真・恋姫†三国伝

kkk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†三国伝

【Ｎコード】
Ｎ８０５５Ｑ

【作者名】
ｋｋｋ

【あらすじ】
かつて光り輝く3人のガンダムと4人の女神と4匹の獣が天から降り立った地、三璃紗。神話の『三候』と『四神姫』と『四聖獣』と呼ばれる彼らは協力して世界を平定すると・・太陽と月と海と大地となって世界を安定していた。やがて遥かな時が流れ・・・・・『三璃紗、闇に包まれるとき、『三候』の魂やどりし輝けるガンダムと『四神姫』の力を受け継ぎし乙女、聖印たる玉璽と天の遣いの導きを受け、ここに闇を打ち払わん・・・・』三璃紗神話『Ｇ記』より。後に『三国伝』と呼ばれる風雲豪傑の時代。これはあまたの

星の如く乱世に煌めき、熱き侠達と美しき乙女達の物語であるｋｋスタジアムｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｋａｚｕｏ１０２０２００３

第1話『龍帝を継ぐものと天の遣い』（前書き）

ｙａｈｏｏブログやピクシブでも連載されています小説をこちらでも連載することにしました。よろしくお願いします。

第1話『龍帝を継ぐものと天の遣い』

かつて光り輝く3人のガンダムと4人の女神と4匹の獣が天から降り立った地、三璃紗。神話の『三候』と『四神姫』と『四聖獣』と呼ばれる彼らは協力して世界を平定すると・・太陽と月と海と大地となって世界を安定していた。やがて遥かな時が流れ・・・・・

『三璃紗、闇に包まれるとき、『三候』の魂やどりし輝けるガンダムと『四神姫』の力を受け継ぎし乙女、聖印たる玉璽と天の遣いの導きを受け、ここに闇を打ち払わん・・・・』
三璃紗神話『G記』より

後に『三国伝』と呼ばれる風雲豪傑の時代。これはあまたの星の如く乱世に煌めき、熱き侠達と美しき乙女達の物語である

第1話『龍帝を継ぐものと天の遣い』

ここは人間とガンダムが共存する世界・三璃紗。光の都『?陽』からはるか北の地方、幽州、楼桑村。ここで一人のガンダムと一人の人間の少女が寝ていた。そこへ誰かがやってきた。

???
「幸せそうに寝てやがる・・・オイ!劉備!!」
???
「早く、起きろ!桃香!!」

彼の名前は劉備ガンダム、この物語の主人公である。もう一人の少女も劉備という名前であり、桃香は真名である。真名とは親しいものでしか許されない名前であるのだ。

？？？

「「起きろ！！！劉備、桃香！！！」」

劉備ガンダム

「うわっ！！ハイっ！！！」

桃香

「ごめんなさい！！！って白蓮ちゃん！？」

劉備ガンダム

「なんだ、兄貴か！おどかすなよ！！？」

公孫賛イージエイト

「使いに出たまま帰ってこないと思ったら・・・・」

白蓮

「こんなところで昼寝とは・・・」

二人を叩き起したのは公孫賛イージエイトと公孫賛（真名・白蓮）である。二人は劉備ガンダムと桃香の兄弟子と姉妹子であるのだ。

劉備ガンダム

「気持ちいいよ！暖かい光にそよぐ風、大河のせせらぎ」

桃香

「劉君の言う通りだよ。三璃紗の豊かな自然と一体になれるよ。」

公孫賛イージエイト

「まったくのんきだな！お前達ってやつは・・」

桃香

「兄さんや白連ちゃん達もいっしょにどう？」

白蓮

「馬鹿な事を言うな！！」

四人はそんなやり取りをしながら帰り道を歩いていた。すると

子供
「うわあああああああああん！！」

子供の悲鳴が聞こえてきた。劉備ガンダムたちはその場へとやってきた。

桃香
「あれって！！？」
劉備ガンダム
「董卓軍の兵士！！」

アニキ
「このガキが！！！ぶっ殺してやる！！」

兵士の一人が子供に斬りかかろうとすると

劉備ガンダム
「やめろ！！！」
アニキ
「何だと！！」
劉備ガンダム
「幼い子供に手を出すやつは俺が許さん！！」

劉備ガンダムは剣で兵士たちを倒していくのであった。

デク
「え！？」
チビ
「何しやがる！！？」
アニキ

「てめぇ、俺達に刃向かうとは・・・・覚えておれ!!!」

兵士たちはその場から逃げたのであった。

劉備ガンダム
「へっ!いつでもきやがれ!!」
桃香
「かっこよかったよ。劉君!!」
白蓮
「また無茶を・・・」
桃香
「いいから、いいから、ところで坊や、何があったの?」
子供
「ごめんなさい・・おなかがペコペコで・・つい・・兵隊さん達の食べ物を盗もうと・・・」
桃香
「そうか・・・気持ちはわかるけど盗みはだめだよ。もう二度としない?」
子供
「はい!」
劉備ガンダム
「よしならば・・これで食べ物を買いな」

劉備ガンダムは袋から銀貨を出して子供にやった。

劉備ガンダム
「いいことしたな、兄貴達!」
公孫賛イージエイト
「しかし・・兵士の食料に手を出すほどよほど飢えていたんだな・・・」

桃香
「あんな子供が三璃紗にはあふれているんだ。」

四人はその様子を見ていた。

公孫賛イージエイト
「こんな豊かな大地なのに戦が絶えず食料が不足する。」
劉備ガンダム
「・・・・・」
白蓮
「弱い者はドンドンつらい生活に追いやられていくのだ。」
桃香
「・・・・・」
公孫賛イージエイト
「俺と白蓮はこの国の人々が安心して暮らせるようにしたい！そのためにももっと自分を鍛えないとな。」
劉備ガンダム
「さすが兄貴！いいことをいうな！」
白蓮
「ああ、ところで一つ聞きたい！」
桃香
「え？」
公孫賛イージエイト
「そういえばお前達、あんな銀貨をよくもっていたな。」
劉備ガンダム
「銀貨？」

すると二人は思い出した。

劉備ガンダム

「あー！！あれは先生の大事なお使いの金だった。」
桃香
「ど、どうしよう！！兄さん、白蓮ちゃん！！」
公孫賛イージエイト
「そんなことだろうと思ったよ。」
白蓮
「まったくお前達というやつは・・・」

その夜

盧植ジムキャノン
「劉備、桃香！！お前達というやつは！！」
劉備ガンダム
「すみません！！」
桃香
「ごめんなさい！！」

二人は劉備の師で桃香の養父の儒学者・盧植ジムキャノンに叱られていた。

劉備ガンダム
「大事なお金を・・申し訳ありません。先生！」
桃香
「劉君は悪くないんです。」
公孫賛イージエイト
「桃香の言うとおりです。二人をお許しください。」
白蓮
「人助けのために使ってしまったのです。」
盧植ジムキャノン
「そのことを言っているのではない！！」

四人
「え！」
盧植ジムキャノン
「劉備、公孫賛、桃香、白蓮！お前たちのやったことはな、盗人つまり罪人の手助けなのだぞ！」
白蓮
「先生！しかし・・・」
桃香
「ほうっておけばその子は殺されていました！」
盧植ジムキャノン
「それが法を犯した行為であればいたしかたあるまい。よいか人々が法を守ってこそ初めて国家が成り立つのだ！たとえどんな理由であろうと絶対に法を犯してはならぬ！その罪はその身をもって償うが定め・・」

すると

役人
「盧植殿はおいでか！？」
公孫賛イージエイト
「役人？」
白蓮
「まさか！？」
盧植ジムキャノン
「やはりきたか・・・・」

役人が入ってきた。

役人
「盧植殿、失礼する！」

盧植ジムキャノン
「役人の方々がこんな夜に何用ですか？」
役人
「董卓軍への反逆の罪で貴方を逮捕します！！」
劉備ガンダム
「何だと！！？」
桃香
「そんな！？」

劉備ガンダムと桃香は驚いていた。

劉備ガンダム
「まてまて先生は何もしていない！！手を出したのは俺だ！！」
桃香
「劉君！！」
盧植ジムキャノン
「控えておれ、」
劉備ガンダム
「いえ！先生は俺が守ります！！」

劉備ガンダムは刀を抜こうとするが

盧植ジムキャノン
「身の程を知れ！劉備！！」
劉備ガンダム
「先生・・・」
盧植ジムキャノン
「考えもなく刀に手をかけるとはなんたる愚か者よ！お前は破門じゃ！！こんなバカはほっといて参りましょう役人の方々！！」

こうして盧植ジムキャノンは役人に連れられてしまった。劉備ガンダムと桃香もそのまま立っていたのであった。

そのころ盧植ジムキャノンは拷問を受けていた。

馬元義ザク
「盧植よ!若いやつらをたぶらかし我らに逆らうは重罪ぞ!!だが・・・事と次第によっては助けてやってもよいのだぞ!!」
盧植ジムキャノン
「どういう意味だ?」
馬元義ザク
「『伝説の宝剣』と『獣神の宝剣』はどこにある?」

盧植ジムキャノンは驚いた。

盧植ジムキャノン
「何じゃそれは?知らんな!」
馬元義ザク
「そんなはずはない!貴様が宮廷軍師を務めていたとき、霊帝から密かに賜ったハズ!その『宝剣』を大師である董卓様に差し出せば・・・」
盧植ジムキャノン
「知らんものは知らん!!」
馬元義ザク
「では思い出されるまでやるまでだ!打て!!」

盧植ジムキャノンは拷問をうつけ続けていた。

翌日

公孫賛イージエイト
「行くな劉備!!」

公孫賛イージエイトは劉備ガンダムを殴り飛ばした。

白蓮
「落ちつけ!!　公孫賛!!」
桃香
「兄さん、やめて!!」
劉備ガンダム
「何をするんだ!!兄貴!!」
公孫賛イージエイト
「お前はまだわからんのか!?先生のお心がっ!!」
桃香
「兄さんの言うとおりだけど私も先生の身が心配で・・・」
白蓮
「桃香まで・・公孫賛はお前たちの身を心配しているのだぞ!!」

すると

市民
「みんな、大変だ!!盧植さんが・・・!!」
桃香
「どうしたのですか?」
市民
「処刑されることになった!!」
劉備ガンダム
「なんだって!!?」

そして、劉備ガンダム達は処刑場へとやってきた。

馬元義ザク
「よいか！反逆者はどうなるかとくと見るがいい！！我ら董卓軍に文句のある奴はおるか！？」
劉備ガンダム
「先生！！」
桃香
「やめて！！」
兵士
「こら、さがれ！！」
盧植ジムキャノン
「うるさいぞ若いの！！悪法もまた法なり！」
劉備ガンダム、桃香
「！！」
盧植ジムキャノン
「どんな法でも犯せば罪・・・・だがワシはあえてお前達に問う！」
桃香
「え？」
盧植ジムキャノン
「悪法を・・・・その悪を除かんとすれば何とする！？」
劉備ガンダム
「せ・・正義をもって・・・・・」
桃香
「法そのものを変えんとすべし・・・・」
盧植ジムキャノン
「ならば己らに正義はありやッ！！？」

そして・・・・

劉備ガンダム

「我が魂は！！」
桃香
「正義ともありぃッ！！」

二人は涙を流しながらもそう答えた。

盧植ジムキャノン
「その心忘れるな・・・生きよ！！」
馬元義ザク
「茶番は終わりだ！！死ねえええええええええええええ！！！！！」

そして、馬元義ザクはそのまま盧植ジムキャノンの首を切り落としたのであった。

劉備ガンダム
「先生―っ！！！！！！！」
桃香
「いやあああああーっ！！！！！！！！」

その夜、劉備ガンダムと桃香は盧植ジムキャノンの死に涙を流していた。

劉備ガンダム
「先生…」
桃香
「・・・・・」

劉備ガンダムにとって盧植ジムキャノンは師匠であり育ての親でもあるのだ。今まで鍛えてもらったことを思い出していた。そして桃香も赤ん坊のころから盧植ジムキャノンに育ててもらっていること

を思い出しているのであった。

公孫賛イージエイト
「劉備・・・・・」
白蓮
「桃香・・・」
劉備ガンダム
「兄貴・・・俺は・・・俺は自分の無力が憎い!!俺にもっと力があれば・・」
桃香
「私も誰かが傷つくのを見たくない・・・・私も力がほしい・・誰かを守ることができる力を・・・・」
公孫賛イージエイト
「ならば力を・・」
白蓮
「真の力を求めよ!!」
公孫賛イージエイト
「これが先生の最後の教えだ!!」
劉備ガンダム
「え?」

すると公孫賛イージエイトと白蓮は龍の置物を動かした。そこには輝ける二本の宝剣があった。

公孫賛イージエイト
「龍帝剣!!」
白蓮
「龍神剣!!」
劉備ガンダム
「龍帝剣?」

桃香
「龍神剣？」
公孫賛イージエイト
「先生が命をかけて守り抜いた宝剣だ！」

二人は触ろうとするが光りが突然輝き始めた。するとそこに一人の青年が現れた。

青年
「いてて・・・・」
劉備ガンダム
「なんだこいつは・・・・」
青年
「ここは・・・・いったい・・・」
桃香
「貴方は一体・・・？」
青年
「俺は・・・北郷一刀・・・見ての通り・・・・」
白蓮
「もしかして・・彼が先生の言っていた天の遣いではないのか？」
公孫賛イージエイト
「ああ、まさか宝剣の光によって召喚されるとはな・・・」
一刀
「天の遣いって・・・」
劉備ガンダム
「それよりもなんで消えたんだ？」
公孫賛イージエイト
「真の正義をもつ者のみが手にする事がかなう！お前達にできるか？」
桃香

「真の正義?」
一刀
「無視ですか・・・・」

すると・・・馬元義ザク達董卓軍兵士がやってきた。

馬元義ザク
「逆族の小僧ども!宝剣があるはずだ!!渡せ!!」

すると・・・・

馬元義ザク
「フン!かまわん火を放て!!」

兵士達は火矢を劉備達の家に放った。そして、五人は何とか出てきた。

公孫賛イージエイト
「くっ・・・」
劉備ガンダム
「貴様ら!!」
白蓮
「なんと卑劣なんだ!!」
桃香
「大丈夫ですか?」
一刀
「なんとか・・・」
馬元義ザク
「出てきたな!見慣れない奴もいるが、宝剣をよこせ!そうすれば・・・楽に師匠の元へ送ってやるぞ!」

劉備ガンダム
「おのれ!!」
桃香
「もう許さない!!」

二人は剣を抜こうとするが

馬元義ザク
「ほほう、剣を抜くか?それがお前らの師匠の教えか?」
劉備ガンダム、桃香
「くっ!!」
馬元義ザク
「法に逆らえば死してなお罪人!師匠が悲しむであろうなあ!!ほらどうした?ぬいてみろ!!」
劉備ガンダム
「悪法もまた法なり・・・・」
桃香
「なればその悪を除かんとすれば何をすべきか・・・」
劉備ガンダム、桃香
「「我が魂に宿る正義をもって悪を断つっ!!」」

劉備ガンダム、桃香は剣を抜くと董卓軍に立ち向かった。

馬元義ザク
「こしゃくな斬れ!斬れ!!」

董卓軍は劉備達に襲いかかった。二人はそれ苦戦する来なく倒していくのであった。

馬元義ザク

「ええい！！どけ！！俺がやる！！」

馬元義ザクは劉備ガンダムと桃香に襲いかかった。そして・・ついに刀をはじかれてしまった。

劉備ガンダム
「ぐわあ！！」
桃香
「きゃあ！！」
馬元義ザク
「死ね！小僧ども！！」

馬元義ザクは二人にとどめを刺そうとした。

公孫賛イージエイト
「龍帝剣と龍神剣を呼べ！！」
白蓮
「お前達の正義を見せろ！！」
一刀
「龍帝剣・・・・龍神剣？」

そして・・・

劉備ガンダム
「龍帝剣！！」
桃香
「龍神剣！！！」

二人の手に龍を模した黄金の剣が現れた。

馬元義ザク
「何！？」
劉備ガンダム、桃香
「はあああああああああああ！！！」

二人は馬元義ザクを攻撃し、倒したのであった。

公孫賛イージエイト
「あの剣の輝き・・・・」
白蓮
「先生・・やはり・・劉備と桃香は・・・・」
董卓軍兵士Ａ
「馬元義様がやられた！？」
董卓軍兵士Ｂ
「逃げろ！！」

董卓兵士達はその場から逃げだしたのであった。

そして、翌日、五人は盧植の墓の前にいた。

公孫賛イージエイト
「そろそろ行くぞ。二人とも！」
白蓮
「お前達はやはり別々の道へ行くのか？」
公孫賛イージエイト
「俺と白蓮と共に父の軍で董卓軍と戦わないか？」
桃香
「ありがとう、兄さん、白連ちゃん。でも私達はまだまだ、未熟者だから・・・」
劉備ガンダム

「俺達はもっと世界を広く見てみたいんだ。」
桃香
「それに彼の事も心配だし。」

あれから、一刀の事を聞いた。彼は記憶喪失であり、いつの間にかこの世界に来ていたのだ。

一刀
「俺、自分がだれかわからないけど・・さっき、二人の劉備が戦っているを見て決めたんだ。俺も旅に出て記憶を取り戻す。」
桃香
「よろしくね。ご主人様♪」
一刀
「え!?」
劉備ガンダム
「先生が言っていたんだ。アンタは天の遣いと呼ばれているんだ。だからアンタは桃香の主人というわけだ。」
一刀
「だからって・・・」
公孫賛イージエイト
「そうか・・・もう何も言うまい!がんばれよ!!」
劉備ガンダム
「兄貴!!」
白蓮
「しっかりやれよ!!」
桃香
「白蓮ちゃん!!」

そして、公孫賛イージエイトと白蓮はそのまま走り去ったのであった。

そして・・・

劉備ガンダム
「先生、俺達も旅立ちます！！」
桃香
「何ができるかわからないけど・・・この国の人々のためにがんばります・・・・」
劉備ガンダム
「俺達の正義を見ていてください・・・」

そして、ここに一人の侠と一人の乙女が立ち上がった。その名は劉備ガンダムと劉備（桃香）！！そして、謎の天の遣い、北郷一刀。その内なる正義の魂。今、まさに正義の炎と燃える！！

続く

第1話『龍帝を継ぐものと天の遣い』（後書き）

次回
劉備ガンダムと桃香と一刀はとある村で新たな出会いを体験するのであった。次回　第2話『出会い』

第2話『出会い』（前書き）

連続投稿になりました。よろしくお願いします。

第2話『出会い』

劉備達が旅立ってのその頃、三璃紗の都『?陽』では事件が起こっていた。

宮廷では一人のMSと少女によって殺戮が行われていた。一人は戦慄の暴将・呂布トールギス、もう一人も呂布（真名・恋）であるのだ。そして、二人は霊帝ガンダムの前にやってきた。

霊帝ガンダム
「そちらは!!?」
呂布トールギス
「霊帝陛下・・・・お覚悟!!」
恋
「・・・・死ね!!」

霊帝ガンダムは二人の攻撃によって殺されてしまった。そこへ一人のMS武将と十常侍筆頭『張譲』がやってきた。

董卓ザク
「くくく・・・・よくやったぞ!!二人の呂布よ!!」
張譲
「董卓ザク様、こちらが例の品でございます。」

董卓ザク。暴虐の大師と呼ばれし恐ろしき男であるのだ。もう一人の張譲も二人の呂布に自分以外の十常侍を始末させた。そして董卓ザクは玉座に座ると龍を模した置物を手に取った。

董卓ザク

「皇帝の証たる『玉璽』、ついに我がものとなったわ！！ふふふ・・ふはははは！！！！これでワシが、この董卓様が三璃紗の支配者じゃあ～！！！」

そして、二人はこのまま去ると一人のＭＳ武将と少女がいた。

貂蝉キュベレイ
「ずいぶんとご機嫌斜めじゃないか、奉先！！」

詠
「恋・・・・・」

呂布トールギス
「貂蝉か・・・・」

恋
「詠、どうしたの？」

貂蝉キュベレイと賈駆（真名・詠）は二人に声をかけた。

貂蝉キュベレイ
「せっかく手に入った玉璽を董卓に渡したのが気に入らないのか・・・？」

呂布トールギス
「フン、玉璽などくれてやる！俺が求めるものはこの血をたぎらせる戦いだけだ！！」

貂蝉キュベレイ
「あいかわらずだな・・・だが、お前を満足させる戦士が三璃紗にいるか？」

呂布トールギス
「ふ・・・いてくれなければこの世に生きる意味がない・・・・・」

貂蝉キュベレイ
「奉先・・・あくまで修羅の道を行くつもりか・・・・」

すると詠が・・・・

詠
「ごめんね恋・・・僕がしっかりしていれば月が捕まらなくて済んだのに・・・・」

恋
「詠のせいじゃない・・・恋は奉先と共にいくだけ・・・月を助けるため…」

詠
「恋・・・・・・」

それを言い終えると二人の呂布はこの場から去った。

第2話『出会い』

そのころ楼桑村を旅立った劉備ガンダム、桃香、一刀は佛土の村に向かっていた。風のうわさですごい豪傑がいると知ったからである三人がたどり着いた先には一人のＭＳ武将と少女が董卓軍とたたかっていた。

劉備ガンダム
「あの二人はいったい・・・・・」

桃香
「すごい・・・・」

関羽ガンダム
「うおおおおおおおおおおお！！！！」

愛紗
「はあああああああああああ！！！！」

董卓軍の兵士と戦っている関羽ガンダムと関羽（真名・愛紗）は次々にとその数を減らしていた。そして、全員を倒すことにできた。しかし後ろから一人の兵士が起き上がって襲いかかろうとしていた。

桃香
「あぶない！！」

劉備ガンダム
「後ろ！！」

二人の助言のおかげで二人は危機を乗り越えた。

関羽ガンダム
「助太刀感謝いたす！！かたじけない！」

劉備ガンダム
「いや・・・・・」

愛紗
「このあたりは董卓軍の黄巾隊がうろうろしている！道中お気をつけなされよ！」

桃香
「ありがとございます。よろしければお名前を・・・・・」

愛紗
「いや、名乗るほどのものではない・・・」

関羽ガンダム
「それに拙者達のような者とは関わらないほうがよい！」

そして、二人はこの場から去った。

一刀
「すごい・・・」

桃香
「もしかしてあの二人が・・・・」
劉備ガンダム
「噂の豪傑・・・・」

そして、村にたどり着いた三人は食料を手に入れようとするが

桃香
「高っ!!おにぎりひとつが銀貨一枚なの!?」
劉備ガンダム
「しかたない六つおくれ!!」
一刀
「どうしてそんなに高いんだよ?」
商人
「すまんねぇ!食料不足なもんで・・・ほれ!あそこの人相書き。あの極悪非道な盗賊達が食料をうばっているんでさあ・・・・」

三人は人相書きを見た。

劉備ガンダム
「盗賊・鬼髭?」
桃香
「黒髪の盗賊?」
一刀
「この間の人たちか・・・でもあの人たちがそんなことを・・・・」

すると

張飛ガンダム
「爆裂大雷蛇!!!!!」

突然の攻撃で三人は吹き飛ばされてしまった。その際に人相書きも破壊された。そこへやってきたのは張飛ガンダムと張飛（真名・鈴々）であった。

鈴々
「やったなのだ!!?張飛!!」

張飛ガンダム
「おうよ!!ありゃ?なんだ・・・・・ただの看板か!!」

鈴々
「はにゃあ・・・まったく張飛はおちょっこちょいなのだ!!」

張飛
「鈴々だってそうだろ!!まあいいワリィ!あんちゃん達、怪我はないか?鬼髭と黒髪かとまちがえちゃった。」

そして、三人は立ち上がった。

一刀
「いや大丈夫だから・・・・」

すると

張飛ガンダム、鈴々
「おおおお!!!!」

二人は劉備ガンダムの持っているにぎりめしをみた。

張飛ガンダム
「腹減った・・・・」

鈴々

「鈴々も～」

二人はへ垂れこんでしまった。

桃香
「劉君・・・・」

劉備ガンダム
「わかった。分けるよ。」

一刀
「俺の分もやるよ!!」

劉備ガンダムは二人ににぎりめしを分けた。

張飛
「ありがてぇ!」

鈴々
「いただきま・・・・」

二人は食べようとするがその口を止めた。すると・・・

鈴々
「すまないのだ!!」

張飛ガンダム
「恩にきるぜ!!」

すると二人はそのまま走り出した。

桃香
「え?」

劉備ガンダム

「なんだ、アイツら？気になるな！」

三人は張飛ガンダムと鈴々を追いかけたのであった。するとそこには一軒家があった。

鈴々
「みんな、にぎりめしなのだ！！」
張飛ガンダム
「みんなで仲良く分けるんだぞ！」
子供Ａ
「わーい！」
子供Ｂ
「ありがとう！」

そこには張飛ガンダムと鈴々が子供達ににぎりめしを分けている姿があった。すると・・・

鴻夫人
「なにかご用ですか？」
劉備ガンダム
「あ・・いや・・・・」
桃香
「あの二人は一体…」
鴻夫人
「ああ張飛と鈴々のことですか・・ああしていつも食べ物をもってきてくれるんです！戦で親を失った子供達のために・・この村でがんばりつづけているんですよ。自分達の夢を捨ててまで・・」
一刀
「夢？」
桃香

「どういうことですか？」

鴻夫人

「張飛と鈴々はかつて無双の戦刃と謳われるほどの戦士でした。天下一の強者となるという大志を抱いて都に上ったのですが・・・・そんな時、董卓の乱が起き・・・・配下の黄巾隊がこの村を襲ったんです。張飛が急いで戻ってきたけどその時はもう・・・・その際に鈴々の両親も殺されました。村を空けたことを悔やんだ張飛と両親を殺された鈴々はそれ以来二度と夢を語らなくなってしまったんです。」

一刀

「二人にそんな過去が・・・・」

その後三人は見張りをしている張飛ガンダムと鈴々と出会った。

劉備ガンダム

「雨の中でも見張りか・・・・」

桃香

「劉君、もしかしてこの二人が佛土の村の豪傑達だよ。」

劉備ガンダム

「ああ・・・・」

すると三人は張飛ガンダムと鈴々に近づき、二人ににぎりめしを与えたのであった。

桃香

「はい、何もたべてないんでしょ！」

一刀

「お堂に入って休んだらどうだ？」

劉備ガンダム

「その間、俺達がみはっていよう！！」

張飛ガンダム
「オヤ？アンタ達か」
鈴々
「鈴々達はここでいいのだ！！半分分けなのだ！！」
桃香
「じゃあ、一緒に食べよう！！」

そして、五人はにぎりめしを食べ始めたのであった。

劉備ガンダム
「俺の名は劉備！」
桃香
「私も劉備だよ。」
一刀
「俺は北郷一刀！！二人のことは鴻夫人から聞いたよ・・張飛、と
張飛・・・」
鈴々
「まぎらわしいから真名で鈴々でいいのだ！！」
桃香
「じゃあ私も桃香で・・・」
劉備ガンダム
「張飛、鈴々・・・自分達の夢を捨ててまで・・・子供達のために
がんばっているそうじゃないか・・・・」
張飛ガンダム
「ヘッ・・・あのばあさん、余計な話を・・・あの日・・・俺さえ
村に残っていれば・・・鈴々の両親や村の皆が・・・・」
鈴々
「鈴々もそうおもうのだ・・・・子供達の顔を見ると今も胸が張り
裂けそうになるのだ。」
張飛ガンダム

「村に手を出すヤローは黄巾隊だろうが鬼髭だろうが黒髪だろうが俺達が討つ!!」

すると

桃香
「鬼髭に黒髪ね・・・悪党には見えなかったけど・・・・」

鈴々
「はにゃ!?お姉ちゃん達、鬼髭と黒髪に会ったのか!?」

劉備ガンダム
「俺達が出会った時にはたった二人で黄巾隊と戦っていた・・・勇敢な武人だったぞ!!」

一刀
「実際に襲われたのか?」

張飛ガンダム
「それは・・・・」

すると

村人
「大変だーっ!!!鴻さんの家が鬼髭と黒髪に襲われた!!」

五人
「!!!」

桃香
「うそ…」

劉備ガンダム
「そんな・・・」

張飛ガンダム
「それみたことか!!?」

鈴々

「やっぱり悪いやつらなのだ!!」

五人は鴻夫人の家に向かった。そこには怪我をした子供たちがいたのであった。

桃香
「ひどい・・」
一刀
「すぐに子供達の手当てを!!」
張飛ガンダム
「しっかりしろ婆さん!!」
鈴々
「やっぱり鬼髭と黒髪の仕業なのか?」
鴻夫人
「そうよ!!あいつらは西の峠に向かったわ。すぐに追いかけて退治を・・・」
張飛ガンダム
「ヤ・・ヤロー!!もう許せん!!」
鈴々
「鈴々達が退治してやるのだ!!」

二人は西へと向かったのであった。

劉備ガンダム
「張飛!!」
桃香
「鈴々ちゃん!!」
一刀
「本当に鬼髭と黒髪が襲ったのか?村の出入りは張飛達が見張っていたはずなのに・・・」

そのころ関羽ガンダムと愛紗は黄巾隊と対峙していたが・・・・・

愛紗
「妙だと思わんか?関羽殿」
関羽ガンダム
「そうだな・・黄巾隊め・・・・攻めるでも逃げるでもなく・・時間の稼ぎか・・・・かっ!?」

すると二人は何かの気配を感じた。その後ろには

張飛ガンダム
「鬼髭!!!」
鈴々
「黒髪!!」
張飛ガンダム
「よくも村をォォ!!!!!死ねえ!!!!!!」

張飛ガンダムは関羽ガンダムを、鈴々は愛紗を攻撃し始めた。

鈴々
「弱い人たちを攻撃するなんて恥ずかしくないのかなのだ!!」
愛紗
「何の話だ?」
張飛ガンダム
「とぼけるんじゃねぇ!!」
関羽ガンダム
「む、黄巾隊が消えている!!」

そして、

鈴々
「問答無用なのだ!!!その首は鈴々達がいただくのだ!!!」
張飛ガンダム
「数々の悪行、地獄で償え!!」
愛紗
「言っていることはわからんが・・・」
関羽ガンダム
「かかる火の粉は払うまで!!」

そして、四人は激突したのであった。

そのころ

村人
「手当ては終わりました。」
劉備ガンダム
「よし!皆はここでおとなしくしているんだぞ!」

劉備ガンダム達は子供達の治療を終えていたのであった。

桃香
「鴻夫人!襲撃のことを詳しく教えて・・」
一刀
「あれ?いない?」

三人は鴻夫人を探したのであった。すると蔵の中から声がしたので、三人は空けた。そこには鴻夫人が縛られていたのであった。

桃香

「鴻夫人!?」
一刀
「どうしたんですか?」
鴻夫人
「劉備さん、桃香さん、一刀さん、何者かが私を・・・・張飛と鈴々はどこ!?」
劉備ガンダム
「まさか!?」

劉備ガンダムと桃香はまさかと思い、一気に走りだした。

一刀
「よし、俺も・・」
???
「まってください。」

一刀が振り向くと三人の少女達がいた。

一刀
「君達は・・・・」

そのころ、四人は激闘を続けていた。

関羽ガンダム
「見事な腕前だ!!」
張飛ガンダム
「てめぇらこそな・・・・・」
鈴々
「悪党にしておくにはおしい腕なのだ!!」
愛紗

「お主らの名を聞こう！！」

そして・・・・

張飛ガンダム
「双ぶ者なき戦の刃！！張飛様とは俺のことだ！！！！！」

鈴々
「一騎当千の猛将！！張翼徳とは鈴々のことなのだ！！！！！！」

関羽ガンダム
「受けて立とう！！我が名は関羽！！鬼の武勇の印にかけていざ！！」

愛紗
「我が名は関雲長！！！！天下の青龍の名にかけて迎え撃とう！！！！」

そして・・・・

張飛ガンダム
「聞け！！！！雷の雄たけびを！！！！！」

関羽ガンダム
「見よ！！鬼の牙の高ぶりを！！！！」

鈴々
「うりゃあああああああああああ！！！！！」

愛紗
「はあああああああああああ！！！！！」

張飛ガンダム
「爆裂大雷蛇！！！！」

関羽ガンダム
「鬼牙百列撃！！！！！」

それぞれの攻撃がぶつかり合ったのであった。そして、煙がはれる

と四人は倒れていたのであった。

張飛ガンダム
「くっ・・・・・」
関羽ガンダム
「ぬううう・・・」
鈴々
「はは・・・」
愛紗
「なかなかやるな・・・」

すると鴻夫人が現れた。

鴻夫人?
「あら・・・まだくたばってなかったのね!!」
張飛ガンダム
「婆さん・・何を言って・・るんだ・・・」
鈴々
「どうなっているのだ?」
鴻夫人
「おっーほっほ!!本当におバカさんねぇ!!」

さらに後ろから黄巾隊が現れた。

関羽ガンダム
「黄巾隊が・・なぜ・・ここに・・・」
愛紗
「まさか・・・奴は・・・・」

すると鴻夫人の姿が別のＭＳ武将に変わった。

関羽ガンダム、愛紗
「「妖術使い張梁！！」」
張梁メッサーラ
「そのとおり！我が術にかかったわね！！もはや立ち上がる力も残ってないようね！！」

四人は立ち上がろうとするが、ダメージが大きすぎで立ち上がることができなかった。

張梁メッサーラ
「さあまとめて殺してあげるわ！！！」
二人
「まてぃ！！」

するとそこへ劉備と桃香が現れ、張梁メッサーラを攻撃した。

桃香
「二人はやらせないよ！！」
張飛ガンダム
「お前ら！！」

すると別のほうから攻撃を仕掛けた。

劉備ガンダム
「うわっ！！」
桃香
「きゃあ！！」
張角パラスアテネ
「馬鹿がいくら増えたとて同じことよ。」

そして・・・・・

張角パラスアテネ
「天公将軍・張角!!」
張宝ボリノークサマーン
「地公将軍・張宝!!」
張梁メッサーラ
「人公将軍・張梁!!」
三人
「「「無敵の張三兄弟よ!!」」」
張角パラスアテネ
「私達に刃向かうとはいい度胸ね。でも後悔しても遅いわよ!!」

すると三人はそれぞれの武器を構えた。

三人
「太平要術・木星合身!!」

三人は合体を開始した。

黄天ジ・オ
「「「蒼天已死!!黄天正立!!」」」

合体した黄天ジ・オは劉備ガンダム達に襲いかかろうとしていた。

黄天ジ・オ
「「「仲良く地獄に行くがいいわ!!!」」」
劉備ガンダム
「くっ・・・」

黄天ジ・オ
「「「死ね！！！」」」
？？？
「やめて！！」
黄天ジ・オ
「「「！！！」」」

黄天ジ・オと劉備ガンダムが振り向くと、そこには一刀と三人の少女達がいた。

桃香
「ご主人様、この子たちって・・・」
一刀
「彼女達は張三兄弟を探しにここまで来たんだ。」
黄天ジ・オ
「「「天宝ちゃん、地宝ちゃん、人宝ちゃん・・・・貴方達、どうして？」」」
天和
「私達は貴方達を探しに来たの・・・」
愛紗
「どういうことなんだ？」
鈴々
「鈴々にもさっぱりなのだ！！」
一刀
「俺が説明するよ。」

一刀は劉備ガンダム達に説明したのであった。張三兄弟と張三姉妹はもともと旅芸人であり、各地を回っては歌を披露していた。ところが三姉妹が董卓の軍に捕まってしまったので張三兄弟は彼女達を取り戻すために黄巾隊を率いていたのであった。

天和
「でも・・私達は何者かによって助けられたの!!」
地和
「だからもうこんなことしないで!!」
人和
「私達と一緒にまた歌いましょ!!」
黄天ジ・オ
「「「でも・・・これまでやった私達の罪は・・・・・・」」」
桃香
「つぐなえばいいじゃないですか?」
黄天ジ・オ
「「「え!?」」」
劉備ガンダム
「お前達は彼女達を助けるために董卓軍に指揮をしていたんだろ・・・」
桃香
「だから貴方達は悪い人ではないとわかったの。」
黄天ジ・オ
「「「貴方達・・・」」」
桃香
「ほかの皆もいいよね?」
関羽ガンダム
「まあお主が言うなら・・・・」
愛紗
「私もかまわん・・・・(この人はもしかして・・・)」
張飛ガンダム
「俺様もかまわないぜ!!」
鈴々
「鈴々もなのだ!!」

そして・・・

黄天ジ・オ
「「「わかったわ。黄巾隊を解散して、これまでの罪滅ぼしをするわ・・・」」」

天和
「張角ちゃん・・・」

するとどこから攻撃して、黄天ジ・オに直撃したのであった。

「！！！！！？？？」

そして、黄天ジ・オは意識をもうろうしながらも立ち上がり・・・・

黄天ジ・オ
「「「ごめんな・・さい・・・やっぱり・・・ゆるされなかったのね・・・・」」」

人和
「そんな・・・・」

地和
「ウソでしょ・・・・」

黄天ジ・オ
「「「さようなら・・・・・」」」

そして、爆発したのであった。

天和
「いやあああああああああ！！」

劉備ガンダム

「誰だ！！こんなことをしたのは！！！」
桃香
「劉君、あれ！！」

桃香が指をさすとそこには屍と化した黄巾隊と・・・・そして・・
呂布トールギスであった。

呂布
「ふぬけた黄巾隊など董卓軍には要らぬ！！」
関羽ガンダム
「奴は！！」
愛紗
「まさか！！？」

第2話『出会い』（後書き）

次回予告

呂布トールギスと激闘する劉備ガンダム達。そして関羽ガンダムと愛紗の過去が明らかとなる。

次回　第3話『桃園決議』

第3話『桃園決議』（前書き）

連続投稿になります。面白い展開になりました。

第3話『桃園決議』

劉備ガンダム達の前に呂布トールギスが現れると関羽ガンダムと愛紗は厳しい顔で睨んでいた。

関羽ガンダム
「呂布・・・」
愛紗
「・・・・・・」
一刀
「やつはいったい・・・・」
桃香
「ご主人様は三人を村まで・・・」
一刀
「わかった!!」

一刀は天宝達を村まで避難させた。

鈴々
「やい!!お前も董卓軍の仲間かなのだ!!!」
呂布トールギス
「・・・・・・・」
張飛ガンダム
「無視かよ!!上等じゃねぇか!!なめてんじゃねぇぞ!!!!」
鈴々
「覚悟するなのだ!!!」

張飛ガンダムと鈴々は呂布トールギスに立ち向かおうとしていた。

劉備ガンダム
「駄目だ!!さがれ張飛、鈴々!!」
張飛ガンダム
「えっ!?」
鈴々
「にゃ!!?」

呂布トールギスは二人を攻撃した。張飛ガンダムは右肩の鎧が切断されてしまった。

張飛ガンダム
「うお!!なんじゃこりゃあああ!!!」
鈴々
「痛っいなのだ!!」
劉備ガンダム
「張飛!!?」
桃香
「鈴々ちゃん!!あの二人が簡単にやられるなんて・・・・」

すると関羽と愛紗が呂布トールギスに近づいて行くのであった。

劉備ガンダム
「関羽、奴は一体何者なんだ?」
桃香
「教えてください!!」
愛紗
「片時も忘れたことはない・・・・・」
関羽ガンダム
「奴こそ拙者から愛する者を・・・・」
愛紗

「私から大切な人を・・・」
関羽ガンダム、愛紗
「「すべてを奪った憎むべき仇！！」」

そして、二人は武器を構えた。

関羽ガンダム
「もはやこの顔を見忘れたとは言わせぬぞ！！呂布！！！！」
愛紗
「ここで会ったが百年目、覚悟！！！」
呂布トールギス
「・・・・・・」

第３話『桃園決議』

それは数年前のことであった。

呂布トールギスはとある村までやってきた。

兵士
「呂布様、この村には評判の二人の武芸者がいるそうです。名は長生と愛閃！」
呂布トールギス
「ほぅ、退屈しのぎだ。連れてこい！」

長生（後の関羽）は鎧を着て準備をしていた。それを見ていた愛人の楼蘭は・・・・

楼蘭
「長生、行かないで！！殺されてしまうわ！！」

長生
「俺と愛閃が行かなければ村人が殺される。行くしかあるまい！！」
楼蘭
「でも・・・」
長生
「案ずるな楼蘭。俺は負けん！！」
楼蘭
「長生・・・せめてこのはい玉をお持ちください。我が家に伝わるお守りです。」

そのころ、当時、十歳の愛紗は兄の愛閃を止めようとしていた。

愛紗
「兄様、行かないでください！！」
愛閃
「だがこのままでは村人が殺されてしまう。心配するな、愛紗！！長生殿と僕は負けないから・・」
愛紗
「兄様・・・・」
愛閃
「だが念のため、蔵の中に入っているんだぞ！！」
愛紗
「はい・・・」

そして、長生と愛閃は闘うが、呂布トールギスの力にかなわず、敗れてしまった。そして、董卓軍の兵士は村人を殺し、故郷を焼き始めた。

しばらくして・・・・

長生
「う・・・うっ！！」

長生は目を覚ました。そして胸の鎧からはい玉をとりだした。

長生
「楼蘭のはい玉。これのおかげで助かったのか・・・！！！！」

長生は最初に見た光景に驚いていた。それはあい廃墟となった村と村人の死体であった。そして・・・

長生
「ろ・・楼蘭！？」

長生の目の前には無残にも殺された愛人、楼蘭がいたのであった。

長生
「楼蘭・・・う・・・ううう・・・うおおおおおおおおおおっ！！！！！」

長生は愛人を失った悲しみで叫んでいたのであった。

そのころ、愛紗も蔵の外から出ると・・・

愛紗
「そんな・・・村が・・・」

そして、愛紗が見たものは・・・・

愛紗

「兄様!!?」

呂布トールギスによって殺された兄、愛閃の姿であった。

愛紗
「兄様・・・・嘘・・・いや・・いや・・・いやあああああああああ!!!!!」

愛紗も悲しみに耐えきれず、悲鳴を上げたのであった。

そして、現在・・・・

呂布トールギス
「長生!?ふ・・・・そういえばそんな小僧がいたな。それにそこにいる女はたしかもう一人の武将の愛閃の妹の愛紗とかいったな・・・」

関羽ガンダム
「拙者はもはやあの時の長生ではない!!」

愛紗
「貴様、それは我が真名と決めた!!その名を呼ぶな!!」

関羽ガンダム、愛紗
「今ここに立っているのは・・・」

そして・・・

関羽ガンダム
「地獄の底から這い上がってきた鬼、関羽!!呂布よ・・・・鬼の裁きを受けるがよい!!!」

愛紗
「我が名は関羽雲長!!!呂布よ、この蒼龍堰月刀の錆となれ!!

！」

そして、両者は激突していたのであった。しかし力でかなわず吹き飛ばされてしまった。

呂布トールギス
「どうした！？鬼の裁きとはこの程度か！！それとも死んだ女と兄の死にざまを語らねば鬼には成りきれぬか？」

すると張飛ガンダムと鈴々が動き出した。

鈴々
「この外道がなのだ！！」
張飛ガンダム
「てめぇのような野郎が一番許せねぇ！！」
関羽ガンダム
「張飛！！」
鈴々
「だいじょうぶかなのだ？」
愛紗
「すまないな・・・張飛・・・・」
鈴々
「鈴々でいいのだ。これから共に戦っていく中だから・・・」
愛紗
「ならば私も愛紗で・・・」
張飛ガンダム
「力を貸すぜ！！！鬼髭、黒髪！！！」
関羽ガンダム
「うむ！！」

四人は呂布トールギスに立ち向かった。しかし・・・・・

呂布トールギス「愚か者どもめがあ!!!!くらえっ、旋風大烈斬!!!!!」

呂布トールギスの放った攻撃で四人は吹き飛ばされてしまった。

関羽ガンダム
「くっ・・・ぐぐぐ・・・」
張飛ガンダム
「くそっ・・・強え!!」
呂布トールギス
「これで終わりか?つまらん!貴様らの力ではこの血はたぎらぬ!!」

すると、劉備ガンダムと桃香が・・・

劉備ガンダム
「なぜだ?」
桃香
「なぜ・・・それほどの力を持ちながら・・・」
劉備ガンダム
「その力を正義に・・・人々のために使おうとしないっ!!」
呂布トールギス
「正義だと・・・・・クックク・・・・・」

呂布トールギスは笑っていた。

呂布トールギス
「ぐはははははははっ!!!笑わせるな!この力こそが正義!!俺

の前には天ですらひれ伏す！！」
桃香
「貴方の正義は間違っています！！」
劉備ガンダム
「天が・・・人々が求める正義は断じて貴様の力ではない！！！」
呂布トールギス
「戯言をぉぉぅ！！！！」

そして、激突した際に劉備ガンダムの両肩パーツが外された。

呂布トールギス
「ふんっ・・・・ぬ！！」

呂布トールギスは驚いていた。そこには劉備ガンダムと桃香が呂布トールギスの武器をつかんでいた。

劉備ガンダム
「こんな力・・・・俺は・・・・・」
桃香
「私は・・・・・」
劉備ガンダム、桃香
「「認めない！！！命を踏みにじる暴力が正義であってたまるものか！！！！！！」」

すると桃香の持っていた首飾りが光っていた。そして、光が愛紗、鈴々に与える。そして、光がはれると三人は龍を模した鎧を装備した姿となっていた。

鬼牙王・愛紗
「これは・・・・・」

雷光王・鈴々
「力がみなぎるのだ・・・・」
聖龍王・桃香
「龍神剣!!!!!!」

聖龍王・桃香の手に龍神剣が現れた。そして・・・

張飛ガンダム
「俺達も見せてやろうぜ!!」
関羽ガンダム
「我らが正義を!!」

すると関羽ガンダムの右肩のパーツと張飛ガンダムの左肩のパーツが外れ、劉備ガンダムの両肩に装備された。そして・・

劉備ガンダム
「龍帝剣!!!!!」

劉備ガンダムの手に龍帝剣が現れた。

呂布トールギス
「何!!?」

そして・・・・

雷光王・鈴々
「爆裂雷鳴砲!!」
鬼牙王・愛紗
「鬼牙・双刃撃!!」
聖龍王・桃香

「光龍斬！！！」

鈴々の放った雷撃と愛紗の放った連続付きと桃香の放った斬撃が呂布トールギスに食らわし、そして武器をはじかれた。

呂布トールギス
「！！」

劉備ガンダム
「これが我らに宿る正義の力だ！！」

そして、最後は黄金に輝いた劉備ガンダムが呂布トールギスに立ち向かった。

劉備ガンダム
「三位一体！！星龍斬！！！！！」

劉備ガンダムは星の形のように呂布トールギスを攻撃した。そして・・呂布トールギスは体勢を崩してしまった。

聖龍王・桃香
「劉君、あと一撃だよ！！」

劉備ガンダムはとどめを刺そうとしたその時、周りに蝶が現れた。そして爆発した。

聖龍王・桃香
「劉君！！」

桃香達は劉備達のところへ向かった。

張飛ガンダム
「劉備！！」
雷光王・鈴々
「大丈夫、気絶しているだけなのだ。」
鬼牙王・愛紗
「呂布は・・・・」
関羽ガンダム
「逃げたのか・・・」
聖龍王・桃香
「劉君・・・・」

そのころをそれを見ていたのは呂布トールギスと貂蝉キュベレイであった。

貂蝉キュベレイ
「三人かがりとはいえあんな若造と小娘に押されるとは・・らくないな奉先・・・」
呂布トールギス
「誰が胡蝶を飛ばせと言った！？」
貂蝉キュベレイ
「？」
呂布トールギス
「俺の戦いに余計な手出しをするな！！」

そして、呂布トールギスは赤兎馬に跨るとそのまま走り出した。

呂布トールギス
「あれこそが三候の一人、龍帝の魂が宿る伝説の宝剣に違いない、そして小娘の持っている剣も四聖獣の一体、青龍と四神姫の一人、龍帝姫の力が宿っている。ふふふ・・この俺に膝をつかせるとはな・

・・・」

その後、三日三晩、眠っていた劉備ガンダムも目覚めた。張三姉妹は呂布に殺された張三兄弟の罪滅ぼしのために村の人たちと歌を披露していた。劉備ガンダム、桃香、一刀は張飛ガンダムと鈴々を旅に誘おうとしたが村を守らなきゃ行けなかったので共に行くことができなかった。

そのころ、関羽ガンダムと愛紗は故郷へと帰っていた。そして愛人・楼蘭と愛紗の兄、愛閃の墓の前で二人は・・・・

関羽ガンダム
「楼蘭、愛閃・・・お前達を失ったあの日より拙者と愛紗は名も顔も捨てて復讐のために生きてきた。」
愛紗
「ですが不思議なものです・・・・二人の戦士にこれほどまでに心を動かされようとは・・・」
関羽ガンダム
「楼蘭・・拙者はこれから・・・」
愛紗
「兄様・・・・私はこれから・・・・・」

すると墓が光り始めた。

関羽ガンダム
「楼蘭・・・」
愛紗
「兄様・・・・・」

そして・・・

関羽ガンダム
「ありがとう楼蘭、愛閃。どうか見守ってほしい・・・」
愛紗
「私達はすべてをかけて祖国、三璃紗の礎となります!!」

そして、二人は旅立った。

そのころ張飛ガンダムと鈴々は・・・・

張飛ガンダム
「んじゃあ、ちょっくら・・・」
鈴々
「見回りに行ってくるのだ!!」

すると・・・・

鴻夫人
「張飛、鈴々!長い見回りになるんでしょう?これを・・・」

鴻夫人は張飛に新しい鎧を、鈴々に虎の髪飾りを渡した。

鈴々
「バッちゃん・・・」
鴻夫人
「お前達は村のために十分尽くしました。これからはその力を三璃紗のすべての人たちのために使っておあげなさい。」
子供A
「行って来い張飛!!」
子供B

「がんばって鈴々」
張飛ガンダム
「みんな・・・」

そして・・・

張飛ガンダム
「よし！！天下の張飛様達の旅立ちだ！！」
鈴々
「笑って派手に見送ってくれなのだ！！」

二人も旅立ったのであった。

そして、劉備ガンダム、桃香、一刀は桃園へとやってきた。すると・・・そこへ

劉備ガンダム
「関羽・・・・」
桃香
「どうして・・・」

関羽ガンダムと愛紗がやってきた。そして

関羽ガンダム
「劉備殿、拙者を貴方の義兄弟にしてください。」
劉備ガンダム
「関羽・・・・」
愛紗
「私も関羽殿とおなじ意見です。貴方方と共に戦いたいのです。」
桃香

「そういうことなら・・・私の真名は桃香というのよろしくね。」
愛紗
「それなら私も愛紗と呼んでください。」

さらにそこへ

劉備ガンダム
「張飛・・・・」

張飛ガンダムと鈴々もやってきたのであった。

張飛ガンダム
「俺様も義兄弟に入れてくれ!!劉備の兄貴!!」
鈴々
「鈴々達もお兄ちゃん達一緒に戦いたいのだ!!」
劉備ガンダム
「関羽・・・・張飛・・・・」
桃香
「愛紗ちゃん・・・鈴々ちゃん・・・」

すると・・・・

一刀
「俺もいいかな?」
関羽ガンダム
「もちろんですぞ!!貴方は劉備殿から聞いた天の遣いに違いありません!!」
張飛ガンダム
「だから旦那も義兄弟だぜ!!」
愛紗

「もちろんです！！」
鈴々
「鈴々もいいのだ！！」

そして・・・七人はそれぞれの武器を構えた。

関羽ガンダム
「我ら七人！！」
愛紗
「性は違えども、兄妹の契りを結びしからは！！」
張飛ガンダム
「心を同じくして助けあい」
鈴々
「皆で力なき人々を救い！！」
劉備ガンダム
「生まれた時は違えども」
桃香
「死すべき時は同じと誓う！！」
一刀
（なぜ・・俺がここにいるのかは分からないけど・・ただ・・・・
俺もこの景色に加わりたかった。）

劉備、関羽、張飛、桃香、愛紗、鈴々、そして一刀。桃の花びらが舞い散る中、義兄妹の誓いを立てた七人の戦士。この後、生涯を共にする戦士たちの戦いはこうして始まった。

第3話『桃園決議』（後書き）

次回予告

胡軫ギャンの襲撃を受けた劉備ガンダム達。そして二人の少女の勇気が二人に力を与える

次回　第４話『龍神と二人の少女』

第４話『龍神と二人の少女』（前書き）

今回は劇場版をモチーフとした話です。
注意　下ネタがあります。

第４話『龍神と二人の少女』

桃園の決議から数日後、ここ龍神の滝では劉備ガンダム達は董卓軍の兵士達と戦い続けていた。

張飛ガンダム
「爆裂大雷蛇！！！」
関羽ガンダム
「鬼牙百列撃！！！！！」
劉備ガンダム
「星龍斬！！！！」
雷光王・鈴々
「爆裂雷鳴砲！！」
鬼牙王・愛紗
「鬼牙双刃撃！！」
聖龍王・桃香
「光龍斬！！！！」

そして、それぞれの攻撃で董卓軍を全滅されることができた。

一刀
「やったな！！」
劉備ガンダム
「あああ・・・」
鬼牙王・愛紗
「今回もなんとかなりましたな。」
すると

胡軫ギャン
「ははははは!!!あれだけの兵を一瞬で片付けるとは。君達が噂の幽州反逆軍ですね!!」

吊り橋には一人のＭＳ武将がいた。

劉備ガンダム
「俺の名は劉備!!」
関羽ガンダム
「拙者は関羽!!」
張飛ガンダム
「俺様は張飛!!」
聖龍王・桃香
「私は劉備玄徳!!」
鬼牙王・愛紗
「我が名は関羽雲長!!」
雷光王・鈴々
「鈴々は張飛翼徳!!」
一刀
「俺は天の遣い・北郷一刀!!」
七人
「我ら、幽州義勇軍!!!」

七人はそれぞれの武器を構えた。

胡軫ギャン
「私は胡軫!!鎮江将軍なり!!!」
雷光王・鈴々
「にゃははははは!!チン●将軍なんておかしい名前なのだ!!」
聖龍王・桃香

「鈴々ちゃん（／／／／／／／／／／）！！！？」
鬼牙王・愛紗
「変なことを言うな！！！？」
胡軫ギャン
「チン●ではない！！　鎮・江・将・軍だ！！何処をどう間違えたらそうなるんだ！？まあいい幽州反逆軍！！董卓様の命によりこの胡軫様が・・・・」
張飛ガンダム
「ごちゃごちゃとうるせぇぞ！！！このキザ野郎！！」
雷光王・鈴々
「鈴々達が相手になってやるなのだ！！！」

張飛ガンダムと鈴々は胡軫ギャンに戦いに向かった。

胡軫ギャン
「ふっ、この私を愚弄するとはいいでしょう！！まずは君達から地獄に送ってあげましょう！！」
張飛ガンダム
「上等だぜ！！」
雷光王・鈴々
「こてんぱんにしてやるのだ！！」

張飛ガンダムと鈴々は吊り橋の真ん中まで走りだした。しかし・・・

胡軫ギャン
「愚か者め！！！」
張飛ガンダム
「うお！！」
雷光王・鈴々

「はにゃ！？」
聖龍王・桃香
「鈴々ちゃん、張君！！」

劉備ガンダム達は吊り橋のところまでやってきた。

胡軫ギャン
「鋭牙・激情斬！！！！！！」

胡軫ギャンの攻撃で吊り橋が崩れ始め、七人は滝に落ちてしまった。

「うわあああああああああああああ！！！！！！」
「きゃあああああああああああああ！！！！！」
胡軫ギャン
「いい音色ですね。」

第４話『龍神と二人の少女』

そのころ胡軫ギャンは？陽に戻ったのだが・・・

董卓ザク
「バカ者！！！！」
胡軫ギャン
「え！？」
董卓ザク
「ワシは龍帝剣と龍神剣を奪えと言ったハズじゃ！！」
胡軫ギャン
「しかし、董卓様！！」
董卓ザク
「貴様は何も分かっておらん！！　龍帝剣は三候の一人、龍帝の魂

が宿る伝説の宝剣で、龍神剣は四聖獣の一体、青龍と四神姫の一人、龍帝姫の力が宿っている宝剣なのだぞ!!必ず探してまいれ!!」

胡軫ギャン

「はっ!!この胡診、チン●いや鎮江将軍の名にかけて必ずや!!」

胡診はさっそく向かった。

董卓ザク

「呂布将軍、奴が失敗したときはわかっておるな!!」

そこには呂布トールギスと恋の姿があった。

そのころ水の中では劉備ガンダムと桃香は意識をもうろうしていた。

すると

???

「劉備・・・二人の劉備よ!!」

突然の声がしたのであった。

劉備ガンダム

「・・・・・・・?」

???

「汝らの望みはなんだ?」

桃香

「貴方は一体?」

???

「答えよ!!劉備!!!」

するとそれは龍の姿となった。

すると二人は起き始めた。

桃香
「きゃあ!!?」

劉備ガンダム
「うわあああ!!」

気がつくとここはとある小屋であった。

関羽ガンダム
「劉備殿、桃香殿!!」

愛紗
「兄上、桃香様!!」

張飛ガンダム
「気がついたんだな!!兄貴に姉貴!!」

鈴々
「二人とも無事でよかったなのだ!!」

劉備ガンダム
「いてて・・・・」

関羽ガンダム
「まだ横になっていたほうが・・・・」

桃香
「それより私達は一体…」

一刀
「この二人が助けてくれたんだ!!」

一刀が言うとペレー帽を被った少女と魔女の帽子をかぶった少女が現れた。

孔明（真名・朱里）
「わ・・・私は諸葛亮孔明といいましゅ！！」
鳳統（真名・雛里）
「私は・・・・・鳳統といいましゅ！！！」
劉備ガンダム
「そうか二人が俺達を助けたんだ。ありがとう！！」
朱里
「はっ・・はわわわわ・・・それよりも大変です！！」
雛里
「あわわわ・・・大軍がここまで来ています！！」
桃香
「え！？」

劉備ガンダム達は外へ出た。その先には

劉備ガンダム
「あれはきっと董卓軍だ！！」
桃香
「私達を追いかけてきたんだね。」
朱里
「どうしますか？」
張飛飛ガンダム
「心配するな俺達がやっつけてやるからよ！！」
鈴々
「任せておくなのだ！！」
関羽ガンダム
「こうしてはおられませんぞ！！」
愛紗
「ご主人様は二人をお願いします。」
一刀

「わかった。」
桃香
「行こう、皆!!」

劉備ガンダム達は武器をとって董卓軍の所へ向かおうとするが

劉備ガンダム
「あ・・・あれ?」
桃香
「剣が・・・ない!!!?」
一刀
「え!?」
朱里
「これのことですか?」

朱里が渡されたのは劉備ガンダムの持っている剣の一本であった。

劉備ガンダム
「え・・・いや・・・もう一本はなかったのか?」
桃香
「それに私の剣は?」
愛紗
「黄金に輝く龍帝剣と龍神剣だ!!」
雛里
「いえそれだけでした。」
桃香
「きっと・・あの滝壺の中化・・・・」
朱里
「はわっ!!!あの龍神の滝にですか!!?」
張飛ガンダム

「どうするよ!!?兄貴達!!?」
劉備ガンダム
「この子たちのためにも龍帝剣がなくても闘うのさ!!」
桃香
「私も闘いたいけど・・・武器が・・・」
一刀
「俺の剣を貸してやるよ。一本だけで十分だからな。」
関羽ガンダム
「桃園で義兄弟と誓った仲!!どこまでもついていきましょうぞ!!!」

一刀は桃香に自分の剣を渡した。七人は董卓軍に向かおうとするが

朱里
「だめです!!あんな大軍に向かうなんて死にに行くのと同じです!!!」
桃香
「違うよ。私達は死にに行くんじゃない。」
劉備ガンダム
「この手で明日をつかみに行くんだ!!」
雛里
「明日・・・・・」

そして、劉備ガンダムは董卓軍の所へと向かったのであった。

そして、七人は胡軫ギャンの所へ向かった。

劉備ガンダム
「この先には通さないぞ!!」
桃香

「私達が倒しちゃうんだから！！」
胡軫ギャン
「生きていたとは探す手間が省けました。早く龍帝剣と龍神剣を渡しなさい！！」
鈴々
「だれがチン●将軍なんかに渡すものかなのだ！！」
胡軫ギャン
「鎮江将軍だ！！！！」
劉備ガンダム
「気を取り直して・・・・龍帝剣と龍神剣が狙いか！！」
愛紗
「誰が貴様などにやるか！！」
桃香
（言えない・・・なくしたなんて・・・それに私達も鎧が出ないから・・・）
胡軫ギャン
「しかたありません・・・やってしまいなさい！！」

そして、ついに戦闘が始まった。それを朱里と雛里は見ていた。

雛里
「あの人たちだけで大丈夫かな？」
朱里
「雛里ちゃん、行こう！！」

すると朱里が雛里の手を引いた。

雛里
「どこへ？」
朱里

「龍神の滝だよ！！」

雛里

「だめだよ！！死にに行くようなものだよ！！」

朱里

「死にに行くんじゃないよ。明日をつかみに行くんだよ！！」

雛里

「朱里ちゃん・・・・・」

二人はそのまま走りだした。そして、龍神の滝につくと服と帽子を脱ぎ始めた。

朱里

（怖いけど・・・・三璃紗の明日をつかみに行くためにがんばらなきゃ・・・・）

雛里

（朱里ちゃんと一緒なら私も頑張れる。）

そして、二人は滝つぼに飛び込んだのであった。

一方、劉備ガンダム達も次々に敵を倒しつつあった。

胡軫ギャン

「これだけの兵を倒したのはなかなかだが・・・・私は倒せぬぞ！！　鋭牙・激情斬！！！！！」

胡軫ギャンの放った回転刃が劉備ガンダム達に襲いかかった。

関羽ガンダム

「ぐわあ！！？」

愛紗

「くっ！！！」
劉備ガンダム
「うわああ！！」
桃香
「きゃあああ！！？」
張飛ガンダム
「うわあああああああ！！！！」
鈴々
「はにゃあああああ！！！！」

六人は倒れてしまった。すると一刀が・・・・

一刀
「やめろ！！！」

剣を持って向かおうとするが、

胡軫ギャン
「邪魔だ！！」
一刀
「うわあああああああああ！！！！」

あっさり、やられてしまった。

胡軫ギャン
「話にならん・・・・・」

そのころ・・・滝壺の中では・・・・・

朱里

（どこ・・・劉備さん達の・・・・・剣は・・・・）

朱里と雛里が龍帝剣と龍神剣を探していたのであった。

雛里
（見つけなきゃ・・・・私達の手で・・・・・）

そして、そのころ胡軫ギャンは倒れている劉備ガンダムと桃香に近づいていく。

胡軫ギャン
「哀れな!!そこまでして何が望みです?」

そのころ滝の中では・・・・
???

「汝らの望みはなんだ?」
朱里
（りゅ・・・・・龍神様?）

劉備ガンダム
「望み・・・・・」

龍神
「答えよ!!」
雛里
（私達は・・・・・）

桃香
「私達の望みは・・・・・」

朱里
（私達の望みは・・・・）

劉備ガンダム
「この国の・・・・・・」

劉備ガンダム、桃香、朱里、雛里
「「「「三璃紗の明日だ（です）！！！！！！！」」」」

すると龍神の滝から巨大な龍が現れた。

「ギャオオオオ！！！」

胡軫ギャン
「明日だと！！そんなものが何になる！！」

すると二つの剣が落ちてきた。

胡軫ギャン
「何！！？」

劉備ガンダム
「これは・・・・・」

桃香
「私達の・・・・」

それは龍帝剣と龍神剣であった。

朱里
「拾ってきました！！」

雛里
「それが龍帝剣と龍神剣ですね。」
桃香
「ありがとう!!孔明ちゃん、鳳統ちゃん!!」
朱里
「あの・・私のことは朱里って呼んでください!!」
雛里
「わ・・私も雛里で・・・・」
劉備ガンダム
「ああ、これで一気に決めるぞ!!」

そして、戦闘が再開された。

胡軫ギャン
「ならば・・・・奪うまで!!」

胡診ギャンは劉備ガンダムと桃香に襲いかかった。

朱里
「がんばってくだしゃい!!!」
雛里
「がんばってください!!!!」

朱里と雛里は必死に応援をした。

そして・・・・桃香は聖龍王形態となり、劉備ガンダムと共に胡軫ギャンの武器を破壊した。

胡軫ギャン
「な・・・何!!??」

劉備ガンダム
「聞こえるぜ！！」
聖龍王・桃香
「二人の、いえ皆の声が！！」
関羽ガンダム
「悪を許さぬ、皆の思いが！！」
愛紗
「平和を望む、皆の思いが！！」
張飛ガンダム
「俺達に力を与えてくれる！！」
鈴々
「そうなれば鈴々達は無敵なのだ！！」

愛紗、鈴々も鎧を装備し始めた。

胡軫ギャン
「何を・・ほざくか！！」

そして・・・劉備ガンダム、聖龍王・桃香は龍帝剣と龍神剣を合わせた。そして・・・

関羽ガンダム
「劉備殿！！」
張飛ガンダム
「兄貴！！」
鬼牙王・愛紗
「桃香様！！」
雷光王・鈴々
「お姉ちゃん！！」

関羽ガンダムの右肩のパーツと張飛ガンダムの左肩のパーツが外れ、劉備ガンダムの両肩に装備された。そして、鬼牙王・愛紗の右肩の鎧と鈴々の左肩の鎧が外れ、聖龍王・桃香の両肩に装備された。そして、両者と共に黄金に輝き始めた。

劉備ガンダム
「三位一体・真龍斬!!」
聖龍王・桃香
「三位一体・閃龍斬!!」

両者の必殺技が胡軫ギャンに炸裂した。

胡軫ギャン
「この私が・・鎮江将軍の私がああああああああ!!!」

胡診ギャンはそのまま爆発した。
朱里
「やった・・
愛紗
「やりましたね。兄上、桃香様。」
劉備ガンダム
「ああ。」
一刀
「俺は何もできなかったけれど・・・・・」
鈴々
「やっぱり鈴々達は最強なのだ!!」
桃香
「そう・・・私達の背中には・・・三璃紗の明日が・・・・」

そして、それを呂布トールギスと恋が見ていた。

呂布トールギス
「ふっ、なかなか楽しめそうだ。」
恋
（あの人たちなら・・・月を救えるかもしれない・・・・）

そして、二人はその場から去ったのであった。

その後、朱里と雛里も旅に同行することになった。

第４話『龍神と二人の少女』（後書き）

次回予告

三璃紗の民を苦しめる董卓軍を討つために曹操の呼びかけによって反董卓軍が結成された。

次回　第５話『群雄集結！！』

第5話『群雄集結！！』（前書き）

いよいよ他のキャラクターも増えてきますよ。楽しみにしてください。

第5話『群雄集結!!』

ここはとある場所・・・・一人の武将が書物を読んでいた。すると

程?ワイズワラビー
「司馬懿殿!!ついに龍が・・・失われた龍帝剣と龍神剣を持つものが現れたぞ!!」
司馬懿サザビー
「何!?まさか!!」

司馬懿サザビーは程?ワイズワラビーの説明に驚いた。そしてだんだんと高笑いをしてくるようになった。

司馬懿サザビー
「時は満ちたか!!!天が乱世を望むなら我らもまたその宿命に洵ずるまで!!」

・・・・一人の武将がその場所に立っていた。そこへ一人の少女がやってきた。

華琳
「暗殺は失敗のようね。ところでどうするの?董卓の暗殺が失敗した以上、都にはいられないわよ。どうするの?曹操。」
曹操ガンダム
「華琳、俺の進むべき道は見えた。」
華琳
「そういうことなら・・・・私も同感よ。」

そして、官軍最後の闘将、曹操ガンダムと曹操（真名・華琳）は軍隊の前に立った。

曹操ガンダム
「成すべきは正義！！」
華琳
「成すべきは天！！」
曹操ガンダム・華琳
「「三璃紗の明日はこの曹操がっ！！！」」
曹操ガンダム
「集え！！」
華琳
「戦士達よ！！」

二人の激によって兵士達は活性を上げたのであった。

第５話『群雄集結！！』

三璃紗の民を苦しめる董卓軍を討つため、曹操のゲキに応え、各地の英雄達が続々に集まり、反董卓連合軍が結成された。そして、そんな中で彼らも入っていた。

劉備ガンダム、関羽ガンダム、張飛ガンダム、桃香、愛紗、鈴々、朱里、雛里、そして一刀は反董卓連合軍の野営地に入ってきたのであった。

桃香
「すっごーい！！皆、集まっているね。」
一刀
「皆、董卓を討つために集まっているんだな。」

劉備ガンダム
「でも・・・入ってきたのはいいけれどここに加わるにはどうすればいいんだ?」
愛紗
「いったいだれに話を通せばいいのか?」

すると・・・・

公孫賛イージーエイト
「劉備、桃香!!」
白蓮
「久しぶりだな!!なぜお前達がここに来ているんだ!!」
劉備ガンダム
「公孫賛の兄貴!!」
桃香
「白蓮ちゃん!!」

そこには公孫賛イージーエイトと白蓮がいたのであった。

劉備ガンダム
「兄貴達も義勇軍に!!」
公孫賛イージーエイト
「ああ、俺達も父上の軍を率いて連合軍に参加したんだ。」
桃香
「そうだったんだ。」
白連
「ところで北郷は知っているが・・一緒にいるのは誰だ?」

公孫賛イージーエイトと白蓮は劉備ガンダム達の後ろにいる愛紗達に気付いた。

劉備ガンダム
「俺と桃香の義兄妹の関羽と張飛と愛紗と鈴々だ！！」
公孫賛イージーエイト
「劉備、後のほうは真名だろ・・・・」
劉備ガンダム
「あ・・・・」
桃香
「劉君ったら・・・・で私達と一緒に旅をすることになった朱里ちゃんと雛里ちゃんだよ。」
白蓮
「桃香もだろ・・・」
桃香
「あはは・・・」
愛紗
「私は別に構いません。」
鈴々
「鈴々もなのだ！！」
朱里
「私もかまいましぇん！！」
雛里
「わたひもでしゅ！！」

朱里と雛里もかみかみ状態で答えた。

一刀
「あはは・・・俺達は義勇軍としてこの軍に参加しようと思っているんだ。」
白蓮
「そうか・・・二人が認めた兄妹なら間違いないだろ！！なあ公孫

賛。」

公孫賛イージーエイト

「そうだな。お前達が加えれば百人力だな！！」

張飛ガンダム

「おいおい百人力なんてあるわけねぇだろ！！」

鈴々

「そうなのだ！！失礼なのだ！！」

すると

張飛ガンダム

「俺様が加われば最低でも千人力、いや万人力だ！！・・・アダ！！」

関羽ガンダム

「お前は調子に乗りすぎだ！！」

鈴々

「やーい！！張飛、殴られてやんのーなのだ！！・・・・・はにゃ！！！」

愛紗

「お前もだ、鈴々！！」

張飛ガンダムは関羽ガンダムに、鈴々は愛紗に殴られたのであった。

桃香

「ふふ・・・でも二人のいうとおりだよ。」

劉備ガンダム

「まったくだ！！」

一同は笑っているのであった。それをそれぞれの群雄たちが見ていた。

曹操軍

曹操ガンダム
「あれが・・・劉備か・・・・」

華琳
「司馬懿の言うとおり、あの二人が伝説の龍帝剣と龍神剣を持っているというわけね。」

曹操ガンダム
「劉備・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
それは十五年前のことであった。若き頃の曹操ガンダムにとって驚くべき事実が起こった。

曹操ガンダム
「将軍！！　お待ちください！！盧植将軍！！引退など・・・・将軍は三璃紗を見捨てるおつもりですか？」

それは将軍、盧植ジムキャノンの突然の引退であった。

盧植ジムキャノン
「それは違うぞ。曹操校尉・・・。ワシはむしろ祖国のために身を引くのだ！！」

曹操ガンダム
「どういう意味です？」

盧植ジムキャノン
「明日のために己は何を為すべきか、己は何になるべきか。ワシにはワシの、貴様には貴様の往く道がある！曹操よ、明日は己でつかむものなり！」

曹操ガンダム
「盧植将軍！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、現在

曹操ガンダム
「そうか・・・盧植将軍、貴方のつかんだ『明日』とはあの二人のことか・・・・・」
華琳
「ますます興味がわいてきたわ。」

孫堅軍

孫堅ゼフィランサス
「おお、あの二人が劉備か、あの伝説の失われた龍帝剣と龍神剣を手にしているのか。」

江東の虎と呼ばれた侠、孫堅ゼフィランサスも劉備ガンダムと桃香の様子を見ていた。

黄蓋グフ
「殿、これはもしかしては・・・・・」
孫堅ゼフィランサス
「我が秘宝の虎錠刀と虎王牙刀と同じ力を持っているかもしれんな。これは我が息子と娘達もうかうかしておられんぞ！！」
孫策サイサリス
「何をおっしゃるんですか、父上！！私達はだれにも負けません！！なあ雪連！！」
雪蓮

「もちろんよ！！父様の言っていることは間違っていないと思うけど私達なら誰にも負けないわよ。」

孫堅ゼフィランサスの息子の孫策サイサリスと娘の孫策（真名・雪蓮）は自信があるかのように言った。

孫策サイサリス
「孫権、お前はどう思う？」

孫権ガンダム
「え！？俺は兄さんや姉さんとは違って・・・・」

蓮華
「孫権、孫策兄様が励ましてるのよ。自分に自信を持って！！」

孫権ガンダム
「蓮華・・・・でも・・」

自分に自信を持てない孫権ガンダムを孫権（真名・蓮華）が励ました。

孫堅ゼフィランサス
「まったく、蓮華とは違って困った奴だ。」

黄蓋グフ
「ですが・・若も素質があります。」

孫堅ゼフィランサス
「だと・・いいんだがな。」

彼らはそんな様子を見ていたのであった。すると・・・・

袁術ズサ
「静まりなさい！！この反董卓連合軍に参加できるのは選ばれし群

雄のみ！！」
袁術（真名・美羽）
「そのとおりじゃ。劉備とやら童達はお前達の参加を認めた覚えはないぞよ！！」

そこへ袁術ズサと美羽がやってきた。

張飛ガンダム
「あっ？なんだ、この末成り野郎と金髪チビは？」
袁術ズサ
「末成り！！？」
美羽
「チビじゃと！！？」
関羽ガンダム
「こら、やめんか張飛！！」
桃香
「兄さん、誰です？」
公孫賛イージーエイト
「袁術様だ！！この連合軍の副将だ。」
愛紗
「副将ですか・・・」
鈴々
「こんなチビや末成り野郎が副将なんておかしすぎるのだ！！」
美羽
「えーい！！他の奴らならまだしもお主にだけは言われたくないわ！！！」
袁術ズサ
「まったく失礼な人たちです！！！」

袁術ズサと美羽も侮辱されたことで怒っていた。そこへ

袁紹バウ
「一体何事だ？」
袁紹（真名・麗羽）
「何、さわいでいるんですの、美羽さん？」
袁術ズサ
「おお、兄上。」
美羽
「麗羽姉様も・・・」

袁紹バウ、麗羽、顔良（真名・斗詩）、文醜（真名・猪々子）がやってきた。

袁紹バウ
「そなたは・・・公孫賛とかいったな・・・」
公孫賛イージーエイト
「袁紹様！！」
劉備ガンダム
「袁紹・・・？」
白蓮
「二人とも頭を下げろ！！この方々は反董卓軍の盟主である袁招様だ！！」
桃香
「はい！！」

劉備ガンダム達は頭を下げた。

愛紗
「頭を下げろ、鈴々！！」
関羽ガンダム

「お前もだ!!張飛!!」

張飛ガンダムと鈴々も渋々、頭を下げたのであった。

袁術ズサ
「やっとわかったみたいですね。これほどの大連合軍を率いるには我ら袁一族のような貴族の家柄が必要なのです!!」

美羽
「そのとおりじゃな。」

袁紹バウ
「劉備とやら、ワシらが率いる反董卓連合軍にはお前達のような貴族でもなく兵を率いていない田舎者を加える余地はない!!」

麗羽
「まったくそのとおりですわね。」

劉備ガンダム
「そんな俺達は三璃紗を闇に包もうとしている董卓を倒したくってこの連合軍に参加しに来たんだ!!」

桃香
「そうです!!私達も董卓軍に苦しめられて来たんです!!」

愛紗
「さよう、袁招殿!!貴方がたは反董卓軍の盟主。」

関羽ガンダム
「我らと理想を同じとする仲間ではないのか!!」

麗羽
「おーほほほほ!!この高貴な家柄の私達が貴方達の仲間ではありませんわ!!」

袁紹バウ
「とにかくワシらの機嫌がそこねぬうちにこの野営地を立ち去れ!!」

一刀

「なんだと！！」
斗詩
「すみません、すみません！！」
猪々子
「二人はいつもこんなんで・・・・」
一同は険悪なムードになっていた。すると
兵士
「来た！！董卓軍の襲撃だ！！」
桃香
「え！？」
そこでは一人の女武将が兵士達を倒しているのであった。
華雄（真名・藍）
「ふはははは董卓軍に刃向かうものはすべて倒す！！！！我こそは董卓軍の武将・華雄！！貴様ら反乱軍などすべてようやく真名がついた私が倒してくれるわ！！」
一同は襲撃に気付いた。
孫堅ゼフィランサス
「おお！！」
曹操ガンダム
「しまった！！」
そして、藍は袁紹達の元へやってきた。
藍

「ふふふ、見つけたぞ！！貴様らが反董卓連合軍の親玉の袁紹と袁術だな！！さあ勝負だ！！」

藍は武器を手にして襲いかかろうとしていた。

袁術ズサ
「ひえええええええええええ！！！！！」
美羽
「ぴぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！」

袁術ズサと美羽は逃げ出してしまった。

麗羽
「美羽さん！？」
袁紹バウ
「こら！！袁術、なぜ逃げる？」
麗羽
「こうなったら斗詩、猪々子！！やってしまいなさい！！」
猪々子
「しょうがないな・・・・」
斗詩
「勝てるのかな…？」

二人は仕方なく挑むが・・・・

藍
「ふん！！」
斗詩
「きゃああああ！！」
猪々子

「あべっし！！」

あっさりとやられてしまった。そして、藍は袁招と麗羽の元へとやってきた。

藍
「次は貴様らの番だ！！」
袁紹バウ
「うわわ・・なぜ盟主であるこのワシが闘わねばならんのだ？麗羽、お前が行け！！」
麗羽
「なぜ私が闘わなければいけませんの！！貴方が行きなさい！！」
袁招バウ
「うるさい、お前が行け！！」
麗羽
「貴方が行きなさい！！」

袁紹バウと麗羽は喧嘩を始めてしまった。

藍
「ちっ・・・盟主がこれでは期待できん！！」

藍はこの場から去ろうとした。その時

劉備ガンダム
「はあああああああああ！！！」
聖龍王・桃香
「えええええい！！！」
藍
「くっ・・・・何者だ！！」

突然の攻撃に藍は防御した。そこには劉備ガンダム、関羽ガンダム、張飛ガンダム、恋姫鎧装した桃香、愛紗、鈴々がいた。

六人
「我ら、幽州義勇軍!!!」
藍
「幽州義勇軍、そうか貴様らが胡診を倒した奴らか。」

そのころ逃げ出した袁紹バウと麗羽は・・・・・・

袁紹バウ
「ふう、助かったわい。」
麗羽
「ですわね。」

そこへ

袁術ズサ
「ご無事で何よりです。」
袁紹バウ
「袁術!!お前、さっきはワシを置いて逃げおって!!」
美羽
「ふふふ、袁術はへたれじゃの!!麗羽姉様もご無事でよかったのじゃ!!」
麗羽
「そうですわね。・・・・って美羽さんも私を置いて逃げたのではありませんか!!」

そして、幽州義勇軍は藍と闘っていた。

張飛ガンダム
「爆裂大雷蛇！！！」
雷光王・鈴々
「爆裂雷鳴砲！！」
関羽ガンダム
「鬼牙百列撃！！！！」
鬼牙王・愛紗
「鬼牙双刃撃！！」
劉備ガンダム
「星龍斬！！！！」
聖龍王・桃香
「光龍斬！！！」

それぞれの攻撃を受け止めた藍は・・・・

藍
（ふっ・・・この者達なら月様を助けられるかもしれんな・・・・）

そう思うと藍は

藍
「ふっ、なかなかやるな幽州義勇軍よ！！この続きは虎牢関でやろうぞ！！」

そういうと藍はその場から逃げだした。

雷光王・鈴々
「こらー、逃げるな！！」

張飛ガンダム
「追いかけるぞ！！」
劉備ガンダム
「待て、追いうちは危険だ！！」
聖龍王・桃香
「劉君の言う通りだよ。ここは体勢を立て直さなきゃ。」

こうして、反董卓連合軍の危機は去ったのであった。

その後、劉備ガンダム達に助けられた袁紹達は幽州義勇軍の参加を認めたのであった。

公孫賛イージーエイト
「共に戦おう！！劉備、桃香！！」
白蓮
「期待しているぞ！！」
桃香
「うん、兄さん、白連ちゃん！！」
劉備ガンダム
「ああ！！」

こうして、幽州義勇軍も戦いに参加することができたのであった。

馬騰率いる西涼軍はすでに天水を出発し、西方より長安を目指している。

虎牢城の正門は曹操軍、公孫賛軍、幽州義勇軍が攻めていた。

そして、虎牢城の難解の場所である虎の巨像が見守る地を攻めるのは・・・・

孫堅ゼフィランサス
「あれに見えるは虎牢城の虎の門!!その壁に虎が見えよう!!このワシも江東の虎と呼ばれし武将!!虎が虎を狩ってみせようぞ!!」
孫堅軍兵士
「おおおおっー!!!!」

江東の虎と呼ばれし武将、孫堅ゼフィランサス率いる孫堅軍である。

孫策サイサリス
「行くぞ!!」
雪蓮
「ええ、もちろんよ!!やる気が出てきたわよ!!」
孫権ガンダム
「やっぱり俺は・・・」
蓮華
「もうここまで来たんだからいい加減に覚悟を決めなさい!!」

そのころ、正門では

華雄ザンネック
「来おったな!!反乱軍め!!」
藍
「しかし華雄よ。気をつけろ!!反乱軍には私を圧倒する軍がいるからな!!」
華雄ザンネック
「ふっ・・・それなら期待しているぞ!!行くぞ!!」
藍
「ああ!!」

そういうと華雄ザンネックと藍は虎牢関から飛び降りた。しかし

華雄ザンネック
「あっ！！」

藍
「なっ！！？（／／／／／／／／／／）」

董卓軍兵士
「華雄様！！」

華雄ザンネックが柵に足を引っ掛かってしまい、その際に藍の胸当てのホックを掴み、その拍子で胸あてが外れてしまった。そして、そのまま・・・・・

華雄ザンネック、藍
「あああああああああああああああ！！！！？」

そのまま落下して、転げ落ちてしまった。ようやく兵士達のいるところまでやってきたところで止まった。

華雄ザンネック
「いててて・・・・」

藍
「なっ！！？（／／／／／／／／／／）」

華雄ザンネックは藍の胸を鷲掴みしていた。

藍
「何をするんだ！！！？」

華雄ザンネック

「ぶふぉ！！！」

藍は華雄ザンネックを思いっきり殴った。そして、二人は周りから冷たい視線を浴びさせられていた。藍は胸当てを直すと・・・・・

藍
「ははははは！！！董卓軍武将、華雄！！」
華雄ザンネック
「貴様ら反乱軍などワシらが相手になるぞ！！」
董卓軍兵士
「さすがは華雄様！！！かっこいい！！！」

そこへ劉備ガンダム達がやってきた。

一刀
「よっし、やるぞ！！」
鬼牙王・愛紗
「ご主人様は無理しないほうが・・・・・」
一刀
「俺だって闘えるんだ。これくらい平気さ！！」
聖龍王・桃香
「ご主人様・・・」
雷光王・鈴々
「お兄ちゃんは大丈夫そうなのだ！！」
張飛ガンダム
「まあ、なにかあったら俺達が旦那を守ってやるぜ！！」
劉備ガンダム
「俺達、幽州義勇軍が相手になる！！」

劉備ガンダム達は武器を構えた。

華雄ザンネック
「ぐはははははは!!!!!　幽州義勇軍だと!!?笑わせてくれるわ!!」
藍
「しかし、華雄、こいつらをなめたら・・・」
華雄ザンネック
「心配するな!!?こいつらなど我が斬馬戟の必―っ殺の一撃で・・・・!?」

そのとき

曹操ガンダム
「大紅蓮斬!!!!!」
炎鳳王・華琳
「超烈火斬!!!」
華雄ザンネック
「ぎゃあああああああああああああああ!!!!!!」

突然、現れた炎によって華雄ザンネックは戦死した。

藍
「くっ、華雄がやられたか・・・いったん体勢を立て直すしかないか!!」

藍はその場から去ったのであった。

曹操ガンダム
「うるさいぞ。お前!!」
炎鳳王・華琳

「本当よ！！」

そこへやってきたのは愛馬・絶影に跨った曹操ガンダムと鳳凰の鎧をまとった華琳の姿であった。

劉備ガンダム
「あれが・・・・曹操・・・」
聖龍王・桃香
「すごい・・・」

二人の劉備と曹操。後に宿敵となる二人の初めて出会いであった。

すると正面の門が開くと多数の兵士と馬に跨ったＭＳ武将と女性がいた。

張遼ゲルググ
「車騎将軍！！　張遼、見参！！」
張遼（真名・霞）
「うちも張遼や！！！曹操、覚悟しろや！！！！」

張遼ゲルググと霞はそれぞれの武器で曹操ガンダムと華琳に襲いかかろうとしていた。すると

夏侯惇ギロス
「貴様が泣く子も黙る張遼か！！」
夏侯惇（真名・春蘭）
「貴様、華琳様に刃を向けるとは許さんぞ！！」

夏侯惇ギロスと春蘭が止めたのであった。

夏侯惇ギロス
「曹操！！こいつは俺にやらせろ！！」
春蘭
「華琳様、この者の相手は私が！！」

すると後ろから手離剣が襲いかかってきた。しかし鉄球と矢によって落とされた。

夏侯淵ダラス
「兄者！！」
夏侯淵（真名・秋蘭）
「姉者、大丈夫か！！」
夏侯惇ギロス
「おお夏侯淵！！」
春蘭
「秋蘭！！」

夏侯淵ダラスと秋蘭によって助けられた。そこへさらに二人の武将が現れた。

陳宮メリクリウス
「虎牢城・右軍校慰・陳宮！！」
高順ヴァイエイト
「左軍校慰・高順！！貴様らの相手は我らが務める！！」
夏侯淵ダラス
「面白い！！俺は曹操軍副将・夏侯淵！！」
秋蘭
「我が名も夏侯淵！！」
夏侯惇ギロス
「同じく夏侯惇！！」

春蘭
「我が名も夏侯惇だ！！」
夏侯惇ギロス
「俺達、兄妹に戦いを挑んだことを後悔すんじゃねぇぞ！！」

そして・・・・

張遼ゲルググ
「いざ参る！！」
曹操ガンダム
「来い！！」

そして、両者は激突したのであった。

そのころ、虎の門では孫堅軍がようやくたどり着いた。

孫堅ゼフィランサス
「これが虎の門・・・・」

するとこちらも門が開いた。

程普ジムカスタム
「殿！あれを！！」
韓当ジムキャノン？
「敵襲か！？」

しかし、虎の巨像の口から光が見えた。

祖茂パワードジム
「！！？危ない殿！！」

祖茂パワードジムは孫堅ゼフィランサスを守ったが重傷を負った。

孫堅ゼフィランサス
「祖茂！！！」
孫策サイサリス
「貴様は！！」

そこにいたのは・・・

呂布トールギス
「ふふふ・・・ふはははははっ！！！」
雪蓮
「呂布！！」
呂布トールギス
「まずは貴様らが相手か！！！江東の虎と江東の小覇王！！」

そして、呂布トールギスは降りたのであった。そして、孫堅ゼフィランサス、孫策サイサリス、雪蓮の所へ向かおうとしていた。

黄蓋グフ
「殿！！」
周瑜ヒャクシキ
「孫策！！」
周瑜（真名・冥琳）
「雪蓮！！」

周瑜ヒャクシキと冥琳と黄蓋（真名・祭）と黄蓋グフ達四騎衆も立ち向かおうとするが、突然周りに蝶が現れ、周りが爆発した。

祭
「くっ・・・これは・・・・」
貂蝉キュベレイ
「奉先の戦いの邪魔させぬ!!」

門から貂蝉キュベレイが現れた。

孫権ガンダム
「どうすれば・・・・」
周瑜ヒャクシキ
「若、ここは我々に任せて殿と孫策の元へいってきてください!!」
孫権ガンダム
「でも・・・・・」
冥琳
「私達なら大丈夫です!!蓮華様も行ってきてください!!!」
蓮華
「冥琳・・・・・」

二人は孫堅達のほうへ向かっていくのであった。

そのころ、公孫賛イージーエイトと白蓮も敵と激闘していた。

公孫賛イージーエイト
「くっ・・・さすがにこの数は多すぎする!!」
白蓮
「このままでは・・・・」

すると突然現れた一人のＭＳ武将と女性によって敵が倒された。

趙雲ガンダム

「大丈夫ですか？　公孫賛殿！！」
公孫賛イージーエイト
「お前達は・・・・」
趙雲（真名・星）
「我らは流浪の武将・・・・というのは今日まで、義によって貴公らと闘わせてもらうぞ！！」
董卓軍兵士
「えーい、やってしまえ！！」

董卓軍兵士は襲いかかった。

趙雲ガンダム
「真空迅！！！」
星
「はあああああああああああ！！！！！」

一瞬のうちで兵士達を倒したのであった。

公孫賛イージーエイト
「すごい・・・・」
趙雲ガンダム
「これからは貴方達と共に戦わせてください！！」
白蓮
「ああ、よろしくな。趙雲に趙雲・・」
星
「私のことは星でよろしい。共に戦っていく中だからな。」
白蓮
「では私も白蓮で・・・」

こちらも戦闘を繰り広げていたのであった。

そのころ

張飛ガンダム
「この殺気!!」
雷光王・鈴々
「あれは・・・呂布なのだ!!」

幽州義勇軍は虎の門で孫堅軍と戦っている呂布トールギスを見つけたのであった。

関羽ガンダム
「劉備殿!!」
鬼牙王・愛紗
「桃香様!!」
一刀
「指示を頼む!!」
聖龍王・桃香
「これ以上、犠牲を出さないためにも・・・・」
劉備ガンダム
「幽州義勇軍はこれより敵将・呂布を討つ!!この戦いを終わらせるためにっ!!!!!」

そして、幽州義勇軍は呂布トールギスのいるところへ向かっていくのであった。

そのころ、?陽では恋、詠が裏口で何かしていた。

詠
「月っ、早く!!」

後ろから現れた少女はもう一人の董卓（真名・月）である。董卓ザクとは違い、心やさしい性格をしているのだ。しかし張譲に捕まってしまったのであるが隙を見て逃げ出した。

月
「うん・・でもここから逃げて、どこいけば・・・」

陳宮（真名・音々音）
「そんなの後で考えればいいのです！！」

恋
「大丈夫、みんな・・・恋が守る・・・」

はたして月達の運命は・・・・・！？

第5話『群雄集結！！』（後書き）

次回予告

激戦続く虎牢城！！そして月達から語られる真実は・・・

次回　第6話『江東の虎、死す！！　？陽炎上！！』

第6話『江東の虎、死す！！　？陽炎上！！』（前書き）

なぜか携帯版だと一部の文字が消えてしまう・・・・
ちなみに恋姫の華雄の真名は藍です。

第6話『江東の虎、死す！！　？陽炎上！！』

虎牢城では戦闘が繰り広げていた。そこへ新たな武将達が現れた。

孫尚香ガーベラ
「わぁー、やってる、やってる！！本物の戦だ！！すごい！！シャオ、来て来て！！」

孫尚香（真名・小蓮）
「本当だ！！これならシャオ達の大活躍をお父様や兄様や姉様にみせることができるわ！！」

孫尚香ガーベラ
「よーし、行くわよ！！」

二人が向かおうとするとそこへ陸孫（真名・隠）と呂蒙（真名・亞莎）、周泰（真名・明命）があわてた様子でやってきた。

隠
「あれぇー？　尚香様に小蓮様、長沙のお城で留守番してるんじゃなかったんですか？」

孫尚香ガーベラ
「だって退屈だったんもん！！」

小蓮
「シャオ達だって大活躍しちゃうんだから！！」

隠
「まったく姫様は・・・・・はっ！！！それよりも大変です！！！」

孫尚香ガーベラ
「どうしたの？」

亞莎
「それが殿も孫策様も孫権様も雪蓮様も蓮華様も周瑜様も冥琳様も

祭様も四騎衆も苦戦しています！！」
明命
「いま、思春様も向かっていますが苦戦することには変わりなく。
それからご家老の祖茂様も重傷です！！」
小蓮
「なんですって！！」

それを聞いた孫尚香ガーベラと小蓮は慌てて、孫堅ゼフィランサス達の所へ向かった。

第６話『江東の虎、死す！！　？陽炎上！！』

そのころ虎牢城では戦闘が繰り広げていたのであった。

そんな中で孫堅ゼフィランサス、孫策サイサリス、雪蓮、孫権ガンダム、蓮華、そして、新たに甘寧（真名・思春）も加戦して呂布トールギスと闘っていたが苦戦していた。

思春
「蓮華様、このままでは・・・」
蓮華
「たしかにこのままではまずいわね。」

すると

劉備ガンダム
「見つけたぞ！！呂布！！」
呂布トールギス
「ぬ？」
孫堅ゼフィランサス

「お主らは？」

そこへ劉備ガンダム、関羽ガンダム、張飛ガンダム、桃香、愛紗、鈴々、一刀達、幽州義勇軍が現れた。

七人

「我ら、幽州義勇軍！！！」

孫策サイサリス

「おお！！」

聖龍王・桃香

「孫堅将軍、私達も加勢いたします！！」

呂布トールギス

「ほう・・・貴様らか・・・・」

劉備ガンダム

「呂布！！いつぞやの決着をつけてやるぞ！！」

呂布トールギス

「虎の次は龍か・・・面白い、かかってこい！！この俺の血をたぎらせてみろ！！」

劉備ガンダム

「行くぞ！関羽、張飛！！」

聖龍王・桃香

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃんもがんばろうね！！」

そして、一同は呂布トールギスと激闘を繰り広げていた。

そのころ

孫尚香ガーベラ

「祖茂爺！！」

小蓮

「大丈夫!!」

孫尚香ガーベラと小蓮と亞莎と明命と穏は致命傷を負った祖茂パワードジムの所へと向かった。

祖茂パワードジム
「姫様・・・・」
孫尚香ガーベラ
「あいつか?爺をこんな目にあわせたのは!?」

孫尚香ガーベラと小蓮は呂布トールギスを見つけた。

小蓮
「シャオ達がやっつけてやる!!!」

二人は戦場へと向かったのであった。

祖茂パワードジム
「姫様、な・・なりませ・・・ぬ・・・・・」

祖茂パワードジムは何とか止めようとするもそのまま力尽きてしまった。

明命
「祖茂様!!」
隠
「そんな・・・」

そのころ戦場では

呂布トールギス
「魂!!!旋風大烈斬!!!!!!!!ぐおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

呂布トールギスの攻撃によって劉備ガンダム達も苦戦していた。

呂布トールギス
「たぎる!!命を奮わす戦いに魂も叫んでおるわ!!!!」
聖龍王・桃香
「さらに強くなっている。」
雪蓮
「まさに暴将・・・なんという戦士なの・・・・・」
孫堅ゼフィランサス
「ならば受けてみよ!!!虎錠刀と虎王牙刀の力を!!!」

孫堅ゼフィランサスは虎錠刀と虎王牙刀を構えると・・・

孫堅ゼフィランサス
「くらえ!!!猛虎獣烈覇!!!!!」

孫堅ゼフィランサスは二本の剣から放った虎のオーラで呂布トールギスを攻撃した。

呂布トールギス
「くっ・・なかなかやるな江東の虎よ!!!だがこれで終わりしてやる!!!」
孫堅ゼフィランサス
「猛虎獣烈覇を防ぎきっただと!!?」
呂布トールギス
「旋風爆裂衝!!!!!!!!!」

呂布トールギスはさらなる攻撃を繰り出した。

孫堅ゼフィランサス
「者ども！！かわせ！！！」

孫堅ゼフィランサス達はかわそうとするが

孫尚香ガーベラ
「父上、兄上！！」
小蓮
「お姉様！！」

そこへ孫尚香ガーベラと小蓮がやってきたのだ。

孫堅ゼフィランサス
「尚香、シャオ！！！？いかんっ！！来るな！！！！」
孫策サイサリス
「父上！！」
一刀
「孫堅将軍！！」

孫堅ゼフィランサスは危険を顧みずに娘達の所向かった。そして・・
・・

孫堅ゼフィランサス
「ぐわあああああああああああ！！！！！！」
小蓮
「お父様！！！！！」

呂布トールギスの攻撃をまともに食らってしまい、その場に倒れてしまった。

孫権ガンダム
「父上・・・そんな・・・」
蓮華
「お父様・・・・くっ・・・はあああああああああああ！！！！」
孫権ガンダム
「うおおおおおおおおおおおお！！！！！」

父を倒されたことによって、孫権ガンダムと蓮華は怒りを身に任せようとしたが…

雪蓮
「蓮華、落ち着いて！！」
孫策サイサリス
「孫権、怒りを身に任せるな！！！」
孫権ガンダム
「はっ！！」
蓮華
「姉様・・・・・」

二人の言葉によって怒りを収まることができた。そして正門では騒ぎになっていた。

呂布トールギス
「ちっ、虎牢城が落ちたか・・・やはり江東の虎もその程度か！！龍帝剣と龍神剣を持ちしものよ！！この勝負預からせてもらうぞ！！」

呂布トールギスはその場から去ったのであった。

鬼牙王・愛紗
「待て！！」
張飛ガンダム
「あの野郎！！」
一刀
「ゆるさねぇ！！」

そして・・・孫堅ゼフィランサスは死に際に孫権ガンダム達に語ろうとした。

孫堅ゼフィランサス
「このワシが・・・・ここで倒れるとは・・・・尚香、シャオ。あれほど・・戦場に来るなといったハズだぞ・・・・・」
孫尚香ガーベラ
「父上！！」
小蓮
「お父様！！」
孫堅ゼフィランサス
「孫策、雪蓮。後のことはお前達に任せる・・・・・」
孫策サイサリス
「父上！！」
雪蓮
「父様！！」

そして・・・・

孫堅ゼフィランサス

「孫権、蓮華・・・・・」
蓮華
「お父様・・・・・・」
孫権ガンダム
「父上・・・・・」
孫堅ゼフィランサス
「勇気だ・・・・お前達の心の中に眠る・・・・・真の勇気・・・・を目覚めさせるのだ・・・・」
孫権ガンダム
「真の勇気・・・・・・」

孫堅ゼフィランサスは孫権ガンダムに虎錠刀を、蓮華に虎王牙刀を渡した。

孫堅ゼフィランサス
「そうすれば・・・お前達にも・・・・虎錠刀と虎王牙刀が応えてくれるはず…だ・・・・真の勇気を・・・目覚めさせよ!!」
孫権ガンダム、蓮華
「は・・・はい!!」

そして、孫堅ゼフィランサスはゆっくりと瞳を閉じ、静かに息を引き取った。

孫権ガンダム
「父上・・・父上・・・・・？」
孫堅ゼフィランサス
「・・・・・・・・・・」
孫権ガンダム
「父上・・・・父上えええー!!!!!!!!!!」
蓮華

「お父様あああああ！！！！！！！！！」

孫権ガンダムと蓮華、そして、周りにいた戦士達は孫一族の長である孫堅ゼフィランサスの死を悲しんだ。

関羽ガンダム
「なんということだ・・・・あの江東の虎と呼ばれた英雄が・・・・」
雷光王・鈴々
「こんなのいやなのだ！！」
聖龍王・桃香
「やめさないと・・・これ以上誰かが傷ついたり悲しむのは・・・・・」
劉備ガンダム
「この戦い絶対に終わらせるぞ！！！」
一刀
「そうだな！！！」

そして、反董卓連合軍は虎牢城を突破した。

そのころ、？陽の宮廷では・・・・・

董卓ザク
「何ぃぃぃぃ！！！！虎牢城が落ちただと！！！！！！」
張譲
「しかももう一人の呂布が董卓を逃がしただと！！！！」
董卓ザク
「ええい！！呂布は何をしておったか！！！！」

董卓ザクと張譲は虎牢城が落ちたことと、月が逃げたことに驚いていた。

徐晃サーペント
「はい報告によると虎牢城守備隊は全滅・・・」
藍
「呂布をはじめとした武将も行方不明です・・・」
董卓ザク
「役立たずめ・・・・」

徐晃サーペントと藍は董卓ザクにそう語った。

藍
（恋が月様を逃がしてくれたんだ・・・）
徐晃サーペント
（よくやったぞ・・・恋!!）

藍と徐晃サーペントは月が逃げたことに安心した。するとそこへ李儒シャッコーがやってきた。

李儒シャッコー
「ひょひょひょ!!!いやあ、戦慄の暴将である呂布将軍も大したこともありませんな。」
徐晃サーペント
「軍師殿、そのような言い方、呂布将軍に無礼であろう!!」
董卓ザク
「負け犬のことなどどうでよい!!」
張譲
「それよりも李儒殿、何か策はないか?」

すると李儒シャッコーは何か言いだした。

李儒シャッコー
「恐れながら董卓様、張譲殿。反乱軍は虎牢城を突破して、ここ？陽に到達する距離まで迫っております！！そして張譲殿も十常侍は全滅したと誤報を流していたもう一人の董卓に知られればまずいことになりましょうぞ！！こうなれば敵の攻撃に備えることが先です。ここは一旦、長安の？宇城まで退き、体勢を立て直すことが先決かと・・・」
藍
「何！！？」
董卓ザク
「みすみすこの？陽を明け渡せと申すか！！！」
李儒シャッコー
「このような都など奴らにくれてやればよいのです・・・・ただし・・・きれいさっぱり焼き払った後で」
李儒シャッコーの言葉に藍と徐晃サーペントは驚いた。
藍
「焼き払うだと！！」
張譲
「名案だ！！」
徐晃サーペント
「張譲殿！！そんなことをすれば・・・民が・・・」
董卓ザク
「民などどうでよいわ！！！　？陽の都に火を放て！！すべてを焼き払うのじゃ！！！！」
そのころ反董卓軍連合は孫堅ゼフィランサスを失った悲しみに包まれていた。

公孫賛イージーエイト
「なんということだ。あの孫堅将軍が・・・・・」
白蓮
「呂布の手にかかり倒されるとは・・・・・・」
趙雲ガンダム
「なんということだ・・・・・」
星
「向こう様も立ち直れるとよいのですがな・・・・・」

その後、孫一族は孫策サイサリスと雪蓮がリーダーとなって進軍を開始する準備をしていた。その後、劉備ガンダム、桃香はショックを大きく受けた孫権ガンダムと蓮華の所へ向かった。

劉備ガンダム
「若将軍・・・・・」
孫権ガンダム
「俺は・・・戦いを恐れていた。・・・・自分がいつ死ぬかで・・・怖かったんだ。」
蓮華
「私も・・・・実は孫権に偉そうなことを言っておきながら・・・・実は怖かったの・・・」
桃香
「孫権さん・・・・・」
孫権ガンダム
「でも・・・父上が言った言葉で目が覚めたよ!!!俺はもう大切な人を傷つけないためにも戦いを恐れないと!!!」
蓮華
「私も戦いからにげたりしないわ!!」
劉備ガンダム
「それでこそ若将軍だ!!」

孫権ガンダム
「若将軍なんてやめてくれよ・・・普通に孫権でいいから」
蓮華
「私も蓮華で呼んでいいわよ。」
劉備ガンダム
「よろしくな!!孫権!!」
桃香
「よろしく、蓮華ちゃん!!」

すると、一刀がやってきた。

一刀
「桃香、劉備。誰かが呼んでいるぞ!!」
桃香
「え!?」

劉備ガンダム達はそのまま行くと曹操ガンダム、華琳、孫策サイサリス、雪蓮、そして・・そこには恋、月、詠、音々音、そして、一人の若い青年と筋肉質の男、二人であった。

一刀
「おーい、二人を連れてきた・・・・」
貂蝉
「あらーん、いい男ねぇーん!!」
卑弥呼
「うむ!!まさにワシ好みじゃ!!」

二人の筋肉質の男、貂蝉と卑弥呼は一刀に襲いかかった。

一刀

「ぎゃあああああああああああ！！！！」

華佗

「貂蝉、卑弥呼！！今はそれどころじゃないだろ！！」

貂蝉

「あらごめんなさいね。」

卑弥呼

「つい・・好みのオの子がいたもので・・・」

話は再開された。

曹操ガンダム

「ではまず・・・そこの少女よ。名を聞こう！！」

月

「はい、私は・・・・董卓です・・・」

すると

全員

「えええええええええええええええ！！！！！！！！！？？」

全員、驚いた。

雪蓮

「こんなかわいい顔した子がこんなことするなんて・・・」

月

「へぅー」

詠

「実はそれはもう一人の董卓と張譲がやっていたことなのよ！！！」

月

「お話します。」

月は話した。張譲が大将軍・何進を罠に嵌めて追放し、董卓ザクを都に引き入れ、そして、結託して自分以外の十常侍や霊帝ガンダムの命を売り、玉璽を渡す。そして、月を人質にして、詠達を無理矢理従わせ、董卓の悪行を全て月に被せる。そして、その隙を見せて逃げ出したのであった。

華琳
「そんなことといきなり言われても・・・・」
曹操ガンダム
「信じがたいものだ。」
恋
「月、嘘ついていない。」
音々音
「恋殿の言うとおりです!!」
月
「別に信じてもらわなくてもかまいません。私はここで死ぬ覚悟ですから・・・」
詠
「月・・・・・」
月
「いいのよ。詠ちゃんは私をいつも助けてくれるから・・・・・」

周りは月の話していることを信じられなかった。

劉備ガンダム
「いや俺は信じるよ!!」
華琳
「え!?」
桃香

「私も彼女が嘘を言っているとは思えないしね。」
孫策サイサリス
「そうだな。」
雪蓮
「私も信じるわ!!」
一刀
「俺も信じるぜ!!」
華琳
「どうするの?曹操?」
曹操ガンダム
「しかたない・・・もう一人の董卓よ、貴公らの身は我々、連合軍が引き受けよう。」
月
「あ・・・ありがとうございます!!」
曹操ガンダム
「ただし、貴公は死んだということで袁紹達には流すぞ。」
劉備ガンダム
「そういうことだ。」
桃香
「よろしくね。」

こうして、月達は助かったのであった。

華佗
「次はこっちの話だ。」
劉備ガンダム
「は・・・はい。」
華佗
「俺は華佗。医者をやっている。後ろにいるのが・・・・」
貂蝉

「私は美しき踊り子の貂蝉よーん！！」
卑弥呼
「ワシは麗しき巫女の卑弥呼じゃ！！」
張飛ガンダム
「どこがだよ・・・どこからみても化け物・・・・」

【しばらくお待ちください】

そこにはボロボロになった張飛ガンダムの姿があった。

桃香
「あははは・・・・どうして三人がここに来ているのでしょうか？」
華佗
「俺達は、太平要術の書を持っている張譲を追う事が目的なんだ。」
劉備ガンダム
「太平要術？」
華佗
「ああ、使えば強力な力を得る恐ろしい妖術書なんだ。」
貂蝉
「だからこそ私達はそれを封印するために旅をしていたのよ。」
曹操ガンダム
「そうか・・・これよりどうする？」
華佗
「もちろんいくさ！！お前達、連合軍と共に戦おう！！」
朱里
「それはたのもしいですね。たしか華佗さんは『五斗米道』の使い手で」
華佗
「五斗米道じゃない！！！ゴッドヴェイドーだ！！！！！」

雛里
「あわわ・・」

そして、華佗は軍医として、詠、音々音は軍師として、卑弥呼と貂蝉と恋は兵として闘うことなった。

一同は?陽に向かった。しかし途中で空の様子がおかしいことに気付いた。

愛紗
「ご主人様!!あれを!!」
関羽ガンダム
「あの方向は?陽!!」
一刀
「空が赤い・・・・・」
劉備ガンダム
「まさか!?」

いやな予感は当たっていた。そう董卓ザクの命令で?陽は燃えていた。都は崩れ、民も炎に飲み込まれていくのであった。

徐晃サーペント
「燃える・・燃える・・・光の都と呼ばれていた?陽が・・・・・何もかも灰になっていく!!」
藍
「くっ・・・・」

二人はそんな炎上する?陽を見ることしかできなかった。

そして、反董卓連合軍が?陽までつくことができた。そこには廃墟

となった?陽であった。

劉備ガンダム
「これが?陽・・・・・・」
桃香
「ひどい・・・ひどすぎる!!」
孫策サイサリス
「董卓め・・・」
雪蓮
「民ごと都を焼くなんて・・・むごいことを・・・・」
華佗
「おのれ!!董卓と張譲は三璃紗を蝕む最低最悪の病魔だ!!!!」
貂蝉
「私の故郷を焼くなんて許さないわよーん!!」
卑弥呼
「我ら漢女道は外道を決して許さん!!」
月
「そんな・・・・」
詠
「月!!」

月は泣き崩れてしまった。

そして、一刀は

一刀
「ちくしょー!!!!!俺達は何のために戦ってきたんだ!!!!!許せねェぞ、董卓!!!!!!」
曹操ガンダム
「一刀、その気持ちを董卓にぶつけるんだ!!」

一刀
「曹操、ああ!!」

すると一刀の体に光があふれると、それは白く光り輝く鎧を装備した姿となった。

愛紗
「ご主人様の姿が変わった!!」
関羽ガンダム
「これは・・・・」
劉備ガンダム
「董卓を倒したいという思いが一刀に伝わったんだ。」
閃光装・一刀
「俺は決めたよ!!三璃紗に生きる者のために・・・董卓だけを倒さなきゃいけないんだ!!!!!」
桃香
「行こう!!ご主人様!!」
劉備ガンダム
「目指すは長安の?宇城へ!!」

こうして反董卓連合軍は決戦の地、長安の?宇城へと向かっていくのであった。

第6話『江東の虎、死す！！　？陽炎上！！』（後書き）

次回予告
ついに董卓ザクとの最後の戦いが始まった。その結末は・・・・・

次回　第7話『終わりなき死闘の果て！』

第7話『終わりなき死闘の果て！』（前書き）

今回で風雲豪傑編が終わります。挿入歌・三璃紗伝説～Ｔｈｅ　Ｂｒａｖｅ　Ｌｅｇｅｎｄ～

第7話『終わりなき死闘の果て！』

長安の北に位置する?宇城。光の都『?陽』を焼き払った董卓軍は険しい山々に囲まれた要塞で連合軍との最終決戦に備えていた。

聖龍王・桃香
「劉君、ついにここまで来たんだね。」

劉備ガンダム
「人の命をもてあそび三璃紗の民を苦しめる董卓！！倒すべき真の悪があそこにいる！！」

閃光装・一刀
「これで戦いが終われば・・」

そして・・・

曹操ガンダム
「これは我らの正義を決する最後の戦いでありすべての始まりである！！全軍突撃！！！！！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

ついに連合軍が動き出したのであった。

劉備ガンダム
「関羽、張飛！！行くぞ！！」

関羽ガンダム
「おう！！」

張飛ガンダム
「やってやるぜ！！！」

聖龍王・桃香
「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、ご主人様!!」
鬼牙王・愛紗
「御意!!」
雷光王・鈴々
「合点なのだ!!」
閃光装・一刀
「行くぞ!!」

第7話『終わりなき死闘の果て!』

そのころ、?宇城では呂布隊が出撃の準備をしていた。

徐晃サーペント
「呂布将軍、お待ちください!!虎牢城での戦いの傷は癒えていないはず!出陣は無茶ですぞ!!」
藍
「いくら董卓様のご命令とはいえ、これでは・・」

徐晃サーペントと藍は呂布トールギスを止めようとした。

呂布トールギス
「ちがうな。徐晃、華雄・・・・この血が奴らとの戦いを求めているのだ。」
貂蝉キュベレイ
「ふっ、付き合うぞ。奉先。」
張遼ゲルググ
「後は往くのみ・・」
霞
「そういうことや!」

呂布トールギス
「好きにしろ！！」

そして・・・

呂布トールギス
「開門！！！！」

ついに戦いが始まった。

孫権ガンダム、蓮華、孫尚香ガーベラ、小蓮組

蓮華
「私はもう大切な人を傷つけさせない！！」

そういうと蓮華から青い光が現れると、虎を模した鎧を装備した姿となった。

孫権ガンダム
「俺もだ！！」

孫権ガンダムも鎧を変形させて、戦闘形態となった。

孫尚香ガーベラ
「あたし達もいくわよ！！」

小蓮
「そのとおりよ！！お父様の弔い合戦よ！！」

白虎王・蓮華
「わかったわ。でも無理しないでね。」

夏侯兄妹ＶＳ高順ヴァイエイト、陳宮メリクリウス

春蘭
「まさかここで貴様らと戦うことになるとはな。」
陳宮メリクリウス
「我らは呂布隊！！この命が尽きても戦いは止まらぬわ！！」
夏侯惇ギロス
「なかなかの心意気だが、それだけで俺達に勝てると思うなよ！！」
高順ヴァイエイト
「ならば行くぞ！！」
夏侯淵ダラス
「来い！！」
秋蘭
「我らが相手になるぞ！！」

こちらも激闘が続いた。

貂蝉、卑弥呼ＶＳ貂蝉キュベレイ

卑弥呼
「行くぞ！！！我が必殺の漢女道が奥義！！！漢女天響拳！！！！！！」

卑弥呼の放った衝撃波で董卓軍兵士を倒した。

貂蝉キュベレイ
「おもしろい。私の相手にふさわしいぞ。」
貂蝉
「ならば私が相手になるわよーん！！」
貂蝉キュベレイ

「私は貂蝉だ！！」
貂蝉
「あらーん、奇遇ね。私も貂蝉なのよ」
貂蝉キュベレイ
「う・・・・・」
貂蝉
「私と同じ名前なだけあって中々の美人ねぇ、でも私の方が一枚上なのよーん」
貂蝉キュベレイ
「な・・なら来い！！！」

貂蝉と貂蝉キュベレイも戦いを始めた。

関羽ガンダム、張飛ガンダム、鬼牙王・愛紗、雷光王・鈴々ＶＳ張遼ゲルググ、霞

張遼ゲルググ
「蒼紋猛瀑布！！」
張飛ガンダム
「爆裂大雷蛇！！！」
関羽ガンダム
「鬼牙百列撃！！！！」

張遼ゲルググと関羽ガンダムと張飛ガンダムもそれぞれの攻撃をぶつけ合わせた。

張遼ゲルググ
「なかなかやるな！！」
関羽ガンダム
「お主こそ！！」

張飛ガンダム
「本気を出しそうな気分だぜ！！」

そのころ

霞
「あんたらの付いている鎧もええもんやな！！だったらウチもまけておられんな！！」

すると霞は武器から光を出すと龍を模した鎧を装備したのであった。

飛龍鎧・霞
「これで互角になったも同然や！！！さあかかってきぃや！！」
雷光王・鈴々
「望むところなのだ！！」
鬼牙王・愛紗
「行くぞ！！鈴々！！」

こちらも戦いを繰り広げていたのであった。

そのころ

曹操ガンダム
「呂布！！」
炎鳳王・華琳
「覚悟！！」
呂布トールギス
「曹操、貴様らか！！！」

絶影に乗った曹操ガンダムと炎鳳王・華琳は赤兎馬に乗った呂布ト

ールギスと激闘を繰り広げていた。さらにそこへ・・・

孫策サイサリス
「暴将・呂布!!父の仇、覚悟!!!」
雪蓮
「はあああああああああああああ!!!!!」

孫策サイサリスと雪蓮が現れ、攻撃したがはじき返されてしまった。
そこへ・・・・

恋
「奉先・・・・」
呂布トールギス
「ほう、恋か・・・・一度、貴様とは剣を交えたいものだ!!」
恋
「恋、奉先を止める!!」
呂布トールギス
「ならば・・・・戦輪形態」

赤兎馬はバイク形態となって、恋に突進した。

呂布トールギス
「魂ィィーッ!!!!!!!!!」
恋
「くっ・・・・・・」
曹操ガンダム
「いかん!!」
炎鳳王・華琳
「このままでは・・・・」

恋はその一撃をくらって、吹き飛ばされてしまった。そして、そのまま向かおうとしていた。

劉備ガンダム
「龍帝剣!!!」
聖龍王・桃香
「龍神剣!!」

そこへ劉備ガンダムと聖龍王・桃香が現れ、攻撃を防いだ

恋
「劉備・・・桃香!!」
劉備ガンダム
「俺達が相手だ!!呂布!!」
桃香
「覚悟しなさい!!」
呂布トールギス
「ふっ・・・来たか龍帝剣と龍神剣!!貴様らだけはこの俺の手でうおおおおおおおお!!!!!」

そして・・・・・

孫策サイサリス
「すさまじい闘気!!」
曹操ガンダム
「来る!!」

そして・・・・

呂布トールギス

「旋風爆裂衝!!!!!!!!!!」

呂布トールギスが強力な一撃を繰り出した。もはや直撃を食らうのも時間の問題であった。

しかし・・・・

閃光装・一刀
「はあああああああああああああああ」

閃光装・一刀があらわれ、その剣が光り出すと、攻撃を防いだ。

聖龍王・桃香
「ご主人様!!」
閃光装・一刀
「お前の好きなようにはさせんぞ!!」
呂布トールギス
「面白い!!まとめて俺が相手になってやる!!」
劉備ガンダム
「呂布、覚悟!!!!」

そして、戦いは激化していた。

そのころ、?宇城では李儒シャッコーがある準備をしていた。

李儒シャッコー
「思った通り、呂布の周りに敵が集まっておるを・・・・・」

そして、李儒シャッコーは恐るべき兵器を使おうとしていた。

李儒シャッコー
「ひゃっひゃっひゃっ！！！弩弓乱射砲、撃っていえいっ！！！！！」

そして、ついに弩弓乱射砲が発射された。その一撃は敵味方関係なく攻撃していた。

公孫賛イージーエイト
「何！！？」
白蓮
「自分達の兵まで攻撃するとは」
趙雲ガンダム
「おのれ！！」
星
「なんと卑劣な！！」

孫尚香ガーベラ
「え！！？」
小蓮
「きゃあああああああああああ！！！！！！」

孫尚香ガーベラと小蓮にもあたりそうになるが

孫権ガンダム
「蒼晄壁！！！！！」
白虎王・蓮華
「はあああああああああああ！！！！！」

孫権ガンダムの蒼晄壁と白虎王・蓮華の攻撃によって防がれた。

孫尚香ガーベラ
「兄さん！！」
小蓮
「お姉様！！」
蓮華
「言ったでしょ！！」
孫権ガンダム
「もう誰も傷つけないと・・・・」

聖龍王・桃香
「ひどい・・」
劉備ガンダム
「無差別攻撃か・・・」
呂布トールギス
「おのれ！！！！！！」

張飛ガンダム
「自分が勝つためなら味方にも容赦なしかよ！！」
雷光王・鈴々
「本当にひどいやつなのだ！！！！」

関羽ガンダム、張飛ガンダム、鬼牙王・愛紗、雷光王・鈴々、張遼ゲルググ、飛龍鎧・霞は必死に攻撃を防いでいた。

張遼ゲルググ
「おのれ！卑劣な！！」
関羽ガンダム
「お主らほどの武人が董卓ごとき暴君に使える義理はなかろう！！」
鬼牙王・愛紗
「どうなのだ！！」

飛龍鎧・霞
「くっ・・・」

夏侯兄妹ＶＳ高順ヴァイエイト、陳宮メリクリウス

夏侯惇ギロス
「何！！？」
春蘭
「味方にまで撃つとは・・・」
夏侯淵ダラス
「なんと卑劣な！！」
秋蘭
「高順、陳宮！！！！！」

そこには弩弓の攻撃をくらった高順ヴァイエイト、陳宮メリクリウスの姿であった。

高順ヴァイエイト
「ぐううう・・・まだだ・・・・」
陳宮メリクリウス
「まだ倒れるわけにはゆかぬ！！」
高順ヴァイエイト、陳宮メリクリウス
「「我らは呂布様の副将！！天下の暴将に敗北の二文字はあらず！！！」」

高順ヴァイエイト、陳宮メリクリウスは怪我をしてもなお、戦いに向かった。

夏侯淵ダラス
「その心意気、敵ながらみごと！！！」

秋蘭
「ならば我らも」
夏侯惇ギロス
「受けて立とう！！」
春蘭
「行くぞ！！」

そして、ぶつかり合った。高順ヴァイエイトと陳宮メリクリウスはそのまま倒れた。しかし

夏侯惇ギロス
「うぐ！！」
春蘭
「がっ！！」

夏侯惇ギロスと春蘭は左目に怪我を負った。

夏侯淵ダラス
「兄者！！！」
秋蘭
「姉者、大丈夫か！！？」
夏侯惇ギロス
「高順・・・・・」
春蘭
「陳宮・・・・・」
夏侯惇ギロス、春蘭
「貴様らの魂、しかとこの目に刻んだぞ！！！」

貂蝉、卑弥呼ＶＳ貂蝉キュベレイ

卑弥呼
「おのれ董卓!!!味方まで攻撃するとはなんと卑劣!!」
貂蝉
「貂蝉ちゃん!!」

貂蝉キュベレイも弩弓の攻撃をくらった

貂蝉キュベレイ
「私も・・・奉先のために・・・・負けられん!!!」
貂蝉
「ならば、私もそれに応えなきゃいけないわ!!!!!　漢女道奥義の奥義!!!!」

そして、お互いぶつかり合った。そして、貂蝉キュベレイは倒れた。

卑弥呼
「貂蝉!!大丈夫か!!」
貂蝉
「貂蝉ちゃん・・・貴方の魂、私の心に刻んだわ!!」

そのころ、?宇城では李儒シャッコーが弩弓乱射砲を発射しまくっていた。

李儒シャッコー
「うひゃひゃひゃ!!!そ～れそれそれ～!!ひゃひゃひゃ!!!うってうって撃ちまくれぇ～!!」
徐晃サーペント
「何の真似だ!?軍師殿!!呂布将軍の部隊が前線にいるのですぞ!」
藍

「都を焼き払うだけでなくこんなむごいことを・・・・」

徐晃サーペントと藍は李儒シャッコーを止めようとするが

李儒シャッコー
「死に損ないどもが今更どうなろうと知ったことではないわ!!それよりも見ろ、徐晃将軍、華雄将軍!!このながめは最高じゃぞ!!　ひゃひゃひゃ!!!」

藍
「き・・・貴様!!」

徐晃サーペント
「このド外道がぁ!!!!!」

李儒シャッコー
「ぎゃあああああああああああ!!!!!!」

李儒シャッコーの外道ぶりにブチ切れた徐晃サーペントと藍は李儒シャッコーをたたきった。

そして・・・

董卓ザク
「ぐはははははは!!!!そうだ!!すべて滅びるがよいのだ!!!!」

?宇城の上には董卓ザクがいたのであった。

董卓ザク
「このワシにたてつくおろか者よ!!それを止められぬ無能な部下よ!!!ワシの力を思い知れ!!!!喰らえ、滅殺爆煉弾!!!!!!!!!!」

董卓ザクはさらに無差別攻撃を繰り出し、敵味方関係なく攻撃していた。そして・・・

閃光装・一刀
「ぐわあああああああ！！！」
聖龍王・桃香
「ご主人様！！！」

閃光装・一刀もまともに食らってしまい、吹き飛ばされてしまった。
その一撃で武装が解除されてしまった。

一刀
「くっ・・・・・・・」
董卓ザク
「ふふふふ・・・張譲の伝達だ。天の遣いよ。この一撃で滅びるがいい！！！！」

そして、董卓ザクがとどめの一発を放った。

一刀
「くっ・・・・」
月
「北郷様！！！」
一刀
「月！！？」
月
「きゃあああああああああああ！！！！」

なんと一刀をかばって月が助けたのであった。月はゆっくりと倒れた。

一刀
「月!!?」
月
「よかった・・・・北郷様が無事で・・・・・」
一刀
「俺はいい!!月、なんで俺を助けんだ!!」
月
「貴方は失ってはいけない人だから・・・・です・・・・あ・・なたを・・まもれてよかった・・・」

月は静かに目を閉じた。

一刀
「月・・・月えええええええ!!!!!」
劉備ガンダム
「そんな・・・・」
聖龍王・桃香
「ひどい・・・・」
一刀
「董卓!!!!!てめぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!」
董卓ザク
「ふふふ・・心配するな!!すぐにあとを追わせてやる!!」

董卓ザクはさらに攻撃をした。そして閃光装・一刀にあたろうとしていた。しかし劉備ガンダムと聖龍王・桃香が前に立ちふさがった。

劉備ガンダム
「いかん!!」
聖龍王・桃香

「ご主人様！！！」
一刀
「劉備、桃香！！」

どかあああああああああああああああああああん！！！！

二人は死を覚悟していたが、驚くべき状況を目の前にしていた。なんと呂布トールギスが二人を助けたのであった。

劉備ガンダム
「呂布・・・・」
聖龍王・桃香
「どうして・・・・」
呂布トールギス
「貴様らを・・・倒すのは・・・・この・・・おれ・・・・」

そして、呂布トールギスはゆっくりと倒れた。そして劉備ガンダムと聖龍王・桃香と一刀の怒りがついに爆発した。

劉備ガンダム、聖龍王・桃香、一刀
「「「董卓！！！！！！！！！」」」
張飛ガンダム
「野郎！！！」
雷光王・鈴々
「なんてひどいやつのだ！！！！」
関羽ガンダム
「もはや、やつを！！！」
鬼牙王・愛紗
「許してはおけぬ！！！」

関羽ガンダムの右肩のパーツと張飛ガンダムの左肩のパーツが外れ、劉備ガンダムの両肩に装備された。そして、鬼牙王・愛紗の右肩の鎧と鈴々の左肩の鎧が外れ、聖龍王・桃香の両肩に装備された。そして、両者と共に黄金に輝き始めた。

劉備ガンダム・聖龍王・桃香
「「三位一体!!」」

董卓ザク
「死にぞこないが!!!落ちろ!!!」

董卓ザクは滅殺爆煉弾を放つが劉備ガンダムと聖龍王・桃香は避けることができた。そして・・・・

董卓ザク
「何!?」

二人は董卓ザクの前にやってきた。

劉備ガンダム
「董卓!!お前には聞こえるか、この声が!!」
董卓ザク
「声だと・・・・」
聖龍王・桃香
「散って行った戦士達の魂の叫びが!!」
劉備ガンダム
「三璃紗に生きるすべての人々の怒りが!!」

それに対して董卓ザクは

董卓ザク
「ぐわはははは!!!!くだらん!!誰に向かって言っている!?この玉璽が目に入らぬか!ワシは三璃紗の王・・・・・!?」

突然、董卓ザクの手に会った玉璽が消えた。

董卓
「消えた!?玉璽が!?これはいったい!!」

そして玉璽は・・・・・・・・・

劉備ガンダム
「ここだ!!!董卓!!」

劉備ガンダムと聖龍王・桃香の手に会った。

董卓ザク
「何だとおっ!!?なぜだ!!なぜワシの手から離れたのだ!!」
聖龍王・桃香
「人々の心を尊ばぬ貴方に三璃紗の王としての資格はありません!!」

そして・・・

劉備ガンダム
「天を、地を、人を」
聖龍王・桃香
「人々を守れと」
劉備ガンダム
「俺達を呼ぶ!!」

劉備ガンダム、聖龍王・桃香
「大いなる力、今ここに！！」

すると玉璽が手に向かって光を出した。

そして、天から龍を模した鎧が現れた。

「ギャオオオオ！！！！！」
孫策サイサリス
「あれは・・・・」
曹操ガンダム
「天玉鎧と神鎧獣！！」
劉備ガンダム
「蒼龍！！」
聖龍王・桃香
「天龍！！」

劉備ガンダムは蒼龍に、聖龍王・桃香は天龍に乗ると、巨大な龍となって董卓ザクを攻撃した。

「ギャオオオオ！！！！！」
劉備ガンダム、聖龍王・桃香
「はあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」
董卓ザク
「バカな！！！！このワシが、このワシが、滅びるとはあああああああ！！！！！！！！！」

董卓ザクは？宇城と共に焼き尽くされたのであった。

そして、それらは二体の龍となって、玉璽と共に天に還った。そこから気絶した劉備ガンダムと桃香が落ちてきた。

鈴々
「お姉ちゃん！！」
愛紗
「桃香様・・・」
張飛ガンダム
「やっぱ俺達もいないとな・・・・」
関羽ガンダム
「死ぬ時は共に誓った我ら・・・」
一刀
「これからも・・・ずっと・・・・・な・・・」

そのころ

張譲
「ちっ、董卓が倒されるとは・・・・でもまだ僕がいるから大丈夫だよ。ふふふ・・・そして、太平洋術があるかぎり・・・・・」

張譲は裏口から逃げることに成功したのであった。

そして、もう一方では

赤兎馬に気絶した呂布トールギスを運んでいた。それを張遼ゲルググと霞が見つけた。

張遼ゲルググ
「呂布将軍も無事のようだし。我らも行くとするか・・・」
霞

「せやけどこれからどないするんや？」

張遼ゲルググ

「私はどこまでも呂布将軍についていくことに決めた。戦場で散った仲間のためにも・・」

霞

「そやな・・・うちもそうするわ！！」

こうして戦いは終わった。華佗の手によって月は一命を取り留めることができた。

そして、戦いの中で徐晃サーペントと藍は曹操ガンダムの配下となった。

そんな様子を見ている人物がいた

孔明リ・ガズィ

「暴虐の星が・・・堕ちましたか・・・・ですがまだ戦いの幕はまだ開いたばっかりですね。」

そして、もう一方でも

于吉

「なかなかやりますね。ですが・・・まだあのお方にはかないませんね。・・・そして、北郷一刀・・・・貴方もです。」

彼らは一体なにものであるのか？

そして、戦いは新たな局面に入ろうとしていた。

第7話『終わりなき死闘の果て！』（後書き）

次回予告

董卓ザクとの戦いが終わり、平和な時を過ごす戦士達。しかしその平和はすぐに打ち砕かれた。

次回　第8話『劉備旅立』

第8話『劉備旅立』（前書き）

今回から袁術編が始まります。

第8話『劉備旅立』

董卓軍との戦いを終えた劉備ガンダム達は故郷の幽州へと戻っていた。彼らは平和な時を過ごしていた。

劉備ガンダム
「いい天気だなぁ♪」
桃香
「本当だよね。」
一刀
「あの戦いが嘘みたいだぜ!!」

劉備ガンダム、桃香、一刀は昼寝をしていた。その下では関羽ガンダム、張飛ガンダム、愛紗、鈴々、恋、音々音が釣りをしていた。

張飛ガンダム
「まったく、せっかく鎧を新しくしたのに暇だな!!」
鈴々
「そうなのだ!!どこかに戦があったら退屈をしのげるのだ!!」
愛紗
「何を言うのだ!!この方がよいではないか!!」
関羽ガンダム
「そのとおり。鎧も武器も使わなくてもいい世の中になったからな。そういう日々が続ければよいのだ!!」
恋
「恋も・・・平和のほうがいい。」
音々音
「ねねもなのです!!平和が一番なのです!!」

董卓が倒れてから月と詠は一刀がくれたメイド服を着て幽州の侍女と言う形で身を隠していた。恋と音々音も月と詠と一緒についてきたのであった。朱里と雛里

張飛ガンダム
「これでこの平和が続・・・」
村人Ａ
「大変だー！！」
桃香
「！？」

そこへ村人が大慌てでやってきた。

村人Ｂ
「村に烏丸の軍が攻めてきた！！」
劉備ガンダム
「何！！？」
村人Ａ
「村の外で奴らが集まっているのを見たんだ！！」
鈴々
「むむむむ！！！それは許せないのだ！！」
張飛ガンダム
「この張飛様が退治してやるぜ！！！」

張飛ガンダムと鈴々は烏丸のいるところまで向かおうとしていた。

愛紗
「場所はわかるのか！！？」
一刀
「それにそれは釣り竿だぞ！！」

張飛ガンダムと鈴々は戻ってきた。

第８話『劉備旅立』

一刀、劉備ガンダム、桃香、関羽ガンダム、愛紗、張飛ガンダム、鈴々、恋、音々音は烏丸のいるところまでやってきた。

？頓メッメドーザ
「ここ平和ボケな幽州はワシら烏丸のものや！！者どもかかれ！！！！」

烏丸兵
「おっー！！！！！！」

すると

音々音
「必殺・ちんきゅーきっーく！！！！！！」

どかあああああああああああああん！！！！！！！

？頓メッメドーザ
「ぶほおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

？頓メッメドーザは音々音に蹴り飛ばされてしまった。

烏丸兵
「？頓様！！！！？」

？頓メッメドーザ
「おのれ何者や！！！！？」

音々音
「こらあああああああああ！！！！せっかくの平和をぶち壊すとは許せないのです！！！」
一刀
「あっちゃー、ねねの奴・・・・」
桃香
「とにかく私達も行こう！！恋姫鎧装！！」
一刀
「閃光武装！！」

そして、桃香、愛紗、鈴々、一刀も鎧を装着して劉備ガンダム達と一緒に向かった。

？頓メッメドーザ
「誰や！！お前ら！！」
劉備ガンダム
「俺は劉備！！幽州の平和を乱すものは許さない！！」
聖龍王・桃香
「私は劉備玄徳！！絶対に悪いことはさせないからね！！」
関羽ガンダム
「拙者は関羽！！貴様らの野望もここで終わりよ！！」
鬼牙王・愛紗
「我が名は関羽雲長！！貴様らを地獄に送ってくれようぞ！！」
張飛ガンダム
「俺様は張飛！！最初に雷蛇の餌食になるのは誰だ！！」
雷光王・鈴々
「鈴々は張飛翼徳！！鈴々がいればお前らなんかいちころなのだ！！」
一刀
「俺は天の遣い・北郷一刀！！」

恋
「恋・・・・」
音々音
「音々音なのです！！」
九人
「我ら幽州義勇軍！！」
？頓メッメドーザ
「ものどもかかれ！！！」

そして、烏丸との戦いが始まった。するとそこへ公孫賛イージーエイト達、幽州軍がやってきた。

公孫賛イージーエイト
「烏丸の兵が現れたと聞いたから向かってきたが・・・・」
白蓮
「すでに桃香達が闘っていたとは・・・・」
趙雲ガンダム
「しかし、このままでは」
星
「やられてしまうのも時間の問題ですな。」

そして、公孫賛イージーエイトはある書物を取り出した。

公孫賛イージーエイト
「趙雲、白蓮、星！！今こそ幽州国境警備隊の力を見せる時だ！！」
趙雲ガンダム
「はい！！」
白蓮
「まかせろ！！」
星

「やるとしますか！！」

そして、

趙雲ガンダム
「行くぞ！！白馬陣・出撃！！！」

すると後ろから騎馬隊が現れた。

一方、劉備ガンダム達は烏丸の圧倒的な兵の数に苦戦していた。

張飛ガンダム
「こいつら、いくら倒してもきりがないぜ！！」

雷光王・鈴々
「鈴々、疲れたのだ！！」

鬼牙王・愛紗
「囲まれたか・・・」

劉備ガンダム
「このままでは・・・」

聖龍王・桃香
「・・・・！！？あれ見て！！！？」

すると丘から白い光が下りてきた。

関羽ガンダム
「白い光！？」

閃光装・一刀
「いや違う！！」

光の形が変わると、それは

趙雲ガンダム
「進め！！飛影閃！！！」
白蓮
「我らの力を見せつけるぞ！！」
星
「おう！！」

白馬の騎馬隊へと変わったのであった。

劉備ガンダム
「あれは趙雲。」
聖龍王・桃香
「それに白蓮ちゃんに星ちゃんも。」
公孫賛イージーエイト
「白馬陣・鋒矢！！！」

すると騎馬隊は形を変えて、烏丸の兵に突撃した。あまりの攻撃に防ぐことができなかった烏丸の兵たちは吹き飛ばされるのであった。

烏丸兵
「ふ・・・防ぎきれませ・・・ぎゃあああああ！！！！」
？頓メッメドーザ
「こんなアホな！！？ありえん！！圧倒的な数の差を一瞬で・・・こんなことは・・・」

そして、そこへ

星
「私も力を見せて見せようぞ！！はあああああああああああ！！！！」

星は武器から光を出すと、その姿は龍を模した鎧を武装した姿となった。

昇龍装・星
「行くぞ！！」
趙雲ガンダム
「？頓、覚悟！！！！」
？頓メッメドーザ
「く・・・来るな・・・・・・来るな！！！！！！」

そして・・・・

趙雲ガンダム
「真空迅！！」
昇龍装・星
「疾風迅！！」
？頓メッメドーザ
「ぎゃあああああああああああああああああ！！！！！！！！」

二人の一撃で？頓メッメドーザは倒された。そこへ

公孫賛イージーエイト
「皆、無事か？」
劉備ガンダム
「公孫賛の兄貴！！」
聖龍王・桃香
「じゃあ、あの部隊は・・・・・！？」

そこへ白蓮達が戻ってきた。

白蓮
「ああ、私達の率いる幽州国境警備隊だ。」
鬼牙王・愛紗
「そうだったのですか・・・」
恋
「すごい・・・」
趙雲ガンダム
「お久しぶりです。劉備殿。」
昇龍装・星
「我々も今は公孫賛将軍のもとに使えております。」
聖龍王・桃香
「将軍って・・・・兄さん、いつの間にそんなに偉くなったの！？」
公孫賛イージーエイト
「いや父の後を継いだだけだ。」
閃光装・一刀
「すげぇー」

こうして烏丸との戦いは終わった。

その夜、劉備ガンダム達は屋敷にいた。
劉備ガンダム
「ところで兄貴。昼間烏丸を倒した戦い方。あれはいったい・・・」
公孫賛イージーエイト
「あれは兵法の一つ、白馬陣だ。」
桃香
「兵法？」
鈴々
「へぇーほぉー」

鈴々はダジャレを行ったのであった。

朱里
「鈴々ちゃん、こんなときにふざけないでください。」

公孫賛イージーエイト
「改めて・・・これを・・・・・」

公孫賛イージーエイトはある書物を出した。

劉備ガンダム
「これは盧植先生の・・・・」

白蓮
「そうだ今は亡き盧植先生が残してくれた兵法書。この中に記されていたのが白馬陣なんだ。」

桃香
「兵法・・・あれが・・」

公孫賛イージーエイト
「たった一瞬で何万という敵を打ち下すことができる。それが俺達が盧植先生に受け疲れた兵法なんだ。」

すると劉備ガンダム達は何か思った。

劉備ガンダム
（兄貴と姉貴は盧植先生の遺志をついで、この幽州の地を守っている。）

桃香
（私達はどうすれば・・・・・）

そして・・・・

桃香
（そうか・・・董卓が倒された後でも平和が戻ってきたわけじゃない。）
劉備ガンダム
（たくさんの人々が戦国乱世で苦しんでいるんだ。わかったよ。先生）
白蓮
「どうしたんだ?二人とも。」

すると

劉備ガンダム
「兄貴、姉貴、俺達」
桃香
「旅に出るよ。」

翌日

劉備ガンダム、関羽ガンダム、張飛ガンダム、桃香、愛紗、鈴々、朱里、雛里、月、詠、恋、音々音、一刀は旅の出発に備えていた。

公孫賛イージーエイト
「本当に行くのか?」
白蓮
「できれば国境警備隊として私達と一緒にここ幽州をまもってほしいけどな。」
桃香
「兄さんに白蓮ちゃん、ありがとう。でもここには趙雲さんや星ちゃんがいるし、兄さんの兵法があるから大丈夫だよ。」

劉備ガンダム
「だから俺達はもっと外の世界を旅することにするよ。いつか俺達を必要としてくれる人々に出会うために・・・」
公孫賛イージーエイト
「相変わらずの奴だな。」
月
「私達もご主人様についていくことにしました。」
恋
「恋も・・・・」
一刀
「ありがとう。」
詠
「僕はこいつが月にいやらしいことをしないためについて行くからね。」
音々音
「ねねも同じなのです！！」
張飛ガンダム
「へへへ・・兄貴や姉貴らしいや！！」
鈴々
「お気楽なところもお兄ちゃんやお姉ちゃんもいっしょなのだ！！」
愛紗
「こら、鈴々！！！まあそれでこそ我らが見込んだ兄上や桃香様だ。」
関羽ガンダム
「ああ、そのとおりだ。」
すると
趙雲ガンダム
「残念です・・・・」

星
「我らと共に戦いたかったのですがな・・・」
鈴々
「安心するのだ!!また一緒にやれるのだ!!」
愛紗
「我ら共に正義の剣をふるい続けるのなら。」
桃香
「かならず一緒に戦う時が来るはずだよ。」
趙雲ガンダム
「はい、皆さんもお元気で・・」

こうして、劉備ガンダム達は旅立ったのであった。

旅立ってから数日がたった。そんな彼らに最大の敵が訪れたのであった。

桃香
「ううー・・もう限界だよ・・・・」
劉備ガンダム
「たしかに・・・・」
張飛ガンダム
「俺様もだ・・・・・」
鈴々
「鈴々もなの・・・だ・・・・」
恋
「・・・・・・・」
音々音
「恋殿・・・・しっかりしてくだされ・・・・・です・・・・」
月
「へぅー・・・・・」

詠
「月、大丈夫?・・・・・・」
朱里
「たしかに・・・・もう・・・限界のようですね・・・・・」
雛里
「今に・・・倒れそうな現状です。」
一刀
「なんで・・・・こんな目に・・・・」

全員はふらふら状態であった。

関羽ガンダム
「だらしないぞ・・・・」
愛紗
「まったく・・・・・」

ぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ・・・・・・

関羽ガンダム
「うっ・・・・・」
愛紗
「あっ・・・・・・・」

そして、全員が動けなくなってしまった。

桃香
「もう・・・・うごけない・・・・」
関羽ガンダム
「拙者も・・・・・限界・・・・」
愛紗

「私も・・・・・だ・・・・・」
恋
「おなかすいた・・・・・・」
鈴々
「おなかぺコペコなのだ・・・」
張飛ガンダム
「なんで食い物がないんだよ!!!」
関羽ガンダム
「張飛・・・・・・」
愛紗
「鈴々・・・・・・」
詠
「恋・・・・・あんた達が皆のお弁当を食べちゃったからでしょうが!!!!!!!」
張飛ガンダム
「う・・・うるせぇー!!!」

全員は空腹という強敵に襲われていたのであった。

そして、全員はその場に動けなくなっていた。そんな時、一人の少年が現れた。

少年
「なんだ?・・・・・大変だ!!!人が倒れている!!!」

その後、近くの村で保護された劉備ガンダム達は食事にありつけることができたのであった。

劉備ガンダム
「はぁー、食った、食った!!」

桃香
「おなかいっぱい!!」
朱里
「助かりました。」
すると・・・・・
陶謙ジム
「旅のお方ですか・・・・ここ徐州へようこそ・・・・・」
劉備ガンダム
「はじめまして、俺は劉備といいます。」
桃香
「私も劉備っていいます。」
陶謙ジム
「ワシはここ徐州を治める陶謙と申します。」
一刀
「ここはいい国ですね。」
月
「はい、平和で住んでいる人々の心が温かくて・・」
鈴々
「おまけにごはんもおいしいのだ!!」
陶謙ジム
「どういたしまして、ところで劉備殿はどうしてこちらに・・・」
そして、劉備ガンダムはこれまでのことを陶謙ジムに話した。
陶謙ジム
「それはすばらしい志だ。でしたらこの村にいつでもいてください。」
桃香

「ありがとうございます。ですが・・・その気持ちだけで・・・」

すると村人の一人があわててやってきた。

村人
「陶謙様!!」
陶謙ジム
「どうしたのだ?」
村人
「見張りからの連絡で西より大軍が我が国に向かってきます!!」
陶謙ジム
「何!?」
桃香
「そんな!?」

陶謙ジムは向かおうとするが、咳き込んでしまい、動けなかった。

愛紗
「ここは私達に任せてください!!」
張飛ガンダム
「戦いのことは俺達に任せな!!」
陶謙ジム
「しかし貴方達は我が国の客人・・・・」
関羽ガンダム
「一宿一飯の恩でございます。」
劉備ガンダム
「俺達に任せてください。」
一刀
「朱里、雛里、月、詠、陶謙様のことを頼むぞ!!」

こうして、一行は西門へと向かった。

陶謙ジム
「なんとさわやかな人たちだ。」

そして、西門から出た劉備ガンダム達は驚いた。

劉備ガンダム
「まさか・・・・あれは・・・・・」
桃香
「そんな・・・・あれって・・・・」
全員
「曹操!!!?」

それは鎧を新しくした紅連装・曹操ガンダムと華琳であった。
曹操ガンダム
「久しぶりだな、劉備!!」
華琳
「なぜ貴方達が徐州にいるのかしら?」
劉備ガンダム
「それはこっちのセリフだ!!」
桃香
「どうして、このような平和な国を攻めるのですか?」

二人の問いに対しての答えは

曹操ガンダム
「余と華琳は三璃紗に平和をもたらすために戦っておる。」
劉備ガンダム
「何を言う!!この徐州は陶謙様が平和に治めているのだぞ!!」

華琳
「何を言っているのかしら、平和とは『武』によってなるものなのよ。」
曹操ガンダム
「武を持たぬ陶謙が統治する国など語るに足りぬ!!」
桃香
「そんな!?」
曹操ガンダム
「三璃紗、すべての地が余の支配下になった時こそ真の平和が訪れるのだ!!」
華琳
「そういうことよ。」
劉備ガンダム
「それじゃあ董卓と同じじゃないか!!」
そして・・・・・
曹操ガンダム
「言ってもわからないようだな・・・・・」
華琳
「そうね・・・・・」
そして、二人はそれぞれの剣を抜いて、天に向けた。
曹操ガンダム、華琳
「「我らは曹操!!我らが覇行の立ち塞ぐ者は誰であろうと全て倒して進むのみ!!」」
劉備ガンダム
「ならば曹操!!」
桃香

「私達が貴方達を止めます！！」

劉備ガンダムは剣を抜き、桃香も恋姫鎧装備した。

関羽ガンダム
「劉備殿！！？」
愛紗
「桃香様！？」
一刀
「本気かよ！！？」

そして、曹操ガンダムも馬から降り、華琳も恋姫鎧装した。

劉備ガンダム
「まさか董卓討伐で共に戦った曹操達と俺達が・・・・」
聖龍王・桃香
「今度は敵として・・・・戦うなんて…」
曹操ガンダム
「劉備、お前達も余と闘う運命を持った戦士達ということだ！！」
炎鳳王・華琳
「そのとおりよ！！」

そして、四人は戦闘態勢になった。お互いに剣をぶつけ合う四人。
その力は互角であった。

聖龍王・桃香
「なぜですか！！すでにある平和を壊してまで闘わなければならないのですか！！」
炎鳳王・華琳
「民とは弱きものよ。弱きものは強きものに守られてるからこそ幸

福になれるのよ！！」
曹操ガンダム
「ならば三璃紗全ての民を余の民とすることこそが余の理想だ！！」
劉備ガンダム
「違う！！強いとか弱いとかじゃない！！皆に分けへ出なく共に生きていく世界こそが理想だ！！」

そして、龍帝剣と龍神剣が激しく輝き始めた。

曹操ガンダム
「大紅蓮斬！！！！」
炎鳳王・華琳
「超烈火斬！！！」
劉備ガンダム
「星龍斬！！！！」
聖龍王・桃香
「光龍斬！！！」

お互いの必殺技がぶつかった。そして、煙がはれると劉備ガンダムと桃香が膝をついていた。そして、曹操ガンダムは剣を治め、華琳も武装を解除した。

桃香
「え！？」
曹操ガンダム
「今日のところは剣を治めよう！！」
華琳
「でも覚えておきなさい！！貴方達のやり方では徐州一国すらも治められないわ！！」
劉備ガンダム

「くっ・・・・」
張飛ガンダム
「兄貴達をなめんなよ!!!」
鈴々
「その通りなのだ!!」
愛紗
「二人とも待て!!」

曹操軍は撤退していくのであった。すると朱里と雛里が大慌てで走っていた。

朱里
「みなさん、大変です!!　陶謙様が!!」
雛里
「様態が悪化し始めました!!」

陶謙ジムの様態が悪化し始めたのであった。たまたま近くを寄っていた華佗に診察をしてもらった。

一刀
「どうですか?治りそうですか!!」
華佗
「残念ながら・・これればかりは・・・俺の手でも・・・・」
桃香
「そんな・・・」
劉備ガンダム
「陶謙様・・・・」
陶謙ジム
「劉備殿、この徐州を守ってくださったんですな。・・・・ありがとうございい・・・ます・・」

桃香
「いえ・・・私達は・・・・・」
陶謙ジム
「互いに利用することしか考えない時代に・・・・・貴方達のような人たちが徐州に来てくれるとは・・・なんという幸運」
劉備ガンダム
「弱気になってはいけません!!」
桃香
「そうですよ!!　華佗さんの手なら・・・・・」
華佗
「すまない・・陶謙様は寿命が近いから・・・・さすがの俺ももう手の施しようが・・・・」
陶謙ジム
「そのとおりです・・・ただ心配なのは・・・・ワシの後で徐州をつぐものがいなかったことです・・・ですが・・・その心配もなくなりました。」

陶謙ジムは劉備ガンダムと桃香の顔を見た。

陶謙ジム
「劉備殿・・・・この徐州をお頼みしましたぞ。」
桃香
「なんですって!!」
劉備ガンダム
「そんな!?俺達なんかがこの徐州を治めるなんて…無理です!!」
陶謙ジム
「人は・・・自らふさわしい役目を得ること・・・・・劉備殿、貴方達はこの徐州どころか三璃紗全土の民を幸福にすることができる天命を持つ人だ!!・・・・・この徐州を・・・そして・・・・この徐州の民を・・・幸せにしてくだされ…貴方達に会え・・・・て・

・・・よか・・・・・」

陶謙ジムは静かに目を閉じた。

劉備ガンダム
「陶謙様・・・・・？」

桃香
「嘘・・・・・・」

華佗
「ご臨終なされたか・・・・・・」

劉備ガンダム
「陶謙様！！！」

桃香
「そんな！！」

陶謙ジムが亡くなった後、劉備ガンダムと桃香は陶謙ジムの志を受け継いで、徐州を治めることになった。

第8話『劉備旅立』（後書き）

次回予告

孫一族は新天地を求めて、江東の地へとやってきた。そこで新たな出会いが待っていた。

次回　第9話『江東の小覇王』

第9話『江東の小覇王』（前書き）

お久しぶりです。最新話です。

第9話『江東の小覇王』

劉備ガンダム達が旅立ったのと同時に動き出した者達が現れた。孫一族の長、孫堅ゼフィランサスを失った悲しみを乗り越え、長男・孫策サイサリスと長女・雪蓮の指揮の下で新天地を求めていた。

孫権ガンダム
「なあ、兄さんや姉さんは新天地とか言っているけど・・・・本当に俺達にそんなものが必要なのかな？」
孫尚香ガーベラ
「何よ、相変わらず孫権兄さんは煮えきらないわね！！」
小蓮
「本当よ！！新しくなったのは鎧だけなの！！？」
蓮華
「鎧は関係ないわよ。でも・・確かにお父様が亡くなってから袁術に領土を奪われたから私達は新しい土地を見つけなければならないけど・・・・」

すると周瑜ヒャクシキと冥琳が答えた

周瑜ヒャクシキ
「若、蓮華様。なにも我らはこの地を侵略しようということではうありません。」
冥琳
「周瑜の言うとおりです。この土地は領主がおらず、民は盗賊に泣かされてきました。」
周瑜ヒャクシキ
「そうです。この地を平定することは民のためでもあります。」
孫権ガンダム

「そうかもしれないけれど・・・」

すると・・・

祭

「見えたぞ。孫策殿、雪蓮殿！」

孫策サイサリス

「おお・・・」

一同は走り出した。

孫策サイサリス

「ここが長江の東の地・・・・」

雪蓮

「江東・・・・」

第９話『江東の小覇王』

孫策サイサリス達がたどり着いたころと同じ時であった。

陸遜ゼータプラス

「何するんだよ！！」

アニキ

「何言っていやがる！！てめぇが俺達の縄張りに入り込んだからだよ！！」

一人のＭＳ武将、陸遜ゼータプラスがチンピラ達に絡まれていたのであった。

陸遜ゼータプラス

「何だよ!!長江は誰のものでもないだよ!!」
チビ
「アニキ、こいつ生意気ですぜ!!」
デク
「そうなんだな!!」
アニキ
「そうだな。おい、こいつに痛い目を合わせてやれ!!」

すると・・・

孫尚香ガーベラ、小蓮
「そこまでよ!!」

孫尚香ガーベラと小蓮が現れた。

アニキ
「なんだ、てめぇらは?」
小蓮
「みてわかんないの!!正義の味方に決まっているでしょ!!」
チビ
「正義の味方だってよ!!」
デク
「わらちゃうんだな!!」
孫尚香ガーベラ
「あんた達ね!!そんな子供をいじめて恥ずかしくないわけ!!」
小蓮
「そういうのシャオは絶対に許さないから!!」
アニキ
「けっ、小娘の分際で俺達に逆らうとどうなるか・・・」

それと同時に孫策サイサリス達が現れた。

孫策サイサリス
「逆らうと・・・」
雪蓮
「どうなるのかしらね・・・」
チビ
「ひっ！！」
アニキ
「この狩りは必ず返すからな！！」

三人は恐れをなして逃げ出した。

小蓮
「たく借りたもの物を返したこともないのによく言うわね。」
隠
「あの・・・大丈夫でしたか？」
陸遜ゼータプラス
「うん・・・・・ありがとう」
孫尚香ガーベラ
「あんたは・・・？」
陸遜ゼータプラス
「僕は陸遜。」
隠
「私と同じ名前ですね。」

それから孫策サイサリスは陸遜ゼータプラスの話を聞いた。

陸遜ゼータプラス
「董卓軍がいなくなって平和になったと思ったら・・・今度はあん

な連中が現れて・・・」
蓮華
「兄様、あの連中は・・」
孫策サイサリス
「あの連中はこのあたりを縄張りにしている水賊だろ・・・」
孫権ガンダム
「水賊って・・・」
周瑜ヒャクシキ
「水辺を荒らす盗賊です。」
思春
「この辺りは長江の流れが複雑に絡み、船がないと兵が動かしにくいのです。」
黄蓋グフ
「思春のいうとおりです。亡き大殿様も水軍さえあればと頭を悩ませていました。」
雪蓮
「水軍ね・・・・・」
隠
「陸遜さん、家族はどうしたのですか?」
陸遜ゼータプラス
「前の戦で村も家族も・・・・」
蓮華
「じゃあ貴方はずっと一人で・・・・・」
陸遜ゼータプラス
「うん・・・・」
孫尚香ガーベラ
「そう・・・・」
孫策サイサリス
「今の三璃紗にはこんな子供がいるんだ。この子達のためも俺達の力が必要なんだ」

孫権ガンダム
「力か・・・」

すると・・・

小蓮
「ねぇ、陸遜、よかったらシャオ達と一緒に来ない？」
陸遜ゼータプラス
「え！？」
孫尚香ガーベラ
「あたし達はこの土地に新しい国を建てようとしているの、戦もない、皆家族のように仲良く暮らせる平和な国。」
陸遜ゼータプラス
「・・・・・家族。」
小蓮
「そう、今日からアンタはシャオ達の新しい家族だよ。」
孫尚香ガーベラ
「ね♪素敵だと思わない？」
陸遜ゼータプラス
「本当に・・・一緒にいてもいいんですか？」
小蓮
「もちろんよ！！」
陸遜ゼータプラス
「ありがとうございます！！」

するとさっきのチンピラ達が大慌てでやってきた。

蓮華
「あれはさっきの連中！！」
孫尚香ガーベラ

「ふぅーん、ちゃんと借りを返すなんていい度胸じゃない。」
小蓮
「今度こそ、シャオ様の力を見せてあげるわ！！」
孫尚香ガーベラと小蓮は身構えた。しかし
チビ
「助けてくれ！！」
孫尚香ガーベラ、小蓮
「え！？」
アニキ
「あんた達、正義の味方だろ？あいつをやっつけてくれよ！！」
小蓮
「あいつ？」
チンピラの一人が指をさすと巨大なＭＳ武将、太史慈ドムが現れた。
アニキ
「来た！！頼むぜ、姐さん達！！」
小蓮
「ちょっと待ちなさい！！」
孫尚香ガーベラ
「まったく次から次へと・・・・」
すると孫策サイサリスと雪蓮が前に立ちふさがった。
孫策サイサリス
「よせ、尚香、シャオ！！」
雪蓮
「下がっていなさい！！」

太史慈ドム
「貴公らがこの軍の将か？」
雪蓮
「だとしたら・・・・」
太史慈ドム
「あの連中といい、貴公らといい、董卓軍がいなくなったと思ったらこれだ！！これ以上、この土地を荒らすことは許さん！！」
孫策サイサリス
「なるほどこの地の武将というわけか・・・」
太史慈ドム
「我こそは太史慈！！この江東の地を踏みたくば、いざ尋常に勝負！！」

そして・・・・

孫策サイサリス
「いいだろう。」
雪蓮
「やってあげましょう。」
冥琳
「やめなさい！！孫策、雪蓮！！」
周瑜ヒャクシキ
「そうだ、お前達が闘う必要はない！！」
雪蓮
「二人とも、止めないで彼も江東の民ならいずれは私達の家族になるわ。」
太史慈ドム
「家族だと・・・・・？」
孫策サイサリス
「そうだ、ならば志を共にし、真、同じ道を歩まなければならぬ。

よいかお前達、これは真剣勝負だ!!!」
雪蓮
「手出しはしないでほしいわ。」

そして・・・・・

孫策サイサリス
「太史慈といったな・・・俺の名は孫策!!」
雪蓮
「私も孫策よ。まあ雪蓮でよんでいいわ。」

そして、孫策サイサリスの両肩の鎧が外され、それがトンファーのような武器へと変わった。そして、雪蓮も剣を抜いた。

孫策サイサリス、雪蓮
「「その喧嘩買って（やろう!!）（あげるわ!!）」」
太史慈ドム
「行くぞ、孫策、雪蓮!!!うおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

勝負が始まったのであった。

孫権ガンダム
「兄さん!!」
蓮華
「姉様!!」
冥琳
「心配しなくてもいいですよ。」
蓮華
「冥琳・・・・でも・・・・」

周瑜ヒャクシキ
「大丈夫ですよ。亡き大殿様もよく土地の者と刀を交えたものです。」
孫権ガンダム
「父上が！！？」
冥琳
「はい、孫子いわく真の軍師は民と心を同じくし民も軍師のためなら死を恐れず、」
周瑜ヒャクシキ
「そう、すなわちこれを『道』という。」

そして、戦いは激化していた。孫策サイサリスはトンファーを連結させたバズーカー型の棍、強襲激鋼棍を手にし、雪蓮も剣に力を込めていた。

孫策サイサリス
「激鋼重爆突！！！！」
雪蓮
「覇王烈風斬！！！」
太史慈ドム
「させぬ！！！鋼烈滅砕陣！！！！」

三人の必殺技が激突した。そして、お互い引いた。

太史慈ドム
「なかなかやるな！！」
雪蓮
「貴方もね！！」
太史慈ドム
「だがお前達の力はその程度ではない！！」

孫策サイサリス
「ふっ・・・・」

そして、

雪蓮
「思春!!」
孫策サイサリス
「黄蓋!!あれを」
黄蓋グフ
「はっ!!」

黄蓋グフと思春が持ち出したのは虎錠刀と虎王牙刀であった。

黄蓋グフ
「よろしいのですか?」
雪蓮
「彼、ただものじゃないわ。」
孫策サイサリス
「ならば!!全身全霊で立ち向かわなければ俺達の志は届かぬ!!」
太史慈ドム
「ようやく本気になったようだな!!!!」

二人は剣を構えた。

孫策サイサリス
「受けて見よ!!!三候の魂が宿す虎錠刀の一撃と」
雪蓮
「四聖獣の一体、白虎と四神姫の一人、獣帝姫の魂が宿る虎王牙刀の一撃を!!」

孫策サイサリス、雪蓮
「「はあああああああああああああああああああ！！！！！！」」
太史慈ドム
「こ・・・これは・・・」
そして・・・・
孫策サイサリス
「猛虎獣烈覇！！！！」
雪蓮
「猛虎牙王覇！！！！！」
二人の必殺の一撃を放った。太史慈ドムはそれを受け止めた。
太史慈ドム
「これしき・・・・・」
孫策サイサリス、雪蓮
「「はあああああああああああああああああああ！！！！！」」
「ガオオオオオオオ！！！！！」
孫策サイサリスと雪蓮の後ろから虎のオーラが現れ、更に押していた。
太史慈ドム
「ぐわあああああああああああああああああ！！！！」
受け止めきれなかった太史慈ドムは吹き飛ばされてしまった。
思春

「やった！！」

祭

「おお！！」

小蓮

「孫策兄様の勝ちよ！！」

太史慈ドム

「くっ・・・・何という力・・・・私の負けだ！！とどめを刺すがいい！！」

それに対しての孫策サイサリスと雪蓮の答えは・・・・

孫策サイサリス

「貴様が本当に俺達の敵ならばな。」

太史慈ドム

「何！？」

雪蓮

「私達は侵略者じゃないわ。この江東の平和を願うものよ。貴方も同じでしょ。太史慈・・」

太史慈ドム

「孫策・・・・雪蓮・・・・・」

孫策サイサリス

「俺ならこの地を平和にできる！！」

雪蓮

「私もよ。」

すると二人は手を差し伸べた。

孫策サイサリス

「俺達と同じ道を歩んでみないか？」

雪蓮

「どう？」

太史慈ドムの答えは・・・・

太史慈ドム
「情けは受けぬ！！」
孫策サイサリス
「太史慈・・・・・」
太史慈ドム
「この借りは必ず返す！！」

太史慈ドムはこの場を去った。

黄蓋グフ
「待て！！」
思春
「貴様、孫策様と雪蓮様に対して無礼であろう！！」
雪蓮
「やめなさい！！」
孫策サイサリス
「追うな！！」
黄蓋グフ
「しかし・・・」

孫策サイサリス達は去っていく

孫尚香ガーベラ
「いいの？あいつ絶対に仕返しに来るわよ！！」
孫策サイサリス
「その時はその時だ！！」

雪蓮
「また相手になってあげればいいしね。」

孫策サイサリスと雪蓮はそんな彼を見ているのであった。

そのころ、寿春では・・・

袁術ズサ
「孫策がこの寿春の目と鼻の先までやってきたですと!!?」
美羽
「それは真かの紀霊、七乃よ!!」

それにたいして紀霊ハンマハンマと張勲（真名・七乃）は答えた。

七乃
「はい、このまま孫策さんが江東を支配すれば袁術様と美羽様にとっては大変なことになります。」
紀霊ハンマハンマ
「袁術様、今のうちに何らかの手を打つべきかと・・・・」
袁術ズサ
「むむむむ!!きっとこの玉璽を狙ってきたに違いありません!!」
美羽
「それに領土を奪われたのに生意気じゃ!!!」

なぜこの二人が玉璽を持っているかは後ほどで・・・・・

紀霊ハンマハンマ
「袁術様、美羽様。私達に水軍をお貸しいただけないでしょうか?」
美羽

「水軍とな・・・・？」
七乃
「はい、我が軍が誇る最強の水軍艦隊なら孫策さんを簡単に倒せますよ！！」
袁術ズサ
「だったらささっと出陣しなさい！！」
七乃
「は～い！！ではいきますよ！！紀霊さん。」
紀霊ハンマハンマ
「貴様が命令するな！！！」

二人は出陣の準備に向かった。

袁術ズサ
「誰にも渡しませんよ！！玉璽を持つものは三璃紗の皇帝の証、この袁術様こそが皇帝にふさわしいのですぞ。」
美羽
「そうじゃのう・・・・ペロペロ」
袁術ズサ
「そのとおりです・・・・・ってあああああああああ！！！！美羽さん、それは私の大事な蜂蜜ですよ！！！？」
美羽
「甘いのじゃ！！」

大丈夫なのか・・・・・？

そのころ、江東では孫策サイサリス達が村の手伝いをしていた。

隠
「尚香様、小蓮様～見てください。」

孫尚香ガーベラ
「あら陸遜、隠、亞莎、どこいっていたの？」
亞莎
「これみてください。陸遜さんが見つけたんですよ。」
小蓮
「立派な筍ね。」
陸遜ゼータプラス
「この竹藪でとってきたんですよ。筍で何か料理をしようと思って。」
孫尚香ガーベラ
「賛成！！」

こうして料理を始めることにした。まず孫尚香ガーベラと小蓮は青竹を巻きに使用するが

小蓮
「けほけほ！！なによこれ！！」
孫尚香ガーベラ
「煙ばっかでて、ちっとも燃えないんじゃない！！」
冥琳
「だめですよ。姫様、青竹は薪に使うものではありません。」
小蓮
「それなら先に言ってよ！！」
周瑜ヒャクシキ
「言わなければわかりませんか？」
陸遜ゼータプラス
「よくご存じですね。周瑜様、冥琳様。」

陸遜ゼータプラスは青竹をくり抜いたものに、笹をしいて、その中に魚と筍を詰め込んで、それを火の上に載せて、いぶせた。

陸遜ゼータプラス
「こうすれば美味しい青竹の包み焼きのできあがり！！」
孫権ガンダム
「へぇー、たのしみだな。」
孫尚香ガーベラ
「あんた、若いくせに物知りなのね。」
祭
「おお、これは酒が進みそうじゃ！！」
黄蓋グフ
「祭殿、昼間から飲まないでください・・・・」
蓮華
「まったく・・・・・」

すると・・・

明命
「大変です！！！軍艦が攻めてきました！！」
小蓮
「え！！？jまさか水賊！？」

蓮華は望遠鏡で調べた。

蓮華
「違う。あれは袁術軍だ！！」
孫策サイサリス
「何！？」
雪蓮
「なんでこんなところに攻めてきているのよ！？」

そのころ、船では紀霊ハンマハンマと七乃が指揮をとっていた。

紀霊ハンマハンマ
「三璃紗・最強の水軍艦隊の力、たっぷりと味わせあわせてやるわ！！」
七乃
「みなさん、攻撃開始です！！」
紀霊ハンマハンマ
「撃て！！」

袁術軍は攻撃を開始した。孫策サイサリスと雪蓮は立ち向かおうとした。

周瑜ヒャクシキ
「よせ、孫策、雪蓮！！ここは一旦引くんだ！！」
孫策サイサリス
「退くだと！？ふざけるな！！！！」
雪蓮
「このままあいつらに尻尾を巻いて逃げろというの！？」
冥琳
「考えがあるのよ。とにかく私と周瑜の言うことを聞いて、兵を全滅させたいの！！？」

二人は周りを見ると兵たちは村人を守ることで精いっぱいであった。

孫策サイサリス
「くっ・・・皆下がれ！！」
雪蓮
「竹藪に入るのよ！！」

孫策サイサリス達は竹藪の中に入った。そして・・・水軍艦隊は岸までたどり着いた。

紀霊ハンマハンマ
「者ども続け!!」
七乃
「このまま一気に攻めちゃいますよ!!」

紀霊ハンマハンマと七乃の命令で袁術軍は竹藪へと入りこんだ。

孫権ガンダム
「あんな大軍、勝てっこないよ。」
蓮華
「どうするのですか!?」
孫策サイサリス
「周瑜、冥琳、こんな竹藪に入ったところで見つかるのは時間の問題だ。だったら・・・」
周瑜ヒャクシキ
「闇雲に突撃するだけが闘いではないぞ!!」
雪蓮
「え!?」
冥琳
「孫子いわく相手の力が大きければ大きいほどその力を利用せよ。」
孫策サイサリス
「お前達、何か策があるんだな。」
周瑜ヒャクシキ
「まあ任せておけ。」

そのころ紀霊ハンマハンマと七乃は竹藪の中を歩きつづけていた。

紀霊ハンマハンマ
「探せ、探せ!!そのあたりにいるはずだ!!」
七乃
「探し出して捻りつぶしてくださいね。」
すると何か物を燃やす音がした。
紀霊ハンマハンマ
「この音は・・・・」
すると煙が出てきた。
紀霊ハンマハンマ
「しまった!!?火刑の罠か!!?」
周りに現れた煙に、咳き込む袁術軍
七乃
「紀霊将軍、こんなのが火刑のはずがありませんよ!!」
紀霊ハンマハンマ
「たしかに・・ごほごほ!!」
煙の正体は青竹を燃やしている孫尚香ガーベラと小蓮と陸遜ゼータプラスであった。
小蓮
「たく二人は何考えているのよ!」
陸遜ゼータプラス
「逃げるための時間稼ぎかな・・・・?でも周瑜様と冥琳様は敵の力を利用すると言っていたし・・・・」

孫尚香ガーベラ
「ちょっと手を止めないでよ！！」

一方、袁術軍は煙に苦しんでいるのであった。

七乃
「これは限界ですね。みなさん、引き返してください。」
袁術軍・兵士
「しかし、この煙では進みようが・・・・」
紀霊ハンマハンマ
「黙れ！！なんとしても船にたどり着くんだ！！」

紀霊ハンマハンマと七乃は兵士を連れて、何とかして竹藪から逃げた。

周瑜ヒャクシキ
「なかなかよき船だな。」

そこには水軍艦隊を乗っ取った孫策サイサリス達がいたのであった。

紀霊ハンマハンマ
「どういうことだ！！！？」
七乃
「あ～どうやらこれは水軍を奪わせるための罠だったんですね。」
紀霊ハンマハンマ
「おのれ、図ったな！！」
七乃
「ですよね。」
紀霊ハンマハンマ
「ですよね・・・・ではない！！！なんとかしろ！！！」

七乃
「無理！！」
紀霊ハンマハンマ
「貴～様～！！！」

そして、孫尚香ガーベラ、陸遜ゼータプラス、小蓮は出てきた。

小蓮
「みてあれ！！」
陸遜ゼータプラス
「そうか二人は最初から敵の船を奪うために・・・・」
冥琳
「三璃紗最強の水軍艦隊はたった今から我らの物だ！！」
周瑜ヒャクシキ
「孫策！！」
冥琳
「雪蓮！！」
雪蓮
「今こそ反撃のとき！！」
孫策サイサリス
「者ども撃て！！！」

そして、一斉攻撃を開始した。袁術軍は逃げまどうしかなかった。

孫策サイサリス
「猛虎獣烈覇！！！！」
雪蓮
「猛虎牙王覇！！！！！」

さらに孫策サイサリスと雪蓮の一撃で吹き飛ばされてしまった。

七乃
「このままではまずいですよ！！」
紀霊ハンマハンマ
「えーい！！！竹藪に逃げ込め！！」

袁術軍は竹藪に逃げ込もうとした。そこには小蓮達がいた。

陸遜ゼータプラス
「うわあああああああああああ、こっちに来ます！！」
孫策サイサリス
「尚香！！？」
雪蓮
「シャオ！！？」
周瑜ヒャクシキ
「陸遜！！」
紀霊ハンマハンマ
「そこをどけ！！」

紀霊ハンマハンマは三人を攻撃しようとしたそのとき、巨大な金棒が現れた。

雪蓮
「あれは・・・・」

そして・・現れたのは・・・・

太史慈ドム
「女、子供にまで手をかけようとは・・・・それでも男か、外道！！！」

七乃
「私は・・・女ですよ…」

それは太史慈ドムであった。それと同時に配下も現れた。

孫策サイサリス
「太史慈!!?」
太史慈ドム
「我ら江東の武士、義によって孫策軍を助太刀いたす!!行くぞ!!!」
水軍兵
「おう!!!」

そして、太史慈ドム達の攻撃で袁術軍は全滅しそうになった。

紀霊ハンマハンマ
「おのれ!!!・・・って張勲はどこだ?」

紀霊ハンマハンマがあたりをキョロキョロしていると七乃はいつのまにか逃げていたのであった。

七乃
「紀霊さん、はやく逃げましょう!!」
紀霊ハンマハンマ
「おおおおい!!!?えええええい覚えておれ!!!」

紀霊ハンマハンマもその場から逃げだした。

孫策サイサリス
「よく戻ってきた。太史慈。」

太史慈ドム
「言ったハズだ。借りは必ず返すと・・・・それに・・・・」

太史慈ドムは膝をついた。

雪蓮
「貴方・・・・」
太史慈ドム
「私も歩んでみたくなりました。貴方達と同じ道を・・・・」
孫策サイサリス
「・・・・共に行こう、太史慈!!」
雪蓮
「一緒にがんばろうね。」
太史慈ドム
「はい!!」

すると

陸遜ゼータプラス
「お師匠様!!」
冥琳
「今日は人気者だな。二人とも。」

しかし、陸遜ゼータプラスが下に来たのは

陸遜ゼータプラス
「お師匠様!!」
冥琳
「なっ!?」
周瑜ヒャクシキ

「私と冥琳のことか！？」
孫策サイサリス
「周瑜と冥琳が師匠！？」
雪蓮
「おどろきね。」
周瑜ヒャクシキ
「よさないか陸遜！！」
陸遜ゼータプラス
「いえこのたびのお師匠様達の兵法、感動しました。ぜひこの僕を弟子にしてください！！」
冥琳
「しかし・・・・」
隠
「いいじゃありませんか。こんな頼んでいますし。私も後輩ができてうれしいですし。」
周瑜ヒャクシキ
「・・・・・・」
陸遜ゼータプラス
「お願いします！！」
孫権ガンダム
「ひきうけてやれよ。周瑜。」

そして・・・・・

冥琳
「しかたないわね。」
周瑜ヒャクシキ
「だが私達の教えは厳しいぞ。」

新たな仲間と水軍を手に入れた孫策と雪蓮が小覇王の快進撃はここ

から始まった。

第９話『江東の小覇王』（後書き）

次回予告

袁術達の魔の手が徐州へと攻めてくる。そして・・曹操の言葉に対しての二人の劉備の答えは・・・・？

次回　第１０話『皇帝宣言』

第１０話『皇帝宣言』（前書き）

ついに十話を突破しました。

第１０話『皇帝宣言』

ここ、寿春の城では

七乃
「はい、美羽様、あ～ん。」

美羽
「あ～ん。うーむ、蜂蜜は甘いのじゃ！！」

袁術ズサ
「だ～か～ら！！！！それは私の蜂蜜だと言っているでしょうが！！！！！」

美羽
「むぅー、すこしくらいいいではないか！！」

袁術ズサ
「まったく・・・・しかし、紀霊将軍ともあろうものが水軍を奪われるとは・・・」

紀霊ハンマハンマ
「もうしわけありません。この紀霊、一生の不覚」

するとそこへ張譲が現れた。

張譲
「袁術様、耳寄りな情報をお持ちしました。」

美羽
「耳寄りな情報。」

張譲
「はい、劉備が治める徐州では、劉備達は民と畑を耕すだけで武力を持っていないと・・・」

袁術ズサ

「なるほど江東の孫策を倒すのは後回しにして、守りの薄い劉備の徐州を攻めるとしましょう。」
美羽
「そうじゃな。今回は童達も出るとしようぞ。」
紀霊ハンマハンマ
「おおお！！無敵の袁術様達が出陣なさるとはこの紀霊、感激です(泣)」

そして、袁術ズサは手にした玉璽を天にあげた。

袁術ズサ
「無敵・・・・いい響きですね。」
美羽
「張譲よ・・・・・お主には感謝するぞ。」
袁術ズサ
「そうですね。貴方のおかげで玉璽を手に入れることができましたから。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
それは董卓軍との戦いの後のことであった。張譲はこの辺りをさまよっていた。
張譲
「くっ・・・・・なんとかして・・・・やつらに仕返しをしないと・・・・・ん！！？」
張譲が見つけたのは玉璽であった。
張譲

「これは・・・・玉璽・・・これなら・・・ん？あれは・・・」

そこへやってきたのは袁術ズサと美羽であった。

袁術ズサ
「たしか・・・この辺に・・・・」
美羽
「間違いないであろうな？」

そこへ

張譲
「貴方が未来の皇帝となられる袁術様ですね。」
袁術ズサ
「そうですが・・・ええ私が！！」
張譲
「その証として・・・これをお渡しします。」
袁術様
「おおこれは玉璽ではないですか・・・では・・・・」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・

袁術ズサ
「それではいきますよ！！」
美羽
「徐州を攻めるのじゃ！！」
こうして袁術軍は動き出した。

第１０話『皇帝宣言』

そのころ、徐州では劉備ガンダム・桃香・一刀・関羽ガンダム・愛紗・張飛ガンダム・鈴々・恋・音々音が村人と一緒に畑を耕していたのであった。

桃香
「今日もいい天気だね。」
子供
「今年も豊作だといいね。」
劉備ガンダム
「ふぅー、やっぱり剣を振るより鍬を振ったほうがいいもんだな。」
桃香
「そうだね。張君と鈴々ちゃんはどう思うの？」

それにたいして二人の答えは

張飛ガンダム
「たく、毎日毎日、畑を耕してばっかりで」
鈴々
「これじゃあ鈴々達の腕や武器がさびちゃうのだ！！」
関羽ガンダム
「今はそれでよいでしないか。」
一刀
「あんなこと言っているけど二人も今の生活を気に入っているんだって。」
少年
「そうなの？」
劉備ガンダム
「そうさ鍬は畑を耕して、作物は命を育てる。剣じゃできないこと

だ。」

恋
「恋も楽しい・・・・・」
一刀
「そうか・・・偉いな、恋」

一刀は恋をなでた。すると・・・

音々音
「ちんきゅーきっく！！！」

一刀
「ぶほおおおおおおおおおお！！！！！」

どかああああああああああああん！！！！

一刀は音々音に蹴り飛ばされたのであった。

音々音
「この！！恋殿に何をするのですか！！！」
恋
「ねね、めっ！！」
音々音
「うう・・・・」
桃香
「あらあら・・・」

するとしばらくして、朱里と雛里がやってきた。

朱里

「みなさん、お昼の準備ができました。」
雛里
「村に戻ってください。」
愛紗
「おっ、もうそろそろそんな時間か・・・」
桃香
「じゃあ、皆、お昼ご飯にしようね。」
劉備ガンダム
「張飛、鈴々!!行くぞ!!」
張飛ガンダム
「先に行ってくれ。」
鈴々
「鈴々達はこれが完成してからいくなのだ。」
恋
「恋も残る・・・」
愛紗
「そうかあんまり遅くなるようならお前達の分はなくなっているぞ。」
桃香
「じゃあ先に行ってるね。」

こうして、劉備ガンダム達は村へと戻った。

劉備ガンダム
（これが俺達の望んだ理想の国なのかもしれない。）
桃香
（平和だね。こんな平和がずっと続けられるといいのに。）

そのころ、畑に残った張飛ガンダム達は

恋
「できた。」
張飛ガンダム
「こんなものだろ。」
鈴々
「鈴々達の最高の畑が完成したのだ！！」
張飛ガンダム
「ここには何を植えようかな？ネギか・・・イモか・・・・・」
鈴々
「鈴々は瓜がいいと思うのだ！！」

すると

恋
「・・・・来る！！」
鈴々
「え！？」

何者かが襲いかかってきた。張飛ガンダム達はとっさに避けることができた。

張飛ガンダム
「うわあああああああああああああ！！！！！」
鈴々
「にゃあああああああああああああ！！！！！！」
恋
「！！！？」

三人は武器を構えた。土煙がはれるとそこには紀霊ハンマハンマがいたのであった。

鈴々
「いきなり何するのだ！！」
張飛ガンダム
「テメェー！！せっかく俺達が耕した畑を壊してくれたな！！！」
紀霊ハンマハンマ
「お前らだけか！！？劉備達はどうしたんだ！！？」
恋
「恋達のことを知っている・・・・」
鈴々
「お前一体何者なのだ！！」
紀霊ハンマハンマ
「我こそは三璃紗最強の袁術皇帝軍だ！！」
張飛ガンダム
「袁術皇帝軍！！？」

三人は上を向くと袁術ズサと美羽、七乃、大勢の軍がいたのであった。

袁術ズサ
「ふふふふ・・・・私の無敵伝説はここから始まるのです！！」
美羽
「そのとおりなのじゃ！！」
七乃
「ですよね！！」
張飛ガンダム
「あっ！！！あの末成り野郎と金髪チビ！！？」
袁術ズサ
「あっー！！！！！また『末成り』って言った！！！」
美羽

「童はチビではないぞ!!!」
七乃
「袁術様と美羽様を愚弄することは許しませんよ!!ねぇ、紀霊将軍!!」
紀霊ハンマハンマ
「そのとおりだ!!この紀霊様の三尖麗牙の餌食にしてやる!!」

すると・・・

鈴々
「紀霊?江東で孫一族を追い詰めたというあの紀霊かなのだ?」
紀霊ハンマハンマ
「そうだ。ふふふ・・・どうやらこんな田舎でも私の名声は届いているようだな。」
張飛ガンダム
「追い詰めたが水軍をとられて泣きながら逃げ出したって聞いたぜ。」
鈴々
「泣き虫なのだ。」
恋
「・・・・泣き虫」

ズコ!!!

紀霊ハンマハンマ
「ふ・・・ふざけるな!!!泣いてなどおらぬは!!!!!!」

紀霊ハンマハンマは武器を構えて襲い掛かった。鈴々も恋姫鎧装した。

張飛ガンダム
「恋、こいつは俺達に任せろ！！」
雷光王・鈴々
「あの末成り野郎の所へ行くなのだ！！！」
恋
「うん！！」

恋は袁術ズサの所へと向かった。

袁術ズサ
「ふふふ・・・・来ましたね。では貴方の出番ですよ・・・・・」

袁術ズサはある武将に呼びかけたのであった。

一方、恋は袁術ズサのいるところまで向かった。すると・・

恋
「・・・・お前は！！？」

そこにいたのは・・・・・・

恋
「奉先・・・・・・」
呂布トールギス
「ふふふふ・・・・・・久しいな・・恋！！！」

戦慄の暴将・呂布トールギスであった。

一方、戦いのほう激化していたのであった。

紀霊ハンマハンマ
「喰らえ!!最強の必殺技・麗牙鋼烈閃!!!!」
張飛ガンダム
「それのどこが最強なんだ!!!爆裂大雷蛇!!!」
雷光王・鈴々
「爆裂雷鳴砲!!」

それぞれの必殺技がぶつかり合った。勝ったのは・・・・・

紀霊ハンマハンマ
「ぐあああああ!!!まさか袁術軍最強の私が!!!!」

張飛ガンダムと雷光王・鈴々であった。紀霊ハンマハンマはそのまま吹き飛ばされてしまったのであった。

七乃
「あらら・・・紀霊さんやられちゃいましたね。」
張飛ガンダム
「最強は俺達だったな!!」
雷光王・鈴々
「そうなのだ!!つぎはお前らの番なのだ!!」

張飛ガンダムと雷光王・鈴々は袁術ズサのいるところまで向かった。

美羽
「ちとやりすぎではないのかね?」
袁術ズサ
「いいのですよ。私は三璃紗の皇帝ですから・・・・」

張飛ガンダムと雷光王・鈴々は袁術ズサ達の所へと向かった。そこ

には

恋

「くっ・・・・」

雷光王・鈴々

「恋！！！どうしたのだ！！？」

張飛ガンダム

「！！！？？・・・・貴様は・・・・生きていたのか、呂布！！！！！」

そこには傷ついた恋と呂布トールギスがいたのであった。

呂布トールギス

「戦いがある限り俺は死なん！！俺は修羅！！」

雷光王・鈴々

「修羅？」

呂布トールギス

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

呂布トールギスは大きく力をためたのであった。

その頃村では劉備ガンダム達が一休みをしていたのであった。

関羽ガンダム

「張飛、遅いですな。」

桃香

「鈴々ちゃんや恋ちゃんも遅いね。」

愛紗

「あの大飯食らいが遅れるなんてめずらしいですね。」

一刀

「何しているのかな？」
劉備ガンダム
「早くしないと握り飯、なくなちゃうぜ。」

彼らは危機に接していることに気がつかなかった。

そして、張飛ガンダム達は呂布トールギスと戦っていた。

呂布トールギス
「暴風激烈斬！！！！！！！」
張飛ガンダム
「うわあああああああああああああああ！！！！！！！！」
鈴々
「にゃあああああああああああああああ！！！！！！！！」

二人は呂布トールギスの必殺技に吹き飛ばされたのであった。

呂布トールギス
「ふっ・・・・・・」
美羽
「さすがじゃのう。」
袁術ズサ
「さあ出陣しますよ。あの村を制圧するのです！！」

袁術軍は徐州へと攻め始めたのであった。

張飛ガンダム
「呂布め・・・・」
雷光王・鈴々
「村の皆が危ないのだ！！」

恋
「行こう！！」

そのころ村では

桃香
「ごちそうさまでした。」
愛紗
「いつもかたじけない。」
月
「どういたしまして。」
詠
「その代わり一休みしたらまた頑張りなさいよ！！」
劉備ガンダム
「さて俺は張飛と鈴々と恋にこの握り飯でも持ってやるとするか。」
関羽ガンダム
「うむ腹をすかして倒れているかもしれんからな！！」

すると突然火矢が放たれた。

一刀
「なんだ！！？」
愛紗
「何事だ！！？」
桃香
「曹操さんは許昌へと戻ったのに」
劉備ガンダム
「誰がこの平和な地を攻めてきたんだ！！！！」

劉備ガンダム達は村人達を安全なところまで避難させた。

一刀
「皆、大丈夫か！？」
少年
「怖いよ…」
朱里
「大丈夫ですよ。」
愛紗
「うむ！！お主たちには指一本触れさせん！！」

すると

どごおおおおおおおおおおおおおん！！！！！！

城壁が崩れ、そこから袁術軍が現れた。

詠
「ちょと、あれって袁術軍の兵士じゃない！！？」
劉備ガンダム
「袁術がこの徐州を攻めてきたのか！！？」
関羽ガンダム
「なぜ、こんな平和な村に！！？」
桃香
「こんなことしちゃうなんて許せない！！」
愛紗
「桃香様！！」
桃香
「うん！！恋姫鎧装！！！」

桃香と愛紗は鎧を装備して、劉備ガンダムと関羽ガンダムと共に戦

いを始めた。

聖龍王・桃香
「はあああああああああああ！！」

鬼牙王・愛紗
「はあああああああああああああああ！！！」

関羽ガンダム
「うおおおおおおおおおおおお！！！」

劉備ガンダム
「くっ・・まだ来るか！！？」

彼らは続々集まる敵を相手にして戦っていた。

そんな様子を袁術ズサ達は見ていた。

張譲
「制圧は時間の問題ですね。」

美羽
「やっぱりこんなのはやりすぎじゃぞ！！」

袁術ズサ
「いいのです！！この一歩は小さな一歩ですが三璃紗支配への大きな一歩になるのです。」

そして、袁術軍はドンドンと迫っていくのであった。

村人Ａ
「劉備様、もう駄目です！！袁術軍はあまりも多すぎます！！」

聖龍王・桃香
「あきらめちゃダメ！！」

劉備ガンダム

「そうだ！！」
村人Ｂ
「しかし・・・・」
鬼牙王・愛紗
「我らが付いている！！」
関羽ガンダム
「！！？・・・あの煙は！！？」

一同は村の向こうの煙に気がついた。

雛里
「あそこはたしか・・・・・」
少年
「山向こうの村だよ！！」
音々音
「なんですとー！！！？」
詠
「やられているのはこの村だけじゃなかったの！！？」
月
「もしかしたら・・・・徐州のすべての村は・・・・・もう」
閃光装・一刀
「そんなことはない！！」
劉備ガンダム
「徐州が全部だなんて・・・・」

すると城壁が崩れる音がした。現れたのは張飛ガンダムと雷光王・鈴々と恋であった。

聖龍王・桃香
「張君に鈴々ちゃんと恋ちゃん！！」

張飛ガンダム
「兄貴！！皆、ここから逃げるんだ！！」
劉備ガンダム
「何言っているんだ！！！村を守るために戦うんだ！！」
雷光王・鈴々
「駄目なのだ！！袁術軍には呂布がいるのだ！！？」
鬼牙王・愛紗
「何！！？」
関羽ガンダム
「あやつ、生きておったのか！！？」
恋
「いまの恋達では勝てない・・・・・」
閃光装・一刀
「ここまでなのか・・・・」
するとそこへ・・・・・
袁術ズサ
「さて・・・追い詰めましたよ。劉備・・・・」
そこへ袁術ズサ、張譲、呂布トールギスが現れた。
劉備ガンダム
「袁術・・・・・！！！」
鬼牙王・愛紗
「それに呂布、生きておったか！！」
詠
「それにあれって張譲じゃないのよ！！」
月
「そんな・・・・」

張飛ガンダム
「董卓もろとも吹き飛んだと思っていたのに、生きていたなんて・・・」
張譲
「私はそう簡単には死にませんよ。」
袁術ズサ
「さあ呂布、やりなさい！！！」

呂布トールギスは劉備ガンダム達に襲い掛かった。

劉備ガンダム
「ぐわああ！！！」
聖龍王・桃香
「きゃあ！！？」
村人
「劉備様・・・・」

二人は苦戦していた。

劉備ガンダム
「村はすっかり壊滅・・・」
聖龍王・桃香
「でも民の皆はまだ逃げ遅れている・・・・」
劉備ガンダム
「正直・・・ここじゃたたかえない。」

二人は苦戦していた。

袁術ズサ
「ふふふ・・・ひとおもいにやっておしまい！！・・・・・ん！？」

すると突然現れた紅連の炎によって軍の半分を焼かれた。

袁術ズサ
「これはまずいことになりましたね・・・一時退却しますよ!!」

袁術軍はその場から逃げだしたのであった。

劉備ガンダム
「この炎は・・・・まさか・・・」

桃香
「皆、あれ見て!!!」

その先にいたのは曹操ガンダムと炎鳳王・華琳であった。

劉備ガンダム、桃香
「「曹操(さん)!!!?」」

その後・・・・

曹操ガンダム
「これでわかっただろう。二人の劉備よ。」

華琳
「民と共に畑を耕すだけでは平和な国は作れないのよ!!」

劉備ガンダム
「俺達はただ・・・・民の笑顔が見たくて・・・・・・」

華琳
「笑顔ですって!?どこに笑顔があるのよ!!」

桃香
「え!!?」

二人は村人たちの様子を見た。みんな悲しみや苦しみだけの顔であった。

曹操ガンダム
「民から笑顔を奪ったのは袁術ではない!!お前達だ!!」
桃香
「そんな・・・・」
華琳
「貴方達は間違っていたのよ。平和とは『武』によって成り立つのよ!!」
曹操ガンダム
「お前達にもその武があるではないか!!・・・・二人の劉備よ・・・余の所へ来い!!」
劉備ガンダム
「え!!?」

徐州が陥落してから一日が明けた後、劉備ガンダムと桃香は悩んでいた。

劉備ガンダム
「俺達は・・・・・どうしたら・・・・いいんだ?」
桃香
「二人の曹操さんの言っていることも間違っていないけど・・・私達には・・・」

そんな二人のところに曹操ガンダムと華琳がやってきた。

華琳
「二人の劉備、貴方達のせいで徐州は陥落したのよ。」

曹操ガンダム
「三璃紗統一のために必要なのはお前達の武だ！！二人の劉備よ、余と華琳の片腕となれ！！」
劉備ガンダム、桃香
「え！！？」
華琳
「そのためにも民への思いを捨てなさい！！それが貴方達の弱さになるのよ・・・」
曹操ガンダム
「お前達にもその武があるではないか。しばらく考えろ！！」

二人はそのまま、部屋を出たのであった。そんな劉備ガンダムと桃香の前にＭＳ武将と一人の少女が現れた。

桃香
「貴方達は？」
典韋アッシマー
「ワシは典韋！！曹操軍衛兵隊の隊長じゃ！！」
典韋（真名・流琉）
「私も典韋と言います！！よろしくお願いします！！」
劉備ガンダム
「よろしくお願いします。」
典韋アッシマー
「お前らも光栄な戦士達だ！！曹操様と華琳様の片腕になるのだからな。あれほどの戦士は三璃紗全土を探してもどこにもおらん！！」
桃香
「ははは・・・」
典韋アッシマー
「あの方々こそ平和を愛し、正義を愛し、まさに空に輝く太陽のごとくワシらに光を与えてくださるのだ！！なあ流琉！！」

流琉
「典韋さんはいつもこうなので・・・・」
劉備ガンダム
「そうなんだ・・・・」
典韋アッシマー
「それほどの方々よ!!ははははははは!!!!」
流琉
「では失礼します。」

二人は部屋を出た。

劉備ガンダム
「たしかに、二人の曹操の言うとおりかもしれない。平和には『武』も必要だと・・・」
桃香
「でもやっぱり私達はそれでも民や仲間達の思いは捨てられないよ。」
劉備ガンダム
「それを捨てて、得る勝利なんかいらない・・・」

そこへ一刀達が入ってきた。

一刀
「よく言ったな二人とも!!」
桃香
「ご主人様、皆!!」
関羽ガンダム
「それでこそ我らが付いてきた劉備殿と桃香殿だ!!」
愛紗
「我らはどこまで付いていきましょう!!」

張飛ガンダム
「俺達はいつだって兄貴達と一緒だぜ!!」
鈴々
「鈴々もなのだ!!」
朱里
「私もです!!」
雛里
「こくこく・・・・」
恋
「恋も・・・・」
月
「私達は貴方達のおかげで助かりましたから・・・・」
詠
「僕達も力になってあげないとね。」
音々音
「ねねもなのです!!」
劉備ガンダム
「皆・・・ありがとう!!」

劉備ガンダムと桃香は皆の思いで元気づけられたのであった。

司馬懿サザビー
「あの二人は我が軍には向きませんな。」
曹操ガンダム
「しかし・・・武将としての力はほしい!!」
華琳
「そうね・・・」

一方でも見ていたのもいた。

藍
「月様・・・元気そうでよかった。」
徐晃サーペント
「ああ、しかし呂布将軍が生きておったとは・・・・・・」
藍
「ああ、何か嫌な予感が起きそうだな。」
そして、物語は動き出そうとしていた。

第１０話『皇帝宣言』（後書き）

次回予告

曹操ガンダムと華琳は劉備ガンダム達と共に苑の城へと向かった。

しかしそこには恐るべき罠があった。

次回　第１１話『裏切りの城』

第１１話『裏切りの城』（前書き）

連続投稿です。今回は悲しい話になります。

第１１話『裏切りの城』

それから一日が明けた後、劉備ガンダム達の下に典韋アッシマーと流琉が現れた。

典韋アッシマー
「お前達、宛の町を治める張繍将軍を知っているか？」
桃香
「いえ・・・」
流琉
「曹操様と華琳様に心酔し、自ら配下になったお方です。」
典韋アッシマー
「この度、自分の城を作られ、その祝いの招待状が届いた。招かれたのは曹操様と華琳様とお前達だ！！」
劉備ガンダム
「俺達が！！？」

そこへ曹操ガンダムと華琳がやってきた。

華琳
「貴方達の活躍を聞いてぜひ会いたいと言っているわ。」
桃香
「でも私達は・・・」
曹操ガンダム
「余と華琳としてもお前達を張繍に会わせたい。」
劉備ガンダム
「え！？」
華琳
「私と曹操と張繍は同じ考えよ。三璃紗統一の理想こそなにより大

事といっているわ。」
曹操ガンダム
「その理想の前ではお前達の民の思いなど小さき物!!」
一刀
「なんだと!!」

劉備ガンダム達は曹操ガンダムの言葉に怒り出した。

華琳
「今の時代、そう考えるものは増えているわよ。」
曹操ガンダム
「余の考えはもはや余だけのものではない!!お前達も目を覚ませ!!」
劉備ガンダム
「くっ・・・・・」

第11話『裏切りの城』

劉備ガンダム、桃香、関羽ガンダム、愛紗、張飛ガンダム、鈴々、朱里、雛里、一刀、典韋アッシマー、流琉は外で待っていた。(ちなみに恋、音々音、月、詠は留守番)

典韋アッシマー
「お前達も曹操軍に入れ!!いかに光栄なことかすぐにわかる!!なぜなら曹操様と華琳様はまさに空に輝く太陽のごとくワシらに光を与えてくださるのだ!!なあ流琉!!」
流琉
「典韋さん、同じことを言ってますよ。」
関羽ガンダム
「それほどまでに曹操殿を敬愛しているようですな。」

愛紗
「そうだな。」
典韋アッシマー
「無論、小さな料理店で働いたワシと流琉を軍に入れたのが曹操様と華琳様だからな。」
流琉
「そのおかげで私達の力も約に立てるようになりました。」
典韋アッシマー
「その御恩、けして忘れぬ!!」
鈴々
「にゃははは、このおっちゃんも困ったものなのだ。」
張飛ガンダム
「ずっと、曹操をほめ続けている。」
朱里
「それほど曹操さんのことがすきなんですよ。」
雛里
「うんうん。」

すると曹操と華琳が出てきた。

典韋アッシマー
「おっ!!行くぞ!!」

こうして宛の張繍ブリトヴァの城へと向かったのであった。

そして、ようやくたどり着いた。そこへ二人のＭＳ武将が現れた。

張繍ブリトヴァ
「曹操様、ようこそおいでくださいました。そちらが二人の劉備殿と天の遣い殿でございますか。会えてうれしいですぞ。」

一刀
「俺のことまで知っているのか！！？」
華琳
「その者は？」
張繍ブリトヴァ
「新しい軍師の賈？と申します。」
賈？アシュタロン
「お見知りおきを・・・・・」
張繍ブリトヴァ
「さあ中へどうぞ。」

そして、曹操ガンダム、華琳、劉備ガンダム、桃香、典韋アッシマー、流琉、一刀は武器を預け、城の中に入った。関羽ガンダム、愛紗、張飛ガンダム、鈴々、朱里、雛里は別の場所で待つことにした。

曹操ガンダム
「張繍、考えを申してみろ！！」
張繍ブリトヴァ
「無論、曹操様達と意見でございます。個人の想いよりも大事なのは何より三璃紗の統一！！」
華琳
「貴方達もわかったでしょ。これが現実よ。」
劉備ガンダム
「たしかに・・・・・」
桃香
「間違ってはいないけど…」
張繍ブリトヴァ
「さらに付け加えるならば誰より偉大なものこそ三璃紗を統一するべきなのです。曹操様ならやり遂げると思います。そう信じていますので配下になりました。」

曹操ガンダム
「ふっ・・・・」
華琳
「たしかにね。」

すると張繍ブリトヴァの様子が変わった。

張繍ブリトヴァ
「ですが、我の前に曹操様の前に偉大なお方が現れたのです。」
華琳
「なんですって!!」
張繍ブリトヴァ
「そのお方は・・・・袁術様!!」

そういうと張繍ブリトヴァは後ろに下がった。そして賈?アシュタロンは縄を引っ張った。すると鉄格子が現れ、七人を閉じ込めた。

一刀
「なんだと!!?」
桃香
「とじこめられちゃった。」
劉備ガンダム
「どうなっているんだ!!?」
曹操ガンダム
「袁術だと!!?」
???
「ふはははははははははは!!!!!!!」
???
「おほほほほほほほほほほほ!!!!!」
???

「ふふふふふ・・・・・」

さらにそこに現れたのは紀霊ハンマハンマと七乃と張譲であった。

張譲
「まんまと罠にかかった。」

紀霊ハンマハンマ
「これでお前らも終わりだ!!」

一刀
「お前らは!!?」

張繍ブリトヴァ
「悪く思うな。曹操『様』」

曹操ガンダム
「張繍、余への裏切り許さぬぞ!!」

七乃
「そんなこと言ってもいいのですか？　賈?さん!!」

賈?アシュタロン
「曹操『様』。減らず口もそこまでだよ!!」

賈?アシュタロンは縄を引っ張った。すると釣り天井が落ちてきた。
しかし、典韋アッシマーと流琉がそれを支えたのであった。

典韋アッシマー
「曹操様と華琳様に傷を付けるわけには・・・・・ゆかぬ!!」

流琉
「早くしてください・・・・・」

桃香
「典韋!!」

張譲
「釣り天井を支えるとは・・・・何と怪力だ。」

曹操ガンダム、華琳、劉備ガンダム、桃香、一刀は鉄格子を壊そうとしているがなかなか壊れなかった。

一刀
「二人とも頑張って！！」
賈？アシュタロン
「無駄なんだよね！！」

賈？アシュタロンはさらに縄を引っ張った。その上から岩が落ちてきた。

典韋アッシマー
「ぐっ・・・・・」
流琉
「くっ・・・・・・」

はたして脱出できるのであろうか？

そのころ、突然の音に異変を感じた関羽ガンダム、愛紗、張飛ガンダム、鈴々は劉備ガンダム達の所に向かった。

張飛ガンダム
「どうなっているんだ！！？いったい！！」
鈴々
「突然、大きな音がしちゃったから驚いたのだ！！」
関羽ガンダム
「そういうことか・・・・・」
愛紗
「なら兄上と桃香様とご主人様が危ない！！行くぞ！！」

四人は走り出したのであった。

そのころ、釣り天井はどんどんと迫っていた。

典韋アッシマー
「ぐっ・・・・・」

流琉
「くっ・・・・・」

劉備ガンダム
「典韋さん！！」

張譲
「これで袁術様もお喜びなれるぞ。」

そこへ関羽ガンダム、愛紗、張飛ガンダム、鈴々がやってきた。

七乃
「あれ！！？」

関羽ガンダム
「劉備殿！！！？」

愛紗
「桃香様！！」

鈴々
「お兄ちゃん！！」

紀霊ハンマハンマ
「貴様ら！！」

張飛ガンダム
「テメェー、紀霊！！テメェーらの仕業だったんだな！！！」

張飛ガンダムと鈴々が紀霊ハンマハンマの相手をしているすきに関

羽ガンダムと愛紗がそれぞれの武器を振りまわして、鉄格子を壊した。

桃香
「ありがとう愛紗ちゃん！！」
劉備ガンダム
「関羽、助かった。」

曹操ガンダム、華琳、劉備ガンダム、桃香、一刀はなんとか脱出できたが典韋と流琉は両手が塞がって出られなかった。すでに二人の体力も限界であった。

流琉
「くっ・・・・・」
典韋アッシマー
「まだ若い流琉を死なせるわけにはいかぬ・・・・・」
流琉
「え！？」

典韋アッシマーは流琉の背中を押し、外へ出した。そして・・・

どごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん！！！！！

典韋アッシマー
「ぐわあああああああああああああああああ！！！！！」
流琉
「典韋さん！！？」

そのまま釣り天井が落ちて、典韋アッシマーはつぶされてしまった。

そして、いつのまにか張繍ブリトヴァと賈?アシュタロンと紀霊ハンマハンマと七乃と張譲は逃げていたのであった。

関羽ガンダム
「おのれ!!!」
張飛ガンダム
「にげやがったな!!」
流琉
「典韋さん!!しっかりして!!」

そして、劉備ガンダム達は下敷きになった典韋アッシマーの所へと向かった。

典韋アッシマー
「流琉・・・曹操様と華琳様は・・・・ご無事か・・・・・」
流琉
「典韋さんのおかげで二人は無事です。」
典韋アッシマー
「そうか・・・・よかった。流琉・・・・これから・・・・・ワシに代わって曹操様と・・・華琳様を・・・頼んだぞ・・・・・・二人は・・・我らが・・・太陽・・・」

そして、典韋アッシマーは静かに目を閉じて、絶命した。

流琉
「!!!!?」
劉備ガンダム
「そんな!!?」
桃香
「嘘・・・」

関羽ガンダム
「典韋殿！！」
張飛ガンダム
「おっさん！！」
鈴々
「うわあああああああん！！！おっちゃんが死んじゃったなのだ！！」
愛紗
「なんということだ・・・・」
一刀
「俺達を助けるために・・・・」

劉備ガンダム達は典韋アッシマーの死を悲しんでいた。そして・・・

華琳
「すぐに許昌へ戻るわよ。」
曹操ガンダム
「兵を集めて、張繍を追い、その後ろの袁術を討つ。」

曹操ガンダムと華琳はそのまま立ち去ろうとした。

一刀
「二人ともそのまま行くのかよ！！典韋さんは俺達を助けるために死んだんだぞ！！それをなんとも思わないのか！！」
桃香
「そうです！！命をかけて忠誠をつくした兵に大義の一言もかけてあげられないのですか！！」
曹操ガンダム
「典韋は任を果たして死んだんだ。戦士として本望のはず・・・・」
劉備ガンダム

「俺達はただ・・・」
華琳
「死んだ者に情けをかけてやれということね。・・・くだらないわ!!」
桃香
「なんですって!!」
曹操ガンダム
「それで典韋が喜ぶと思っているのか!!お前たちだけが満足するだろう!!部下の死に報いる方法はただ一つ!!勝つことのみ!!」

曹操ガンダムと華琳の言葉に劉備ガンダム、桃香、一刀を怒りを表していた。

一刀
「それが二人の考えなんだな・・・」
劉備ガンダム
「やっぱり俺達はお前達のようにはなれない。」
桃香
「私達が戦いに勝ったとしても散っていた命がある。彼らのおかげで私達は生きています。」
劉備ガンダム
「それを忘れての勝利の価値なんてあるとは思えない!!お前達とは同じ道を歩めないな・・・・」

その後、徐州の民を許昌に残すと劉備ガンダム達は自分達ができることを探すために旅を出のであった。

その夜

流琉は自分の部屋にいた。

流琉
「あのときは・・・曹操様と華琳様の前にいたらから・・・我慢できた。二人の言っていることは正しいから私は我慢することができた。そうだよね・・・典韋さん」

そして、流琉の瞳から涙がこぼれた。

流琉
「でも・・・もう我慢しなくても・・・・・いいよね・・・・」

そして・・・

流琉
「う・・・うう・・・・うわあああああああああああん!!!!」

彼女はその悲しみを抑えきれず、一晩中泣き明かした。部屋の外では華琳がいた。彼女の瞳から涙が出たのは・・・・・・気のせいではないだろう・・・・

翌日、流琉は曹操ガンダムと華琳に呼ばれた。

流琉
「お呼びでございましょうか?」
曹操ガンダム
「これを・・・・・」
流琉
「これは・・・典韋さんの・・・・・」

それは典韋アッシマーの形見である豪太斧であった。

曹操ガンダム
「典韋の意志を継げるのはお前だけだ！！」

華琳
「彼の遺した武器で頑張りなさい。」

流琉
「は・・・・はい！！」

流琉はそう決意した。死んだ典韋アッシマーの分まで曹操ガンダムと華琳を守ると・・

第１１話『裏切りの城』（後書き）

次回予告

劉備ガンダム達は袁術ズサの悪行を止めるために袁紹バウのところへ向かったのだが・・・・

次回　第１２話『天と地』

第１２話『天と地』（前書き）

またまた連続投稿です。

第12話『天と地』

許昌を後にした劉備ガンダム達は袁紹バウと麗羽が治める町へとやってきた。

桃香
「すごい、民だけでなく兵までいっぱいいるね。」

朱里
「そうみたいですね。」

関羽ガンダム
「なにしろ二人の袁紹殿は以前反董卓連合軍の盟主だったお方だ。」

雛里
「さすがに武力も抜きに出ているようです。」

すると張飛ガンダムと鈴々が

張飛ガンダム
「おい、俺達、何しに来たっけ？」

鈴々
「鈴々もなのだ！！」

愛紗
「まったく！！お前達は兄上と桃香様の話を聞いていなかったのか！！」

一刀
「二人の袁術の暴走を止めるために、その兄と従姉である二人の袁紹との交渉に来たんだぞ。」

張飛ガンダム
「そうだったんだな。じゃあさっそく袁紹の所へ行こうぜ！！」

月

「私達は近くの茶店で待っていますから」
詠
「僕達の正体を知られるわけにはいかないしね。」
一刀
「そうか・・・」

月、詠、恋、音々音は別行動をとった。

第１２話『天と地』

月達と別れた劉備ガンダム達は歩き出した。

桃香
「とにかくとめるように交渉しないと・・・・」
劉備ガンダム
「でもどこへ行ったら会えるんだろうかな?」

すると

顔良ガズアル
「貴様ら、何者だ!!!」

そこへ一同の前に二人のＭＳ武将、顔良ガズアルと文醜ガズエルが現れた。

朱里
「はわわわわ!!」
雛里
「あわわわわ!!」
桃香

「ひゃあ！！！？」
劉備ガンダム
「あの俺達は・・・・・」
張飛ガンダム
「やいやい人に名前を聞くときは自分から名乗るもんだ！！」
鈴々
「そうなのだ！！」
顔良ガズアル
「我らこの都を守る顔良・文醜兄弟！！」
文醜ガズエル
「見慣れぬ顔に怪しい風体、まさか貴様ら、どこかの国の密偵では・・・」
顔良ガズアル
「取り調べる武器を捨てよ！！」

すると

愛紗
「貴様ら、無礼なのはそっちではないか！！」
関羽ガンダム
「愛紗の言うとおりだ！！　我らの話を聞かずにその対応そんなり！！」
鈴々
「見ただけで鈴々達を怪しむとは許せないのだ！！」
張飛ガンダム
「この野郎、許せねェ！！！久しぶりに暴れてやるぜ！！！」
顔良ガズアル、文醜ガズエル
「「刃向かう気か！！」」
愛紗
「どこからでもかかってこい！！」

一同は睨みあった。

朱里
「はわわわわわ！！」

雛里
「あわわわわ！！」

桃香
「ちょっと！！愛紗ちゃん、鈴々ちゃん！！」

劉備ガンダム
「関羽、張飛！！」

顔良ガズアル、文醜ガズエル
「「行くぞ！！」」

するとそこへ斗詩と猪々子がやってきた。

斗詩
「あああ、顔良に文醜、ちょっと待って！！」

顔良ガズアル
「斗詩、猪々子！！！なぜ止める！！」

猪々子
「こいつらは連合軍で袁招様と麗羽様と面識があるから大丈夫だって！！」

文醜ガズエル
「そうなのか！！」

するとそこへ・・・・

麗羽
「そのとおりですわよ。」

後ろから馬車がやってきた。そこには袁紹バウと麗羽が乗っていた。

顔良ガズアル、文醜ガズエル
「「袁招様、麗羽様！！」」

劉備
「袁紹・・・・」

袁紹バウ
「久しぶりだな。二人の劉備よ。」

劉備ガンダム達は袁紹バウと麗羽の城へとやってきた。

麗羽
「さきほどは失礼しましたわ。」

袁紹バウ
「しかし、わざわざワシらの国に来るとはなんのようなのだ！！」

そして・・劉備ガンダム

劉備ガンダム
「聞いてくれ、袁紹！！あんたの弟である袁術が俺達の治める徐州を襲って、奪ったんだ！！」

麗羽
「なんですって！！？」

桃香
「それだけではありません！！曹操さん達をだまし討ちにしようとしたり、孫策三の江東も襲い掛かってきました！」

劉備ガンダム
「かつて戦った仲間がこんなことするなんておかしいだろう！！二人の袁紹！！兄弟と従姉であるあんた達なら袁術を止められるはず

だ・・・」

それを聞いた麗羽は黙って聞いたが、袁紹バウは・・・・

袁紹バウ
「ん!?このワシを使って袁術を止めてどうするつもりだ?二人の劉備よ、貴様ら、袁術の後釜にすがるつもりか?」

麗羽
「ちょっと、失礼ですわよ!!」

劉備ガンダム
「後釜!!?」

桃香
「私達は三璃紗を平和にしたいだけなんです!!」

袁紹バウ
「平和がほしければまず三璃紗の統一よ!!そのために自分以外の国を滅ぼすことだ!!」

一同は驚いた。それを聞いた麗羽は怒り出した。

麗羽
「ちょっとそんなやり方は間違っていますわよ!!」

袁紹バウ
「ふっ、麗羽、お前も相変わらず甘いやつだ!!」

麗羽
「なんですって!!!?それに他国の滅亡による統一なんて愚の骨頂ですわよ!!」

袁紹バウ
「そんなことはどうでいい!!今はこの三璃紗は乱世、互いに互いの国を奪うことが自然なのだ!!この天が一つと同じように三璃紗の大地もまた一つ!!ならばこの三璃紗を統一するのもただ一人だ

と同意!!劉備もワシも袁術も共にそれを目指す戦士の一人よ!!」

それを聞いた劉備ガンダムと桃香は曹操ガンダムと華琳の言葉を思い出した。

麗羽
「でも袁術さんは貴方の弟ですわよ!!」

袁紹バウ
「奴とは交わりを断っている!!もはやこんな乱世では兄弟も親もただの敵!!やつがどうなろうとワシの知ったことではないわ!!」

麗羽
「そんな、美羽さんは戦いを好むような子では!!」

袁紹バウ
「ふっ、貴様も甘いようだな!!」

麗羽
「そんな・・・・」

それを聞いた劉備ガンダム達は絶望していた。

袁紹バウ
「それにやつらが国を失ったのは袁術が悪いのではない!!やつらが甘いだけだ!!」

桃香
「たしかにそうかもしれませんけど・・・・」

袁紹バウ
「とにかく話はここまでだ!!とっとこの国から出ていくがいい!!」

とういうと袁紹バウは納得がいかない麗羽と劉備ガンダム達を残して部屋を出て行った。

そのころ、劉備ガンダム達は帰り支度をしていた。

関羽ガンダム
「礼儀知らずのやつらよ！！」

張飛ガンダム
「まったくだぜ！！！あんな奴らに期待したのが間違いだったんだ！！」

朱里
「劉備さん、桃香様、これからどうします？」

劉備ガンダムと桃香は悩んでいた。

鈴々
「むぅー！！！むしゃくしゃするのだ！！！どこかで一発あばれたいのだ！！！」

愛紗
「お前は何を言っているんだ！！それでは袁術のやっていることと変わらんだろう！！！」

雛里
「そうですよ！！」

劉備ガンダム
「どうしたら・・・いいんだ？」

桃香
「たしかにこのままでは戦力は足りない・・・・」

そこへ麗羽、斗詩、猪々子がやってきた。

麗羽
「一つ、よろしいでしょうか？」

劉備ガンダム
「もう一人の袁紹か？」
麗羽
「先ほどの話を詳しく教えていただけませんか？」
桃香
「はい、実は・・・・」

劉備ガンダムと桃香は先ほどの話に加えて、袁術ズサと美羽が玉璽を手に入れたことを話した。

劉備ガンダム
「すでに二人は玉璽の闇に魔力に魅入られておかしくなっている。ここも攻められるのも時間の問題だ。」
桃香
「どうか、お願いします！！」

そして、しばらく考えた麗羽は・・・・・

麗羽
「わかりましたわ。私も寿春にいる美羽さん達が心配ですから・・・。斗詩、猪々子。貴方達に任せますわよ。」
斗詩
「私達もそうしたいのはやまやまなんですけど・・・・・・」
猪々子
「袁招様にばれたらどうなるか・・・・・・」
麗羽
「そのへんは私に任せてもらってよ！！とにかくお願いしますわ。」
桃香
「ありがとうございます！！」
一刀

「これで何とかなりそうだ！！」
劉備ガンダム
「皆、行こう！！」
全員
「おう！！」

そして、月達と合流した劉備ガンダム達は袁術のいる寿春へと向かったのであった。しかしその様子を聞いていた者がいた。

そのころ袁紹バウは部屋に戻ったそこへ軍師である沮授Ｒジャジャと田豊ガルスＪがやってきた。

袁紹バウ
「沮授、田豊か・・・・」
沮授Ｒジャジャ
「袁招様、劉備達が帰りました。」
袁紹バウ
「それでよい！！今、ワシが袁術を攻めるのは得策ではない！！ここは距離を置くべきよ！！」
田豊ガルスＪ
「すでに袁術様は以前の袁術様とは違います。今や完全に玉璽に支配されているでしょう。」
沮授Ｒジャジャ
「その袁術様に攻められた曹操と孫策が今度は袁術様を攻めるという情報が入っております。」

それを聞いた袁紹バウは笑っていた。

袁紹バウ
「すべてはワシの狙い通りよ！！これで奴らが戦い消耗すればよい

のだ！！ワシは何の苦労もせず玉璽を手に入れ、三璃紗を支配してやるわ！！」
田豊ガルスＪ
「三虎強食の計、大成功ですな。」
袁紹バウ
「ふふふ・・はははははははははは！！！！！！」
沮授Ｒジャジャ
「それから麗羽様が劉備達に援軍を送ったそうですが、どうなさいますか？」
袁紹バウ
「ふっ、麗羽め余計な事をしおって！！まあいい奴らの好きにさせるがよい！！」
田豊ガルスＪ
「はっ！！」

こうして、麗羽から援軍をよこした劉備ガンダム達は袁術の所へと向かってきたのであった。そんな彼らを見ていたものがいた。
孔明リ・ガズィ
「面白い人たちだ。しかしこれで三璃紗全土の運命が決まりましたね。」

そして・・・・・・許昌では・・・・
曹操ガンダム
「余をたばかり、余の武将をだまし討ちにしたのは袁術！！」
炎鳳王・華琳
「これより全軍で奴を叩き潰す！！」
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

曹操軍が動き出し・・・・

そして・・・・江東でも・・・・

孫策サイサリス
「我らの江東を攻め、民を苦しめる袁術を許すな！！今こそ逆襲のときだ！！」
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

雪蓮
「目指すは袁術の都・寿春！！」

孫策軍も動き出したのであった。

今、三璃紗全土に戦乱が巻き襲うとしていた。

第１２話『天と地』（後書き）

次回予告

袁術の城へと攻めた孫策軍。そして小覇王、最後の戦いとなる・・・

・

次回　第１３話『さらば孫策！！』

第１３話『さらば孫策！！』（前書き）

三国伝のほうも終わりに近づいてきますけどこちらの小説はまだまだ続きます。

第13話『さらば孫策！！』

袁術の寿春へと向かう幽州義勇軍、曹操軍、孫策軍、そして、最初にたどり着いたのが孫策軍であった。孫策サイサリスと周喩ヒャクシキと雪蓮と冥琳は城の様子を確認した。

孫策サイサリス
「あれが袁術の城か・・・・」
周喩ヒャクシキ
「城というよりは要塞だな。」
冥琳
「それを攻略するのは容易ではないわ。」
雪蓮
「真正面から攻めた場合、損害はどれくらいあるの？」
周喩ヒャクシキ
「半分は犠牲になるだろう。」
孫策サイサリス
「半分か・・・俺にとっては兵も家族の一員だからな。」
雪蓮
「一人の犠牲も出さないような作戦を立ててくれるかしら？」
冥琳
「まったく無茶なことを言うわね。」
周喩ヒャクシキ
「だが策がないわけではない・・・・」

作戦は袁術の城の表門を攻めるほうをおとりにして、裏門を攻めるということになる。しかし犠牲者を出ることがあるのだ。そして、その任務を任されたのは・・・・孫策サイサリスと雪蓮であった。

その夜、孫権ガンダムと蓮華は孫策サイサリスと雪蓮の元へとやってきた。

孫権ガンダム
「孫策兄さん。」
蓮華
「雪蓮姉さま。」
雪蓮
「蓮華に孫権、どうしたのよ？」
孫権ガンダム
「さっきの別働隊の話だけど、本当に兄さんと姉さんが行くの？」
孫策サイサリス
「当たり前だ！！俺達が行かなくて誰が行く！！？」
蓮華
「やっぱり二人だけで行くのは反対です！！」
孫権ガンダム
「そうだよ。何もそんなに無理しなくても、もっと別な方法があるんじゃないのかな？」
蓮華
「彼らと話し合うとかいうこととか・・・・・」
孫策サイサリス
「話し合うだと！！？」
雪蓮
「たしかに貴方達の言うとおり、侵略を止めされば誰も傷つかずに済むわよ。」
蓮華
「でしたら・・・・」
雪蓮
「でもね。その袁術に苦しめられている民はどうするのよ！！」
孫権ガンダム

「それは・・・・」
孫策サイサリス
「悲しいことだが世の中には話し合いだけで解決できないほどの悪いやつがいる。そういうやつを許してはいけない!!命をかけて戦わなきゃいけないんだ!!」

孫権ガンダムと蓮華は顔を討つ向いた。

孫権ガンダム
「やっぱり兄さんと姉さんにはかなわないな・・・」
蓮華
「孫権の言うとおりです。私達は兄様や姉様のようにはなれません。」
雪蓮
「強いばかりじゃ戦士じゃないわよ。」
孫策サイサリス
「そうだ。お前達には俺や雪蓮や父上とは違った勇気があるじゃないか!!」
孫権ガンダム
「違う勇気?俺と蓮華が・・・・」
雪蓮
「そうよ、人を悼み、人を思うやさしさ、それこそが真の勇気なのよ。」
蓮華
「真の勇気・・・・・」
孫策サイサリス
「虎錠刀は真の勇気を示す。この刀にふさわしいのは・・・・孫権、お前なのかもしれない・・・・・」
雪蓮
「虎王牙刀も同じよ。それにふさわしいのは・・・・蓮華、貴方な

のかもしれないわ。」
孫権ガンダム、蓮華
「え！！？」

孫権ガンダムと蓮華は二人の言葉に驚いた。そして、出撃のときは来た。

第１３話『さらば孫策！！』

そして、寿春の城へと攻め始めたのであった。

周喩ヒャクシキ
「目指すは袁術の城、表門！！全軍、出撃！！！」

そして、ついに攻め始めた。

張譲
「くっ、孫策軍か・・・」
張繍ブリトヴァ
「うろたえるな！！すぐに戦力の集中を・・・・・」
賈？アシュタロン
「二人とも心配しなくてもいいよ。やつらここを本気で攻めるつもりはないから・・・」
張繍ブリトヴァ
「何、そうなのか？　賈？」
賈？アシュタロン
「本命はきっと裏門のほうだよ・・・・・」
張譲
「ふっ・・・・ならばどうすればいい？」
賈？アシュタロン

「罠にかかったふりをすればいいよ。手は打ってあるからな・。」

そのころ、孫策サイサリスと雪蓮は裏門へと向かっていた。

孫策サイサリス
「見えた。あれが裏門か・・・」
雪蓮
「それじゃ行くわよ!!」

すると、突然、矢が振り込んできた。

孫策サイサリス
「!!!?」
雪蓮
「これは・・・・」
紀霊ハンマハンマ
「ふはははははははは!!!!!まんまと罠にはまったな!!」
雪蓮
「貴様は・・・・」
孫策サイサリス
「紀霊!!?」
紀霊ハンマハンマ
「貴様らの作戦などお見通しよ!!者ども撃て!!」

袁術軍は一斉攻撃を始めた。孫策サイサリスと雪蓮は防戦一方になっていた。

そのころ、罠に気がつかれた孫権ガンダム達は孫策サイサリスと雪蓮の所に向かっていた。

猛虎王・蓮華
「まさか、奴らに作戦がばれてしまうなんて・・・・」
冥琳
「とにかく裏門にいる孫策と雪蓮と合流しましょう!!」
孫権ガンダム
「兄さん、姉さん、俺達が来るまで無事にいてくれよ・・・・」

一方、孫策サイサリスと雪蓮に翻弄された紀霊ハンマハンマはしびれを切らしてしまい

紀霊ハンマハンマ
「おのれ・・・ちょこまかと・・・・こうなったらこの私自らが葬ってくれるわ!!」

そして、紀霊ハンマハンマは飛び上がると・・・孫策サイサリスと雪蓮の目の前にやってきた。そんな紀霊ハンマハンマに孫策サイサリスと雪蓮は・・・

孫策サイサリス
「ずいぶんと焦っているようだな。紀霊将軍!!」
雪蓮
「あんまり失敗すると袁術も許してはおかないわよ!!」

挑発した。そして・・・・

紀霊ハンマハンマ
「黙れ!!　喰らえ!!最強の必殺技・麗牙鋼烈閃!!!!!」

紀霊ハンマハンマは必殺技を放った。そして・・・・

孫策サイサリス
「猛虎獣烈覇！！！！」
雪蓮
「猛虎牙王覇！！！！！」

孫策サイサリスと雪蓮も必殺技を放った。そして・・勝ったのは・・
・・

紀霊ハンマハンマ
「ぐわあああああああああああああ！！！！！」

孫策サイサリスと雪蓮であった。そして、城壁が崩れ落ちた。

紀霊ハンマハンマ
「くっ・・・・なかなか・・・・やるな・・・だが・・・私とて袁
術軍・・・最強の戦士・・・・このまま引き下がるわけには・・・・
・・」

紀霊ハンマハンマは武器を手に取ろうとするが、それを先に手にし
たのは・・・・

紀霊ハンマハンマ
「あああああ！！？」
孫策サイサリス
「てめぇーごとき、とどめをさすのに虎錠刀を使うまでもない！！」
雪蓮
「虎王牙刀もよ。せめて自分の武器で死になさい！！」

孫策サイサリスであった。

紀霊ハンマハンマ
「やめろ!!俺はただ袁術に利用されただけなんだ!!!」
雪蓮
「黙れ、外道!!!自分の主をも裏切るとは・・・・」
孫策サイサリス
「このドブネズミ!!!!」

グサ!!!

紀霊ハンマハンマ
「ぐお・・・・お・・・お・・・・・」

そして、孫策サイサリスは紀霊ハンマハンマにとどめを刺したのであった。

袁術軍兵士
「紀霊様がやられた!!」
袁術軍兵士
「たったふたりだ!!やってしまえ!!」

兵士達は攻撃しようとするが・・・・

周喩ヒャクシキ
「天雷白爪弓!!」

そこからきた周喩ヒャクシキの攻撃で兵士達は吹き飛ばされてしまった。そこへ孫権ガンダム達がやってきた。

孫権ガンダム
「よかった・・無事で・・・」

猛虎王・蓮華
「でもあんまり無茶しないでください。」
冥琳
「そうよ・・・まったく・・・」
雪蓮
「ごめんなさいね。」
孫策サイサリス
「だがこれで戦いが終わったわけではないぞ!!」

そして、孫策サイサリスと雪蓮は袁術ズサに剣を向けた。

孫策サイサリス
「袁術、次は貴様の番だ!!」
雪蓮
「覚悟しなさい!!」

それを見た袁術ズサは・・・・

袁術ズサ
「おのれ・・・こうなったら呂布将軍、貴方の番ですよ。」

ついに戦慄の暴将が動き出した。

そのころ、

張繍ブリトヴァ
「賈?、裏門が突破されたぞ。」
賈?アシュタロン
「そうみたいだね。これで一気に孫策軍が攻めて来るよね。こうなったらずらかるしかないね。」

張繍ブリトヴァ
「ずらかるって、袁術を裏切るのか！？」
張譲
「そうだぞ！！」
賈？アシュタロン
「泥船にしがみついてたら、こっちまで沈んじゃうよ。行こう、張繍様、張譲様。」

そういうと三人は袁術の城から逃げ出したのであった。

そのころ、本陣に戻った孫策サイサリス達は

孫権ガンダム
「なんだ？あの見慣れない天幕は・・・・？」
孫策サイサリス
「行ってみよう。」

八人は早速中に入った。そこには華佗がいたのであった。

雪蓮
「貴方はたしか・・・董卓軍とたかった時にいた・・・」
華佗
「ああ、華佗だ。実は孫策殿達に伝えたいことがあって来たんだ。」
孫尚香ガーベラ
「ところで伝えたいことって何？」
華佗
「俺の師匠からの言葉だ。張譲が生きていた。そして太平要術も奴の手の中にある。」
蓮華
「なんですって！！？」

華佗
「やつが袁術の所にいると思って、駆けつけたんだが・・・一歩遅かったようだ。奴の気配が消えてしまっていた。」
孫策サイサリス
「とにかく・・・その張譲の居所をつかむために袁術との戦いに決着をつけなければ・・・・」

そして、華佗を軍医として加えた孫策軍は袁術の城へと進軍を始めた。

そのころ袁術の城では

美羽
「なんじゃと!!!?孫策がここに攻めてきているとな!!」
七乃
「はい、紀霊将軍もあっさりやられちゃったし、張繍様達はにげられてしまいましたよ。」
美羽
「どうするのじゃ!!?」
袁術ズサ
「心配いりませんよ。私達には切り札がありますから・・・・・」

そして、ついに城門までたどり着いた。

孫策サイサリス
「我らが狙うのは袁術の首!!」
雪蓮
「江東の民を苦しめる袁術を許すな!!」
「おおおおおおおおおっー!!!」
孫策サイサリス

「全軍、突撃!!!」

孫策軍は一斉に突撃を開始した。しかし・・・・

呂布トールギス
「旋風・・・・」

孫策サイサリス
「いかん!!」

呂布トールギス
「大烈斬!!!!」

突然の攻撃で全員が吹き飛ばされてしまった。しかし孫策サイサリスと雪蓮はたっていた。

雪蓮
「くっ・・・皆、大丈夫?」

そこへ現れたのは・・・・呂布トールギスであった。

呂布トールギス
「どうやら、俺と戦う資格があるのは貴様らだけのようだな。二人の孫策よ」

雪蓮
「生きていたのね。呂布!!」

呂布トールギス
「戦場がある限り俺は死なん!!」

孫策サイサリス
「まさか・・・父上の仇である貴様と戦うことになるとはな。呂布、父上の無念、ここで晴らして見せようぞ!!」

呂布トールギス

「ふふふ・・さすがは虎を継ぐ者たちよ！！聞こえるぞ！！貴様らの魂の声が！！！！！」

雪蓮

「周喩、冥琳、私達で奴を引き付けるから体勢を立て直して！！」

周喩ヒャクシキ

「わかった・・・」

冥琳

「頼んだわよ、孫策、雪蓮！！」

そして・・・・

孫策サイサリス

「行くぞ、呂布！！！」

雪蓮

「はあああああああああ！！！」

呂布トールギス

「来い、小覇王！！！」

そして、両者の戦い始まった。

そのころ、曹操軍は

曹操ガンダム

「孫策軍が寿春に乗り込んだだと！！」

伝令

「はっ、すでに城門を突破して、戦闘に入った模様です。」

司馬懿サザビー

「まずいですな。袁術軍には呂布がいます。いかに二人の孫策でも相手があの暴将では・・・」

炎鳳王・華琳

「私達も急ぐわよ。」

寿春へと向かって言った。

そのころ、幽州義勇軍も寿春へと向かっていた。

関羽ガンダム
「この森を抜ければ寿春ですぞ!!」

鬼牙王・愛紗
「そして袁術もそこにいる!!」

劉備ガンダム
「袁術軍は強力だ!!!気を引き締めて行くぞ!!」

聖龍王・桃香
「こんどこそ三璃紗を平和にするために!!」

雷光王・鈴々
「あいつを倒すのだ!!」

張飛ガンダム
「ああ、徐州での借り、百倍にして返してやるぜ!!」

恋
「・・・奉先・・・」

閃光装・一刀
「皆、行くぞ!!」

そのころ、孫策サイサリスと雪蓮と呂布トールギスとの戦いは激化していた。

雪蓮
「なかなか手ごわいわね!!」

孫策サイサリス
「だが負けるわけにはいかん・・・」

呂布トールギス
「うおおおおおおおお！！！暴風激烈斬！！！！！！！！」

呂布トールギスは必殺技を放った。その威力で孫策サイサリスと雪蓮は虎錠刀と虎王牙刀を手放してしまった。

雪蓮
「くっ・・・・」
孫策サイサリス
「まだだ！！」

雪蓮は腰に備えた剣を抜き、孫策サイサリスも両肩のトンファーを装着して、呂布トールギスに立ち向かった。

孫策サイサリス
「本当の戦いはこれからだ！！」
呂布トールギス
「笑わせてくれる！！！！！！」

そんなとき、孫権ガンダムと猛虎王・蓮華は虎錠刀と虎王牙刀を手に取ると、二人の元へと向かった。

孫権ガンダム
「兄さん！！」
猛虎王・蓮華
「姉様！！」
雪蓮
「孫権、蓮華！！！きちゃだめ！！！」
呂布トールギス
「邪魔だ！！！」

呂布トールギスは雪蓮達を斬ろうとしていた。その時

孫策サイサリス
「ぐおおおおおおおお！！！！！」

孫策サイサリスが三人をかばって重傷を負ってしまった。

猛虎王・蓮華
「兄様！！」
孫策サイサリス
「三人とも・・・・無事か・・・・？くっ・・・・！！」
孫権ガンダム
「兄さん！！」
孫策サイサリス
「雪蓮・・・・二人を下がらせるんだ・・・・奴は俺が・・・・・」
雪蓮
「わかったわ。」

雪蓮は孫権ガンダムと蓮華を下がらせた。

呂布トールギス
「ふっ・・・・つまらん・・・・」
孫策サイサリス
「何・・・・！！？」
呂布トールギス
「貴様ももう一人の貴様も貴様らの父もそれほどの力を持ちながら、情けにおぼれて命を散らす。くだらんぞ・・・・」
孫策サイサリス
「黙れ・・・・何が・・・・何が悪い！！命をかけて家族を守ること

のどこがくだらない！！！！」
呂布トールギス
「ほう・・・怒りが魂を震わせるか・・・面白い！！！」

そして、両者はそれぞれの武器を構えた。

孫策サイサリス
「孫権、蓮華・・・よく見ておけ！！これが孫一族の戦士の生き様だ！！！！」

孫策サイサリスはトンファーに力を込めて、呂布トールギスに立ち向かった。

雪蓮
「あれを使うのね・・・孫策・・・」
孫策サイサリス
「はああああああああああああああ！！！！！」
呂布トールギス
「虎を継ぐ者よ。終わりにしてくれる！！！！！」

孫策サイサリスは天に向かって飛んだ。

孫策サイサリス
「行くぞ！！！父上から受け継いだ最終奥義！！！！天華剛烈魂！！！！！！！」
呂布トールギス
「うおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

そして、両者の攻撃がぶつかった。

煙がはれると、呂布トールギスはたっていた。仮面の一部が砕けた。

呂布トールギス
「くっ・・・・・さすがは・・・・孫策・・・・まさに覇王の名に恥じぬ戦士だった。血をたぎらせるいい戦いだった・・・・・・・・だが!!!!!」

孫策サイサリス
「ぐっ・・・・・」

呂布トールギス
「あと一歩だったな!!」

孫策サイサリスは呂布トールギスに致命傷を与えられ、その場に倒れた。そして、呂布トールギスはそのまま立ち去った。

孫権ガンダム
「兄さん!!」

猛虎王・蓮華
「兄様!!」

雪蓮
「孫策!!」

三人は孫策サイサリスのもとへとやってきた。そこへ華佗を連れてきた冥琳達がやってきた。

周喩ヒャクシキ
「華佗殿、頼む!!」

華佗
「わかった。見てみよう・・・」

華佗は孫策サイサリスの体を調べた。

華佗
「くっ・・・・これは・・・」

蓮華
「兄様は助かるの？」

小蓮
「教えてよ！！」

華佗
「結論から言おう・・・・・・孫策殿の傷が深すぎる。もはや・・俺の力を持ってしても無理だ。」

その場にいた全員が驚いた。そこへ曹操軍が駆けつけた。更にそのあとに劉備ガンダム達もやってきた。

聖龍王・桃香
「曹操さん！！」

劉備ガンダム
「お前達も来ていたのか！！」

炎鳳王・華琳
「劉備か・・・・・・」

曹操ガンダム
「どうやら・・遅かったようだ。」

閃光装・一刀
「え！？」

一同は驚いた。孫策サイサリスが倒されていることに・・・・・・

聖龍王・桃香
「そんな・・・・」

関羽ガンダム
「あの孫策将軍が・・・・・」
鬼牙王・愛紗
「なんということだ・・・・・・」

そして、孫策サイサリスは最後の力を振り絞って、孫権ガンダム達のほうを向いた。

孫権ガンダム
「兄さん、しっかりして!!」
猛虎王・蓮華
「兄様、しっかりしてください!!」
孫策サイサリス
「孫権・・・後の事は・・・・頼んだぞ!!」
孫権ガンダム
「無理だよ!!俺は兄さんの様にはなれない!!兄さんのように戦えないよ!!」
雪蓮
「孫権!!しっかりしなさい!!」
猛虎王・蓮華
「姉様・・・・」
孫権ガンダム
「けど・・俺は・・・・・」
孫策サイサリス
「雪蓮の言うとおり・・・・だ。お前にも・・・・・・真の・・・・・勇気が・・・・あると・・・・」
雪蓮
「それに蓮華、貴方にもあるわよ。」
猛虎王・蓮華
「ですが・・・・」

孫策サイサリス
「太陽がどれほど・・・・激しく輝くけれど…夜の訪れない・・・・日は・・・ない！！」
雪蓮
「夜の闇をやさしく照らすのは月の明かり・・・・」
孫権ガンダム
「月の・・・・明かり・・・・」
孫策サイサリス
「そうだ・・・・いつか・・・・世の中が平和に・・・なったとき・・・・必ず・・・・お前達のような戦士が・・・・必要となる・・・・その時・・お前達は・・・人々をいやす・・・・月となれ！！」
孫権ガンダム
「兄さん・・・・」
猛虎王・蓮華
「兄様・・・・わかりました。」

孫権ガンダムと猛虎王・蓮華は涙を流しながらうなづいた。そして・・孫策サイサリスは雪蓮のほうへと向いた。

孫策サイサリス
「雪蓮・・・・最後まで・・・二人を・・・導いて・・・・やって・・・くれ・・・・」
雪蓮
「わかったわ。だから心配しないで・・・・」

雪蓮は静かにうなづいた。その瞳から涙がこぼれていることには気がつかなかったが・・

孫策サイサリス
「皆・・・・後は・・・・頼んだぞ・・・・」

そして、孫策サイサリスは静かに瞳を閉じ、息を引き取った。

孫権ガンダム
「兄さん・・・兄さん!!!!!!!!」

猛虎王・蓮華
「兄様!!!!!!!!」

周喩ヒャクシキ
「孫策!!!!」

冥琳
「周喩・・・・・」

孫尚香ガーベラ
「そんな・・・孫策兄さんまで・・・」

小蓮
「ひっく・・・・兄様が・・・・孫策兄様が死んじゃったよ!!!」

孫一族は孫策サイサリスの死を悲しんでいた。

猛虎王・蓮華
「兄様・・・うわあああああああああん!!!!!私はもっと貴方といてほしかった!!もっと・・もっと・・もっと!!!!!」

雪蓮
「立ちなさい・・・孫権、蓮華・・・・」

猛虎王・蓮華
「姉様・・・・」

雪蓮
「孫策は貴方達に託したのよ・・・だからこそ・・そのためにも袁術を倒すのよ!!!」

孫権ガンダム
「姉さん・・・・」

猛虎王・蓮華
「はい！！」

そして、孫権ガンダムは虎錠刀を、猛虎王・蓮華は虎王牙刀をとると袁術ズサの城へと目線をやった。もはや二人は戦いを恐れることはなかった。

そして・・・雪蓮は孫策サイサリスの亡きがらに近づき・・・・・

雪蓮
（孫策・・・・貴方の想いは孫権と蓮華が受け継いだわ・・・・・・だから・・・私も・・・最後の仕事をやらないとね・・・・・だから安心して休んでて・・・・）

そして、雪蓮は孫策サイサリスの形見である赤いマフラーを身に付けた。

第１３話『さらば孫策！！』（後書き）

次回予告

ついに袁術との最後の戦いが始まった。そして、静かなる猛虎が目覚める！！

次回　第１４話『真の勇気』

第１４話『真の勇気』（前書き）

今回で袁術編が終わります。次回からは袁紹編が始まります。

第１４話『真の勇気』

呂布トールギスとの戦いで孫策サイサリスは命を落とした。そして、今、袁術軍との最後の他戦いが始まろうとしていた。

第１４話『真の勇気』

曹操軍と幽州義勇軍は戦闘の準備を整っていた。

曹操ガンダム
「これより全軍で袁術を討つ！！突撃！！！」
炎鳳王・華琳
「一気に叩き潰すのよ！！！」

まず曹操軍が動き出した。迎え撃つ袁術軍兵士を次次へと倒していくのであった。

劉備ガンダム
「俺達も行くぞ！！」
聖龍王・桃香
「孫策さんの死を無駄にしないために！！」
雷光王・鈴々
「わかっているのだ！！」
張飛ガンダム
「当たり前だ！！！」
鬼牙王・愛紗
「百も承知！！」
関羽ガンダム
「心得た！！」

恋
「闘う・・・・」

斗詩、猪々子を加えた幽州義勇軍も敵を倒しつつあった。そして、一気に城へと攻めていくのであった。

そのころ城内では・・・・

美羽
「なんじゃと!!?孫策の軍だけでなく、曹操や劉備まで攻めてきていると!!!!?」
七乃
「は～い。ここも攻められるのも時間の問題ですよ。」
袁術ズサ
「心配いりませんよ。私達には呂布将軍がいます。いかに曹操や劉備といえどそう簡単にはここに来ませんよ。」
美羽
「そうじゃった・・・そう簡単にはたどりつけんのじゃ!!」

しかし、そこへ曹操ガンダム達がやってきた。

七乃
「あれぇ?あっさりと来ちゃいました。」
美羽
「どういうことじゃ!!!袁術!!!!?」
袁術ズサ
「あれ?こんなに簡単に!!!?」
曹操ガンダム
「袁術よ、覚悟はいいか!!!?」
炎鳳王・華琳

「覚悟しなさい！！」

全員は剣を向けた。

袁術ズサ
「いや・・・・まだ覚悟は！！」

七乃
「あの・・・・呂布将軍が皆さんの前に現れませんでしたか・・・・」

雷光王・鈴々
「ごちゃごちゃとうるさいのだ！！」

張飛ガンダム
「徐州での借り、千倍にして返してやるぜ！！！！！！」

張飛ガンダムと雷光王・鈴々はそれぞれの武器で袁術ズサ達を攻撃した。しかしかわされて、玉座を破壊した。

袁術ズサ
「ひえええええええええええええ！！！！！！」

美羽
「ぴいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

七乃
「きゃあああああああああああ！！！！！」

三人はチョコマカと逃げていた。そして、隙を見た美羽と七乃は裏から逃げることに成功した。しかし・・・袁術ズサは追い詰められた。

聖龍王・桃香
「逃がさないよ！！三璃紗の平和のため、孫策さんの仇を討つため

に貴方を倒す！！」
袁術ズサ
「ちょっと待ってください・・・孫策を倒したのは呂布であって私では・・・・」
鬼牙王・愛紗
「黙れ！！！その呂布を従えたのは貴様であろう！！！なら貴様が倒したのと同じだ！！！！！」
関羽ガンダム
「いいわけなど聞かん！！！！」
劉備ガンダム
「覚悟しろ！」
炎鳳王・華琳
「はあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」
曹操ガンダム
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

劉備ガンダム達は袁術を追い詰めて、そして、飛びかかった。

袁術ズサ
「こうなったら・・・・玉璽よ！！！！！！！私に力を！！！！！！！！！」

突然、玉璽から禍々しいオーラが放たれて、一同は吹き飛ばされてしまった。

劉備ガンダム
「これは・・・・」
袁術
「ひゃはははははははははは！！！！！！ついに来ました！！！！！

！」

そして、オーラが一気に放たれて、城の一部が崩れた。

外では戦闘を行っていた孫権ガンダム達がその様子を見ていた。

孫権ガンダム
「何だ！！？」

猛虎王・蓮華
「あれっていったい・・・」

そして、そこから劉備ガンダム達が吹き飛ばされたのであった。

劉備ガンダム
「何が起きた！！！？」

曹操ガンダム
「これは・・・・・」

そして、オーラが消えるとそこには禍々しい姿となった袁術ズサ・飛翔形態がいたのであった。

孫尚香ガーベラ
「あれはいったい・・・・」

小蓮
「なんなのよ・・・・」

周喩ヒャクシキ
「袁術が天玉鎧を呼んだというのか・・・・・？」

そして・・・・

袁術ズサ
「ひゃはははははは！！！！！！！！無敵！！！！！！」

そういうと袁術ズサは無差別攻撃を始めた。

袁術ズサ
「無敵、無敵、無敵！！！！！なんという素晴らしい力、これが私の天玉鎧！！！！！！」

袁術ズサは大鎌から放った一撃で無差別攻撃を始めた。

司馬懿サザビー
「違う、天玉鎧ではない！！無論、神鎧獣でもない！！あれは袁術が玉璽の闇に取り込まれたものだ！！」
袁術ズサ
「これぞ最強！！！！！私は呂布を超えたのでーす！！！！！！！！」

袁術ズサの無差別攻撃は激しさを増していくのであった。

小蓮
「あいつ、何が無敵よ！！」
孫尚香ガーベラ
「アンタの首、私達がとってあげるわ！！！華天楼！！！！！」

孫尚香ガーベラは必殺技を放ったが・・・・

袁術ズサ
「邪魔です！！！」

袁術ズサに跳ね返されてしまった。

孫尚香ガーベラ、小蓮
「きゃあああああああああああああ!!!!!!」
孫権ガンダム
「尚香!!」
猛虎王・蓮華
「シャオ!!!!」

孫権ガンダムと猛虎王・蓮華は二人の元へ向かったが後ろから袁術ズサが襲い掛かってきた。

袁術ズサ
「二人の孫権、貴方達も父上と兄上のように無駄死にしなさい!!」
猛虎王・蓮華
「お父様も孫策兄様も無駄死にじゃない!!!二人は三璃紗の未来のために戦ったんだ!!」
袁術ズサ
「それが無・駄・死・にですよ!!誰も私の力にはかなわないのです!!」
孫権ガンダム
「そんな・・力・・・俺達は絶対に認めないぞ!!!」
袁術ズサ
「認めないならどうしますか?私を倒すのですか、貴方達に?貴方達ごときにたおせるはずありません!!!三璃紗は無敵皇帝、袁術様が支配するのでーす!!!」

袁術ズサは高笑いを始めた。そして・・・孫権ガンダムと猛虎王・蓮華の怒りはついに爆発した。

孫権ガンダム

「許さない・・・」
袁術ズサ
「え！？」
猛虎王・蓮華
「絶対に許さない！！！！！」
孫権ガンダム
「いつまでたっても三璃紗に平和が来ないのは・・・・」
猛虎王・蓮華
「誰かが悲しい思いをするのは・・・・・・」
孫権ガンダム・猛虎王・蓮華
「「袁術、お前のような奴がいるからだ！！！！」」

そんな時、二人からすさまじい闘気が放たれた。それと同時に玉璽が袁術ズサの手から離れ、孫権ガンダムと猛虎王・蓮華の元へとやってきた。そして、玉璽から光が天に向かって光が放たれた。

孫権ガンダム
「お前だけは絶対に倒す！！！」
猛虎王・蓮華
「三璃紗の平和のために！！！！」

すると天から虎を模した鎧、天玉鎧と神鎧獣が現れた。

孫権ガンダム
「天玉鎧・弩虎！！！！」
猛虎王・蓮華
「神鎧獣・猛虎！！！！！」

孫権ガンダムは弩虎を、猛虎王・蓮華は猛虎を鎧のように装備した。

袁術ズサ
「天玉鎧に神鎧獣！！！？」
孫権ガンダムと猛虎王・蓮華
「はあああああああああああああああああ！！！！！！！！！」
小蓮
「兄様、姉様！！？」
冥琳
「これは・・・」
朱里
「二人の孫権さんに聖なる力が宿ったんですね。」

そして天玉鎧と神鎧獣を装備した孫権ガンダムと猛虎王・蓮華は虎のオーラに身を包まれ、袁術ズサの所へと向かって行った。

「ガオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！」
孫権ガンダム、猛虎王・蓮華
「袁術！！！！！！！！！！！！！」
袁術ズサ
「そんな天玉鎧と神鎧獣が何なのですか！！私の力のほうがずっと上です！！！！！！！」

袁術ズサは大鎌を持って二人に向かった。しかし、孫権ガンダムと猛虎王・蓮華はそんな袁術ズサの力に負けずに逆に押し返した。

「ガオオオオオオオオオオオ！！！！！！！」
孫権ガンダム、猛虎王・蓮華
「はあああああああああああああああ！！！！！！！！！」
袁術ズサ
「ひぃ・・・来るな・・来るなあああああああああああ！！

！！！」

そして、最後の一撃を放ち、袁術ズサにとどめを刺したのであった。

袁術ズサ
「そんな・・・・せっかく・・・・なれたのに・・・・三璃紗の・・・・支配者に・・・・はちみつ・・・・・・なめたい・・・・・」

吹き飛ばされた袁術ズサは爆発した。そして光が離れると孫権と蓮華は天玉鎧と神鎧獣の武装を解除した。そして、再び、天に向かって消えた。

孫権ガンダム
「やったな・・・・」
蓮華
「ええ・・・・・」

それをみた劉備ガンダム達は

劉備ガンダム
「天玉鎧は孫権に・・・・」
桃香
「神鎧獣は蓮華ちゃんに力をくれたんだね。」
張飛ガンダム
「あれ？そういえば金髪チビのほうはどうしたんだ？」
小蓮
「そういえばさっきから雪蓮姉様の姿も見えないわね。」

そのころ・・・美羽と七乃は裏口から逃げて行った。

七乃
「美羽様、ここまでくれば大丈夫ですよ。」
美羽
「そ・・・そうか・・・・これでわらわも助かるの・・・・」
七乃
「袁術様も玉璽にとらわれなければあんなことにはなりませんでしたのにね。」
美羽
「そうじゃのう!!とにかく今はここから・・・・・」
??
「逃げられるとでも思っているのかしら?」
美羽、七乃
「「!!!!!!?」」

二人が振り向くと、そこには剣を構えた雪蓮がいたのであった。

美羽
「出たーーーーのじゃ!!!!!!?」
七乃
「きゃあああああああ!!!!!!!!」
雪蓮
「逃がしたりはしないわよ!!私達の江東を攻めただけでなく孫策をも殺したのだから・・・・」
美羽
「ち・・・違うのじゃ!!!!もう一人の孫策を倒したのはわらわではない!!袁術じゃ!!」
雪蓮
「黙れ!!!!!!」
美羽
「ピィー!!!!」

雪蓮
「さあ、覚悟しなさい！！！」
美羽
「いやじゃいやじゃ、わらわはまだ死にたくない！！！」
雪蓮は剣を振り上げて、美羽と七乃を斬り殺そうとするが、そこへ・・・・
孫権ガンダム
「待って、雪蓮姉さん！！」
孫権ガンダムと蓮華がやってきた。
雪蓮
「孫権、蓮華・・・」
孫権ガンダム
「その二人を助けてやってくれないか？」
雪蓮
「どうして・・・・？」
孫権ガンダム
「姉さんの気持ちもわかるけどこの二人は戦う意思はないし、勝負はついているよ。」
蓮華
「私も孫権と同じ意見です。」
雪蓮
「わかったわ。いきなさい。そして、二度と私の前に現れないことよ！！！」
そういうと美羽と七乃は大慌てで逃げた。そして・・・

孫権ガンダム
「これで・・・・本当に終わったんだね・・・・」
蓮華
「ええ、これからは姉様とがんばってね。孫権」
雪蓮
「そのことなんだけど蓮華。私は王を辞めることにしたのよ。」
蓮華
「え！？」
雪蓮
「だから蓮華、貴方が孫権と共にがんばりなさい。」
蓮華
「ですが・・・私には・・・・」
雪蓮
「そんなことないわよ。孫権と貴方には真の勇気があるわ。その証拠に虎王牙刀も使いこなせたし・・・」
蓮華
「姉様・・・・」

そして、迷いがなくなった蓮華は虎王牙刀で長い髪を切り落とした。
そして・・・

蓮華
「我が名は孫仲謀！！！今誇り高き先代、二人の孫策は、片方は命を落とし、片方は身を引いた！！」
孫権ガンダム
「そして我らも父、孫堅の願い、先代、二人の孫策の願いを、我ら二人の孫権が必ずや実現させて見せる！！」
蓮華、孫権ガンダム
「今こそ勝どきをあげよ！！！」
「おおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

孫権軍は一斉に勝どきを挙げたのであった。

これで平和が戻ったのであろうか？

そのころ

七乃
「助かってよかったですね。」

美羽
「しかし、やはり悔しいのじゃ！！」

七乃
「どうしますか？美羽様？」

美羽
「玉璽を見つけて、今度はわらわが三璃紗の皇帝になるのじゃ！！」

七乃
「さすがは美羽様ですね！！」

美羽
「ふはははははは！！！！もっと褒めてたもう！！！」

そして・・・その玉璽は・・・・・・・・・・・・・・

？？？

「ふふふふ・・・・ふはははははははははは！！！！！ついに手に入れたぞ・・・玉璽を！！これでワシが三璃紗の支配者になるときが来たのじゃあ！！！」

何者かが手に入れたのであった。

第１４話『真の勇気』（後書き）

次回予告

孫権が治めることになった江東に荒くれ者が現れた。

次回　第１５話『江東の蒼眼児』

第１５話『江東の蒼眼児』（前書き）

今回から新シリーズが始まります。後、地震のほうは大変ですね。
こちらは被害はありませんでした。

第１５話『江東の蒼眼児』

袁術との戦いを終えて、孫権ガンダムと蓮華が雪蓮に代わって、国を治めることになったが・・・少々の問題が起こっていた。

第１５話『江東の蒼眼児』

袁術軍がいなくなってからここ江東はすっかり平和であった。そんな平和な村に訪れた孫尚香ガーベラ、小蓮、陸遜ゼータプラス、穏、思春、亞莎であった。

小蓮
「ここも村らしくなったわね。」
陸遜ゼータプラス
「姫様達が来てくれたおかげですよ。」
隠
「まあそうですか。」
思春
「たしかにここは戦や水賊によって江東には人がこなくなりましたから・・・」
亜莎
「でも孫策様のおかげで人が集まったんですね。」

そんな時、孫尚香ガーベラと小蓮の顔の様子が変わった。

孫尚香ガーベラ
「孫策兄さん・・・・」
小蓮
「兄様・・・・」

亜莎
「す・・すみません！！！」

亜莎はとっさに謝った。そんな時、川から大きな音がした。そこには水上バイクに乗る二人のＭＳ武将がいたのであった。さらに水しぶきをかけた。

小蓮
「危ない！！」

孫尚香ガーベラ、小蓮、穏、思春、亞莎はとっさに避けることはできたが、陸遜ゼータプラスはもろにかかってしまった。

陸遜ゼータプラス
「何するんだよ！！」
呂蒙ティジェ
「ははははははははは！！！！！！」
甘寧ケンプファー
「おらおら！！！！！！」

さらに二人は悪ふざけをして、そのまま船で川遊びをしている二喬のところへとむかった。

大喬
「え！！？」
小喬
「きゃあああああああああああ！！！！！」

二人は船から転落してしまった。

呂蒙ティジェ、甘寧ケンプファー
「ははははははははははは！！！！」
孫尚香ガーベラ
「ちょっとあんた達！！」
小蓮
「いいかげんにしなさい！！！！！」

そんな小蓮達のところに二人は向かった。

呂蒙ティジェ
「ああ？」
甘寧ケンプファー
「なんぜい？」
小蓮
「あんた達、こんなことしてて恥ずかしくないの！！？」
呂蒙ティジェ
「俺達はこれが楽しいんだよ！！なあ甘寧！！」
甘寧ケンプファー
「呂蒙の言う通りじゃき！！じゃじゃ馬姫たちに言われる筋合いはないぜよ！！」
思春
「貴様ら！！！」
孫尚香ガーベラ
「いいかげんにしなさいよね！！！」

そして、呂蒙ティジェ、甘寧ケンプファーは再び、水上バイクで水しぶきを喰らわせた。孫尚香ガーベラ、小蓮、思春はそれぞれの武器で防いだが・・・・

陸遜ゼータプラス

「うわあああああああ！！！」
亜莎、隠
「きゃあああああああああああ！！！！」

三人は武器の波動によって、川に転落してしまった。

呂蒙ティジェ
「おもしろかったぜ！！！」
甘寧ケンプファー
「また遊んでやるぜよ！！」

二人はそのまま立ち去った。

孫尚香ガーベラ
「あいつら・・・・」
陸遜ゼータプラス
「姫様、思春様、ひどいですよ。」
思春
「すまん・・・」

そして、城に戻った小蓮達は

孫尚香ガーベラ
「絶対に許せない！！！」
小蓮
「そうよ！！シャオ達が江東に戻ってからあいつらが暴れているのにどうして野放しのままなの！！？」

二人の意見に孫権ガンダムと蓮華は・・・

孫権ガンダム
「うん・・・・・」
蓮華
「気持はわかるけどいまは落ち着いて・・・・」
そっけない態度で答えた。
太史慈ドム
「一度、部下がとらえようとしましたが、水上での動きはなかなかなもので・・取り逃がしてしまいました。」
祭
「こまったものじゃ。」
黄蓋グフ
「いつも上流に逃げていくので、根城はそちらにあるでしょう。」
思春
「ですがやつらの逃げ足が速いもので、たしかな場所は・・・・」
そんな家臣達に孫尚香ガーベラと小蓮は・・・・
小蓮
「もういい!!」
孫尚香ガーベラ
「皆、頼りないわね。こうなったらあたしとシャオが成敗してくる!!!」
冥琳
「だめですよ。お二人は孫一族の姫ですよ。」
周喩ヒャクシキ
「冥琳の言うとおりです。お立場をわきまえてください!!」
小蓮
「でも・・・」

冥琳
「我らで何らかの手は打ちますので！！お二人は部屋でおとなしくしてください！！」
孫尚香ガーベラ
「わかったわよ！！部屋でおとなしくしているわよ！！」
小蓮
「行こう、陸遜！！」
陸遜ゼータプラス
「姫様！！」

三人はそのまま部屋を出た。

祭
「まったく、二人のおてんばにも困ったものじゃ。」
隠
「しかし彼らは江東に何しに来たのでしょうか？」
周喩ヒャクシキ
「近いうち討伐の兵を出します。よろしいですね。」

周喩ヒャクシキの問いに孫権ガンダムと蓮華

孫権ガンダム
「・・・・・ああ」
蓮華
「任せるわ・・・・・・」

二人もそのまま部屋を出た。

黄蓋グフ
「孫策様のお亡くなりの後、ずっとあの調子、心配じゃ。」

そんな二人を周喩ヒャクシキと冥琳は見守っていた。

そのころ雪蓮は孫堅ゼフィラスと孫策サイサリスの墓へと訪れた。

雪蓮

「父様、孫策。私は王座を蓮華に渡して置いたわ。孫権も今は立ち直れていないけれど彼らならできるはずよ。」

そして、雪蓮はもっていた花を供えた。そこへ呂蒙ティジェ、甘寧ケンプファーが移動しているのを発見した。

雪蓮

「あの二人はたしか・・・そう二人には孫権と蓮華のいい部下になれるわ。」

そのころ、孫尚香ガーベラ、小蓮、陸遜ゼータプラスは船で呂蒙達のアジトへと移動していた。

小蓮

「やつらの居場所、まちがいないでしょうね!!」

陸遜ゼータプラス

「上流のほうですから・・・たぶん・・・でもいいんでしょうか？お師匠様達の言いつけを守らず、こんなことをして。」

孫尚香ガーベラ

「大丈夫よ。あいつらを倒しちゃえば二人も文句を言わないわよ。今は孫権兄さんも蓮華姉さんがいないと頼りないし。」

小蓮

「そうよ。シャオ達が守らないとね!!」

三人はアジトに向かって行くのであった。

そして、ついに事件が起きた。

明命
「大変です！！！」

明命が大慌てで走ってきた。

黄蓋グフ
「どうしたのじゃ？」

明命
「尚香様と小蓮様の部屋にこれが・・・」

黄蓋グフ
「これは・・・」

黄蓋グフは手紙を読み始めた。

手紙
『やっぱり我慢できないので呂蒙達をやっつけに行ってくるね。大丈夫、陸遜も一緒だから心配しないで。　尚香・小蓮』

それを読み終えた黄蓋グフは・・・・

黄蓋グフ
「な・・な・・・な・・なんですっとー！！！！？」

驚いていた。

一同は王間に集まった。

冥琳
「なんということを・・・・」
思春
「無謀なことをなさるのだ!!」

そこへ孫権ガンダムと蓮華がやってきた。

孫権ガンダム
「どうした?」
祭
「ああ、尚香殿と小蓮殿と陸孫が呂蒙達の根城に乗り込んだ様じゃ!!!」
蓮華
「なんですって!!!!?」

孫権ガンダムと蓮華も手紙を読んだ。

黄蓋グフ
「若、蓮華様、どうなされますか?」
亜莎
「あの二人が相手では無事では済みません!!」
周喩ヒャクシキ
「急いで、救出に向かうぞ!!」

すると・・・

蓮華
「待って・・・」
孫権ガンダム

「俺が行く！！」
蓮華
「私もよ！！」

孫権ガンダムと蓮華が行くことを決めたのであった。二人の眼には迷いはなかった。

冥琳
「しかし、今、救出の兵を出しますので、今しばらくお待ちください！！」
蓮華
「そんなの待っていられないわ！！」
周喩ヒャクシキ
「ならば一人で行くつもりなのです！！？」
孫権ガンダム
「尚香と小蓮は俺達の妹だ！！」

二人はどうして行くつもりであった。すると・・・・

黄蓋グフ
「若、蓮華様、お待ちくだされ！！」
思春
「今やお二人は孫一族の長です。戦に向かうのでしたらこれを・・」

黄蓋グフと思春が取り出したのは虎錠刀と虎王牙刀であった。二人はそれを手に取るとそのまま歩き出した。

太史慈ドム
「軍師どの、よろしいので・・・」
冥琳

「これもお二人が孫一族の長として江東を治めることができるか・・・」

周喩ヒャクシキ

「我らは見守らなければなるまい。」

そのころ、孫尚香ガーベラ、小蓮、陸遜ゼータプラスは案の定、呂蒙達に捕まってしまった。そんな水賊達は酒盛りをしていたのであった。

孫尚香ガーベラ

「こんなことをしてただで済むと思っているの？」

呂蒙ティジェ

「思ってねぇよ！！お前らを助けに兵が押し寄せるんだよな！！」

陸遜ゼータプラス

「へっ、うちの軍はすごいんだぞ！！今のうちに僕らを逃がしたほうが身のためだぞ！！」

甘寧ケンプファー

「ふん、おもしろい！！」

呂蒙ティジェ

「そんな奴らを待っていたんだ。相手が強ければ強いほどでけぇ祭ができるってことよ！！」

小蓮

「祭って・・・」

甘寧ケンプファー

「命をかけて戦うってことぜよ！！」

周りの水賊達は笑い始めた。

孫尚香ガーベラ

「そんなに戦いたいならあたしが相手してあげる！！」

小蓮
「シャオもだよ!!この縄をほどきなさい!!」

二人は立ち上がるも、縛られているのでその場で転んでしまった。
そして、水賊の一人がやってきた。

水賊
「おとなしくしてろ!!痛い目にみてぇーか!!」

すると・・・

???
「やめろ!!」
???
「やめなさい!!」

突然の声がした。そこへやってきたのは孫権ガンダムと恋姫鎧装した蓮華であった。

孫尚香ガーベラ
「孫権兄さん・・・」
小蓮
「蓮華姉様・・・助けに来てくれたの?」
呂蒙ティジェ
「孫権か・・・」
甘寧ケンプファー
「なんぜ、孫策かとおもったぜよ!勘違いさせおって!!」

そして、孫権ガンダムと猛虎王・蓮華は武器を構えた。

孫権ガンダム
「妹達と陸孫は返してもらう!!」
猛虎王・蓮華
「手出しすると容赦しないわよ!!」
呂蒙ティジェ
「へっ、弱いくせに言ってくれるぜ!!甘寧、女のほうは任せたぜ!!」
甘寧ケンプファー
「相手が女のほうでは張り合いがないぜよ!!しかし、わかったぜよ!!」
孫権ガンダム
「尚香と小蓮は陸遜を頼む・・・」

そして、戦いが始まった。孫権ガンダムと呂蒙ティジェ、猛虎王・蓮華は激闘を繰り広げていた。

呂蒙ティジェ
「なかなかやるな!!・・・だが立ち筋が甘いぜ!!孫策ならすごかったがな・・・」
孫権ガンダム
「俺達の兄さんと姉さんがどうした!!」
呂蒙ティジェ
「虎の覇気をもったすごい英雄って聞いたぜ!!」

そして、呂蒙ティジェは孫権ガンダムを蹴り飛ばした。

猛虎王・蓮華
「孫権!!?」
甘寧ケンプファー
「喰らえ!!蒼烈鮫!!!」

甘寧ケンプファーの必殺技が猛虎王・蓮華にあたりそうになるが・・・

孫権ガンダム
「蒼洸壁!!!」

孫権ガンダムがとっさに守ってくれたのであった。

甘寧ケンプファー
「はじかれた!!?」
呂蒙ティジェ
「なんだ!!?あの技は!!?」

そして・・・・

孫権ガンダム
「これだけの力を持っているのになんで他のことに役立てようとしないんだ!!」
孫尚香ガーベラ
「そうよ。あんた達は暴れまわって江東の皆に迷惑をかけているだけ、恥ずかしくないの!!?」
甘寧ケンプファー
「やかましい!!ワシらだって最初からこんなことをしに来たんじゃなかったんじゃ!!」
猛虎王・蓮華
「なら何しに来たのよ!!」
小蓮
「聞くだけ無駄よ!!大した理由なんてないわよ!!」
呂蒙ティジェ

「てめぇ、みそこなうな!!俺達が江東に来たのは・・・」
甘寧ケンプファー
「二人の孫策の下で闘うことぜよ!!」

一同は驚いた。

猛虎王・蓮華
「どうして孫策兄様と雪蓮姉様のもとで・・」
呂蒙ティジェ
「江東には虎の覇気を持った英雄がいることを、会いたかったんだ!!!そんな二人に!!そんな二人とともに戦いたかったんだよ!!命を燃やしたかったんだよ!!!」
孫権ガンダム、猛虎王・蓮華
「!!!!!!!!!!???」

二人は孫策サイサリスと雪蓮の言葉を思い出した。そして、二人は武器を治めた。

呂蒙ティジェ
「てめぇら、何の真似だ!!?」
孫権ガンダム
「お前達と斬り合いはしたくない。」
呂蒙ティジェ
「は!?何言っていやがるんだ?」
猛虎王・蓮華
「貴方達は兄様や姉様を親って、この江東に来たでしょ。」
孫権ガンダム
「なら俺達にとっては家族も同然。家族を傷つけることはできないよ!!」

そんな二人の行動に呂蒙ティジェ、甘寧ケンプファーは笑っていた。

呂蒙ティジェ
「へっ、偉そうなことを言っているが、ようは怖くなったんだろ！！それでも江東の虎、二人の孫策の弟と妹か！！」

呂蒙ティジェは二人を切りつけた。孫権ガンダムの鎧の一部が切られ、猛虎王・蓮華のほほから血が流れた。

呂蒙ティジェ
「孫策のように虎には見えねぇ！！せめて猫の覇気くらいみせろ！！」

孫権ガンダム
「民や家族を守ることが領主の役目だ！！」

猛虎王・蓮華
「そして、いまの江東の領主は私達だ。だから私達は貴方達に刃を向けない！！」

孫権ガンダム
「それが俺達の・・・勇気だ！！！」

すると孫権ガンダムと猛虎王・蓮華の後ろから虎のオーラが現れた。

「ガオオオオオオオ！！！！！」

呂蒙ティジェ
「まさか・・・これは・・・虎の覇気だ・・・おい、今・・・・・」

甘寧ケンプファー
「あっしも見えたぜよ！！あれはたしかに・・・・」

呂蒙ティジェ
「ということは・・・あいつらは・・・」

呂蒙ティジェは二人が虎の覇気を持っていることを感じた。

呂蒙ティジェ
「へっ・・・虎は生きていたか・・」
孫権ガンダム
「ありがとう、呂蒙!!」
呂蒙ティジェ
「ありがとうだ!!!?そんな調子だと領主としてなめられるぞ!!孫権、てめぇには男というものが足りねぇ!!」
猛虎王・蓮華
「まあ・・たしかに・・・・・」

そして、呂蒙ティジェは・・・・・

呂蒙ティジェ
「だが素質はありそうだ!!女の孫権もだ!!活きのいいのがそばにいれば何とかなりそうだな!!どうだい皆!!」
甘寧ケンプファー
「こいつらが本物の戦士になったらわしらも命の燃やしがいがあるもんじゃきのう!!」
孫権ガンダム
「いったい・・・」
猛虎王・蓮華
「なんの話をしているの?」
呂蒙ティジェ
「わかんねぇのか!!!!?俺達がてめえらの面倒を見てやるってことなんだよ!!!」

孫権ガンダム達は驚きを隠せなかった。

孫尚香ガーベラ
「いったい・・・どういうこと・・・」
呂蒙ティジェ
「まあ、これからは大船に乗った気でいいぜ！！」

朝になって、雪蓮、周喩ヒャクシキ、冥琳は城の外の様子を見ていた。

祭
「雪蓮殿、この音は・・・」
雪蓮
「あれみてごらん。」
黄蓋グフ
「ん・・・？あれは！！！！？」

そこには呂蒙ティジェ、甘寧ケンプファーと共に水上バイクをかける蓮華達であった。

孫尚香ガーベラ
「きゃっほー！！」
小蓮
「これ楽しいね！！」
陸遜ゼータプラス
「姫様達、速度あげすぎですよ！！」
蓮華
「もう江東で暴れたりしないわよね。」
甘寧ケンプファー
「お主らの面倒をみるんだ！！そんな暇はないぜよ！！」
呂蒙ティジェ
「俺達がついた以上、本物の戦士にしてやるぜ！！よろしく頼むぜ、

大将に姉御!!」
孫権ガンダム
「ああ!!」

太史慈ドム
「これはいったい・・・・」
雪蓮
「己の魂をぶつけ合い、仲間になったのよ。私たちみたいにね。（孫権と蓮華は立ち直れたかもしれないわね。江東の領主として最初の一歩を踏みだしたみたいよ。見ているかしら孫策。）」

孫権ガンダム
（兄さんの言っていた真の勇気、それが少し見えたかもしれないよ。）
蓮華
（私達、がんばってみせます。兄様。）

孫権ガンダムと蓮華は江東の領主としての一歩を踏み始めたのであった。

第１５話『江東の蒼眼児』（後書き）

次回予告

劉備達は再び旅をづけていた。そしてついに帰還する

次回　第１６話『劉備帰還』

第１６話『劉備帰還』（前書き）

おまたせしました。最新話でございます。

第16話『劉備帰還』

袁術が倒され、三璃紗にひと時の平和が戻った。そんな中で、劉備ガンダム、関羽ガンダム、張飛ガンダム、桃香、愛紗、鈴々、朱里、雛里、一刀は旅を続けていたが・・

劉備ガンダム
「あれ？ここどこだけ？」
関羽ガンダム
「たしか・・この道は通ったような・・」
桃香
「えええ！！！？」
一刀
「ここってどこなんだ月？・・・・・月？」
愛紗
「恋・・・・・」
張飛ガンダム
「詠・・・・・」
鈴々
「ねね・・・・」

いつのまにか月達がいなくなっていた。

桃香
「もしかして・・・私達・・・・・」
朱里
「はい・・・」
雛里
「間違いはありません。」

そして・・・・

全員
「道に迷った（のだ）！！！！！！！」

劉備ガンダム達は三璃紗の地をさまよっていた。

第１６話『劉備帰還』

劉備ガンダム達は道に迷ってしまった。

桃香
「ねぇ、ここってどこなの・・・・」

愛紗
「さっきから同じところを回っているような気がします・・・・」

鈴々
「う～おなかペコペコなのだ。」

関羽ガンダム
「皆、同じだ。我慢せい！！」

朱里
「鈴々ちゃん、がんばってください。」

雛里
「私達も同じですから・・・・」

劉備ガンダム
「しばらく何も食っていないからな。」

張飛ガンダム
「なんか俺達、こんなことをしているような気がする。」

一刀
「そういえば徐州でもこんな感じだったっけ・・・・」

桃香
「うん・・・あの時、陶謙さんのところで世話になったよね。あの時、ご飯、おいしかったね。」

そして、劉備ガンダム達は思い出した。空腹の状態で徐州へ来たことを、そんな徐州に二人の曹操が攻めてきたことを、陶謙ジムが病で亡くなった後、劉備ガンダムと桃香が徐州の領主となったことを思い出した。

劉備ガンダム
「そうやって俺達は徐州を治めることになったんだ。」
鈴々
「あの時のお姉ちゃんとお兄ちゃん、かっこよかったのだ。」
愛紗
「二人の民を思う気持ちが陶謙殿に届いたでしょう。」
桃香
「えへへ・・・」

一同はしんみりとしていた。そんなとき

ガサガサガサガサ

朱里
「え!?」
雛里
「なに!?」
一刀
「茂みから音がしているぞ・・・」

そして茂みから出てきたのは・・・

イノシシ
「ブヒィー！！！！！」
劉備ガンダム
「うわあああああああああああ！！！！！？」
張飛ガンダム
「い・・イノシシ！！！！？」

巨大なイノシシであった。今にも突進しそうな感じであった。すると・・・

鈴々
「カンカン！！」
イノシシ
「ブヒ！！？」

イノシシはうるんだ瞳となって、足をとめた。

鈴々
「やっぱりカンカンなのだ！！」
愛紗
「おい、カンカンって・・・・」
鈴々
「カンカンは昔、鈴々が飼っていたイノシシなのだ！！」

鈴々が言うにはカンカンは小さいころから飼っていたイノシシだというのだ。しかし鴻夫人が大人になったから山に返すように言われたので泣く泣く山に帰したのであった。

鈴々

「まさかこんな所で会うなんて感動の再会なのだ！！」
張飛ガンダム
「俺ははじめてだけどな。」
関羽ガンダム
「しかし、そのイノシシ、本当に昔飼っていたものなのか？」
鈴々
「もちろんなのだ！！こっちの脇の下に白いモサモサが・・・・・」

鈴々はイノシシの前足をあげた。そこには白いモサモサが・・・・・・・なかった。

鈴々
「ないのだ・・・・。どうやら・・・・イノシシ違いのようなのだ・・・・」
イノシシ
「ブヒィ！！！」

イノシシの眼が殺気だったものに変わった。

朱里
「はわわわわわ！！！！」
雛里
「あわわわわわわ！！！！」
一刀
「逃げろ！！！？」
桃香
「ひえええええええええ！！？」
イノシシ
「ブヒィー！！！！」

劉備ガンダム達はイノシシに追われてしまったのであった。
なんとか逃げ切った劉備ガンダム達は地に伏せていたのであった。

張飛ガンダム
「まったく何が感動の再会だ!!?」
鈴々
「よく似ていたから・・・てっきり・・・・」
愛紗
「てっきりではない!!?」
桃香
「まあ、なんと逃げ切ったからよかったよ・・」

するとまた茂みから音がした。

愛紗
「また出たか!!!」
張飛ガンダム
「今度こそ倒してやるぜ!!!」

関羽ガンダム、張飛ガンダム、愛紗、鈴々は戦闘態勢になるが・・・。そこに出てきたのは・・・・

桃香
「皆、ちょっと待って!!」
劉備ガンダム
「あれは・・・」
恋
「ご主人様・・・・?」
月

「よかった。はぐれたからどうしようかと思いましたよ。」

それは月、詠、恋、音々音であった。そして・・・・

一刀

「恋、月、詠、それに徐州の村人の皆も！！」

村人？

「おひさしぶりです、劉備様！！」

桃香

「本当に久しぶりだよね。」

その時

音々音

「ちんきゅーきっく！！！！」

どかあああああああああああああああん！！！！

一刀

「へぶぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

音々音

「ねねを無視するとはどういうことなのですか！！！」

一刀は音々音に蹴られたのであった。その後、民に頼まれて、徐州を再び治めることになった。しかしいつ誰か襲ってくるかは分からないのでこの徐州を守るために修行を積むことにした。

劉備ガンダム

「でやあああああああ！！！！」

翔龍王・桃香

「はあああああああああああ！！！！！！！」

劉備ガンダムと鎧を新しくした桃香は落ちてきた岩を真っ二つに斬った。

鈴々
「お姉ちゃん達、すごいのだ！！」

愛紗
「ああ、さすがは伝説の剣の使い手だ！！」

一刀
「そうだな。」

張飛ガンダム
「でも岩を十個も落とすのは大変だったぜ。」

鈴々
「鈴々もなのだ。」

すると・・・

桃香
「二人合わせて二十個だよね。でも私、六個しか切ってないよ。」

劉備ガンダム
「俺も七個だけだ。」

残り七個はというと・・・・

ひゅるるるるるるる～

ゴッチーン！！！！！

案の定、劉備ガンダム、関羽ガンダム、張飛ガンダム、桃香、愛紗、

鈴々、一刀の頭の上に落ちた。その場に倒れた。朱里と雛里も慌てて駆けつけた。

桃香
「い・・・痛い・・・」
朱里
「大丈夫ですか!!?」
劉備ガンダム
「な・・・なんとか・・・・・」
桃香
「でも前に送られた手紙では曹操さんの軍もさらに強大になったと聞いたし、それに孫権さんや蓮華ちゃんたちは水軍を味方につけちゃったし。」
劉備ガンダム
「誰もが力をつけているからな。俺達もなんとかしないとな・・・」

すると

桃香
「そうだ・・公孫賛兄さんと白蓮ちゃんならどうかな?」
劉備ガンダム
「そうか・・あの人に会えば何かをつかめるかもしれない!!」

そして、恋達に徐州を任せた劉備ガンダム、関羽ガンダム、張飛ガンダム、桃香、愛紗、鈴々、朱里、雛里、一刀は公孫賛イージーエイトと白蓮が治める幽州へとやってきた。

公孫賛イージーエイト
「劉備、桃香!!」
劉備ガンダム

「ひさしぶりだな。公孫賛の兄貴、白蓮の姉貴!!」
白蓮
「はなしは聞いたぞ。徐州を再び治めることにしたんだってな。」
桃香
「うん!!ところで趙雲さんと星ちゃんは・・・・?」
公孫賛イージーエイト
「あそこだ。」

そこには張飛ガンダムと轟雷王・鈴々が趙雲ガンダムと昇龍装・星とむかいあっているのであった。

張飛ガンダム
「趙雲、星!!」
轟雷王・鈴々
「鈴々達と勝負するなのだ!!!」
趙雲ガンダム
「こちらこそ・・・」
昇龍装・星
「よろこんで!!」

そして、四人は勝負を始めたのであった。そんな様子を見ていた劉備ガンダム達は

公孫賛イージーエイト
「楽しそうだな。」
白蓮
「そうだな。」
劉備ガンダム
「兄貴、俺達も蘆植先生の下であんな風に修行をしたんだよな。」
桃香

「うん、でも私はやられてばっかだけど・・・・」

そして、劉備ガンダム達はこれまでの旅のことを思い出したのであった。

白蓮
「あの後、お前達は旅に出たんだよな。」

桃香
「うん、その時に関さんと張君と愛紗ちゃんと鈴々ちゃんと義兄妹となったんだよ。」

劉備ガンダム
「ああ、董卓軍との戦いが始まったんだ。」

公孫賛イージーエイト
「そうだったんだな。」

そして、二人は関羽ガンダム達との出会いを思い出したのであった。

その時、張飛ガンダムと轟雷王・鈴々が趙雲ガンダムと昇龍装・星との戦いは激化していた。

趙雲ガンダム
「その三位一体の技、一度拝見してみたいものです!!」

昇龍装・星
「そのような技を受けてみたいとあるからのう。」

轟雷王・鈴々
「これは見世物じゃないのだ!!」

張飛ガンダム
「そのとおりだぜ!!」

そこへ関羽ガンダムと愛紗がやってきた。

関羽ガンダム
「四人ともそこまでだ！！！」
愛紗
「この勝負は引き分けとする。二人とも、どうだ趙雲と星の実力は・・・・」
張飛ガンダム
「なかなかのもんだ！！」
鈴々
「熱い血がたぎってくるようなのだ！！」
関羽ガンダム
「ほう・・まるで呂布のようだな・・・」

すると・・・

張飛ガンダム
「呂布？呂布はこうだ『たぎる、たぎるぞ！！戦士の塊が、お前のその血が俺の塊をたぎらせる！！！』」
鈴々
「張飛、違うのだ。こうなのだ『お前の血が俺のタマ●ンをたぎらせる！！』なのだ！！！」
愛紗
「鈴々！！！！何行っているんだ、お前は！！！！」
関羽ガンダム
「それをいうなら魂だ！！」
星
「タマ●ンとは興味深いですな・・・」
愛紗
「星、お主まで・・・・」
趙雲ガンダム

「まあ・・それはさておき・・・よっぽどつらい目に会ったんですね。」

そして、呂布トールギスとの戦いも思い出したのであった。

鈴々
「あのときは呂布のやつに片膝をつかせたのだ!!」

趙雲ガンダム
「六人ともおみごとでした。」

関羽ガンダム
「趙雲殿、星殿。」

愛紗
「こんどは我らが相手になるぞ!!」

星
「ほう、今度は鬼髭と黒髪が相手ですか」

そして・・鬼神王・愛紗と関羽ガンダムと趙雲ガンダムと昇龍装・星との戦いは始まったのであった。

劉備ガンダム
「皆、はりきっているようだな。」

白蓮
「ひとつ気になることがあるんだ。」

桃香
「え!?」

朱里
「なんですか?」

公孫賛イージーエイト
「烏丸の軍のことだ。やつら何度やられて幽州に攻め来る。何者かが烏丸を手助けしているとしか思えない。」

劉備ガンダム
「一体誰が！！？」

そこへ兵士がやってきた。

兵士
「公孫賛様！！」
公孫賛イージーエイト
「何事だ！！？」
兵士
「この幽州に袁紹軍が向かってきています。その数・・およそ百万！！」
劉備ガンダム
「なんだって！！！？」
一刀
「袁紹が・・・・」

一方、袁紹軍は百万もの兵を率いて、幽州へと向かって行くのであった。

袁紹バウ
「幽州の田舎軍団など我が敵ではない！！全軍、進め！！！！」

第１６話『劉備帰還』（後書き）

次回予告

百万もの軍で攻める袁紹達に対して、幽州軍は白馬陣で攻めることになった。

次回　第１７話『激闘！！白馬陣！！』

第17話『激闘！！白馬陣！！』（前書き）

先週の三国伝の最終回はいかがでしたか？というわけで最新話です。

第１７話『激闘！！白馬陣！！』

袁紹軍は幽州へとどんどん攻めてきて来たのであった。そんな中で麗羽は納得いかない顔であった。

麗羽
「どうしてこのようなことに・・・」
斗詩
「麗羽様、納得いかないそうね。」
猪々子
「そりゃ、あたい達だって納得してねぇよ。」

それは数日前のことであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

麗羽
「なんですって！！！？幽州を攻めるのですか！！」
袁紹バウ
「そう、このワシこそが三璃紗すべる帝王となる。まず手始めに烏丸との戦いで疲れ切った幽州を蹴散らしてくれるわ！！」
麗羽
「そんな・・・」
袁紹バウ
「だが、その前にお前たちに見せたいものがある。」

袁紹バウは麗羽、斗詩、猪々子にある部屋へと呼んだ。そこには布をかぶせていたものが大きく乗っていた。そして袁紹バウは布をとるとそこには被せてある布を取ると、それは玉璽と袁術ズサの十極

呪導鎧があったのであった。

麗羽
「これは・・・・玉璽！！？」
斗詩
「それにそれは袁術様の鎧ではありませんか！！」
袁紹バウ
「ふふふ、この玉璽を手に入れたからにはワシが三璃紗の帝王となるのだ！！」
斗詩
「それのせいで袁術様がどんな最期になったのか御存じなのですか！！」
猪々子
「そうですよ。下手したら袁招様まで・・・」
袁紹バウ
「ふん、ワシと奴は違う！！」
麗羽
「そんな、とにかく私達は貴方に協力することは・・・・」
袁紹バウ
「できぬとは言わせぬぞ。貴様の大事な従妹の命が惜しければな・・・・」
麗羽
「なっ！！？美羽さんをどうしたのですか！！！？」
袁紹バウ
「今はワシに従えばいい。お前は逆らえないがな・・・」
麗羽達も仕方なく、袁紹バウに協力することになった。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第17話『激闘!!白馬陣!!』

そして、袁紹軍本陣では

袁紹バウ
「白馬陣だと？　沮授よ、なんだそれは？」
沮授Rジャジャ
「こちらをご覧ください、袁紹閣下。このように騎馬隊の側面に鋼鉄の車輪を取り付けて、全軍で突撃する。これが公孫賛の兵法、白馬陣でございます。」
袁紹バウ
「ふん、田舎侍共めがこざかしい。田豊よ、なにか策はないか？」
田豊ガルスJ
「はっ、白馬陣がどれほど強力な兵法といえど我らが扱う、本物の兵法に比べれば子供の遊びも同然!!我ら軍師にお任せください。」

そのころ、離れたところでは兵士達を組んれけんしている者たちがいた。

于禁（真名・沙和）
「いいか!!!お前らのチン●は飾りでないことを敵に見せてやるの!!」
兵士
「サーイエッサー!!!!」
沙和
「声が小さいの!!」
兵士
「サーイエッサー!!!!」
李典（真名・真桜）
「相変わらず沙和の指揮は厳しいものやな。」

楽進（真名・凪）
「だが、それが沙和のいいところだ！！ですよね、張コウ将軍。」
張コウザク？
「ああ、いつでも出陣できるようにすれば俺もかまわないからな。」
張コウザク？、凪、真桜、沙和が兵たちの訓練をしているところへ
田豊ガルスＪ
「精が出ますな。張コウ将軍。」
張コウザク？
「これは軍師殿、いかがなされましたか？」
田豊ガルスＪ
「実は幽州攻略の先鋒を将軍たちに務めていただきたいのです！！」
真桜
「うちらが！！？」
凪
「それは願ってもないことです！！」
張コウザク？
「ぜひお任せください！！」
田豊ガルスＪ
「ほう、さすがは将軍、話が速い。期待していますぞ。」
凪
「はい！！！沙和、いい知らせだぞ！！」
三人は沙和達に知らせたのであった。
田豊ガルスＪ
「ふっ、猪武者どもめ・・・・」
そのころ、麗羽達は悩んでいた。

麗羽
「なんとかして袁紹の暴走を止めなくてはなりませんわね。」
猪々子
「そのためにも味方が必要っすよ。あたいらだけでは無理っすよ！！」
斗詩
「でしたら張コウ将軍ならいかがでしょうか？」
麗羽
「そうですわね。彼なら私達に味方してくれるでしょう。」

そこへ張コウザク？が出陣の準備をしていた。

斗詩
「張コウ将軍、ちょうどよかったです。すこしお話を・・・」
張コウザク？
「すまないが、俺達は田豊殿に先鋒を任されたのだ。頼み事なら後にしてくれ！！」
猪々子
「え！！？」

張コウザク？はそのまま歩き出したのであった。

麗羽
（何か嫌な予感がしますわ・・・・）

そのころ、劉備ガンダム達は幽州の民達を易京楼まで避難させていた。

劉備ガンダム

「皆、あとひと踏ん張りだ！！」
桃香
「易京楼まできたら安心だから。がんばって！！」
一刀
「二人とも見えてきたぞ。」

そして、ついにたどり着いたのであった。

桃香
「これが・・・易京楼・・・・・」
愛紗
「なんと山奥一変を要塞にするとは・・・・」
関羽ガンダム
「ああ・・」
張飛ガンダム
「こいつはたいしたもんだ！！」

そこへ公孫賛イージーエイトがやってきた。

公孫賛イージーエイト
「我々も来るべきに備えておいたのでな。ここからなら袁紹の攻撃を民から守ることができよう。」

彼らは易京楼まであるくと、そこには趙雲ガンダム、星、白蓮が出撃の準備をしていた。

趙雲ガンダム
「お待ちしていました。公孫賛将軍。」
星
「我々はいつでも白馬陣の出撃は可能ですぞ。」

公孫賛イージーエイト
「三人ともご苦労だったな。」
桃香
「出撃って・・・・まさか・・」
白蓮
「そのまさかだ。これより我々は袁紹軍に対して奇襲攻撃をかける。」
鈴々
「奇襲攻撃って・・・相手は百万の軍なのだ!!」
朱里
「いえ大軍だからこそ奇襲には弱いものなんです、鈴々ちゃん。」
雛里
「それに白馬陣の機動力ならば・・・」
星
「乱戦になればこちらが有利になる。」
劉備ガンダム
「なるほど、そういうことか・・・」
公孫賛イージーエイト
「俺達が袁紹軍の出鼻をくじく。」
白蓮
「その間に劉備、桃香。お前達は易京楼の守りを固めてくれ。」
桃香
「任せて!!」
公孫賛イージーエイト
「頼んだぞ、劉備、桃香。」

そして・・・奇襲攻撃が始まったのであった。

そのころ

兵士
「張コウ将軍、楽進様、李典様、于禁様!!幽州軍が現れました。」
真桜
「慌てることはあらへん!!」
凪
「やはり奇襲をかけてきましたね。」
張コウザク？
「軍師殿の読まれた通りか・・・」

そして・・・・

公孫賛イージーエイト
「白馬陣、突撃!!!」

白馬陣の奇襲攻撃が始まったのであった。そして張コウザク?達の部隊も動き始めた。

張コウザク？
「皆、俺達の任務は敵の足を止めることだ!!」
沙和
「わかったかなの!!」
兵士
「サーイエッサー!!」

兵士達は盾を準備して、白馬陣の突撃を止めていたのであった。

公孫賛イージーエイト
「白馬の動きを封じ込めるとは・・・・」
凪
「本隊の到着まで持ち込むんだ!!」

趙雲ガンダム
「我ら白馬陣を力づくで止めたか！！？」
公孫賛イージーエイト
「趙雲、星、白蓮！！指揮官を狙え！！」
星
「御意！！」
白蓮
「任せろ！！」

そして、三人は張コウザク？達のいるところを狙った。

趙雲ガンダム
「やるな・・・」
星
「それぞれ一騎打ちか・・・・」
白蓮
「私の場合は二人相手だが・・・・望むところだ！！」
張コウザク？
「俺は袁紹軍・将軍・張コウ！！貴様は？」
趙雲ガンダム
「幽州将軍・趙雲だ！！」
張？ザク？
「行くぞ！！趙雲！！」
凪
「我が名は楽心！！貴様の相手は私が受けよう！！」
星
「面白い！！我が名は趙雲、その勝負受けて立とう！！」
真桜
「うちは李典や！！」
沙和

「沙和は于禁なの！！お前の命もらうの！！」
白蓮
「望むところだ！！我が名は公孫賛！！かかってこい！！」

そして、それぞれの戦いが始まった。そんな様子を田豊ガルスＪは見ていた。

田豊ガルスＪ
「張コウ達め、素直に言いつけを守っておるわ！！合図を出せ！！」

そして、銅鑼がなると弩弓が放たれ、敵味方も関係なく無差別攻撃をしていた。

白蓮
「何！！？」
凪
「あれは！！？」
趙雲ガンダム
「左右から奇兵だと！！？」
星
「正面の部隊はおとりか！！？」
張コウザク？
「これはどういうことなんだ！！？」

別の場所では沮授Ｒジャジャが指揮をとっていた。

沮授Ｒジャジャ
「ふふふふ・・・白馬陣のような正面突破の陣計ほど前後からの攻撃には弱いもの・・・」
公孫賛イージーエイト

「いかんこのままでは全滅だ!!!!引け!!」

公孫賛イージーエイトは部隊を撤退させたのであった。そして、張?ザク?達は部下の所に向かった。

沙和
「皆!!」

真桜
「なんでこんなことになったんや!!」

凪
「大丈夫か!!」

張コウザク?
「しっかりしろ!!」

兵士
「張コウ・・・将軍・・・どうして・・・俺達・・・」

一人の兵士が死ぬと張コウザク?達は怒りを抑えきれなかった。

そして、本陣では・・・・

真桜
「どういうつもりや!!　田豊!!!?」

沙和
「よくも沙和達の兵達を捨て駒にしてくれたの!!」

田豊ガルスJ
「捨て駒とは心外な。戦に犠牲はつきものなのです!!」

凪
「貴様!!!」

するとそこへ天幕の騒ぎが聞こえた麗羽達が顔を出した。

斗詩
「どうしたんですか！！」

麗羽
「いったい何事なのですか！！？」

張コウザク？
「麗羽様、田豊が俺達の兵を捨て駒にしたんですよ！！」

猪々子
「何！！？」

麗羽
「ちょっとどういうことなのですか！！！捨て駒とは！！」

するとそこへ

袁紹バウ
「麗羽よ、何をそんなに憤慨しておるのだ？　田豊達の兵法によって白馬陣は撃破できたのであろう？」

麗羽
「だからって味方の兵まで巻き添えにすることなんてありますか！！」

張コウザク？
「そうです、こんなことでは閣下に背くものが現れますぞ！！」

袁紹バウ
「ならば・・・・殺せばよい！！」

一同は袁紹バウの一言に驚いた。

袁紹バウ
「敵も味方も関係ない！！ワシに従わぬというなら・・・・皆殺し

にするまでよ!!!」
麗羽
「くっ・・・・」
袁紹バウ
「ははははははははははははははははははは!!!!」

そのころ易京楼では体勢を立て直していた。

公孫賛イージーエイト
「俺のせいだ・・・・・俺がもっと兵法を使いこなせれば・・・・」
白蓮
「自分を攻めるな!!私にも責任はある!!」
趙雲ガンダム
「白蓮様の言うとおりです。将軍の責任だけではありません。あれほどの大軍を逸し乱さずに統率するとは敵にはよほどの軍師がいるのでしょう。」
公孫賛イージーエイト
「軍師か・・・俺に伏龍ほどの才能さえあれば・・・・・」

すると・・・朱里と雛里が

朱里
「伏龍ですか?」
雛里
「そういえば聞いたことあります。荊州にいる伝説の軍師と聞きました。」
桃香
「そうなの!!?」
公孫賛イージーエイト
「ああこの兵法書を書いたのも伏龍なんだ。」

白蓮
「ああ、盧植先生も『伏龍こそはまさに天才』とおしゃっていた。」
劉備ガンダム
「すごい・・・・・」
公孫賛イージーエイト
「この兵法書を使いこなせればな!・・・・・だが悔しいが今の俺達では理解できない。」

そして、

朱里
「私が伏龍を連れてきます!!」
雛里
「私もです!!荊州は私達の故郷でもあります。私達の先生なら伏龍の事を知っているかもしれません。」

朱里と雛里は荊州に行くことを決めた。

劉備ガンダム
「二人だけでは危険だ!!俺も行く!!」
桃香
「私も!!それに兄さんや白連ちゃん達の力になりたいの!!」
公孫賛イージーエイト
「劉備・・・桃香・・・・」
張飛ガンダム
「俺様も兄貴達と一緒に行くぜ!!」
鈴々
「もちろん鈴々もいくなのだ!!愛紗達はどうするのか?」

すると関羽ガンダムが・・・

関羽ガンダム
「いや・・軍師がいても兵がいなくては・・・ならば曹操に援軍を送ると考えよう。袁紹に対抗することができるのは曹操ぐらいです。」
愛紗
「ああ、だから私や関羽殿が許昌へ行って、二人の曹操を動かして見せましょう!!」
一刀
「俺も行くよ!!二人だけじゃ心配だし。」
愛紗
「ご主人様・・・」
公孫賛イージーエイト
「ありがとう。お前達が戻ってくるまでの間、幽州の民達は俺達が守って見せる!!」
白蓮
「命をかけてな!!」

劉備ガンダム、張飛ガンダム、桃香、鈴々、朱里、雛里は伏龍を探すために荊州へ・・・・・
関羽ガンダム、愛紗、一刀は曹操ガンダムと華琳に援軍を頼むために許昌へとむかった。

それぞれの使命を胸に戦士達は旅立った。目的はただ一つ幽州の民を守るため。

第１７話『激闘！！白馬陣！！』（後書き）

次回
幽州の民を守るため戦士達はそれぞれの使命を果たそうとしていた。
次回　第１８話『関羽、咆哮！！』

第１８話『関羽、咆哮！！』（前書き）

最新話でございます。

第１８話『関羽、咆哮！！』

劉備ガンダム、張飛ガンダム、桃香、鈴々、朱里、雛里は伏龍を探すために荊州へ・・・・・

関羽ガンダム、愛紗、一刀は曹操ガンダムと華琳に援軍を頼むために許昌へとむかった。

そして、劉備ガンダム、張飛ガンダム、桃香、鈴々、朱里、雛里は荊州へとたどり着いた。そして、彼らは朱里と雛里の先生でも二人の水鏡のもとへとゆってきた。

水鏡（真名・華蓮）

「朱里、雛里、久しぶりですね。」

朱里

「水鏡先生と華蓮先生もお久しぶりです。」

雛里

「お元気そうでなりよりです。」

水鏡ガンタンク

「ふぉふぉふぉ・・・・ワシらもまだまだ元気じゃ。」

華蓮

「それであの人たちは・・・・」

華蓮は劉備ガンダム達に眼を向けたのであった。

第１８話『関羽、咆哮！！』

水鏡ガンタンク

「それでお主たちはこの隠居したおいぼれに何か御用なのかな？」

劉備ガンダム

「俺達は伏龍という男を探しているのです。」
華蓮
「伏龍・・・懐かしい名前ですね。」
朱里
「知っているのですか!!」
水鏡ガンタンク
「ワシの弟子で華蓮の弟弟子じゃった。」
華蓮
「どうして伏龍のことを聞きに来たのですか?」
桃香
「三璃紗の明日のためです!!」
劉備ガンダム
「袁紹が百万の軍勢を持って、三璃紗を支配しようと動いたのです。」
雛里
「このままでは民の笑顔を失うことになります。」
劉備ガンダム
「この乱世を終わらせるためには力だけでなく知力も必要なのです。そのためにも天才軍師・伏龍がどこにいるのか?教えてください!!」

それを聞いた水鏡ガンタンクと華蓮は静かにほほ笑んだ。

華蓮
「どうやら、貴方方は兵法が万能のものと勘違いしていますね。」
鈴々
「はにゃ?」
水鏡ガンタンク
「かつてお主たちと考え、兵法を持って暴君董卓に立ち向かった男がおった。世の中を変え、人々を救おうと・・・」

華蓮
「しかし、彼を待っていたのは数えきれない犠牲者とたとえようもない絶望です。」

二人の言ったことに朱里と雛里ははっきりとしていた。

桃香
「それで伏龍さんは・・・・」
水鏡ガンタンク
「もうこの世にはおらん!!」
桃香
「え!!?」
一同は驚きを隠せなかった。

水鏡ガンタンク
「大いなる力は大いなる悲劇をももたらす。そんなものに世の中を変えることができないと言い残して・・・自ら・・・・」

劉備ガンダム達は伏龍が死んだこととショックを受けた。そしてそのまま水鏡ガンタンク達のもとを去った。そこへ一人の武将が現れた。

水鏡ガンタンク
「これでよいのかな?」
華蓮
「あの人たちはいい目をしていました。もしかしたら本当に三璃紗の明日を変えられるかもしれません。・・・・」
孔明リ・ガズィ
「私には関係ありません。」
水鏡ガンタンク
「それがお主の本心か?」

孔明リ・ガズィ
「兵法を使ったものは皆、地獄の業火でその身を焼かれるのが運命なのです。」
水鏡ガンタンク
「あいかわらずじゃのう。が・・・それもよきかな、よきかな。」

そのころ、曹操達に援軍を頼みに来た関羽ガンダム、愛紗、一刀は許昌へとたどり着いたのであった。

関羽ガンダム
「街はさらに大きく、堅牢になり・・・・」
愛紗
「民も増えているな。」
一刀
「二人の曹操は力をつけているようだな。」
関羽ガンダム
「やはり袁紹の百万の軍勢に立ち向かうには曹操の力が必要だ!!」

すると

商人
「このガキ待ちやがれ!!」
関平ガンダム
「わぁ、ごめんよ!!」

関羽ガンダム達が振り向くとそこには商人が一人の少年を捕まえていたのであった。

関平ガンダム
「いでで」

商人
「よくも積荷の食料を盗み食いしやがったな！！」
関平ガンダム
「もう三日も食ってなかったんだよ！！」
関羽ガンダム
「待たれよ、代金は拙者が払う。だから放してやれ。」

関羽ガンダム達は一人の少年、関平ガンダムを助けた。

関平ガンダム
「たすかったぜ。ありがとう、オッサンにアンちゃんにおばちゃん・・」

【しばらくおまちください】

関平ガンダム
「たすかったぜ。ありがとう、オッサンにアンちゃんにお姉ちゃん・・・」

関平ガンダムは愛紗に殴られたのであった。

一刀
「まったく親が聞いたら泣くぞ。」
関平ガンダム
「そんなのいねぇーよ。前の戦争で家も家族も皆・・・」
関羽ガンダム
「そうか・・だが盗みはもうやめろ！」
愛紗
「そうだお前も男なら辛くとも己の魂に恥じぬよう頑張れ、いな。」
関平ガンダム

「うん・・・・・」
一刀
「なら・・・俺達と来るんだ。またやるかもしれないからな。」
関平ガンダム
「いいのか!!?おいら関平ってんだ!!よろしくな!!」

そして、関平ガンダムを連れた三人曹操ガンダムと華琳の城に入った。

書室

郭嘉ヴァサーゴ
「先生、劉備の使者、二人の関羽と天の使いが曹操様と華琳様を訪ねてきたそうですよ。」
司馬懿サザビー
「ほう・・・意外と早かったな。」

そして場所は王室へと移られた。

曹操ガンダム
「久しいな二人の関羽よ・・・・」
華琳
「それに天の遣いの北郷一刀・・」
関羽ガンダム
「曹操将軍もお変わりなく…」
愛紗
「二人の劉備より書簡でございます。」

愛紗は書簡をさし出すが・・・・

華琳
「必要ないわ。二人の袁紹が動いたことでしょ。」
一刀
「そういうことなら幽州のために援軍を頼む!!」

すると

夏侯惇ギロス
「小僧!!でかい口を叩くな!!」
春蘭
「そうだ。それにわが許昌としていつ誰から攻められるかもしれぬのは同じであるぞ!!」
夏侯淵ダラス
「その危険を冒してまで援軍を出せとは・・・厚かましいとは思わぬか!!」
秋蘭
「ましてや相手は百万軍!!まともにぶつかれば損害は大きいのだぞ。」
関羽ガンダム
「もちろん、幽州を救っていただいた暁には公孫賛将軍ができるだけのお礼をさし出すとおしゃっています。」

すると・・・・

司馬懿サザビー
「足りぬな・・・・」
愛紗
「はっ・・・・」
司馬懿サザビー
「幽州が我らの協力に見合う金品をさし出すとは思えぬ。」

荀？（真名・桂花）
「それは私も同感です。」
華琳
「桂花、黙ってなさい。」
曹操ガンダム
「金品などいらぬ！！余が望むのは力。」
華琳
「私も同じよ。我が正義を持って三璃紗を統一してこの乱世を終わらせる。そのための力を私達は欲しているのよ！！」

そして・・

関羽ガンダム
「力がお望みなのですか・・・・・」
愛紗
「ならば・・・」
一刀
「俺達の力ならどうか！！！」

関羽ガンダム、愛紗、一刀は幽州のために曹操ガンダムと華琳の力になることを決意したのであった。

すると

郭嘉ヴァサーゴ
「待ってください曹操様、華琳様。こいつら、本当に僕らの役に立ちますか？」
桂花
「この者達は信用できません！！」
一刀

「おい、それってどういう・・・」
桂花
「話しかけないで!!妊娠しちゃうでしょ!!」
春蘭
「おい、貴様らも鬼髭の関羽と黒髪の関羽と天の遣いがどれほどの戦士か・・・」
郭嘉ヴァサーゴ
「もちろんですよね。桂花さん。」
桂花
「ええ、でも私達は見たわけではありませんので…そうですね・・・一つどれほどの腕なのかみせてもらいませんかね・・・よろしいのでしょうか?華琳様。」
華琳
「好きにしなさい・・・」
郭嘉ヴァサーゴ
「おい連れてこい!!」

そして、兵士達が連れ込んだ大柄な体格をしたＭＳ武将であった。

周倉ドーベンウルフ
「うおおおおおおおお!!!!なんのつもりだ、てめえら!!!!殺すんならさっさと殺しやがれ!!!!!!」
桂花
「こいつは周倉という山賊でいずれは処刑される男なのよ・・・でもね・・・」
郭嘉ヴァサーゴ
「周倉さん、この三人の内、一人でも勝てたら君を無罪放免にしてあげましょう!!」
周倉ドーベンウルフ
「何!?本当か!!よっしゃー!!!!!!」

そして、関羽ガンダム、愛紗、一刀は立ち上がった。

関羽ガンダム
「ふむ・・・・」
愛紗
「ではこれは預けておく。」
一刀
「こいつなら鎧なしでも行けるな。」

三人は士官達に武器を預けた。

周倉ドーベンウルフ
「てめえら!!この俺様相手に丸腰だと!!?捻りつぶしてやらあ!!!!!!まずは小僧、てめえからだ!!!!!」

周倉ドーベンウルフは一刀に襲い掛かるが・・・・・

一刀
「ふん!!」
周倉ドーベンウルフ
「うおっ!!!!!」

面打ちを食らわされてしまった。今度は愛紗のほうに襲い掛かるが

愛紗
「ふん・・」
周倉ドーベンウルフ
「おっと・・・・・!!!!?」

足払いをかけさせられ、転んでしまった。そして、今度は関羽ガンダムに襲い掛かるが避けられ続けていた。そして・・ついに・・・

周倉ドーベンウルフ
「もう我慢ならねぇ!!!!ぶっ殺してやる!!!」

ついにキレた周倉ドーベンウルフは一刀に襲い掛かるが、関羽ガンダムと愛紗が前にやってきて、そして・・・

周倉ドーベンウルフ
「うっ・・・・!!」
関羽ガンダム
「なぜ、そんなに死に急ぐ?」
愛紗
「命を粗末にすることに意味などあるのか!!?」
一刀
「だったら、俺達も容赦はしないぞ。」

指一本で止められてしまった。そして三人からすさまじい闘気があふれ出た。

周倉ドーベンウルフ
「なぜだ?・・・この三人がこんなに大きく見えるんだ!?なんてやつらだ・・・」

周倉ドーベンウルフは三人の気におびえ、へなへなと座り込んでしまった。

関平ガンダム
「すげぇ!指一本であの大男を・・・・すげえよ!!おっちゃんに

お姉ちゃんにアンちゃん!!」

そして・・・

関羽ガンダム
「これでも拙者達の力は不足か!!」

曹操ガンダム
「見事!!者ども我が軍は幽州へと援軍へ向かう!!」

華琳
「全軍出撃準備をせよ!!」

こうして幽州への援軍を送ることができた関羽ガンダム、愛紗、一刀であった。

そのころ荊州では・・・・・

張飛ガンダム
「たく・・・・・とんだ無駄足だったぜ!!」

鈴々
「まったくなのだ!!」

すると・・・

桃香
「本当に伏龍さんは死んだのかな?」

劉備ガンダム
「俺にはそんな風には見えないんだ・・・。それにさっきから黙っている朱里と雛里のことも気になるし。」

朱里
「・・・・・・・・・」

雛里
「・・・・・・・・・・」

するとそこへ水鏡ガンタンクと華蓮がやってきた。

華蓮
「貴方達、まだ幽州へ帰っていませんか？」

桃香
「もう少し残って伏龍について調べたいんです。」

劉備ガンダム
「それに幽州には易京楼という強力な要塞がありますし。」

水鏡ガンタンク
「何をのんきな言っておる！！お主たちは袁紹軍の恐ろしさを知らんのか！！？」

桃香
「どういうことです！！」

水鏡ガンタンク
「袁紹軍の真の強さは兵の数ではない！！百万の兵を縦横無尽に動かせる軍師、沮授、田豊じゃ！！いかに堅牢な易京楼といえどひと月ももたぬ。」

劉備ガンダム
「そんな・・・・」

鈴々
「こうしちゃいられないのだ！！」

張飛ガンダム
「でも伏龍のことは・・・どうするんだ？」

朱里
「私と雛里ちゃんが残って、探していますから・・」

桃香
「わかった。先生方、失礼します！！」

劉備ガンダム、張飛ガンダム、桃香、鈴々は幽州へと戻った。

朱里
「水鏡先生、華蓮先生・・・・」

雛里
「何か・・・・知っていますね。」

華蓮
「え!?」

水鏡ガンタンク
「やれやれ、朱里達には参ったものじゃ。」

そのころ、幽州軍と袁紹軍は激戦を繰り広げていた。

本陣

袁紹バウ
「うぬらは何をやっているのだ!!!あのような田舎の城を落とすのに何日かかっているのだ!!」

田豊ガルスJ
「易京楼はまれに見る堅牢な要塞。あのような城をまとめに攻めていれば一年かかっても攻め落とせません。」

袁紹バウ
「一年じゃと!!?そんな悠長なことがしていられるか!!?」

沮授Rジャジャ
「でしたらまともに攻めなければよろしいのでは・・・・」

袁紹バウ
「ほう、ずいぶんと面白いことを言うな。何か策があると申すか?」

沮授Rジャジャ
「罠の天才と呼ばれた沮授の美しき策略、ご覧になってください。」

袁紹バウ
「ほう・・・やってみるがよい。」

そのころ、麗羽達は

麗羽
「どうすればいいのですの？」
斗詩
「麗羽様、気が立っているね。」
猪々子
「そりゃそうだろう。美羽様を人質に取られてしまったからな。」
斗詩
「そういえば沮授様が烏丸の残党の皆さんを集めているけど・・」
麗羽
「何か嫌な予感をしますわね。私達もいきましょう。」

三人も沮授Ｒジャジャの元へ向かったのであった。

そのころ美羽達は

美羽
「くす・・・七乃、怖いのじゃ。」
七乃
「そうですよね。・・・・どうしてこのようなことに・・・」

実は玉璽を探しまわっていたところを袁紹軍に見つかり、捕まってしまったのであった。

そして、沮授Ｒジャジャの恐ろしき策略とは・・・

第１８話『関羽、咆哮！！』（後書き）

次回予告

百万の袁紹軍に追い詰められた公孫賛イージーエイトの答えは・・・・・

次回　第１９話『無念、公孫賛』

第１９話『無念、公孫賛』（前書き）

袁紹編も佳境となったストーリーが来ました。

第１９話『無念、公孫賛』

沮授Ｒジャジャは顔良ガズアルと文醜ガズエルと共にやってきたのは烏丸の残党たちであった。

沮授Ｒジャジャ
「聞きなさい、烏丸の残党たちよ！！」
烏丸兵Ａ
「何が始まるんだ？」
沮授Ｒジャジャ
「お前達は袁招閣下の後ろ盾があったにもかかわらず、何の役にも立たなかった。よってこの場で皆殺しです！！」

沮授Ｒジャジャの一言によって顔良ガズアルと文醜ガズエルは武器を構えた。

烏丸Ｂ
「ひえー！！！！お助け！！」
烏丸Ｃ
「どうか命だけは！！」
沮授Ｒジャジャ
「ですが袁招閣下はお優しいお方です。役立たずのお前達に最後のチャンスを与えました。あれを御覧になりなさい！！」

沮授Ｒジャジャがさした先にはたくさんの土耗が置かれていた。

沮授Ｒジャジャ
「あの土耗を易京楼の城壁に積み上げるのです！！見事に積み上げ、城壁を乗り越えれば、莫大な褒美を与えましょう！！ただし・・・失

敗したらわかっていますよね。」

その一言に烏丸はおびえた。そんな様子を田豊ガルスＪは見ていた。

田豊ガルスＪ

「さすがは沮授殿。これで烏丸達は死に物狂いで突撃するだろう。この作戦が成功すれば将軍・・・・貴方の出番ですよ。」

田豊ガルスＪの視線の先には呂布トールギスと張遼ゲルググと霞の姿があった。

第１９話『無念、公孫賛』

そして、烏丸兵達は土耗を持って、易京楼まで走って行った。そして、それに気がついた幽州軍も弓矢を構えた。

公孫賛イージーエイト

「敵を城壁に近づけさせるな！！」

白蓮

「撃て！！」

二人の指示によって兵達は矢を放った。

白蓮

「なっ！！？あれは烏丸兵じゃないか！！」

趙雲ガンダム

「なぜ、袁紹軍の陣から烏丸兵が・・・・」

星

「どうやら答えは向こうにありそうですな。」

趙雲ガンダム

「星、いったい何を・・・・ん!!?」

趙雲ガンダムが見た先には

顔良ガズアル
「ひるむな!!」
文醜ガズエル
「後ろに下がれば貴様らは皆殺しだぞ!!!」
白蓮
「そうか・・烏丸を背後から操っていたのは袁紹だったのか!!」

そして、烏丸兵の一部は易京楼の城壁までやってきて、土耗を積み始めた。

公孫賛イージーエイト
「土耗を積んで城壁を登る作戦か・・そうさせん!!」

公孫賛イージーエイトは兵達に烏丸兵達を討たせた。しかしどんどんと土耗は積み上がっていくのであった。

白蓮
「このままでは城壁を超えられてしまう。」
公孫賛イージーエイト
「趙雲、星!!!」
趙雲ガンダム
「お任せください!!」
星
「我らの攻撃を受けよ!!」

恋姫武装をした星と趙雲ガンダムはジャンプをした。そして・・・・

趙雲ガンダム
「真空迅！！」
昇龍装・星
「疾風迅！！」

二人の技で土耗の山を崩れた。しかし土耗が破れて、中身が出てきた。

趙雲ガンダム
「あれは火薬・・・」
昇龍装・星
「まさか！！？」

なんと中身は土ではなく火薬であった。そして、離れたところでも麗羽達が様子を見ていた。

猪々子
「どういうことなんだ！！？あの中身が火薬だなんて・・・・」
斗詩
「まさか・・・・沮授様は烏丸兵達をも捨て駒にするんじゃ！！」
麗羽
「そんな・・・」

そして、沮授Ｒジャジャは火矢を放とうとしていた。

沮授Ｒジャジャ
「ごくろうでした。烏丸兵共！！これがお前たちへのご褒美です！！」

そして火矢が放たれ、それは易京楼の城壁に積んだ火薬入りの土耗に突き刺さった。そして・・・・・・

どかあああああああああああああああああああん！！！！！！！

大きな爆発が起こり、敵味方関係なく爆風に吹き飛ばされ、城壁も崩れ落ちた。

あたりは炎に包まれていた。そして公孫賛イージーエイトはゆっくりと立ち上がった。

公孫賛イージーエイト
「くっ・・・・・趙雲、白蓮、星！！大丈夫か！！？」

趙雲ガンダム
「くっ・・・・・」

星
「なんとか・・・・」

白蓮
「公孫賛も大丈夫か・・・・・？」

公孫賛イージーエイト
「俺は大丈夫だ！！」

それを聞いて安心した三人は気絶した。そして公孫賛イージーエイトが見たものは倒れている自分達の兵士と燃え盛る城壁であった。

公孫賛イージーエイト
「なんということだ・・・・おのれ・・・・・・袁紹・・・・よくも！！！」

公孫賛イージーエイトは怒りを抑えきれなかった。そしてそこへ・・・

呂布トールギス
「その心意気・・・・気に入った。」

呂布トールギスが現れた。

公孫賛イージーエイト
「貴様は・・・・呂布!!?なぜ貴様が袁紹軍にいるのだ!!?」
呂布トールギス
「戦いがある限り・・・・我が魂も戦場にあり!!!」
公孫賛イージーエイト
「おのれ修羅め・・・・・・」

公孫賛イージーエイトは無謀にも呂布トールギスに立ち向かった。

公孫賛イージーエイト
「くっ・・・・・・」
呂布トールギス
「ふふふ・・・・その眼だ。死を恐れず戦いを決意した魂ほどくらいがあるものはない!!!!」

そして・・・・

呂布トールギス
「暴風激烈斬!!!!!!!!!!!!!!」

必殺技をまともに食らった公孫賛イージーエイトは吹き飛ばされてしまった。

そのころ、劉備ガンダム、張飛ガンダム、桃香、鈴々は幽州へと戻っていた。

桃香
「もうすぐ幽州につく・・・早くても夜中には・・・」

劉備ガンダム
「俺達が戻るまで待っていてくれよ。公孫賛の兄貴!!」

そのころ、気絶していた公孫賛イージーエイトは意識を取り戻した。

趙雲ガンダム
「公孫賛将軍・・・・」

白蓮
「意識を取り戻したんだな。」

公孫賛イージーエイトは起きようとするがぐらついてしまった。

公孫賛イージーエイト
「くっ・・・・」

星
「まだ御無理はしないほうが・・・」

公孫賛イージーエイト
「俺のことはいい・・・それよりどうなっている。」

白蓮
「・・・・・・・・あれを見てみろ!!」

公孫賛イージーエイトが見たものは圧倒的な数の袁紹軍であった。

そのころ、麗羽達は

麗羽
「もう我慢なりませんわ！！袁紹のやっていることは獣と同じ事ですわ！！」
猪々子
「麗羽様の気持ちはわかるッスよ！！」
麗羽
「自分達の兵や烏丸兵達を捨て駒をするなんて許せませんわ。」
斗詩
「でも袁紹様になるべく被害が少なくなるような方法ってないかしら・・・」

そこへ・・・・

張遼ゲルググ
「袁紹様、それなら私達に名案があります。」

張遼ゲルググと霞がやってきた。

麗羽
「貴方達は呂布隊の・・・・」
霞
「うちらは張遼や。公孫賛はんの戦いぶりには感動したやからな。」
張遼ゲルググ
「ですので私達が公孫賛に降伏するよう袁紹様に伝えておきましょう。」
麗羽
「降伏ですか・・・それなら・・・」
霞
「戦場で刃を交えた戦士同士、降伏の交渉役は任せとき！！それに

袁紹はんも曹操軍が来ると聞いて慌てておるしな。」

麗羽

「えええ!!お願いしますわ!!猪々子、斗詩、貴方達もお願いしますね。」

しかしそれを聞いていたのは麗羽達だけではなかった。

そのころ、圧倒的な軍の数を見た公孫賛イージーエイトは・・・・

公孫賛イージーエイト

「どうやら・・・ここまでのようだな・・・」

白蓮

「ああ、そうだな・・・援軍は間に合わなかったな。」

趙雲ガンダム

「何を言っているのです!!我々はまだ戦えます。たとえこの命が尽きようとも・・・・」

公孫賛イージーエイト

「お前はそうやって民を道ずれにするのか!!?」

星

「しかし・・・」

白蓮

「我々が闘ってきたのは何のためだ!!」

公孫賛イージーエイト

「幽州の民を守るためではないか!!!」

二人の言葉に趙雲ガンダムと星は黙って聞いた。

公孫賛イージーエイト

「もはや降伏する以外に民を守る手立てはない・・・・」

星

「しかし・・・あの袁紹がそのようなことを認めるとは・・・」
公孫賛イージーエイト
「この俺の首を差し出してでも民を守って見せる!!」
白蓮
「え!?」
趙雲ガンダム
「将軍・・・・」
公孫賛イージーエイト
「これまで皆、本当によくやってくれた・・・・ありがとう。」

公孫賛イージーエイトの言葉に感動した兵達は泣き崩れた。

趙雲ガンダム
「そこまでのご覚悟を・・・・」
星
「ならば我らも・・・・」
白蓮
「いやお前達、二人は死んではいけない。」
公孫賛イージーエイト
「三人だろ・・・・白蓮・・・・」
白蓮
「何!!?」
公孫賛イージーエイト
「お前も趙雲達と一緒に行ってくれ。」
白蓮
「何言っているんだ!!私も・・・」
公孫賛イージーエイト
「あの二人にはまだお前を必要としているんだ。これを・・・」

公孫賛イージーエイトが白蓮に渡したのは伏龍の兵法書であった。

公孫賛イージーエイト
「この伏龍の兵法書を劉備達に渡してほしい。劉備達なら正義のために役に立ててくれるだろう。」
白蓮
「わかった・・・お前の分まで・・・私と趙雲と星が支えてやるからな。」

白蓮は泣きながら答えた。そして、三人は劉備ガンダム達の所へと向かって行った。

白蓮
「公孫賛・・・・お前の志は必ず劉備達に届けて見せる。」

そして・・・、公孫賛イージーエイトは走り去る白蓮達を見送っていた。そこへ・・・・

兵士
「将軍、張遼と名乗る者たちとその使者が城の前に来ております。」
公孫賛イージーエイト
「張遼?あの呂布隊の張遼達なのか?」

公孫賛イージーエイトはたくさんの兵士達を連れて、張遼ゲルクグと霞と猪々子と斗詩が待っていた。

霞
「来たか・・・」
張遼ゲルググ
「これ以上の戦いは双方にとっても無益のはずいさぎよく降伏せよ。」

公孫賛イージーエイト
「まさか・・・地獄の修羅の者が降伏勧告に来ると鼻・・・・」
霞
「ご不満か・・・」
公孫賛イージーエイト
「いや・・・まさにこちらから降伏を申し出ようとしていたところだ。」
猪々子
「そうかよかった。」
斗詩
「これなら安心だね。」
公孫賛イージーエイト
「ただし、一つ条件がある。」
張遼ゲルググ
「聞こう・・・・」
公孫賛イージーエイト
「城内の者たちには一切手を出さないこと。この条件を聞いてくれるなら俺の首を差し出そう。」
霞
「民や兵達のために己の命を差し出すとはええもんやな。」
張遼ゲルググ
「わかった。我らが誇りにかけて袁紹様には一切の手出しはさせぬ。」
斗詩
「だから安心してください。」
猪々子
「そういうことツス。」
公孫賛イージーエイト
「ありがとう・・・・張遼殿。」

公孫賛イージーエイト達は張遼ゲルググ達に連れられて、袁紹達の前にやってきた。そして、その場に持っていた武器を捨てたのであった。

袁紹バウ
「ふん、見上げた心がけだな公孫賛。」
麗羽
「よくご決断をしてくれましたわ。」
公孫賛イージーエイト
「この首一つで民と兵を助けられるなら安いものだ。」
張遼ゲルググ
「お聞きのとおりです、袁紹様。」
霞
「幽州軍には戦う意思はあらへん。」

張遼ゲルクグと霞と猪々子と斗詩は前に出た。

麗羽
「たしかにそのとおりですわね。公孫賛将軍、報告の通り貴方の首一つで幽州の民や兵たちには・・・」

しかし・・・・

袁紹バウ
「ふん!!田舎者の首一つにどれほどの価値がある!!?」
公孫賛イージーエイト
「何!!?」

袁紹バウが手を挙げると、兵達は弓を構えた。

公孫賛イージーエイト
「貴様！！？」
猪々子
「どうなっているんだ！！？」
斗詩
「なんで武器を・・・・！！？」
袁紹バウ
「わはははははは！！！よくやったぞ張遼！！これで鼠どもをきれいさっぱり皆殺しにできるわ！！！」
霞
「なんやと！！？」
麗羽
「なんですって！！？」
袁紹バウ
「撃て！！！」

袁紹バウの指示で兵達は矢を放った。それを受けた兵達は倒れてしまった。

公孫賛イージーエイト
「お前達！！？」
張遼ゲルググ
「やめろ！！これでは話が違う！！」
霞
「せや！！なんでこないなことせなあかんのや！！」
公孫賛イージーエイト
「おのれえええええええええええ！！！！」

公孫賛イージーエイトは剣を持って、袁紹達に立ち向かおうとしたが、矢が次々に刺さってしまい、動きを止められてしまった。

張遼ゲルググ
「公孫賛！！！？」
猪々子
「ひでぇ！！」
斗詩
「どうしてこんなことに・・・」
公孫賛イージーエイト
「張遼・・・よく・・も・・・だましたな・・・」
霞
「ちゃう・・・うちらは・・・・」
公孫賛イージーエイト
「うっ！！！？」
張遼ゲルググ
「公孫賛！！？」

そして、最後の一発が急所に当たってしまい、公孫賛イージーエイトは絶命した。

霞
「公孫賛・・・・！？」
麗羽
「そんな・・・・」
袁紹バウ
「わはははははは！！！！易京楼に火を放て！！！幽州の者どもは民も兵も皆殺しじゃ！！！！！！」

そして、易京楼に火矢が放たれてしまった。燃え盛る易京楼を見た張遼ゲルググと霞と麗羽は怒りを隠しきれなかった。

張遼ゲルググ
「なぜだ・・・」
霞
「なんでこないなことになったんや！！」
張遼ゲルググ、霞
「「うおおおおおおおおおおおおお！！！！」」
麗羽
「どうしてこんなひどいことを・・・・・」

そのころ、劉備ガンダム達も易京楼に向かっていた。

劉備ガンダム
「この森を抜ければ易京楼だ！！」
桃香
「あれは・・・」

劉備ガンダム達が見たのは趙雲ガンダムと星と白蓮であった。

白蓮
「劉備、桃香！！？」
張飛ガンダム
「趙雲！！」
鈴々
「星！！」
桃香
「白連ちゃん！！」
劉備ガンダム
「どうして、姉貴達がここに・・・」
趙雲ガンダム
「公孫賛将軍のご命令で・・・」

桃香
「兄さんが・・・・どういうこと!?」
劉備ガンダム
「公孫賛の兄貴に何があったんだ!!?」
星
「くっ・・・・」
鈴々
「な!!?あれを見るのだ!!」

すると・・・・・易京楼へ向かっている先の空が赤くなっていた。

劉備ガンダム
「あの先は易京楼の・・・」
桃香
「まさか!?」

劉備ガンダム達は易京楼に急いで向かっていた。そして、劉備ガンダム達が易京楼へたどり着いた。そこはすでに地獄化していた。

張飛ガンダム
「なんということだ・・・・」
鈴々
「燃えているのだ・・・・」
趙雲ガンダム
「易京楼が・・・・」
星
「燃えている・・・・」

燃え盛る易京楼、倒れている兵達の死体。そして・・・・・

白蓮
「な！！？」
桃香
「そんな・・・嘘・・・・」
劉備ガンダム
「公孫賛の兄貴が・・・・・・・」

それはだまし討ちにあい、憤死した公孫賛イージーエイトの死体であった。そして、爆風によって吹かれた炎によって焼き尽くされてしまった。

劉備ガンダム
「兄貴いいいいいいいいいいいいいい！！！！！」
桃香
「兄さん！！！！！！いやあああああああああああああ！！！！！！！」
白蓮
「公孫賛！！！！！！！！！！！」

第１９話『無念、公孫賛』（後書き）

次回予告

公孫賛イージーエイトの仇を討つために向かう劉備ガンダム達。そして二人の張遼の決断とは・・・・・

次回　第２０話『全軍官渡へ』

第２０話『全軍官渡へ』（前書き）

今回は原作通りの話になりますが、それ以降はアレンジを入れてみましたので楽しみにしてください。

第２０話『全軍官渡へ』

袁紹バウのやり方についに麗羽達の我慢も限界に来ていたのであった。

麗羽
「もう我慢なりませんわ！！」

猪々子
「そのとおりですよ！！公孫賛将軍の民を守る想いを利用して、だまし討ちするなんて！！」

麗羽
「もはや・・・袁紹のやっていることは獣以下ですわ！！！あの者はどうなっています！！」

斗詩
「南へと向かっています。おそらく曹操軍と戦うために・・・・」

麗羽
「くっ・・・・・」

そのころ、美羽達は何者かによって牢から抜け出すことができた。

美羽
「何とか助かったものじゃ。」

七乃
「はい、では逃げましょう。お嬢様。」

二人は逃げることができた。そして逃がしたのは・・・・

霞
「張遼・・・ええんか？こんなことをして・・」

張遼ゲルググ
「かまわん。もはや袁紹様・・・いや袁紹にはついて行けん。それが呂布将軍への裏切りだとしても・・・・」

第２０話『全軍官渡へ』

劉備ガンダム達は廃墟となった易京楼へとやってきた。

白蓮
「公孫賛・・・・・う・・ううう・・うわあああああああああああん！！！」
桃香
「そんな兄さんが死ぬなんて・・・・・・」
劉備ガンダム
「すまない・・・公孫賛の兄貴・・・俺達は・・・兄貴達を助けられなかった。」

劉備ガンダム、桃香、白蓮は公孫賛イージーエイトの死を悲しんでいた。

趙雲ガンダム
「劉備殿・・・」
星
「桃香殿・・・」

そして、泣き明かした劉備ガンダムと桃香と白蓮は立ち上がった。

劉備ガンダム
「袁紹軍は南へ去った。曹操を倒すつもりだ！！」
張飛ガンダム

「もう幽州には用はないというわけか！！」
鈴々
「ひどいやつらなのだ！！」
趙雲ガンダム
「おのれ・・袁紹！！」

そして・・・・

桃香
「私達は・・・・袁紹を倒す！！」
鈴々
「お姉ちゃん！！」
劉備ガンダム
「公孫賛の兄貴の仇はこの劉備が討つ！！」
桃香
「私もだよ！！」
白蓮
「もちろんだ！！無論私も一緒だ！！」

白蓮は公孫賛イージーエイトの遺品である剣をとって、天に向かって挙げた。

星
「しかし白蓮殿・・相手は袁紹軍・百万ですぞ。」
白蓮
「それがどうした！！」
桃香
「敵の数なんて関係ないよ！！幽州の民のために戦った兄さんの無念は私達が晴らす！！」
白蓮

「そのとおりだ！！！」

それを聞いた張飛ガンダムと鈴々は・・・・・・

鈴々
「さすがはお兄ちゃんとお姉ちゃんなのだ！！」

張飛ガンダム
「よーし！！この落とし前は俺達できっちりつけようぜ！！」

趙雲ガンダム
「百万の軍にたった五人で挑むのですか！！？」

すると、趙雲ガンダムと星は劉備ガンダムと桃香の瞳に迷いがないことに気がついた。

趙雲ガンダム
「劉備殿、桃香様！！我らを貴方方の家臣にしてください！！」

星
「お願いします。」

劉備ガンダム
「趙雲・・・・」

桃香
「星ちゃん・・・」

白蓮
「私からも頼む。この二人はお前達についていたほうがいい。」

趙雲ガンダム
「あの袁紹軍、相手に公孫賛将軍の仇を討とうという熱き思いが心をふるわせました。」

星
「どうか我らも共に戦わせてください！！」

そんな二人・・・・劉備ガンダムと桃香は・・・・

劉備ガンダム
「それはだめだ。お前達を家臣にするつもりはない・・・・」

桃香
「でも・・・・二人はもう私達の仲間だよ!!」

趙雲ガンダム
「劉備殿・・・・」

星
「桃香様・・・・・」

そして・・・・

劉備ガンダム
「目指すは南の地!!」

桃香
「袁紹と曹操が闘っている地、官渡!!」

白蓮
「行くぞ!!」

そして、劉備ガンダム達は官渡へと向かって行った。

そのころ、曹操ガンダムと華琳への援軍を送らせることに成功した関羽ガンダム、愛紗、一刀もようやくたどり着いたが・・・・

関羽ガンダム
「何!!?公孫賛殿が亡くなっただと!!?」

伝令
「はっ、袁紹軍・百万の前に幽州の要塞・易京楼は陥落・・・公孫賛殿は勇敢にも戦い。見事な死に様なこと・・・・」

愛紗
「なんということだ・・・」
一刀
「間に合わなかったか・・・・俺達はなんのために・・・・」

三人は悔しそうな顔をした。

宝慧
『おい、これで俺達が出撃した意味がなくなったじゃねぇか!!?』
程?（風）
「これ宝慧・・そういうことは言ってはいけませんよ。」
程?ワイズワラビー
「風殿のいうとおり。これは関羽殿達の要請に答えての出陣。せめて袁紹軍に一矢を報いるべきでは・・・」
郭嘉ヴァサーゴ
「無駄だね。僕達は許昌の都へ戻るべきだよ。」

すると何者かがやってきた。

関羽ガンダム
「何奴!!」
張遼ゲルググ
「私は張遼!!」
霞
「うちも張遼や!!!!!!」

それは張遼ゲルググと霞であった。

愛紗
「何!!?」

一刀
「あいつらがどうして!!?」
春蘭
「袁紹軍の先方か!!?」
夏侯惇ギロス
「おのれ我らがたどり着いたところへ襲撃とは・・・・」
夏侯淵ダラス
「おもしろい。今度こそ決着をつけてやる!!」
秋蘭
「ああ!!」

夏侯兄妹は戦闘態勢をとるが、張遼ゲルググと霞は馬から降りると膝をついた。

張遼ゲルググ
「我ら張遼!!」
霞
「曹操軍に投降するで!!」
春蘭
「何!!?」

曹操軍は官渡の手前で陣を作ると、張遼ゲルググと霞から幽州攻略のことを伝えた。

程?ワイズワラビー
「なんと・・・・民のために降伏した公孫賛殿をだまし討ちするとは・・・」
関羽ガンダム
「卑怯なり!!袁紹!!」
愛紗

「奴のやっていることは獣以下だ！！」

一刀

「ああ、許せねェ！！」

霞

「うちらは今まで呂布将軍についてきた・・・せやけど降伏した武将をだまし討ちしたためらいもない袁紹に加担することはできへん！！」

張遼ゲルググ

「そうだ！！曹操殿！！我ら二人の張遼、これより貴方方の軍で闘わせてください！！」

張遼ゲルググと霞は曹操ガンダムと華琳に頭を下げた。

華琳

「ほう・・・呂布を裏切り、私達につくというのね。」

すると・・・・

桂花

「華琳様、お言葉ですが、今まで敵として闘ったものを仲間にすることなんてできません！！」

郭嘉ヴァサーゴ

「桂花さんの言うとおりですよ。」

夏侯淵ダラス

「そのとおりだ！！」

秋蘭

「呂布は我々と死闘を繰り広げている。宿命の敵！！」

夏侯惇ギロス

「そうだ！！我が目に付けた傷の痛み、忘れはせんぞ！！」

春蘭

「簡単に信用できるものか！！」

夏侯惇ギロスと春蘭は董卓軍の戦いで片目に傷を負ってしまったのであった。春蘭は眼に傷をつけただけであったが、夏侯惇ギロスは完全に眼が潰れてしまい、眼帯をつけているのであった。

霞
「信用できへんのは無理もあらへんな・・・・」

張遼ゲルググ
「ならば我らだけでも袁紹と戦うまでだ！！」

張遼ゲルググと霞は立ち上がって、その場から去ろうとしたその時・・・

関羽ガンダム
「待たれよ！！たしかに呂布は敵！！」

愛紗
「だが、この公孫賛殿の死に憤りを感じた張遼殿達の眼に一片の曇りなし！！」

一刀
「この二人の言葉信じてみる価値はあるぜ！！」

張遼ゲルググ
「関羽殿！！」

霞
「あんたらというやつは・・・」

春蘭
「な！？」

一同は驚いた。

風
「お兄さん達の言葉にも一理はありますね。」
夏侯淵ダラス
「武将として迎えることなどありえぬ！！」
桂花
「いきなり信じろというのは無理に決まっているわ！！」

すると

華琳
「静まりなさい。」
張遼ゲルググ
「曹操殿！！」
曹操ガンダム
「二人の張遼よ、公孫賛を倒した袁紹の言葉を述べよ・・・・・・」
霞
「わかったで。袁紹はこういったんや。（この袁紹が天と地を一つにし、三璃紗全土を支配する帝王となる時が来た！！）と・・・・・・」
華琳
「袁紹め・・・・・天を望むなんて・・・・」
曹操ガンダム
「玉璽を手に入れて自らも見誤ったか！！！」
司馬懿サザビー
「しかし袁紹は軍師の策に従い、玉璽を手に取らず、魂をとられないようしているとか・・奴めの野心あり得るかもしれません。」
華琳
「さすがは天を自称するだけのことはあるわね。」

そして、曹操ガンダムと華琳は天に指をさした。

曹操ガンダム
「袁紹は帝王と名乗り、この三璃紗を支配しようとしている！！もはや奴が我ら曹操と々天と抱くことはない！！」
華琳
「三璃紗を統べるのは、我ら曹操のみだ！！！」

一同は一斉に頭を下げた。そして・・・曹操ガンダムと華琳は張遼ゲルググと霞の前まで歩いてきた。

曹操ガンダム
「張遼よ。余の軍に入ることは余の理想のために戦うことになる。」
華琳
「私達が袁紹と戦えば貴方達は呂布と矛を交えるかもしれないわ。わかっているわね。」
張遼
「呂布将軍と戦えるなら、武将として本望！！」
霞
「そういうことや！！」

そして・・・・・

華琳
「関羽と愛紗と一刀の言うとおりだわ。この二人の眼には一片の曇りがないわよ。」
曹操ガンダム
「余の理想と共に闘う戦士ならたとえ昨日までの敵といえど、今日から我らの部下だ！！」
華琳
「張遼、霞！！私達の矛となって袁紹軍を打ち砕きなさい！！」

張遼ゲルググ
「曹操殿、華琳殿・・・・・・」

そして・・・・

曹操ガンダム
「敵は袁紹軍!!」
華琳
「戦場は官渡だ!!!!!」

そして、曹操軍も陣の設営を急がせて、官渡へと向かった。

そのころ

斗詩
「麗羽様、本当にいいんですね!!」
猪々
「あの袁紹様・いや袁紹の野郎を裏切るんですね。」
麗羽
「もちろんですわ!!!彼のやっていることは袁家の名門を汚したのですから!!そのために彼を討伐します!!!目指すは官渡ですわ!!!!」

麗羽達も官渡へと目指したのであった。

袁紹軍と曹操軍は決戦の地、官渡へと向かった。

第２０話『全軍官渡へ』（後書き）

次回予告

二人の関羽と張遼は官渡で奇襲を決行する。

次回　第２１話『官渡の戦い』

第２１話『官渡の戦い』（前書き）

この話で魏の恋姫キャラは全部出ます。それからあの二人も生存させました。

第２１話『官渡の戦い』

官渡で先遣部隊が袁紹軍の前線基地へと向かって行くが・・・・・、
突然の炎に部隊は混乱していくのであった。

兵士
「隊長、袁紹軍の罠です！！」
隊長
「火計の罠か・・退け！！退け！！！」

部隊は撤退しようとするが、前方に二人の武将がいた。

兵士
「隊長、あれは・・・・・」
隊長
「くっ・・・・退路を断たれたか・・・・・」
顔良ガズアル
「我こそは袁紹軍・右将軍、顔良！！」
文醜ガズエル
「同じく、左将軍・文醜！！」
隊長
「げっ！！！顔良・文醜兄弟！！？」

そして・・・・

顔良ガズアル・文醜ガズエル
「「必殺・金剛爆炎破！！！！！！」」

顔良ガズアル・文醜ガズエルの合体攻撃で先遣部隊は全滅した。そ

して、それを沮授Ｒジャジャは見ていた。

沮授Ｒジャジャ
「美しい。愚か者が罠にはまって死んでいく姿の何と美しいことでしょう。そして、この私も美しい罠を張るこの私も美しい！！」

沮授Ｒジャジャは笑いながら去った。

第２１話『官渡の戦い』

そのころ、曹操軍本陣では

程？ワイズワラビー
「ふむ、先遣部隊は全滅か、さすがは罠の天才、沮授」

風
「前線基地とは簡単には抜けられないのですね」

郭嘉ヴァサーゴ
「大軍では難しい・・・・では逆に少数の決死隊を送るというのはどうでしょう？」

郭嘉（真名・稟）
「決死隊ですか・・・・」

郭嘉ヴァサーゴ
「本体より先に罠だらけの官渡に突入して。罠を統べて受けてもらうのです」

稟
「そんな、それでは文字通り死にに行くようなものです！！」

程？ワイズワラビー
「稟殿の言うとおりだ！！そんな危険な作戦につかせられる武将など・・・」

郭嘉ヴァサーゴ

「いるじゃないですか・・・自分達から力になると言い切った戦士達が・・・」

郭嘉ヴァサーゴは関羽ガンダム、愛紗、一刀に行かせることにした

関平ガンダム
「そんなたった三人だけで行くなんて無茶だよ・・・」

関羽ガンダム
「たしかに無茶かもしれない」

関平ガンダム
「じゃあ、なんで、引き受けたり・・・」

愛紗
「それでも戦士にはどんなに怖くても無茶でも決して逃げてはいけない時があるのだ。」

一刀
「お前にもそれがわかる時が来るさ」

そして、三人は官渡へと向かった。

張遼ゲルググ
「関羽殿・・・・」

霞
「・・・・・・・」

そのころ、官渡では・・・・・

兵士?
「曹操軍め・・・すっかりおとなしくなったな」

兵士?
「そりゃそうさ。沮授様の罠の前では手足も出なかったんだ」

兵士？
「でも、このままじゃ俺達暇で困っちまうよな」

一同は笑っていた。そこへ・・・・河から

関羽ガンダム
「では・・・・」
鬼神王・愛紗
「我らが・・・・」
閃光装・一刀
「忙しくさせてやるぜ！！」

関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀が現れた。

兵士
「大変です！！　沮授様！！河の中から曹操軍が現れ、こちらに向かってきます！！」
沮授Ｒジャジャ
「ほう、それで数は？」
兵士
「それがたった三人で・・・・」
沮授Ｒジャジャ
「何？三人？」

沮授Ｒジャジャが見た先には火計の罠を突破した関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀の姿が見えた。

兵士
「火計の罠、突破されました！！」
沮授Ｒジャジャ

「なるほどそのためにも河を渡ってきたというのですか。でも罠は火だけではないのですよ！！！」

兵士達は弾薬を詰めた矢を放った。

関羽ガンダム
「ふん・・・・これしきの罠・・・・・・」
鬼神王・愛紗
「我らには効かぬ！！」

三人は攻撃するのだが、煙が出てきた。

閃光装・一刀
「くっ・・・炸裂弾か・・・・」

三人は視界が最悪な状況になっても進み続けた。

沮授Ｒジャジャ
「ふふふ・・なかなかやりますね・・・ですが・・・」

突然、三人の足元が崩れた。何とか落ちずに済んだ。

閃光装・一刀
「落とし穴か・・・・」
鬼神王・愛紗
「小癪な罠を・・・はりおって」
沮授Ｒジャジャ
「おーっほっほ！！美しく死になさい！！弩弓砲発射！！！」

そして、弩弓砲が発射された。

関羽ガンダム
「おのれ・・・」

しかし、何者かの攻撃によって、関羽ガンダム達は助かった。そして手を差し出したのは・・・・

関羽ガンダム
「張遼!!?」
張遼ゲルググ
「掴まれ関羽殿、北郷殿!!」
飛龍鎧・霞
「はやおしい!!」

張遼ゲルググと飛龍鎧・霞であった。

鬼神王・愛紗
「なぜここに・・・」
飛龍鎧・霞
「あんたらの曹操将軍の力になろうとしている想いに一片の曇りもなかった」
張遼ゲルググ
「私と霞も同じだ。同じ旗印の下で闘う以上、我らは仲間ではないか。戦友達が死地に向かっていることをほっとくことができん!!」
閃光装・一刀
「張遼・・・・」

そして・・・

鬼神王・愛紗

「かたじけない。張遼達よ・・・」
飛龍鎧・霞
「霞や」
鬼牙王・愛紗
「え！？」
飛龍鎧・霞
「共に戦って行く仲や。うちのことは霞でええで！！」
鬼神王・愛紗
「なら私も愛紗で・・行くか霞！！」
閃光装・一刀
「俺も一刀でいいぜ」
飛龍鎧・霞
「おう！！いくで、愛紗、一刀！！」
関羽ガンダム
「我らも行くか、張遼！！」
張遼ゲルググ
「ああ！！いざ共に戦おう、関羽！！」

五人はさらに進み続けた。兵士達はさらに弩弓砲を発射しようとするが・・・・

張遼ゲルググ
「蒼紋！！」
飛龍鎧・霞
「龍牙！！」
関羽ガンダム
「百列！！」
鬼神王・愛紗
「撃！！！！」

四人の攻撃で兵士達は全滅した。閃光装・一刀も負けじと敵を攻撃していた。

そのころ、袁紹軍の別の基地では・・・・、一人の少女に兵士達は止まってしまった。

許緒（真名・季衣）
「さあ、来い!!!僕が相手になってやるぞ!!」

兵士
「ふっ、俺達の相手がこんなチビだとは・・・な・・・」

カッチーン!!

季衣
「チビって・・・・言ったな・・・・」

兵士
「だから・・どうした?」

季衣
「・・・・・・・・ぶっ飛ばす!!!!!」

季衣は持っていた鉄球で兵士達を吹き飛ばした。

兵士
「何!!?」

さらにそこへ夏侯惇ギロス、夏侯淵ダラス、狼を模した鎧を装備した春蘭と秋蘭が現れた。

夏侯惇ギロス
「関羽と張遼と小僧にばかりいい格好はさねぇぞ!!!」

紅狼装・春蘭
「そうだな！！！」
夏侯淵ダラス
「さあ来い雑魚ども！！！」
蒼狼装・秋蘭
「夏候兄妹、ここにあり！！！」

兵士達は立ち向かおうとするが、

夏侯惇ギロス
「やるぞ！！淵！！」
夏侯淵ダラス
「おう！！兄者！！」
紅狼装・春蘭
「我らも行くぞ！！秋蘭！！」
蒼狼装・秋蘭
「ああ！！姉者！！」
夏侯惇ギロス、夏侯淵ダラス
「「隼鋼二重閃！！！！」」
紅狼装・春蘭、蒼狼装・秋蘭
「「牙狼双刃斬！！！！」」
兵士
「ぐわあああああああああああああああ！！！！！！」

夏候兄妹の放った合体技によって、全滅した。

夏候兄妹
「「「「我らに死角なし！！！」」」」

そのころ、関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀、張遼ゲル

ググ、飛龍鎧・霞は前線基地まで進んでいた。そこへ・・・・・

顔良ガズアル
「我ら顔良・文醜兄弟!!」
文醜ガズエル
「この先には通さぬぞ!!!」

顔良・文醜兄弟が立ちふさがった

鬼神王・愛紗
「そうはいかぬ!!」
飛龍鎧・霞
「うちらを止めれるものやら、止めて見せろ!!」
顔良ガズアル・文醜ガズエル
「「必殺・金剛・・・・・」」

その時!!!

猪々子
「そうは・・・」
斗詩
「させません!!」

そこへ猪々子と斗詩が現れ、顔良・文醜兄弟を止めた!!!

顔良ガズアル
「何だと!!」
文醜ガズエル
「貴様ら、袁紹様を裏切るのか!!!?」
猪々子

「ここはあたいらに任せて・・・・・」
斗詩
「早く進んでください！！！」

二人の想いを知った関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀、張遼ゲルググ、飛龍鎧・霞は先へ進んだ。

そのころ、沮授Ｒジャジャは前線基地から逃げ出していた。

沮授Ｒジャジャ
「まさかあの二人が裏切るとは・・・ひぃ！！？お前達は・・・・」

そんな、沮授Ｒジャジャの眼の前に関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀、張遼ゲルググ、飛龍鎧・霞が現れた。

関羽ガンダム
「どこへ行くつもりだ？」
張遼ゲルググ
「逃がしはせんぞ！！」
飛龍鎧・霞
「しかし、兵を盾に自分だけ逃げだすとは・・・」
鬼神王・愛紗
「貴様、それでも一軍の将か！！」
閃光装・一刀
「覚悟しろよ・・・・」

五人は沮授Ｒジャジャをじりじりと追い詰めた。沮授Ｒジャジャはあたりを見回していた。そこへ大岩が五人の上に落とされた。

関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀、張遼ゲルググ、飛龍鎧・霞
「「「「「！！！！！？」」」」」
どっしーん！！！！！
沮授Rジャジャ
「ふふふふ・・・・！！！！見事に引っ掛かりましたね。私の罠は完ぺきなのです！！美しい・・・実に美しい・・・・そして、この私自身も美しいのです。あっーはっはっは！！！」
罠が成功した沮授Rジャジャは高笑いをした。その時・・・・・
ピシッ！！
沮授Rジャジャ
「は？」
どかあああああああああああああああん！！！！！
沮授Rジャジャ
「ひ！！？」
大岩がくずれ、そこから無傷の関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀、張遼ゲルググ、飛龍鎧・霞が現れたのであった。
関羽ガンダム
「どうやら、得意の罠もネタ切れのようだな」
鬼神王・愛紗
「今度こそ追い詰めたぞ」

沮授Rジャジャ
「ひ・・・ひぃ・・・・・・」

五人は沮授Rジャジャを追い詰め・・・・そして・・・・

関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀、張遼ゲルググ、飛龍鎧・霞
「「「「「覚悟!!!!!」」」」」

ザシュ!!

五人の怒りの一撃で沮授Rジャジャを攻撃した。

沮授Rジャジャ
「ぎゃあああああああ!!!いやだ!こんな・・・・美しくない!うつく・・・しく・・・ない!!」

関羽ガンダム、鬼神王・愛紗
「「その愚かさ・・・」」

張遼ゲルググ、飛龍鎧・霞
「「地獄の底で・・・」」

閃光装・一刀
「悔いるがいい!!」

沮授Rジャジャは倒れ、爆発した。五人はその場から去った。

そのころ、顔良・文醜兄弟と斗詩と猪々子は・・・・・

顔良ガズアル
「何!?前線基地がやられだと!!?」

文醜ガズエル

「おのれ！！こうなったらお前らの相手をしている暇はない！！」

顔良・文醜兄弟は追撃をしようとするが・・・・・

斗詩
「まだあんな外道に従うつもりなのですか！！」

猪々子
「張？将軍の兵や烏丸の残党みたいに捨て駒されてもいいのかよ！！？」

顔良ガズアル
「どういうことだ！？」

文醜ガズエル
「説明しろ！！」

斗詩と猪々子はこれまでのことと美羽を人質に取っていることを話した。

顔良ガズアル
「なんということだ・・・袁紹様がそのようなことを・・・！？」

文醜ガズエル
「俺達はあんな外道な領主に従っていたのか・・・！！」

猪々子
「敵味方関係なく逆らったものには皆殺しなんてありえん！！」

斗詩
「このままでは捨て駒にされて殺されてしまいます。どうか麗羽様の力に・・・・」

そして、顔良・文醜兄弟の答えは・・・・・・

顔良ガズアル

「わかった。我らも麗羽様の下で闘おう。」
斗詩
「よかった・・・・・」

こうして、顔良・文醜兄弟は麗羽達の仲間になった。

そのころ、曹操軍は・・・・・・・・

郭嘉ヴァサーゴ
「いやぁ・・・・二人の関羽さんと二人の張遼さん、それと北郷さん、本当にあれだけの罠を突破して、前線基地をつぶしちゃうなんてね」
桂花
「まさか・・・・突破しちゃうなんて・・・・」
曹操ガンダム
「風は我が軍に吹き始めたな」
紅連王・華琳
「そのようね」

そして、曹操ガンダムと紅連王・華琳は前に出た。

紅連王・華琳
「これより我が軍は本陣の袁紹を討つ！！」
曹操ガンダム
「全軍、突撃せよ！！！」
「おおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

そのころ、前線基地陥落を見ていた田豊ガルスＪは・・・・

田豊ガルスＪ

「前線基地がやられたか・・・罠の天才、沮授を倒すとは・・・・
曹操軍、侮りがたし・・だが、曹操よ、私には切り札があるのだ」

田豊ガルスＪは呂布トールギスを見た。

そのころ・・・・徐州では・・・・・

恋

「・・・・・・・奉先・・・・・・・」

恋は何かを感じ始めたのであった。

第２１話『官渡の戦い』（後書き）

次回予告

袁紹軍との戦いにて、ついに天の力が覚醒する。

次回　第２２話『天に選ばれし者』

第２２話『天に選ばれし者』（前書き）

今回で袁紹編は終わります。いよいよストーリーも佳境になってきました。

第２２話『天に選ばれし者』

官渡の戦いに勝利した曹操軍は袁紹軍・本陣まで一気に進軍した。
しかし・・・・

呂布トールギス
「暴風激烈斬！！！！！！」

呂布トールギスによって戦況は不利になっていた。そして、呂布トールギスはなおも曹操軍・本陣までやってきた

呂布トールギス
「うおおおおおおおおおおおおお！！！！！曹操、覚悟はいいか！！！！」
司馬懿サザビー
「くっ、最終防衛線を突破されてしまったか・・・・」
桂花
「このままでは呂布が本陣に向かってきます。」

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は剣をとって戦闘態勢をとった。するとそこへ・・・・

張遼ゲルググ、飛龍鎧・霞
「「うおおおおおおおおおおおおお！！！！！」」

張遼ゲルググと飛龍鎧・霞が呂布トールギスを止めたのであった。

張遼ゲルググ
「この先には行かせるわけにはいきません！！」

飛龍鎧・霞
「例え、それが呂布将軍であろうとな!!」
呂布トールギス
「ふっ、何の真似だ?張遼、霞!!」

第２２話『天に選ばれし者』

呂布トールギスが本陣手前に止まっていることを袁紹バウと田豊ガルスＪは確認していた

袁紹バウ
「なんだ?どうしたというのだ?敵本陣手前で呂布が止まったようだな」
田豊ガルスＪ
「何をしている、呂布!!?」

呂布トールギス
「曹操に寝返ったというのか?」
飛龍鎧・霞
「袁紹はうちらの誇りを地に落としたんや!!あのような主の下で闘うことなどできへん!!」
張遼ゲルググ
「呂布将軍!!貴方は袁紹の下で闘うおつもりなのですか?」
呂布トールギス
「主がどのような奴など関係ない!!俺に戦場を与える、それだけで十分だ!!」
張遼ゲルググ
「わかりました。」
飛龍鎧・霞
「うちらがあんたの下で闘うことはもうあらへんな」

そして・・・・・

呂布トールギス
「そうか・・・・・ならば!!」

呂布トールギスは二人に攻撃を仕掛けた

張遼ゲルググ
「くっ・・・」

飛龍鎧・霞
「なんちゅう、攻撃なんや!!」

するとそこへ・・・・・

関羽ガンダム
「張遼!!」

鬼神王・愛紗
「霞!!!」

閃光装・一刀
「助太刀するぜ!!」

張遼ゲルググ
「関羽!!」

飛龍鎧・霞
「愛紗、一刀!!!」

呂布トールギス
「おもしろい・・・まとめてかかってこい!!!」

そして、こちらでも戦いは始まった。そのころ、劉備ガンダム達も官渡へとたどり着いた

轟雷王・鈴々
「やっと、たどり着いたのだ！！」
張飛ガンダム
「もう、戦が始まっているぜ！！」
白蓮
「我らも遅れるわけにはいかぬな！！」
劉備ガンダム
「俺達も行くぞ！！」
翔龍王・桃香
「袁紹を倒して、公孫賛兄さんの仇をとるよ！！」

そして、七人も向かって行った

そのころ、袁紹軍・本陣では

袁紹バウ
「何！！？呂布がまだ前線を突破できぬというのか！！？」
伝令
「はっ、曹操軍、本陣まであと一歩という手前なのですが・・・・」
袁紹バウ
「ええい！！　田豊、どうするのだ！！？呂布が斯様な体たらくではワシの首が捕られるわ！！曹操の兵どもはすぐそこまで来ているのだぞ！！」

すると・・・・

伝令
「袁紹様・・・・・・」
袁紹バウ

「なんだ!!?」
伝令
「背後から敵襲です・・・・」

そのころ、劉備ガンダム、翔龍王・桃香、張飛ガンダム、轟雷王・鈴々、趙雲ガンダム、昇龍装・星、白蓮は袁紹軍を攻撃していた

劉備ガンダム
「俺達の狙いは袁紹のみ!!!」
白蓮
「雑魚は引っ込んでろ!!」
趙雲ガンダム
「公孫賛将軍のかたきを討つために!!」
昇龍装・星
「我らの邪魔をするな!!」

彼らは敵を倒しつつあった。そして、奇襲を仕掛けたのは彼らだけではなかった

それは麗羽達であった

麗羽
「今こそ、袁一族の名と誇りを穢した大罪人・袁紹を討つべしですわ!!」

猪々子、斗詩、顔良・文醜兄弟、袁紹に対して反乱を決めた兵達も奇襲を開始していたのであった

袁紹バウ
「麗羽め、ワシを裏切りおったな!!」

田豊ガルスＪ
「まさか、袁紹様に対して反乱をおこすとは・・・・」
袁紹バウ
「くっ・・・このままでは負けてしまう・・・どうすればよいのじゃ!?・・・どうすれば・・・・・はっ!!!?」

悩んでいる袁紹バウが視線を向けた先は・・・・・玉璽であった

田豊ガルスＪ
「袁紹閣下・・・・まさか・・・・・」
袁紹バウ
「今、使わずしてなんとする!!強大な力が手に入るのだぞ!!」
田豊ガルスＪ
「しかし・・・玉時に魅入られてしまったら魂を奪われますぞ!!!弟君、袁術様のように・・・・」
袁紹バウ
「玉璽に選ばれし者ならそうはならぬはず!!ワシがそうか、そうでないか自ら使えばわかるのだぞ!!!」
田豊ガルスＪ
「危険でございます!!!」
袁紹バウ
「この戦に曹操達が勝てば三璃紗は奴らのものになる!!!それだけは断じてさせぬ!!!三璃紗の天と地、それを支配する帝王はこのワシ、袁招だ!!!!!!!」

そして、袁紹バウは玉璽に触ってしまった。そして・・・・周りから強い気が立ち上がり・・

田豊ガルスＪ
「閣下・・・・ぐわあああああああああああああああ!!!!

！！！」

本陣は爆発してしまった。そして、そこから袁紹バウと玉璽が現れた

麗羽
「今の気は・・・・・いったい・・・・・」

麗羽達、反袁紹軍も何かを感じ始めた。

そのころ、劉備ガンダム達も本陣までやってきた

翔龍王・桃香
「あれが本陣だよ！！」
趙雲ガンダム
「袁紹・・・・」
白蓮
「貴様だけは許さん！！」

劉備ガンダム達も本陣に向かって行った。そして、気から現れたのは袁術ズサの十極呪導鎧を装備した袁紹バウの姿、袁紹バウ・龍飛形態であった。そして、そのまま、飛び去ってしまった

劉備ガンダム
「あれはいったいなんだ？」
昇龍装・星
「急ごう！！！」

彼らも本陣へと向かって行くのであった。そこはすでに廃墟になっていた

白蓮
「どうなっているんだ!?」
翔龍王・桃香
「いったい・・・・何が・・・・ん?」

桃香は何かを踏んだ感触をした

翔龍王・桃香
「ひゃあああああああ!!!!何か踏んだ!!!?」

それは田豊ガルスJの死体であった

趙雲ガンダム
「こ奴、袁紹軍の軍師・田豊!!?」
劉備ガンダム
「死んでいる・・・いったい何が・・・・」
張飛ガンダム
「なんってこった!!!?」

そのころ、袁紹バウは曹操軍・本陣まで迫ってきた

袁紹バウ
「ワシの首、捕れるものなら捕ってみろ!!!!!!」

そのころ、曹操軍本陣では

郭嘉ヴァサーゴ
「この官渡で袁紹を倒せば、三璃紗統一まであと一歩ですね」
紅蓮王・華琳
「確かにそのようね」

曹操ガンダム
「ん・・・！？」

すると何かがこちらに向かってきた

袁紹バウ
「曹操！！！！！」

そして、その場に落ちた

桂花
「何よ！！？いったい！！！」
郭嘉ヴァサーゴ
「何が起きたんだ！！？」

燃え盛る炎と共に現れたのは玉璽と袁紹バウ・龍飛形態であった

袁紹バウ
「曹操！！！！！！」
曹操ガンダム
「袁紹！！？」
紅蓮王・華琳
「何なのよ！！？あの姿は！！？」
司馬懿サザビー
「あれは玉璽の力か・・・・・」
袁紹バウ
「生かしてはおかぬ！！！！」
兵士
「殿達を守れ！！」

兵士達は挑もうとしたが

袁紹バウ
「邪魔だ！！！」
兵士
「ぐわあああああああああああああああ！！！！！」

袁紹バウの圧倒的な攻撃で倒されてしまった

袁紹バウ
「ふはははははは！！！！！素晴らしいぞ！！！この力は！！！」

そして、曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は前に出た

桂花
「華琳様、曹操様！！！危険です！！！」
紅蓮王・華琳
「あれは私達の理想を立ちふさがる壁よ。止めないで」
曹操ガンダム
「そうだ！！この手で突き破らない限り・・・・」
曹操ガンダム・紅蓮王・華琳
「「覇行はなせぬ！！！」」

二人は袁紹バウの所へと向かって行くのであった

郭嘉ヴァサーゴ
「袁紹は玉璽によって力を得た。勝てませんよ」
桂花
「何言っているのよ！！あの二人が負けるなんてありえないわ！！」
司馬懿サザビー

「桂花の言うとおりだ。もし曹操様と華琳様が伝説の力に選ばれし者ならより強大な力を玉璽は与える！！」

桂花
「それってつまり二人もあの力を・・・・・」

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は袁紹バウに向かった

曹操ガンダム
「弟、袁術の元へと向かうがいい！！！」

紅蓮王・華琳
「覚悟しなさい！！！」

袁紹バウ
「無駄じゃ！！！」

曹操ガンダム
「大紅蓮斬！！！」

紅蓮王・華琳
「超烈火斬！！！」

二人はそれぞれの必殺技を袁紹バウに放った。そして、爆発した

桂花
「やった！！」

紅蓮王・華琳
「いや・・・・」

しかし、炎から無傷の袁紹バウが現れたのであった

袁紹バウ
「うわはははははははは！！！！！！まるで効かぬわ！！！！！」

曹操ガンダム

「何！！？」

袁紹バウは剣で曹操ガンダムと紅蓮王・華琳を攻撃した。二人は一度目の攻撃を防いだが、二度目の攻撃は防ぎきれず、吹き飛ばされてしまった

曹操ガンダム
「ぐわあああ！！」
紅蓮王・華琳
「きゃあ！！！？」
郭嘉ヴァサーゴ
「曹操様！！」
桂花
「華琳様！！！！」

二人はその場に倒れこんでしまった

袁紹バウ
「ぐわはははははははははは！！！！！！！！」
曹操ガンダム
「ぐっ・・・・」
紅蓮王・華琳
「がっ・・・・・・」

二人は立ち上がろうとするが、ダメージが大きすぎて立ち上がることができなかった

袁紹バウ
「無様な姿じゃのう！！！！見よ、これが貴様らの主の姿よ！！！斯様なものごときに三璃紗支配などかなわぬわ！！！！！それがで

きるのはこのワシのみよ！！！！ぐわはははははははははは！！！！！」

紅蓮王・華琳

「私達が・・・三璃紗の覇者となるべき私達が・・・動くことすらかなわないというの・・・・・」

袁紹バウ

「ぐふふふふ・・・・くやしそうじゃのう！！！よしよし、ワシに慈悲はある。そろそろ楽にしてやるわ！！！！」

曹操ガンダム

「余に・・・・・力を・・・・・」

紅蓮王・華琳

「この邪悪なる力を打ち破る力を・・・・・」

そして・・・・・

袁紹バウ

「喰らえ！！！紹術・地獄炎！！！！！」

袁紹バウの放った邪悪なる炎は曹操ガンダムと紅蓮王・華琳を攻撃した

袁紹バウ

「わははははは！！！！！燃えろ、燃えろ！！！！！三璃紗の帝王はこのワシじゃ！！！刃向かうものは皆滅びるのじゃ！！！！」

袁紹バウは高笑いをしていた。すると・・・・曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は立ちあがった

袁紹バウ

「ん！！？」

曹操ガンダム
「斯様な炎で・・・・」
紅蓮王・華琳
「我らを焼きつくせるとでも思ったの！！！」
袁紹バウ
「なんだと！！！？」

すると玉璽は曹操ガンダムと紅蓮王・華琳の元へとやってきた。そして、天から光が降り立った。そして、天から鳳凰を模した鎧、天玉鎧と神鎧獣が現れた

司馬懿サザビー
「あれこそまさに全てを超える天の力！！！」
曹操ガンダム
「天玉鎧・炎鳳！！！！」
紅蓮王・華琳
「神鎧獣・紅鳳！！！！！」

曹操ガンダムは炎鳳を、紅蓮王・華琳は紅鳳を鎧のように装備した

袁紹バウ
「こ・・こんなことはあり得ぬ！！！」
曹操ガンダム
「貴様に三璃紗の支配はさせぬ！！！それは三璃紗の破滅を招くのみ！！！」
紅蓮王・華琳
「そのようなまねは天が許さない！！！」
曹操ガンダム、紅蓮王・華琳
「「天の怒り、思い知れ！！！」」

二人は炎に包まれると、それぞれ炎に包まれた鳳凰の姿となって、
袁紹バウに突撃した

「ギイイイイイイイイイ！！！！！！！！」

袁紹バウ
「ぐわあああああああああああ！！！！！！み・・三璃紗の帝王が帝王がかなわぬのなら・・・地獄の帝王になって見せるわ！！！わはははははははははははははははは！！！！！！！」

袁紹バウは高笑いをしながら燃え尽きてしまったのであった

司馬懿サザビー
「やはり、曹操様と華琳様は伝説の力を持ちし者であった・・・・」

曹操ガンダム
「これが・・・・天玉鎧・・・」

紅蓮王・華琳
「神鎧獣・・・・」

そのころ、劉備ガンダム達はその様子を見ていた

劉備ガンダム
「あの輝きは・・・・」

翔龍王・桃香
「私達のときと同じ・・・・・」

そのころ、関羽ガンダム達と戦っていた呂布トールギスは・・・・

呂布
「くくくくく・・・はははは！！！！！曹操！！！！俺はこの時

を待っていた！！！！！」

何かを感じ始め、走り出した

鬼神王・愛紗
「何！！？」
飛龍鎧・霞
「なにがあったんや！！？」
張遼ゲルググ
「まさか・・・・」
関羽ガンダム
「曹操将軍のもとへか・・・」

そのころ、劉備ガンダム達もようやく曹操軍本陣へとたどり着いた

趙雲ガンダム
「曹操軍本陣で何かがあったようですね」
昇龍装・星
「いったい・・・・」
劉備ガンダム
「あの輝き、天玉鎧と神鎧獣に似ている」
翔龍王・桃香
「うん。」
張飛ガンダム
「何が起きているんだ？」
翔龍王・桃香
「私達も急ごう！！」

そのころ、曹操軍本陣では・・・

司馬懿サザビー
「そのお姿はまさにG記に記されていたとおりです。それはたしかに天玉鎧と神鎧獣かと・・・」
曹操ガンダム
「天の力が我らに力を与えたというのか・・・・・」

その時

呂布トールギス
「魂！！！！！！！！！！！！曹操！！！！！！！！」

呂布トールギス
「ついに天玉鎧と神鎧獣を呼びだしたのか・・・・・」
紅蓮王。華琳
「呂布か・・・・・・」
司馬懿サザビー
「血迷ったか、呂布！！殿達はいま伝説の力を身にまとったのだぞ！！！！」
曹操ガンダム
「今のお前では我らの相手ではない」
呂布トールギス
「ふふふ・・・ははははははははは！！！！今のお前たちこそ俺の求める魂！！！曹操、勝負しろ！！！！」
曹操ガンダム
「よかろう・・・貴様の命、貰うぞ！！！！」
呂布トールギス
「ふふふふふ・・・・修羅は死など恐れぬ！！！！！」

すると突然、玉璽が輝き始めた

紅蓮王・華琳
「何！！？」
司馬懿サザビー
「どういうことだ！！！？なぜ呂布にも反応しているのだ！！？」
桂花
「何がどうなっているのよ！！？」
呂布トールギス
「暴風激烈斬！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
呂布トールギスは最大の必殺技をはなった
曹操ガンダム
「大紅蓮斬！！！」
紅蓮王・華琳
「超烈火斬！！！」
曹操ガンダムと紅蓮王・華琳も最大の必殺技を放った。そして、それぞれがぶつかり合い、炎の竜巻となった
呂布トールギス
「ふはははははははは！！！！！滾る、俺の血がかつてないほどにたぎるわ！！！！！」
そして、ついに戦いが始まった。戦況は曹操ガンダムと紅蓮王・華琳が有利であった
呂布トールギス
「まだだ・・・俺の血は滾ることを求めている！！！！魂！！！！！！！！」

呂布トールギスはなおも、攻撃を仕掛けようとしていた

曹操ガンダム
「我らには三璃紗統一の天命あり・・・・」
紅蓮王・華琳
「ここで倒れるわけにはいかないのよ！！！！」

そして、玉璽の輝きはさらに増していた

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳
「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」」

そして、その姿は袁紹バウを葬った炎の鳳凰の姿なった

「ギイイイイイイイイイイイ！！！！！！！！！」
曹操ガンダム
「天鳳華焔斬！！！！！！」
紅蓮王・華琳
「天鳳烈火斬！！！！！！」
呂布トールギス
「何！！！？」

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は呂布トールギスを斬った

呂布トールギス
「これが・・・・天玉鎧と神鎧獣の力・・・・天の力か！！！！！！・・・・ふふふ・・・・俺は今、己の命を感じている・・・・・」

そして、爆発したのであった。そして、玉璽は再び天へと戻った。
そして、曹操ガンダムと紅蓮王・華琳はその場に立っていた

曹操ガンダム
「呂布・・・」
紅蓮王・華琳
「あのような奴は二度と現れないわ。」
藍
「殿、華琳様、天玉鎧と神鎧獣は・・・・・」

藍に聞かれると曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は玉璽のほうを向いた

徐晃サーペント
「玉璽が・・・・」
藍
「追うぞ!!!」
曹操ガンダム
「放っておけ!!」
藍
「しかし・・・・」
紅蓮王・華琳
「玉璽とは天の意思そのものよ・・・・」
曹操ガンダム
「いずれ向こうから来る・・・」

そして、曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は天に指をさした。そこへ関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀がやってきた

関羽ガンダム
「曹操・・・・」

鬼神王・愛紗
「何という人だ」
閃光装・一刀
「ああ・・・・」

そのころ、呂布トールギスのところへと張遼ゲルググと飛龍鎧・霞は向かっていた。そこへ呂布トールギスの愛馬、赤兎馬がやってきた

飛龍鎧・霞
「赤兎!!!?なんであんたがここにおるんや!!?」
張遼ゲルググ
「・・・そうか・・・・生き残ったのはお前だけか・・・・」

そして、劉備ガンダム達もやってきた

轟雷王・鈴々
「袁紹も呂布も皆倒しちゃったのだ」
白蓮
「戦いはすでに終わっていたというのか・・・・」
劉備ガンダム
「今度こそ戦がなくなり・・・・」
翔龍王・桃香
「平和が戻るのかな・・・・・・」

こうして、袁紹軍との戦いに勝利した二人の曹操は勝どきを挙げた

そのころ・・・恋は・・・・
恋
「奉先・・・・後は任せて・・・・・」

恋は呂布トールギスが死んだことを知り、涙を流したのであった。

第２２話『天に選ばれし者』（後書き）

次回予告

二人の関羽と天の遣い、ついに帰還する

次回　第２３話『千里を超えた絆』

第２３話『千里を超えた絆』（前書き）

今回から赤壁編が始まります。後、おまけも付いています。

第２３話『千里を超えた絆』

官渡の戦いに勝利した二人の曹操は三璃紗、北部を完全に制圧。三璃紗統一の覇行は現実になろうとしていた

第２３話『千里を超えた絆』

許昌へと戻った曹操達の元へ司馬懿サザビーがやってきた

司馬懿サザビー
「曹操様、華琳様。三璃紗南部の攻略準備が整いました。つきましては曹操様と華琳様にお渡ししたいものがあります・・・・」

曹操ガンダム
「ほう・・・・」

華琳
「何かしら・・・・・」

司馬懿サザビーはあるものを差し出した。曹操ガンダムと華琳が布を外すとそれは剣であった。

司馬懿サザビー
「七星剣と天星剣にてございます」

曹操ガンダム
「ほう・・・なぜ今頃になって・・・・・」

司馬懿サザビー

「その二つの剣は王者の証・・・・いずれおわかりになる時が来ましょう」

華琳
「ただの宝剣ではなかったようね」

そのころ、別の所ではトラブルが起きていた

霞
「どういうことや!!!?　郭嘉!!!!!」

張遼ゲルググ
「貴様、関羽と愛紗と北郷を牢に入れたのは本当なのか!!」

激哮する張遼ゲルググと霞。じつは郭嘉ヴァサーゴが関羽ガンダムと愛紗と一刀を牢に入れたのであった

郭嘉ヴァサーゴ
「そうですよ。いけませんか?」

張遼ゲルググ
「ふざけるな!!!」

霞
「三人がいったい何したんや!!!!!」

郭嘉ヴァサーゴ
「あのね。今はどうだっていいのですよ」

霞
「なんやと!!?」

郭嘉ヴァサーゴ
「いいですか?貴方達と違って三人には帰る場所があるのです。もし仮に曹操様と華琳様が二人の劉備と戦うことになったら・・・三人はここを去ります。あの三人が僕達の敵になるのですよ。そうなる前に・・・僕はねあの三人を殺すべきなのですよ」

張遼ゲルググ
「貴様!!」

そのころ関平ガンダムは部屋に閉じ込められていた。そして、眼の前には鎧があった。そこへ桂花がやってきた

桂花
「これを着なさい・・・そして、あの三人を助けるのよ」

関平ガンダム
「なんで・・・・」

桂花
「あんな奴らのためでもあんたのためでもじゃないわよ。ただあいつらがより強大になって襲ってきたら華琳様と曹操様もお困りになるからに決まっているでしょ!!!」

関平ガンダム
「ありがとう・・・・」

そして、関平ガンダムは鎧を着ると・・・関羽ガンダムと愛紗と一刀を助けに向かった

そのころ、関羽ガンダムと愛紗と一刀は牢屋敷に閉じ込められていた。三人は黙ったままであった。すると・・・・・

周倉ドーベンウルフ
「おい、あんた達、鬼髭の関羽と黒髪の関羽と天の遣いの兄さんだろ？」

関羽ガンダム
「その声は・・・確か・・・周倉か・・・」

それは関羽ガンダム達が一撃で倒した周倉ドーベンウルフであった

周倉ドーベンウルフ
「へへへへ、覚えてくれてたんだな。で・・・何をやらかしたんだい？」

愛紗
「貴様には関係ないことだ。」

一刀
「ほっといてくれないか。」

周倉ドーベンウルフ
「そう言うなって、気になるじゃねぇか。俺様を降参させた三人がなんで？・・・ってな」

一刀
「だがお前は俺達に勝てなかったから無罪放免にならなかっただろ。なら俺達を恨むことくらい・・・・」

周倉ドーベンウルフ
「俺様は自分の力を認めている奴なら構わないぜ」

そして・・・

関羽ガンダム
「約束を守れなかった・・・・」

周倉ドーベンウルフ
「え!?」

愛紗
「私達は自ら曹操殿の力になると約束した・・・・」

一刀
「けど・・これから行われる三璃紗南部侵略行為に手を貸すことなんてできないぜ。」

周倉ドーベンウルフ
「だからってここにいたって殺されてしまうだだぜ」

関羽ガンダム
「・・・・・・・・・・」

周倉ドーベンウルフ
「へぇー、義理堅いっていうか石頭っていうか、あんたら、誰のために命をはかけているんだ?」

愛紗
「何!?」

周倉ドーベンウルフ
「知っているぜ。旦那に姐さん、身遣いの兄さんは二人の劉備という男と女の舎弟だろ。そいつらがどうなるんだよ！！！」

三人は何かを思い出した。それは桃園の誓いの場であった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

関羽ガンダム
「我ら七人！！」

愛紗
「性は違えども、兄妹の契りを結びしからは！！」

張飛ガンダム
「心を同じくして助けあい」

鈴々
「皆で力なき人々を救い！！」

劉備ガンダム
「生まれた時は違えども」

桃香
「死すべき時は同じと誓う！！」

一刀
（なぜ・・俺がここにいるのかは分からないけど・・ただ・・・・俺もこの景色に加わりたかった。）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・

周倉ドーベンウルフ
「戦士同士の絆はな・・・命よりも重たいんだ。たとえ死んでも切れないというのが戦士同士の絆じゃねぇのかい？」

関羽ガンダム
「例え死んでも・・・・・」

周倉ドーベンウルフ
「なあ、あんたらにとって一番大切なのは何なんだ！！？」

そして・・・

関羽ガンダム
「決まっておろう！！！」

愛紗
「我が義兄と義姉と誓った・・・・・」

一刀
「三璃紗の明日だ！！！！」

三人は牢を破った

関羽ガンダム
「おかげで目が覚めた。礼を言うぞ周倉」

周倉ドーベンウルフ

「へへへ・・・・そう思うなら・・一つ頼みがあるんだがよ・・・・・」

愛紗
「皆まで言うな!!お前には感謝しているから・・・・」

一刀
「俺達と一緒に行こうぜ」

周倉ドーベンウルフ
「その言葉待っていたぜ・・」

そして、四人は脱走を開始した

関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀、周倉ドーベンウルフは兵達と交戦していた

兵士
「脱獄だぁ!!!囚人が脱獄したぞぉ!!!!!」

しかし、関羽ガンダム、鬼神王・愛紗、閃光装・一刀、周倉ドーベンウルフは兵士達をつき次に倒しつつあった。そこへ

兵士
「無駄な抵抗はやめろ!!」

狙撃隊がやってきた

周倉ドーベンウルフ
「狙撃隊と来たか・・・・」

閃光装・一刀
「丸腰の俺達にとっては分が悪すぎるぜ」

鬼神王・愛紗
「ご主人様、その様な事を言う必要はありません」

関羽ガンダム
「愛紗殿の言うとおりだ。どうやら覚悟を決めなければならぬようだ」

周倉ドーベンウルフ
「へへ・・こちとら最初から行先は地獄だ！！とっくに覚悟はできてるぜ！！！」

鬼神王・愛紗
「行くぞ！！」

周倉ドーベンウルフ
「よっしゃあ！！」

四人はなおも立ち向かった

兵士
「おのれ！！撃て！！！」

関平ガンダム
「鬼鋭爪！！！！！」

突然の攻撃に兵士達は全滅した。そこから鎧を装備した関平ガンダ

ムが現れたのであった

関平ガンダム
「助けに来たぜ！！！おっちゃん達！！！」

関羽ガンダム
「関平！！！？」

そして、関平ガンダムは関羽ガンダムと鬼神王・愛紗に武器を渡した。それは自分達の武器であった

鬼神王・愛紗
「お前、どうして・・・」

関平ガンダム
「オイラだって鬼髭関羽と黒髪の山賊狩りの関羽の一番弟子・・・・若き・・・武将・・・・関平様だ」

そういうと関平ガンダムは倒れた

周倉ドーベンウルフ
「大丈夫なのか？」

閃光装・一刀
「気絶しているだけだ」

鬼神王・愛紗
「まったく無茶しおって・・・」

関羽ガンダム
「だが・・・見事だったぞ、関平・・・」

すると

周倉ドーベンウルフ
「旦那！！！新手だ！！！」

そこに現れたのは赤兎馬に乗った張遼ゲルググと黄金に輝く馬に乗った飛龍鎧・霞であった

関羽ガンダム
「張遼・・・・」

鬼神王・愛紗
「霞・・・・・」

張遼ゲルググ
「一つだけ聞かせてくれ、なぜ曹操様と華琳様ではダメなのだ？」

関羽ガンダム
「なぜだと・・・」

飛龍鎧・霞
「うちらは曹操将軍と華琳様を太陽とみたんや。心の闇を照らしたんや・・・」

閃光装・一刀
「太陽か・・・・たしかに間違いはない」

鬼神王・愛紗
「ならば・・・我らが義兄と義姉は海。命をはぐくむ海なのだ」

張遼ゲルググ
「海・・・・・か・・・・」

すると追手が迫ってきた

張遼ゲルググ
「行け！！」

閃光装・一刀
「え！！？」

飛龍鎧・霞
「赤兎馬と麒麟王なら追手を振り切るはずや！！！」

張遼ゲルググと飛龍鎧・霞は指を鳴らすと赤兎馬と麒麟王は戦輪形態となった

張遼ゲルググ
「劉備達は荊州へ向かった」

飛龍鎧・霞
「あんたらの待つ海へ行くんや！！」

鬼神王・愛紗
「しかし、これでは貴公らが・・・」

張遼ゲルググ
「言うな！！」

飛龍鎧・霞
「次に会ったときは敵同士・・・・それでええやないか」

関羽ガンダム
「張遼・・・・」

鬼神王・愛紗
「霞・・・・・」

関羽ガンダムは赤兎馬に、鬼神王・愛紗は麒麟王に乗った。そして・・・

関羽ガンダム
「さらばだ・・・」

鬼神王・愛紗
「我らが友よ!!!」

そして、五人は許昌を後にしたのであった。その様子を見ていたものがいた

郭嘉ヴァサーゴ
「あ～あ、後でどうなっても知りませんよ」

華琳
「その時はその時よ。くだらない子細工はしないわ」

曹操ガンダム
「互いの正義が相容れぬなら正々堂々と戦うまで。南部攻略の手始めは荊州からだ」

そのころ、劉備ガンダム、張飛ガンダム、趙雲ガンダム、桃香、鈴々、星、白蓮は朱里と雛里のいる荊州へと戻ってきたのであった

劉備ガンダム
「水鏡先生、伏龍についてのことを教えてください」

桃香
「お願いします！！」

華蓮
「そう簡単に言われましても・・・・・」

水鏡ガンタンク
「ワシらの知っていることはとっくに・・・・・」

劉備ガンダム
「なんでもいいんです！！！！」

桃香
「伏龍のことならどんな小さな情報でも・・・」

水鏡ガンタンクと華蓮は黙り込んでしまった。そこへ

関羽ガンダム
「相変わらずですな、劉備殿」

愛紗
「桃香様もです」

一刀
「だな・・・・」

そこへ現れたのは関羽ガンダム、愛紗、一刀、関平ガンダム、周倉
ドーベンウルフと、赤兎馬、麒麟王であった。

劉備ガンダム
「関羽！！？」

鈴々
「愛紗！！？」

桃香
「ご主人様！！？」

張飛ガンダム
「どうして！！？」

そして・・・

関羽ガンダム
「誓いを果たすため戻ってまいりました」

愛紗
「今一度、貴方達と共に戦わせてください」

関羽ガンダム
「民のため・・・・・」

愛紗

「正義のため・・・・」

一刀
「そして・・・三璃紗の明日のために!!!」

劉備ガンダム
「関羽・・・・」

桃香
「愛紗ちゃん・・・ご主人様・・・」

劉備ガンダムと桃香は感動して二人に抱きついた

鈴々
「ふん、今頃来ても遅いのだ!!」

張飛ガンダム
「そうだぜ!!」

朱里
「鈴々ちゃん。そんなこといっては・・・・・」

趙雲ガンダム
「張飛殿・・・・」

星
「まあ、待て・・・・」

星に止められた二人が見ると張飛ガンダムと鈴々もさみしさのあまり泣いていることに気がついたのであった

水鏡ガンタンク
「ふぉふぉふぉ・・・・よきかな、よきかな」

華蓮
「ですね」

こうして義兄妹は再び集結することができたのであった。

おまけ

許昌を後にした関羽ガンダム達は赤兎馬、麒麟王に乗って荊州へと向かった

愛紗
「ご主人様・・・しっかりと捕まってくださいね」

一刀
「いいのか!?」

愛紗
「もちろんです」

一刀
「ならば・・・・」

一人は愛紗の胸をつかんだ

愛紗

「！！！！？」

一刀
「しっかりつかまってるぞ・・・・ぞ・・・・・」

愛紗
「ご主人様の・・・・」

一刀
「え！？」

愛紗
「ばかあああああああああああああああ！！！！！！」

一刀は殴られてしまい、麒麟王から落馬したのであった

関羽ガンダム
「主よ・・・・自業自得ですぞ・・・・」

第２３話『千里を超えた絆』（後書き）

次回予告

劉備ガンダム達の前に天才軍師・伏龍が現る

次回　第２４話『伏龍、天を翔る！！』

第２４話『伏龍、天を翔る！！』（前書き）

今回、ついにあの人が出ます！！そう三璃紗に現れた蝶が・・・・

第２４話『伏龍、天を翔る！！』

関羽ガンダム達と再会した劉備ガンダム達は伏龍のことを調べるために荊州の領主・劉表ガンダムの元へと訪れたのであった。劉表ガンダムの城の前にやってきたのであった。劉備ガンダム達の前に一人のＭＳ武将と女性が現れた

黄忠ガンダム
「よく来られた劉備殿、ワシは劉表様に仕えし家臣の黄忠じゃ」

黄忠（真名・紫苑）
「私も黄忠と申します」

劉備ガンダム
「はい・・・・」

桃香
「お願いします」

劉備ガンダム達は黄忠ガンダムと紫苑に連れられて、劉表ガンダムのいる玉座へ招いた

紫苑
「劉表様、劉備さん達が来ました」

劉表ガンダム
「うむ・・・下がっておれ・・・・」

黄忠ガンダム

「はっ・・・・・」

そして・・・

劉備ガンダム
「はじめまして、劉表様、俺は劉備といいいいます」

桃香
「私も劉備といいます」

劉表ガンダム
「おお、お主らが劉備か、ところで何用じゃ？」

桃香
「はい、私達は・・・・」

張飛ガンダム
「伏龍という男を探しているんだ」

鈴々
「そうなのだ」

趙雲ガンダム
「かつて天才軍師として名を馳せた男です」

関羽ガンダム
「何かご存知ですか？」

劉備ガンダム
「三璃紗の明日のために伏龍の兵法が・・・力が必要なのです！！」

桃香
「彼は死んだと聞かされました。でも・・・・」

すると

劉表ガンダム
「何!?死んだじゃと!!?そんなはずは・・・・」

白蓮
「え!?ということは・・・・・」

星
「伏龍は生きているということか!!」

劉備ガンダム
「やっぱり・・・」

一刀
「死んでなかったのか・・・」

愛紗
「では伏龍殿はどこに・・・・」

劉表ガンダム
「それは水鏡殿が知っている」

それを聞いた劉備ガンダム達は劉表ガンダムの城を後にしたのであった

第２４話『伏龍、天を翔る！！』

劉備一行は水鏡先生達の所へと戻っていた

桃香
「水鏡先生、伏龍さんが死んだって嘘だったんですね」

張飛ガンダム
「生きているって聞いているぜ！！」

関平ガンダム
「本当かよ！！？」

留守を任せていた関平ガンダムと周倉ドーベンウルフも驚いた

水鏡ガンタンク
「なんじゃと！？まったく誰がそんなことを・・・・」

華蓮
「貴方が言ったんじゃありませんか・・・・・」

水鏡ガンタンク
「なんのことかの？」

劉備ガンダム
「先生、本当のことを教えてください！！」

そして・・・・

水鏡ガンタンク
「三璃紗の明日のためにお主たちが伏龍を必要としている気持ち、ワシたちにはよくわかるがのう」

華蓮
「ええ、」

水鏡ガンタンクと華蓮は誰かに話していた。外では孔明リ・ガズィが何か悩んでいた

鈴々
「あれ?そういえば朱里と雛里はどこにいるのだ?」

周倉ドーベンウルフ
「ああ、あの嬢ちゃん達なら旦那達が来る前に買い物に行っているぜ」

すると・・・・

朱里
「はわわわわ!!!」
雛里
「あわわわわわ!!!」

突然、朱里と雛里の悲鳴が聞こえた

一刀
「朱里と雛里の悲鳴だ!!」

星

「何かあったのか！！？」

劉備一行は悲鳴のあったところへと駆けつけた。そこには朱里と雛里の帽子と手紙があった

関羽ガンダム
「これは朱里殿と雛里殿の帽子・・・・」

桃香
「手紙まであるよ・・・」

桃香は手紙を読んだ

『二人の劉備へ、二人の軍師を助けたければ森の奥まで来い！！
張繍より』

鈴々
「むむむ二人をさらうなんて許さないのだ！！」

一刀
「二人を助けに行こう！！！」

愛紗
「周倉と関平と白蓮殿はここに残ってくれ！！」

劉備ガンダム、関羽ガンダム、張飛ガンダム、桃香、愛紗、鈴々、一刀は森の奥まで向かった

趙雲ガンダム
「我らも行こう！！」

星
「ああ！！」

するとそこへ・・・・

孔明リ・ガズィ
「お待ちなさい・・・」

星
「お主は・・・・？」

孔明リ・ガズィ
「出かける前にこれを・・・・」

孔明リ・ガズィが現れて、仮面を渡した

趙雲ガンダム
「おい・・・・っていない・・・」

星
「趙雲、私にいい考えがあるが・・・・」

趙雲ガンダム
「え！？」

そのころ、森の奥へとたどり着いた劉備ガンダム達の眼の前に賈？
アシュタロンと人質となった朱里が現れた

賈？アシュタロン

「ふふふ・・・久しぶりだね。賈?だよ!!」

劉備ガンダム
「久しぶり・・・・?」

桃香
「だれ?」

さらに茂みから張繍ブリトヴァと雛里を連れた張譲まであらわれた

張繍ブリトヴァ
「久しぶりだな!!二人の劉備よ!!」

張譲
「お前達の首は我らがもらいうける!!!」

しかし・・・・・

劉備ガンダム
「久しぶり?」

桃香
「誰?」

賈?アシュタロン
「ふふふ・・忘れたとは言わせないよ」

沈黙

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・
・・・・・・
・・・・

賈?アシュタロン
「まさか・・・本当に忘れちゃったの?」

張飛ガンダム
「そうだぜ!!」

賈?アシュタロン
「ほら苑の城で会っただろ!!」

そして・・・

劉備ガンダム
「あああ!!?」

関羽ガンダム
「袁術の手先の奴らだったのか!!」

愛紗
「それに張譲といったら董卓との戦いにいた奴か!!」

張譲
「ようやく思い出したのか・・・・」

賈?アシュタロン
「改めて・・・さあこいつらの命が惜しければ武器を捨てろ!!」

賈?アシュタロンと張譲は武器を朱里と雛里に向けた

朱里
「私達のことはかまいませんのでみなさんお願いします」

雛里
「うん・・・」

桃香
「そんなこと・・・・」

劉備ガンダム
「できるわけがない!!」

全員は武器を捨てた

張繍ブリトヴァ
「ガキどもの命を守るために無様よのう!!」

張譲
「まったくだ!!」

二人は高笑いをしていた。すると・・・・

???

「そこまでだ!!」

張繍ブリトヴァ
「何奴!!?」

一同が振り向くとそこには蝶のような仮面をつけた謎の人物がいた

華蝶仮面一号
「三璃紗に舞い降りた二匹の蝶、美と正義の使者・華蝶仮面一号推参！！」

華蝶仮面二号
「同じく二号推参（赤恥）！！」

二人の華蝶仮面（二号は顔が真っ赤になっている。）は地面に降りた。そんな二人を見た一刀と朱里と雛里は

一刀
（星と趙雲、なにやっているんだろうか・・・）

朱里
（どうなっているのでしょうか？）

雛里
（なぜあの二人が・・・・・）

華蝶仮面二号
「さあ覚悟しろ！！」

賈？アシュタロン
「バカじゃないの！！こっちには人質がいるんだよ！！」

華蝶仮面一号
「やむをえない！！あれを使うぞ！！」

華蝶仮面二号
「お・・・・おう!!!」

すると華蝶仮面達は張繍ブリトヴァ達の周りを走った

張繍ブリトヴァ
「なんだこれは!!?」

張譲
「分身の術か・・・」

そして、二人の華蝶仮面は足をとめた。そして・・・・・

華蝶仮面一号、華蝶仮面二号
「眼が回った」

ズコー!!

張繍ブリトヴァ達はこけた。その隙に二人は朱里と雛里を助けた

賈?アシュタロン
「しまった!!?」

そして、その隙に劉備ガンダムと恋姫鎧装した桃香は武器を手に取った

翔龍王・桃香
「よくもやったね!!」

劉備ガンダム

「やるぞ！！」

そして・・・・

関羽ガンダム
「劉備殿！！」

張飛ガンダム
「兄貴！！」

鬼神王・愛紗
「桃香様！！」

轟雷王・鈴々
「お姉ちゃん！！」

関羽ガンダムの右肩のパーツと張飛ガンダムの左肩のパーツが外れ、劉備ガンダムの両肩に装備された。そして、鬼神王・愛紗の右肩の鎧と轟雷王・鈴々の左肩の鎧が外れ、翔龍王・桃香の両肩に装備された。そして、両者と共に黄金に輝き始めた

劉備ガンダム
「三位一体・星龍斬！！」

翔龍王・桃香
「三位一体・光龍斬！！」

二人の放った必殺技が張繍ブリトヴァに決まった

張繍ブリトヴァ

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！」

張繍ブリトヴァは爆発四散した

賈？アシュタロン
「あ～あ。張繍様、やられちゃったよ」

張譲
「覚えておれ！！」

二人はそそくさに逃げて行ったのであった。そこへ

趙雲ガンダム
「おっ・・・・遅れました」

星
「朱里達を誘拐した奴らはどうした！？」

劉備ガンダム
「華蝶仮面という人が助けてくれたんだ。」

桃香
「うん！！かっこよかったね。」

張飛ガンダム
「そうだな！！」

鈴々
「また一緒に戦ってほしいのだ！！」

関羽ガンダム

「お前達は何を言っているのだ!!仮に助けられたとしても次に敵として来るかもしれないのだぞ!!」

愛紗
「兄上と桃香様もですよ!!」

どうやら一同は華蝶仮面の正体に気が付いていないらしいのであった。そして・・・一刀が趙雲ガンダムに聞いた

一刀
「なあ・・・趙雲、さっきの奴らってもしかして・・・・」

趙雲ガンダム
「そのことは誰にも言わないでください（赤恥）」

すると・・・・

孔明リ・ガズィ
「お見事でした」

桃香
「貴方は・・・・？」

孔明リ・ガズィ
「私は諸葛孔明、かつて天才軍師・伏龍と呼ばれた男です」

劉備ガンダム
「え!?」

朱里

「やっぱり・・・・貴方が・・・・」

雛里
「伏龍でしたか・・・・・」

愛紗
「二人は彼のことを知っているのか！？」

そして・・・・

孔明リ・ガズィ
「ずっと貴方達のことを見ていました。民を想い、三璃紗を思うその姿を、劉備殿達なら三璃紗の明日を創ることができる」

すると劉備ガンダムと桃香は孔明リ・ガズィの前に出た

劉備ガンダム
「大いなる力は大いなる悲劇をもたらす」

桃香
「そういって貴方は姿を消しましたよね」

孔明リ・ガズィ
「！！！？」

劉備ガンダム
「だが力を使うことに恐れるな！！」

桃香
「運命になんかに屈しないで！！！」

劉備ガンダム
「俺達がお前の全てを背負ってやる!!」

桃香
「貴方の力が必要なの!!伏龍さん・・いえ孔明さん!!」

孔明リ・ガズィ
「劉備殿・・・」

二人の言葉に孔明リ・ガズィは・・・・

孔明リ・ガズィ
「どうぞ私を貴方達の正義のためにお使いください」

孔明リ・ガズィは劉備ガンダム達の下で闘うことを決意したのであった

華蓮
「やっと決意を決めましたね」

水鏡ガンタンク
「地に伏す龍、ついに天を翔るか。よきかな、よきかな」

二人もそんな様子をほほえましく見ていたのであった

第２４話『伏龍、天を翔る！！』（後書き）

次回予告

父と兄と姉の想いと勇気を受け継いだ孫権と蓮華、覇行を突き進もうとする曹操と華琳、そして、民のために戦おうとする劉備と桃香の志が三国を動かす

次回　第２５話『天下三分の計』

第２５話『天下三分の計』（前書き）

お久しぶりの更新です。ブログのほうはクライマックスに近づいています。

第２５話『天下三分の計』

三璃紗南部攻略を決めた曹操軍。伏龍こと孔明を仲間にした劉備一行。そのころ平和を満喫していた国があった。それは・・・・・

孫尚香ガーベラ
「ここ！！」

小蓮
「シャオ達が治める江東よ！！」
（キラ☆）

第２５話『天下三分の計』

ここ、江東はすっかり平和であった

孫尚香ガーベラ
「なんか平和よね。」

小蓮
「シャオ、退屈だよ！！」

隠
「そんな話、前にもしたことがありますね」

孫尚香ガーベラ
「あ～あ、どこかで曲者とか悪いやつはいないかしら？」

陸遜ゼータプラス

「何言っているんですか！！」

亞莎
「平和が一番なんですよ。」

小蓮
「だってこうも平和だとつまんないわよ！！」

そういうと小蓮と孫尚香ガーベラは武器を構えた

小蓮
「悪者めかかってきなさい！！」

孫尚香ガーベラ
「私達が相手になってあげるわ！！」

隠
「もう姫様達たら・・・・」

すると・・・

呂蒙ティジェ
「悪者はどこだ！！！」

甘寧ケンプファー
「おうおう！！！悪者やろう！！この俺様が相手ぜよ！！！」

呂蒙ティジェと甘寧ケンプファーが水上バイクでやってきた。そこへ

思春

「いいかげんにせんか！！！」

後ろから思春が水上バイクに乗ってやってきた

思春
「まったく長江にいる悪党はお前達が退治したのではないか！！」

呂蒙ティジェ
「う～ん」

甘寧ケンプファー
「確かにそうじゃったな！！」

小蓮
「まったく孫権兄様と蓮華お姉ちゃんの家臣になってから張り切っちゃって・・」

呂蒙ティジェ
「俺達が仕えた以上、孫権の大将と蓮華お譲にも恥は欠かせないぜ！！」

甘寧ケンプファー
「そうぜよ！！」

陸遜ゼータプラス
「お二人とも孫権様と蓮華様のことを頼りにしていますよね。」

隠
「ですよね」

孫尚香ガーベラ

「昔は頼りにならなかったのに、父上と孫策兄さんを失ってからしっかりしてきたように感じるわ」

そして、その様子を見ていた陸遜ゼータプラスと亞莎に呂蒙ティジェと甘寧ケンプファーが・・・・・

甘寧ケンプファー
「よし、おまんも成長してみ!!」

陸遜ゼータプラス
「僕ですか・・・」

甘寧ケンプファー
「あれら乗ってみ!!!」

陸遜ゼータプラス
「よし!!」

陸遜ゼータプラスは早速水上バイクに乗るが・・・

陸遜ゼータプラス
「うわわわわわわわわわわわ!!!!!!!?誰か止めて!!!!!?」

暴走してしまった

呂蒙ティジェ
「よっしならお前ならどうだ!!」

亞莎

「私ですか!?・・・・はい!!」

亞莎も水上バイクに乗って見るが・・・・・

亞莎
「いやあああああああああああああ!!!!?」

やはり暴走してしまった。そして・・・・

亞莎
「きゃあああああああああ!!!!」

陸遜ゼータプラス
「うわあああああああああ!!!!」

お互いにぶつかってしまい、川に落ちてしまった

甘寧ケンプファー
「なにやってるん!!!?」

思春
「まったく・・・」

その後

陸遜ゼータプラス
「うわあああああああああああああ!!!!?」

甘寧ケンプファー
「しっかりつかまちょり!!!!おらおら!!!!!」

亞莎
「いやあああああああ！！！！おろしてください、止めてください！！！！」

呂蒙ティジェ
「まだまだこんなものじゃないぜ！！！！」

悲鳴を上げる陸遜と亞莎を後ろに乗せて、水上バイクを乗り回す甘寧と呂蒙

小蓮
「陸遜とあの二人も全然成長してないわよね」

隠
「でもあの二人がいるから江東も大丈夫です」

思春
「それはどうかな？」

孫尚香ガーベラ
「どういうこと！？」

思春
「噂では曹操が袁紹を倒したと聞きます」

小蓮
「え！？」

隠
「とういうことは三璃紗の北部は曹操さんが支配したということな

んですね」

思春
「そういうことだ。次に狙われるのは江東なのかもしれません」

小蓮
「そんな・・・」

孫尚香ガーベラ
「こんな平和な江東を・・・」

一同は驚きを隠せなかった

そのころ、江東の城では

孫権ガンダム
「そうか・・・曹操が袁紹を倒したのか・・・」

蓮華
「そして、三璃紗の北部をほぼ制圧した」

孫権ガンダムと蓮華もそのことについて聞いていたのであった

周喩ヒャクシキ
「二人の曹操殿はかつてより三璃紗制圧を目指していました」

冥琳
「おそらく、この江東が戦場になるかもしれません」

雪蓮
「私と孫策が切り開いた江東が戦場になるかもしれないということ

ね」

蓮華
「そんな・・・」

雪蓮
「その時が来たらどうするの？蓮華、孫権・・・父様や孫策がどんな行動するのか考えてみなさい。」

雪蓮に対しての問いに・・・・

孫権ガンダム
（教えてくれ・・・父上・・・・・孫策兄さん・・・）

蓮華
（私達はどうしたら・・・・・）

虎錠刀と虎王牙刀を見ているのであった

そのころ、麗羽一行は新天地へと旅をしていたのであった

麗羽
「袁翔が敗れたおかげで北部は曹操達に支配されてしまいましたが私達の新天地はまだまだありますわよ！！」

斗詩
「でも・・・麗羽様・・・」

麗羽
「どうしたんですの？」

斗詩
「張コウ将軍たちのことどうします・・・」

麗羽
「彼らの決意は変わりませんから好きにさせなさい」

そのころ、張コウザク？、凪、真桜、沙和は南部へと進軍する曹操軍の元へ迫っていくのであった。

張コウザク？
「凪、真桜、沙和、お前達は麗羽様のもとに残っても良いのだぞ！！」

沙和
「そんなこと言わないでほしいの！！」

真桜
「そやで！！」

凪
「貴方にならどこまでつき従います！！！」

張コウザク？
「俺はよい部下を持ったようだ。行くぞ！！」

四人は曹操軍の前に立った

華侯惇ギロス
「何奴！！」

春蘭
「貴様ら、曹操軍との知っての無礼か！？」

張コウザク？
「我こそは今は亡き袁紹様、配下・張コウなり！！」

凪
「同じく楽進！！」

真桜
「同じく李典！！」

于禁
「同じく于禁！！」

張コウザク？
「そのお方、曹操殿達とお見受けした！いざ尋常に勝負せよ！！」

張コウザク？達の前に華侯兄妹が立ちふさがった

秋蘭
「残党がいたとはな・・・」

華侯淵ダラス
「死んだ大将への忠義だてか！！？」

張コウザク？
「いかにも！！」

すると、張遼ゲルググと霞が前に出た

張遼ゲルググ
「忠義だて・・・」

霞
「あんな外道な大将にかいな!!」

凪
「貴方達は・・・・」

張コウザク?
「張遼、霞・・・・」

霞
「知っているで!!あんたらは公孫賛との戦によって袁紹と田豊に御取に使われて部下を犬死させたことはうちらが知っているで!!」

張遼ゲルググ
「もう一人の袁紹である麗羽様ならともかくあのようなものになぜ忠義を尽くす!!」

二人の問いに張コウザク?達は・・・・・

沙和
「そんなこと言われなくてもわかるの!!」

真桜
「うちらは麗羽様に恩義はあるけど袁紹様にも忠義もあるんや!!」

凪
「だからこそ一度主と仰いだことから我らは忠義を忘れぬ！！それがどのようなものであろうと！！」

張コウザク？
「そうだ！！敵の大将の首をとって袁紹様へのたむけとなるか、あるいは一人でも多くを道ずれに地獄の主の元へと行くまで！！」

すると・・・

華琳
「袁紹軍にも貴方達のような戦士がいたとは・・・・・」

曹操ガンダム
「その願いかなえてやろう！！この七星剣でな・・・」

華琳
「私もこの天星剣で闘うわ」

そして、華琳も鎧を装備し、そして・・・・・

紅蓮王・華琳、曹操ガンダム
「はあああああああああああああ！！！！！」

それぞれの戦いが始まった。曹操ガンダムと張コウザク？、紅蓮王・華琳と凪と真桜と沙和はそれぞれの戦いが繰り広げていた。

張コウザク？
「うおおおおおおおおおおおお！！！！」

曹操ガンダム
「でやあああああああああああああああ！！！！！」

凪、真桜、沙和
「はあああああああああああああああ！！！」

紅蓮王・華琳
「はあああああああああああああ！！！」

それぞれ互角の戦いを繰り広げていた

紅蓮王・華琳
「なかなかやるわね。でもその程度では私達は倒せないわよ」

曹操ガンダム
「お前達、主に準じて、地獄へ行くか！？」

凪
「忠義こそ武将の証だ！！」

真桜
「そうや！！」

沙和
「沙和達は忠義を大事にしているの！！」

曹操ガンダム
「袁紹ごときに忠義とはかたはら痛い！！」

張コウザク？

「黙れ！！！お前達こそ三璃紗征服を目指しながら、袁紹様を笑うのか！！？」

紅蓮王・華琳
「私達は袁紹とは違うわよ！！」

曹操ガンダム
「三璃紗統一によって戦をなくし、この地に平和を取り戻すこと、それが我らの望みなり！！」

張コウザク？
「何！！？」

紅蓮王・華琳
「そして、私達はそれがなせる！！」

二人の言葉に張コウザク？達は・・・

真桜
「たしかに立派な物言いや！！」

凪
「だが、信じられぬな！！！」

そして、張コウザク？の両肩パーツが両腕に装備し、凪の両腕に炎が集まった

張コウザク？
「爪拳・獄蓮掌！！！！」

凪
「烈火激烈拳！！！」

真桜
「螺旋突貫！！」

沙和
「疾風激斬！！」

四人の猛攻に曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は押されていた

張コウザク？
「そんなことがなせるほど芯に強き戦士なら我らが力、はじいて見せよう！！！」

紅蓮王・華琳
「三璃紗統一の理想がある限り・・・・」

曹操ガンダム
「どんな力にも勝って見せる！！」

そして、曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は四人の攻撃をはじいた。その瞬間、七星剣と天星剣が輝きを増していた。そして・・・・

紅蓮王・華琳
「これは・・・」

その瞬間、七星剣は青く輝く剣へ、天星剣は赤く輝く剣へと変わった

桂花

「あれは・・・まさか・・・・」

司馬懿サザビー
「それこそは伝説の三候の証である星鳳剣と四聖獣、朱雀と四神姫、炎帝姫の力を宿りし、天凰剣でございます!!やはり曹操様と華琳様が三璃紗の覇者」

春蘭
「我らの主がついに伝説の力を得たか!!」

夏侯惇ギロス
「ああ!!」

秋蘭
「しかし・・・」

夏侯淵ダラス
「あの輝きは・・・・・」

霞
「光から力を感じるで…」

張遼ゲルググ
「ああ!!」

一同は驚きを隠せなかった。そして・・・・・・

曹操ガンダム
「星鳳剣・・三候の証が余のものに・・・・」

紅蓮王・華琳
「天凰剣・・・四聖獣と四神姫の力が私のものに・・・・・」

曹操ガンダム、紅蓮王・華琳
「我らが理想の天の力を得たり！！！」

それを見た張コウザク？達は

張コウザク？
「動けぬ・・・どうやら格の違う相手に勝負を挑んだようだ」

武器を捨てて、その場に座った

張コウザク？
「斬れ・・・・」

凪
「悔いは残らない・・・・・」

真桜
「さっさとしぃ！！」

そして、曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は剣を振った

張コウザク？
「ん！？」

沙和
「沙和達、生きているの！！」

曹操ガンダム
「余と華琳は今、貴様らにとりついた袁紹への忠義を斬った」

紅蓮王・華琳
「どうしても命がいらないなら私達が預かる。我らが覇行を為すために使わせてもらうわ！！」

張コウザク？
（なんという太陽のような人だ・・・・・）

凪
（この方々ならできるかも・・・）

真桜
（平和のための・・・）

沙和
（三璃紗統一を・・・・・）

そして・・・・

張コウザク？
「我らが力、いかようにもお使いください！！」

張コウザク？、凪、真桜、沙和は曹操軍に入ったのであった。

そのころ、荊州では徐州の村人を連れてきたのであった。その際に恋達と合流することができた

白蓮

「劉備、桃香、徐州の村人を連れてきたぞ」

趙雲ガンダム
「ここで皆、安心して暮らせるでしょう」

恋
「恋も安心・・」

音々音
「はいです!!」

劉備ガンダム
「ご苦労だったな。姉貴に趙雲、恋、音々音」

桃香
「これで一安心だよ」

張飛ガンダム
「またみんなで楽しく畑仕事ができるってわけだな」

鈴々
「そうなのだ!!」

すると・・・

朱里
「鈴々ちゃん、残念ながらそうのんびりはいかないみたいです」

雛里
「ご主人様達の話では曹操軍は南への侵略を始めたこと・・・」

孔明リ・ガズィ
「ならば次なる狙いは・・・・・ここ荊州」

一同は驚いた

星
「何！！？」

詠
「徐州の皆を送ったばっかりなのに！！」

劉備ガンダム
「実は俺と桃香もそのことを考えていたんだ。」

桃香
「うん、三璃紗の北部をほぼ制圧したと聞いたから・・・孔明の言うとおりなんだよ」

劉備ガンダム達は曹操ガンダムと華琳の言葉を思い出したのであった

桃香
「このままでは三璃紗の民はまた戦に巻き込まれてしまう」

孔明リ・ガズィ
「曹操達を止めねばなりません。なんとしても・・・・」

月
「でもどうやって・・・・」

朱里
「南部で大きな軍備を持つのは私達がいる荊州と江東です」

関羽ガンダム
「江東・・・・二人の孫権殿達が治める国か・・・・・・」

雛里
「でも曹操軍の力は絶大・・・どちらも一国の力ではかないません」

孔明リ・ガズィ
「そこで江東の孫権殿達の力を合わせて、曹操将軍達と戦うのです」

愛紗
「ほう、なかなかの気策だな」

孔明リ・ガズィ
「そして、これに成功すれば・・・・」

孔明リ・ガズィは地図に指をさした

雛里
「北部・・・」

朱里
「江東・・・・」

孔明リ・ガズィ
「そして、ここ荊州。同じくらい強い勢力が三璃紗に三つ。こうなると互いは戦いを控えるようになります。そして、三璃紗に平和が

戻ります」

劉備ガンダム
「え！？」

桃香
「つまり・・」

孔明リ・ガズィ
「これすなわち・・・・天下三分の計・・・・・」

一刀
「天下三分の計・・・・」

一同は驚きを隠せなかったのであった

劉備ガンダム
「三璃紗の国はそれぞれの国、それぞれの民が皆の者だ」

桃香
「曹操さんだけのものではないことなんだね」

劉備ガンダム
「俺達は曹操達を止めて見せる」

桃香
「民のために皆のために・・・・あの笑顔を守るために・・・・」

こうして、劉備ガンダム達の決意は決まったのであった

するとそこへ・・・・

麗羽
「ここは荊周ですわよね」

そこへ麗羽、顔良ガズアル、文醜ガズエル、斗詩、猪々子がやってきた

劉備一行
「あっ・・・・・・」

麗羽一行
「あっ・・・・・・」

そして、沈黙し始めて・・・・

白蓮
「袁紹・・・貴様!!」

張飛ガンダム
「この野郎!!!のこのこときやがって!!!」

劉備ガンダム
「公孫賛の兄貴の仇をとらせてもらうぞ!!!」

劉備ガンダム達は武器を手にとって襲いかかろうとしていた

関羽ガンダム
「待たれよ!!!」

愛紗
「この者達は敵ではない！！」

鈴々
「どういうことなのだ？」

一刀
「実はな・・・・」

関羽ガンダム、愛紗、一刀はこれまであったことを話した

関羽ガンダム
「とういうわけなのだ。だからこの者達は・・・」

張飛ガンダム
「何言っていやがる！！！幽州を乗っ取ろうとした奴らの言っていることなんか信じられるか！！！」

鈴々
「そうなのだ！！！」

聞いた麗羽一行は・・・・・

顔良ガズアル
「くっ・・俺達だけならまだしも・・・麗羽様に対して無礼な口を叩くとは・・・・」

文醜ガズエル
「許してはおけぬ！！！」

麗羽一行は劉備一行と最悪な展開に迎えようとしていた。すると・・・

桃香
「待って!!この人たちにもわけがあるよ・・・」

劉備ガンダム
「桃香・・・でも・・・」

桃香
「劉君の気持ちはわかるけど・・落ち着いて・・」

孔明リ・ガズィ
「桃香様の言う通りにしましょう」

劉備ガンダム
「わかった・・・・」

こうして麗羽達に劉備達の志を聞かせることにしたのであった

麗羽
「なんと素晴らしい理想なんですの!!!」

劉備ガンダム
「袁紹・・・いや麗羽、あんたにも謝らなければならない」

桃香
「麗羽さん達はこんなことを望んでなかったんですね。白蓮ちゃんもいいよね」

白蓮
「・・・・・・・・わかった・・・・桃香がそこまで言うなら・・・・」

麗羽
「はい、これからは貴方達と共に戦いますわ!!」

一同は驚いた

関羽ガンダム
「劉備殿達の傘下になってくださるのですか?」

麗羽
「何言っていますの?客将としてたたかうまでですわ!!おっほほほほほほほほ!!!!」

ズコー!!!

一同はずっこけた

斗詩
(麗羽様ったら・・・・・)

猪々子
(相変わらずだよな・・・・・)

顔良ガズアル
(まあ・・・外道な袁紹様よりはましだな・・・・)

文醜ガズエル

（ああ・・・・・・）

そして・・・・・・

劉備ガンダム
「皆、これからも民のために戦ってくれるよな？」

桃香
「皆で力を合わせて戦おう！！」

白蓮
「もちろんだ！！」

趙雲ガンダム
「言われるまでもありません！！」

星
「そのとおりだ！！」

関羽ガンダム
「死ぬも生きるも」

愛紗
「兄上と桃香様と共に・・・・」

張飛ガンダム
「どこまでも付いていくぜ！！」

鈴々
「なのだ！！」

全員はやる気をあげたのであった。そこへ・・フードをかぶった女性が現れた

可進
「孔明とやら・・・どうやらあの者達なら大丈夫そうじゃな」

孔明リ・ガズィ
「はい・・・・私達はもとよりその覚悟です」

可進、もともとは霊帝に仕えし大将軍であったが、董卓ザクと張譲にはめられて都を追われていたのであった。フードをかぶっているのは・・・・禁則事項なので（可進希望による）

こうして、劉備一行も新たな一歩を踏み出したのであった

そのころ、張コウザク?、凪、真桜、沙和を加えた曹操軍は進軍を進めていくのであった

曹操ガンダム
「進軍せよ!!」

華琳
「目指すは荊州!!」

おまけ

一刀
「恋、これを・・・・・」

恋
「これは・・・・奉先の・・・・・」

それは呂布の遺品である破塵戟であった。

一刀
「あいつの遺志を受け継いでくれ・・・」

恋
「わかった・・・・」

恋は破塵戟を受け取ったのであった。

第２５話『天下三分の計』（後書き）

次回予告

天の力を操る曹操ガンダムと華琳と勝負する劉備ガンダムと桃香、

この勝負の行方は・・・・

次回　第２６話『龍帝剣、龍神剣、堕つ！！』

第２６話『龍帝剣、龍神剣、堕つ！！』（前書き）

ブログのほうは連載は終了しましたがこちらはまだ続きます。

第２６話『龍帝剣、龍神剣、堕つ！！』

曹操軍が荊州へ向かおうとしているその頃、荊州では事件が起きていた

黄忠ガンダム
「こ・・・・これは！！？」

紫苑
「いったい・・・何があったの！！？」

黄忠ガンダムと紫苑が見たのは劉表ガンダムの部屋が荒らされていたのであった。周りには死体があふれていた

そこへ・・・・・

魏延マーク？
「黄忠、紫苑！！！どうしたんだぜよ！！」

厳顔（真名・桔梗）
「一体何があったんだ！！」

魏延（真名・延耶）
「これって・・・いったい・・・・」

魏延マーク？、桔梗、延耶が騒ぎに気付いて駆け付けた。そして・・・

黄忠ガンダム

「あれは・・・・」

紫苑

「劉表様!!?」

部屋の隅では・・血まみれになって倒れている劉表ガンダムの姿を見つけた

黄忠ガンダム

「劉表様!!」

紫苑

「一体何があったんですか!!?」

劉表ガンダム

「くっ・・・・蔡瑁と黄祖が・・・・・ワシを・・・・・」

そこまで言いきると劉表ガンダムは絶命した。一同は驚きを隠せなかった

第２６話『龍帝剣、龍神剣、堕つ!!』

そのころ、劉備ガンダム達は驚きを隠せなかった

劉備ガンダム

「なんだって!!?劉表様が殺された!!!」

兵士

「はい、黄忠殿の手紙によればそう書かれておりました」

桃香
「そんな・・・・」

愛紗
「一体何者が劉表様を殺したというのだ!!」

孔明リ・ガズィ
「おそらく蔡瑁の仕業かと思われます」

すると・・・

猪々子
「蔡瑁だと!!?」

麗羽
「猪々子、知っていますの?」

斗詩
「教えて、文ちゃん」

猪々子
「わかったよ。あたいの父ちゃんはかつて荊州で名を馳せた武将でそれを妬んだ蔡瑁によって殺されたんだよ!!」

それを聞いた孔明リ・ガズィは・・・・

孔明リ・ガズィ
「今度の事も曹操軍に取り入って自分の名を上げるつもりでしょう。とにかくこれで荊州水軍の力を得ることはできなくなりました」

関羽ガンダム
「江東の孫権軍もいまだ音沙汰なしか・・・」

白蓮
「このまま我らだけで曹操軍と迎え撃つことになると戦いは厳しいものになるだろう」

すると・・・

顔良ガズアル
「劉備殿!!!!」

文醜ガズエル
「曹操軍が攻めてきましたぞ!!」

劉備ガンダム
「え!?」

全員は一斉に外に出て、遠眼鏡を見た。そこ見えたのは・・曹操軍であった

劉備ガンダム
「あれは・・・・」

どんどんと進軍する曹操軍を見た劉備ガンダム達は絶句していた

張飛ガンダム
「曹操の野郎ども、なんて数で攻めてきやがったんだ!!!」

詠

「まさか張遼や徐晃、霞や藍が曹操軍に入ってしまうなんて・・・・・」

麗羽
「それはこちらも同じですわ。張コウ将軍達も曹操軍に入るなんて・・・」

鈴々
「このままだと来てしまうのだ！！」

愛紗
「荊州はひとたまりもないぞ」

すると・・・

劉備ガンダム
「曹操軍が何だ！！」

桃香
「そうだよ！！」

張飛ガンダム
「兄貴！！？」

一刀
「桃香！！？」

劉備ガンダム
「例えどれほどの大軍でも俺達は立ち向かったじゃないか！！！」

桃香
「だから今度も負けないよ!!」

劉備ガンダムと桃香の言葉に一同は静まった

張飛ガンダム
「ああ、そうだな!!」

鈴々
「お姉ちゃん達の言うとおりなのだ!!」

星
「戦いますぞ、曹操軍と!!」

すると・・・・

孔明リ・ガズィ
「兵なくば、森を兵とし・・・・」

朱里
「陣なくば、大地を持って陣となす」

雛里
「私達に任せてください、戦い方はあります!!」

その夜

兵士
「探せ!!この近くにいるはずだ!!」
兵士

「探せ！！」

兵士達は劉備一行を探していた。すると・・・・

関羽ガンダム、鬼神王・愛紗
「「ここだ！！」」

すると森から関羽ガンダム、鬼神王・愛紗が現れた

兵士
「いつのまに・・・・」

関羽ガンダム
「鬼牙百列撃！！！！」

鬼牙王・愛紗
「鬼牙双刃撃！！」

更に別の所では

趙雲ガンダム
「真空迅！！」

昇龍装・星
「疾風迅！！」

恋
「・・・・・死ね！！」

音々音

「ちんきゅー旋風回転きっくー！！！！！」

張飛ガンダム
「爆裂大雷蛇！！！！」

雷光王・鈴々
「爆裂雷鳴砲！！」

白蓮
「うおおおおおおお！！！！」

猪々子
「うおりゃあああああああああ！！！！！」

斗詩
「はあああああああああああああ！！！！！」

顔良ガズアル・文醜ガズエル
「「必殺・金剛爆炎破！！！！！！」」

関平ガンダム
「鬼牙麒麟撃！！」

周倉ドーベンウルフ
「うおりゃあああああああああああああ！！！！！！」

閃光装・一刀
「はあああああああああああああ！！！！！」

劉備ガンダム

「星龍斬！！」

翔龍王・桃香
「光龍斬！！」

全員の攻撃で先見部隊を全滅させることができたのであった

そのころ、曹操軍は

夏侯惇ギロス
「何事だ！！」

紅狼装・春蘭
「状況を説明しろ！！」

兵士
「劉備軍の伏兵です！！」

一同は驚いた

夏侯淵ダラス
「なんだと！！？」

蒼狼装・秋蘭
「あの劉備達がか！！？」

桂花
「信じられないわ！！」

司馬懿サザビー

「伏兵に夜襲、あきらかに今までの劉備達とは違います。おそらく奴らには軍師がついたと思われます」

夏侯淵ダラス
「軍師だと!!?」

すると一人の兵士が吹き飛ばされた

兵士
「先遣隊・・・・は・・・・全滅・・・」

蒼狼装・秋蘭
「おい、大丈夫か!?」

夏侯惇ギロス
「もう我慢ならねぇ!!!俺達も行くぞ」

紅狼装・春蘭
「ああ!!!」

曹操ガンダム
「その必要はない・・・」

紅蓮王・華琳
「奴らはすぐに来るわ」

そして、森の中から劉備一行が現れた

夏侯惇ギロス

「劉備！！？」

紅狼装・春蘭
「貴様ら！！！」

曹操ガンダム
「久しぶりだな。二人の劉備よ・・・」

紅蓮王・華琳
「やはり貴方達とはこのような形で会うしかなかったわ」

劉備ガンダム
「互いに選んだ道だ！！」

翔龍王・桃香
「そうだよ！！」

曹操ガンダム
「余の軍は数十万・・それをたった数人で止めて見せるというのか？」

劉備ガンダム
「止めて見せる！！！」

翔龍王・桃香
「絶対に！！」

紅蓮王・華琳
「面白い。その度胸に免じて私達が相手になってあげるわ！！」

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は馬から降りると星鳳剣と天凰剣を構えた。そして、龍帝剣と龍神剣も光り始めた

劉備ガンダム
「何！？」

翔龍王・桃香
「どうなっているの！！？」

轟雷王・鈴々
「どうしたのだ？」

劉備ガンダム
「龍帝剣が共鳴している・・・・」

翔龍王・桃香
「龍神剣も・・・・あの剣はいったい・・・・・」

曹操ガンダム
「これこそは星鳳剣。劉備、貴様の持つ龍帝剣と同じ三候を継ぐ者の証・・・・」

紅蓮王・華琳
「そして・・これは天凰剣、もう一人の劉備、貴方の持つ龍神剣と同じ四聖獣と四神姫の力を持つものの証・・・」

劉備ガンダム
「三候の証・・・」

翔龍王・桃香

「四聖獣と四神姫の力を持つものの証」

曹操ガンダム
「そうだ・・・」

紅蓮王・華琳
「そして・・・・もうひとつ」

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は手を天にあげた。光の中から現れたのは・・・・玉璽であった

その光を見た孔明リ・ガズィ達は驚きを隠せなかった

朱里
「あれは・・・」

雛里
「まさか・・・」

孔明リ・ガズィ
「いけない・・・あの力に立ち向かっては・・・」

天から光が降り立った。そして、天から鳳凰を模した鎧、天玉鎧と神鎧獣が現れた

劉備ガンダム
「あれは・・・天玉鎧!?」

翔龍王・桃香
「それに神鎧獣!?」

曹操ガンダム
「天玉鎧・炎鳳！！！！」

紅蓮王・華琳
「神鎧獣・紅鳳！！！！！！」

曹操ガンダムは炎鳳を、紅蓮王・華琳は紅鳳を鎧のように装備した

張飛ガンダム
「なんってこった！？」

関羽ガンダム
「二人の曹操はすでに天の力をも操る力を得たというのか！？」

曹操ガンダム
「劉備、貴様らの力、見せてもらおうか！！」

紅蓮王・華琳
「かかってきなさい」

劉備ガンダムと翔龍王・桃香は立ち向かおうとした

閃光装・一刀
「二人とも行くな！！あの天玉鎧と神鎧獣には呂布ですらかなわなかったのだぞ！！」

劉備ガンダム
「だからといって俺達が退けば荊州の民はどうなる！？」

閃光装・一刀
「でも・・・」

翔龍王・桃香
「離して！！？」

劉備ガンダムと翔龍王・桃香は曹操ガンダムと紅蓮王・華琳に立ち向かった

劉備ガンダム
「星龍斬！！」

翔龍王・桃香
「光龍斬！！」

曹操ガンダム
「ふん・・・」

紅蓮王・華琳
「そんな攻撃・・・」

劉備ガンダム
「うわあああああああああ！！？」

翔龍王・桃香
「きゃあああああああああ！！？」

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳の攻撃に二人は吹き飛ばされてしまった。

張飛ガンダム
「兄貴！！？」

白蓮
「桃香！？」

劉備ガンダム
「まだまだ・・・民のためにも・・・」

翔龍王・桃香
「正義のためにも・・・・私達は負けるわけにはいかないの・・・・」

劉備ガンダムと翔龍王・桃香はなおも立ち向かった

関羽ガンダム
「我らも行くぞ！！張飛！！」

張飛ガンダム
「おう！！」

鬼神王・愛紗
「桃香様を助けに行くぞ！！」

轟雷王・鈴々
「おうなのだ！！」

関羽ガンダムの右肩のパーツと張飛ガンダムの左肩のパーツが外れ、劉備ガンダムの両肩に装備された。そして、鬼神王・愛紗の右肩の鎧と轟雷王・鈴々の左肩の鎧が外れ、翔龍王・桃香の両肩に装備さ

れた。そして、両者と共に黄金に輝き始めた

劉備ガンダム
「三位一体・真龍斬！！」

翔龍王・桃香
「三位一体・閃龍斬！！」

劉備ガンダムと翔龍王・桃香は必殺技を放ったが・・・・曹操ガンダムと紅蓮王・華琳に受け止められてしまった

曹操ガンダム
「さすがは龍帝剣と龍神剣・・・・」

紅蓮王・華琳
「共に伝説の力を持っているわね」

劉備ガンダム
「うおおおおおおおおおおおおおお！！！」

翔龍王・桃香
「はあああああああああああああああ！！！」

すると、突然、玉璽が輝き始めた

紅蓮王・華琳
「え！？」

曹操ガンダム
「玉璽が！！？」

そして、劉備ガンダムと翔龍王・桃香の後ろに龍のオーラが現れた

「ギャオオオオオオオオオオオオ！！！」

曹操ガンダム
「そうか・・」

紅蓮王・華琳
「貴方達も天に選ばれし戦士ということね。でも・・・・天にと届いたのは・・・」

曹操ガンダム・紅蓮王・華琳
「「我らの理想だ！！」」

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳
「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」」

そして、その姿は袁紹バウと呂布トールギスを葬った炎の鳳凰の姿なった

曹操ガンダム
「これで終わりだ！！！天鳳華焔斬！！！！！！」

紅蓮王・華琳
「天鳳烈火斬！！！！！」

「ギイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！！！」

炎の鳳凰は劉備ガンダムと翔龍王・桃香に襲い掛かった

劉備ガンダム
「うわあああああああああああああああああ！！！！！」

翔龍王・桃香
「きゃああああああああああああああああああ！！！！」

二人はその際に吹き飛ばされてしまった。その際に龍帝剣と龍神剣が弾き飛ばされてしまった。すると・・・・・

閃光装・一刀
「曹操！！！！」

閃光装・一刀は曹操ガンダムと紅蓮王・華琳に攻撃しようとした

曹操ガンダム
「甘い！！」

紅蓮王・華琳
「どきなさい！！」

二人はさらに攻撃した。すると・・・・・

閃光装・一刀
「！！！？」

突然、閃光装・一刀の脳裏が浮かんだ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

とある場所でさびれた剣を見つけた青年

？？？？

「これは・・・・いったい・・・・・」

すると剣が突然輝き始め、光に包まれた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして・・・・

閃光装・一刀

「ぐわあああああああああああああああああ！！！」

閃光装・一刀も吹き飛ばされてしまった

関羽ガンダム

「劉備殿！！？」

張飛ガンダム

「兄貴！！？」

鬼神王・愛紗

「桃香様！！」

轟雷王・鈴々

「お兄ちゃん！！」

孔明リ・ガズィ

「劉備さん！！」

朱里
「桃香さん！！」

雛里
「ご主人様！！」

劉備ガンダム
「くっ・・・・・・」

桃香
「かっ・・・・・・」

一刀
「・・・・・・・」

三人は気絶してしまった

曹操ガンダム
「さらばだ。龍の力を受け継ぐ者・・・・」

紅蓮王・華琳
「そして・・・・天の遣いよ・・・」

はたして劉備一行の運命やいかに・・・・

第２６話『龍帝剣、龍神剣、堕つ！！』（後書き）

次回予告

二人の張飛と受け継がれた戦神が曹操軍に迎え撃つ。そして。西涼から新たな戦士が現れた。その名は・・・馬超！！

次回　第２７話『激震！！長反橋！！』

第２７話『激震！！長反橋！！』（前書き）

ブログのほうでは最新作の準備が万端です。

第２７話『激震！！長反橋！！』

曹操の荊州攻略を阻止するために劉備達は果敢に挑んだのだが、天の力にはかなわず、倒されてしまった

第２７話『激震！！長反橋！！』

曹操軍に敗れた劉備一行は逃げ続けていた。（気絶している劉備ガンダムは関羽ガンダムに、桃香は愛紗に、一刀は猪々子におんぶさせてもらっている）

兵士
「追え！！」

兵士
「逃がすな！！」

そして、一行は長反橋までやってきた。そこへ孔明リ・ガズィと朱里と雛里がやってきた

孔明リ・ガズィ
「みなさん！！」

愛紗
「孔明殿」

朱里
「劉備さん、桃香様、ご主人様・・・・」

雛里
「まさか・・・」

関羽ガンダム
「天玉鎧と神鎧獣に立ち向かったのだ」

鈴々
「お兄ちゃんも二人をかばったときに・・・・・」

孔明リ・ガズィ
「なんということ・・・・・」

愛紗
「とにかくここを離れなければ・・・曹操軍はすぐに追い付いてくるぞ」

すると・・・・

孔明リ・ガズィ
「わかりました。ならば長江のほとりまで参りましょう」

張飛ガンダム
「長江へ？」

朱里
「江東からの援軍が来るはずです」

雛里
「すでに麗羽さん達が荊州の民を避難させました」

白蓮
「ならば早くしなければ・・・・」

音々音
「曹操軍が来ますぞ!!」

すると・・・、趙雲ガンダムと星がやってきた

趙雲ガンダム
「お待ちください。龍帝剣がないんです!!」

星
「龍神剣も見つからないのだ。劉備殿の持つ片方は見つかったのですが・・・・」

斗詩
「え!?」

周倉ドーベンウルフ
「どうなっているんだ!!」

顔良ガズアル
「まさかあの天玉鎧と神鎧獣との戦いのときに・・・・」

文醜ガズエル
「なくしたというのか!!」

星
「我らはもう一度探してくる」

趙雲ガンダム
「みなさんは先に行ってください！！」

張飛ガンダム
「なっ！！？趙雲、星、てめえら！！」

そして、二人は再び、森へと戻って行った。すると鈴々が・・・・・

鈴々
「こんな時こそ華蝶仮面が助けに来てくれるはずなのだ！！」

ズコ！！！

趙雲ガンダムは馬ごとズッコケった

星
「ふふ・・・・」

星は意気揚々と仮面の準備をしていた。すると

朱里
「鈴々ちゃん、彼らばっかり頼ってはだめですよ」

朱里が趙雲をフォローする形で説得した

趙雲ガンダム
「ほっ・・・」

星
「ちっ・・・・・」

すると・・・・

張飛ガンダム
「こうなったら・・・おめえら、兄貴達を連れて逃げろ!!」

鈴々
「曹操軍は鈴々達が食い止めるのだ!!」

恋
「恋も・・・・・・」

張飛ガンダム、鈴々、恋はこの場に残ることにした

愛紗
「お前達・・・・・」

張飛ガンダム
「兄貴達がいなかったら三璃紗はどうなる!!」

鈴々
「お姉ちゃん達には絶対に生きてもらわなければいけないのだ!!」

恋
「うん・・・」

孔明リ・ガズィ
「張飛さん、鈴々さん、恋さん、貴方達って人は・・・・・」

そして・・・・

関羽ガンダム
「死ぬなよ、張飛」

愛紗
「お前もだ、鈴々」

音々音
「恋殿もですぞ！！」

張飛ガンダム
「死んでたまるかっての！！」

そして、関羽ガンダム達はその場を後にしたのであった

張飛ガンダム
「この橋を通さなければいいだろ！！」

轟雷王・鈴々
「簡単なのだ！！」

恋
「簡単・・・・・」

そして、長反橋にまでやってきた。曹操軍が駆けつけた

夏侯淵ダラス
「橋の上に誰かいるぞ！！」

夏侯惇ギロス
「あれは・・・二人の張飛か！！？」

蒼狼装・秋蘭
「それに人間の呂布もいるのか!!?」

紅狼装・春蘭
「どうなっているのだ!!」

すると・・・・・

張飛ガンダム
「来たな曹操軍!!ここから先は一歩も遠さねぇぜ!!!」

夏侯惇ギロス
「ふっ、よもや貴様ら!!たった三人で俺達に挑むんじゃねぇのか!!!?」

轟雷王・鈴々
「お前らなんか絶対に通さないのだ!!」

恋
「通さない!!」

そして・・・・

徐晃サーペント
「面白い!!ならばこの徐晃が相手になってやろう!!」

張飛ガンダム
「おもしれぇ!!!かかってこい!!!」

張飛ガンダムは徐晃サーペントと戦い・・・・・

藍
「ふっ、恋よ。貴様から劉備軍にいるとはな・・・」

恋
「藍、負けない・・・・」

藍
「ならかかってこい!!」

季衣
「やい、ちびっこ!!お前の相手は僕だ!!」

轟雷王・鈴々
「ていうかお前だってチビなのだ!!」

季衣
「この僕の気にしていることを許さない!!ぶっ潰す!!!」

轟雷王・鈴々は季衣と戦い始めたのであった

そのころ、関羽ガンダム達もーの眼の前に兵士達が現れた

関羽ガンダム
「くっ・・・・荊州軍の兵士か・・・・」

孔明リ・ガズィ
「このままでは・・・」

周倉ドーベンウルフ

「こうなったら・・この俺様が相手になってやるぜ！！！」

すると・・・突然の攻撃で兵士達は吹き飛ばされていた。見た先には一人のＭＳ武将と二人の少女がいたのであった

馬超ブルーディスティニー
「俺は西涼の錦獅子・馬超！！！義によって劉備軍に加勢いたす！！」

馬超（真名・翠）
「あたしも馬超だ！！！そして、もう一人はどこだ！！」

馬岱（真名・蒲公英）
「ここにいるぞ！！二人の馬超の従妹、馬岱とは蒲公英のこと！！」

一同は驚いた。

愛紗
「あの西涼の馬超か・・・・・」

馬超ブルーディスティニー
「ああ、話は聞いた。俺達もあんた達の力になってやるぜ」

関羽ガンダム
「かたじけない」

翠
「あたし達も曹操軍の好きにはさせたくないからな」

蒲公英

「だから、よろしくね！！」

孔明リ・ガズィ
「でしたら、急ぎましょう！！」

関羽ガンダム達は急いで向かったのであった

そのころ

張飛ガンダム
「でりゃあああああああああああ！！！」

徐晃サーペント
「ぐわあああああああああああ！！！」

恋
「ふっ・・・・・」

藍
「ぐおおおおおおおおおおおお！！！」

轟雷王・鈴々
「うりゃあああああああああああ！！！」

季衣
「くっ・・・・・」

三人は見事に徐晃サーペント、藍、季衣を撃退したのであった

張コウザク？
「なかなかやるな！！この張？の一撃を受けてみろ！！爪拳・獄蓮掌！！！！」

張飛ガンダム
「くっ・・・・・」

続いて張飛ガンダムは張コウザク？と・・・・

凪
「我らも行くぞ、真桜、沙和！！」

真桜
「おう！！」

沙和
「任せるの！！」

凪
「烈火激烈拳！！！」

真桜
「螺旋突貫！！」

沙和
「疾風激斬！！」

恋は凪、真桜、沙和と・・・・

流琉

「季衣、下がってて!!今度は私が相手です!!!はあああああああああ!!!!!」

轟雷王・鈴々
「くっ・・・・・」

轟雷王・鈴々は流琉と戦い始めた

三人は一時劣勢になるが・・・・

張飛ガンダム
「爆裂大雷蛇!!!」

雷光王・鈴々
「爆裂雷鳴砲!!」

恋
「ふっ・・・・・」

何とか一撃をかまして、倒すことができたのであった

夏侯惇ギロス
「今度は俺達が相手だ!!」

紅狼装・春蘭
「覚悟しろ!!」

夏侯淵ダラス
「行くぞ!!」

蒼狼装・秋蘭
「ああ！！」

夏侯兄妹は武器を構え・・・・・

夏侯惇ギロス、夏侯淵ダラス
「「隼鋼二重閃！！！！！」」

紅狼装・春蘭、蒼狼装・秋蘭
「「牙狼双刃斬！！！！！」」

それぞれの合体技によって吹き飛ばされそうになる張飛ガンダム達であったが・・・

張飛ガンダム
「なめるな！！」

轟雷王・鈴々
「鈴々達を倒せると思うななのだ！！」

恋
「・・・・・！！」

夏侯兄妹
「うわあああああああああああああああ！！！」

見事に夏侯兄妹を打ち倒すことができたのであった

そのころ、趙雲ガンダムと星は龍帝剣と龍神剣を探し続けていた

趙雲ガンダム
「どこだ・・・どこにある・・・」

星
「趙雲、あれを・・・・」

星が指差した先には龍帝剣と龍神剣が刺さっていたのであった

そのころ、長反橋では曹操軍は苦戦していた

夏侯惇ギロス
「何という奴らだ」

夏侯淵ダラス
「俺達を相手に一歩も引かぬとは・・・・・」

すると・・・

張遼ゲルググ
「次は・・・・」

飛龍鎧・霞
「うちらが相手になろう！！」

張遼ゲルググ
「恋、その武器は呂布将軍のものだな」

恋
「恋は奉先の遺志を受け継いだ。だから戦う」

飛龍鎧・霞
「おもろい！！！なら、かかってこい！！！」

張飛ガンダム
「どこのどいつだかしらねぇが相手になってやるぜ！！」

轟雷王・鈴々
「そうなのだ！！」

張遼ゲルググ
「減らず口もそこまでだ！！」

一同は戦い始めたのであった。すると・・・・・・・

兵士
「なんだ！！？あいつらは！！」

夏侯惇ギロス
「どうした！！？」

一同は驚いていた。その先には趙雲ガンダムと星がいた。そして、その手には龍帝剣と龍神剣があった

趙雲ガンダム
「そこをどけ！！」

星
「はあああああああああああ！！！」

そして、そのまま橋を突破したのであった

轟雷王・鈴々
「頼むのだ！！」

張飛ガンダム
「龍帝剣と龍神剣を兄貴達の下に・・・」

恋
「・・・・・・・」

張遼ゲルググ
「貴様ら、まさかそのために・・・・」

飛龍鎧・霞
「うちらを足止めしたんか！！」

張飛ガンダム
「どうやら俺達の勝ちのようだな！！」

そして、お互いは距離をとった

張遼ゲルググ
「蒼紋猛瀑布！！」

飛龍鎧・霞
「龍牙激烈洸！！！！」

張遼ゲルググと飛龍鎧・霞の放った必殺技で三人は吹き飛ばされた

飛龍鎧・霞

「ここまで戦ったことをほめてやるで」

張遼ゲルググ
「だが・・・・・ここまでだ！！」

恋
「まだ・・・・終わりじゃない」

張飛ガンダム
「そうだ・・・兄貴と姉貴と俺達はな・・・・・」

轟雷王・鈴々
「死ぬときは一緒と誓ったのだ！！！！！」

そして、恋は己の得物と呂布の武器を構えた。そして、張飛ガンダムと轟雷王・鈴々はそれぞれの得物を手にあげた

張飛ガンダム
「聞け、雷の雄たけびを！！！！　爆裂超雷蛟！！！！！！」

轟雷王・鈴々
「爆裂轟雷撃！！！！！！」

恋
「双風激烈斬！！！！！！！」

張遼ゲルググ、飛龍鎧・霞
「ぐわあああああああああああああああああああああ！！！！」

その必殺技の衝撃に押されてしまい、二人は吹き飛ばされてしまったのであった。その際に橋は壊されてしまったのであった

そのころ、馬超ブルーディスティニー達を加えた劉備一行は長江にたどり着いたのであった

孔明リ・ガズィ
「来ました。江東からの援軍です」

孔明リ・ガズィがさした先には江東からの援軍の船であった。その船には周喩ヒャクシキと冥琳が乗っていた

趙雲ガンダム
「これで荊州の民は救われる」

詠
「馬超達のおかげね」

翠
「いいってこさ!!」

関羽ガンダム
「だがいまだ張飛は・・・・・」

愛紗
「鈴々もだ・・・・・」

音々音
「恋殿・・・・・・」

すると・・・劉備ガンダムと桃香と一刀が眼を覚ました

関羽ガンダム
「劉備殿!!」

愛紗
「桃香様、ご主人様!!!」

朱里
「まだ無理をしては・・・」

劉備ガンダム
「俺達のことはいい・・・・」

桃香
「それよりも愛紗ちゃん、皆はどうしたの?」

一刀
「教えてくれ!!」

しかし、三人の問いに一同の表情は暗かったのであった

愛紗
「それが・・・・」

趙雲ガンダム
「私と星が龍帝剣と龍神剣を探している間に・・・・」

星
「張飛と鈴々と恋が残り・・・・」

すると・・・・

張飛ガンダム
「俺様達ならここにいるぜ・・・」

恋
「少し時間がかかった・・・・・・」

鈴々
「でも・・・なんとか・・・間にあったなのだ・・・」

そこへ張飛ガンダム、鈴々、恋がやってきたのであった

劉備ガンダム
「張飛!!」

桃香
「鈴々ちゃん!!」

一刀
「恋!!」

こうして、三人と再会した劉備一行は江東へと目指したのであった

おまけ

江東に向かう船の上で劉備ガンダム達は馬超ブルーディスティニー、翠、蒲公英とあいさつをした

劉備ガンダム
「これからもよろしく頼む」

馬超ブルーディスティニー
「ああ、俺達の力を期待しててくれ」

翠
「よろしく・・・・・」

すると突然、船が揺れた

翠
「わあああああああああ！！！」

一刀
「おっと！！」

蒲公英
「お姉様！？」

桃香
「ご主人様！？」

突然、一刀と翠が倒れた。一刀の手には翠の胸が握られていた

翠
「★□※@！？」

一刀

「いや・・その・・・ごめん・・・」

翠

「何やっているんだ!!!このエロエロ魔人!!!」

翠は一刀を殴り飛ばしたのであった

馬超ブルーディスティニー

「あはは・・・・」

劉備ガンダム

「まったく・・・・」

第２７話『激震！！長反橋！！』（後書き）

次回予告

二人の孫権、二人の劉備が守るもの。それぞれの意思をぶつけ合う

次回　第２８話『孫権、立つ！！』

第２８話『孫権、立つ！！』（前書き）

最新作のほうブログでスタートしました

第２８話『孫権、立つ！！』

劉備一行は孫権達と協力するために江東へと向かった。そのころ孫権ガンダムと蓮華はいまだ悩んでいた。

孫権ガンダム
「どうしたらいいんだ？」

蓮華
「教えてください、お父様・・・・孫策兄様・・・・・」

その様子を雪蓮は見ていた。

雪蓮
「まだ悩んでいるみたいね」

第２８話『孫権、立つ！！』

城へとたどり着いた劉備ガンダム達であったが・・・・・

劉備ガンダム
「なんだって！？曹操達と戦うつもりはないんだって！？」

桃香
「それって一緒に戦えないこと！！？」

一刀
「曹操達は荊州を支配してしまった。次に狙うのはこの江東なんだぞ！！」

三人の言葉に孫権ガンダムと蓮華は・・・・

孫権ガンダム
「でも・・・まだこの江東が攻められたわけじゃないから・・・」

蓮華
「今、劉備達と一緒に戦ったら、曹操達は間違いなくこの江東に攻めてくる」

孫権ガンダム
「そうしたら・・・この地は戦場になってしまう!!!」

劉備ガンダム
「今、来なくとも曹操達は必ず来る!!」

桃香
「考え直して!!」

蓮華
「そうかもしれないけど・・・・・」

そんな様子を孫尚香ガーベラ、陸遜ゼータプラス、小蓮、隠、明命が見ていた

孫尚香ガーベラ
「もう孫権兄さんたら何やっているのよ!!」

小蓮
「お姉ちゃんもしっかりしてよ!!」

陸遜ゼータプラス
「姫様、やめてくださいよ」

隠
「そうですよ。これでは覗き見です」

すると

孫尚香ガーベラ
「こうなったらあたし達が出て決めましょう!!」

小蓮
「うん!!シャオ達で決めちゃおう!!」

陸遜ゼータプラス
「駄目ですよ!!!」

明命
「そんなことしては私達が怒られてしまいます!!」

三人は孫尚香ガーベラと小蓮を止めるのに必死で会った

そのころ、玉座では静寂となっていた

雪蓮
「困ったものね」

祭
「まったくじゃ」

孔明リ・ガズィ
「簡単に結論は出ませんね。・・・」

冥琳
「そのようだな」

すると・・・

雛里
「あのそれから・・・」

朱里
「少し、お尋ねしたいことがありますが・・・」

周喩ヒャクシキ
「と言いますと。」

孔明リ・ガズィ
「我が主、劉備殿の持つ龍帝剣はまさしく三候の魂が受け継ぐ剣です」

朱里
「桃香様の持つ龍神剣も四聖獣と四神姫の力が受け継がれた剣です」

雛里
「ですがそちらの孫権さん達の持つ虎錠刀と虎王牙刀は伝説の刀と言うんでしょうか？」

それを聞いた孫権ガンダム達は

黄蓋グフ
「孫一族に伝わる虎錠刀と虎王牙刀を！？」

太史慈ドム
「おのれ！！今の言葉、客人としても許さんぞ！！！」

呂蒙ティジェ
「てめぇら、うちの大将と姉御を疑うのか！！？」

甘寧ケンプファー
「なめたらいかんぜよ！！」

亞莎
「その言葉は私達、江東の民をも侮辱することになります！！」

思春
「貴様ら、斬られたいか！！」

孫権ガンダム
「この虎錠刀を疑うとは・・・・」

蓮華
「虎王牙刀まで疑うことは許さない！！」

全員は憤怒の状態で会った。しかし、周喩ヒャクシキ、雪蓮、冥琳、祭は余優な顔をしていた

孔明リ・ガズィ
「ならばその証をお見せください」

雪蓮
「どのようにかしら？」

朱里
「私達の主、劉備様と桃香様と剣を交えるのです」

桃香
「ええ！？どういうことなの！？」

劉備ガンダム
「俺達は曹操と戦うために孫権達と一緒にならなければならないのだろ！！？」

雛里
「そのためです」

桃香
「一緒に戦うために戦う・・・・・？」

劉備ガンダム
「わかった。そこまで言うなら戦う！！」

孫権ガンダム
「我が一族の虎錠刀と・・・」

蓮華
「虎王牙刀の力、見せてやる！！」

こうして、お互い戦うことを決意したのであった。すると・・・朱

里と雛里が

朱里
「はぅ～」

雛里
「がんばりすぎました～」

眼を回したのであった

外へ出た一同は四人の戦いを見ていた。そして・・・・・

劉備ガンダム
「うおおおおおおおおおおおおお！！！！」

翔龍王・桃香
「はあああああああああああああああ！！！！」

孫権ガンダム
「うおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

猛虎王・蓮華
「はあああああああああああああああああ！！！！」

戦いが始まったのであった。お互いは一歩も引かなかった

孫権ガンダム
「俺をバカにするのはかまわない！！」

猛虎王・蓮華

「私もよ、だけど孫一族に伝わる虎錠刀と虎王牙刀を疑うのは、我らが父や兄や姉を愚弄することだ!!絶対に許さない!!!」

劉備ガンダム
「そんなことで怒っていたのかよ!!孫権、俺はお前の父上や兄上が本物の戦士か知っている!!だけど、お前はどうなんだ!!」

翔龍王・桃香
「蓮華ちゃんもだよ!!雪蓮さんがどれほどの戦士かはわかるけど、貴方はどうなの!?」

孫権ガンダム
「え!?」

猛虎王・蓮華
「どういうこと!?」

翔龍王・桃香
「そうよ。私達は知りたいの!!貴方達がなぜ戦うのか?」

劉備ガンダム
「いや、なぜ戦わない!?」

そして、再び、お互いに剣をぶつあった

張飛ガンダム
「兄貴、そんな奴、さっさとやってしまえ!!!」

鈴々
「お姉ちゃんもコテンパンにしてやるのだ!!」

関羽ガンダム
「やってしまえではない！！」

愛紗
「我らは江東の孫権軍と共に曹操軍と戦うためにやって来たんだぞ！！」

張飛ガンダム
「あっそうか・・・」

趙雲ガンダム
「しかし、相手の孫権殿達もなかなか強い」

馬超ブルーディスティニー
「ああ、こっちまで刺激が来るぜ」

星
「これは劉備殿達もやられてしまうのではないか？」

翠
「かもしれないな」

張飛ガンダム
「んなことはねぇ！！」

鈴々
「二人ともやってしまえなのだ！！」

一刀

「やってしまってどうするんだよ」

そして、孫権軍も戦いを見守っていた

孫尚香ガーベラ
「私達が出ればすぐに終わるのに！！」

小蓮
「そうよ！！」

陸遜ゼータプラス
「だめですってば、姫様達！！」

隠
「そうですよ。」

すると・・黄蓋グフの様子が・・・・

黄蓋グフ
「ううう・・・・（泣）」

祭
「どうしたんじゃ、黄蓋殿？」

黄蓋グフ
「若様、蓮華様、御立派になられて・・・・・爺はうれしゅうございますぞ！！！うおおおおおおおおおおおおおお（泣）！！！！！」

雪蓮

「あらあら・・・・」

冥琳
「ご家老には困ったものだ」

黄蓋グフは感動のあまり、大泣きしていたのであった

孫権ガンダム
「なぜ戦わないかって・・・・俺は昔から戦いは怖かった」

猛虎王・蓮華
「私もよ!!でも私達は戦ってきた!!守るために戦ってきたのよ!!!」

孫権ガンダム
「俺達の家族を・・・」

劉備ガンダム
「家族？」

孫権ガンダム
「そうだ!!俺達の大切な肉親だ!!」

猛虎王・蓮華
「そして、頼もしい家臣の皆、それにこの江東の民達、お父様や孫策兄様や雪蓮姉様が守り抜いたもの・・・・」

孫権ガンダム
「それが俺達の家族だ!!俺達は家族を守る!!」

猛虎王・蓮華
「だからこの地を戦場にしたくない！！」

孫権ガンダム
「それが俺達の・・・・」

猛虎王・蓮華
「私達の・・・・」
孫権ガンダム、猛虎王・蓮華
「「真の勇気だ！！！」」

そして、孫権ガンダムと猛虎王・蓮華は輝けるオーラにまとわれた

周喩ヒャクシキ
「見事です、若、蓮華様。貴方達は真の勇気に御目覚めになった」

孔明リ・ガズィ
「劉備殿、桃香様、今度は貴方達が答える番です」

そして、劉備ガンダムと翔龍王・桃香も身構えた

劉備ガンダム
「そうか・・家族か・・それが孫権、蓮華、お前達の大切なものなんだな」

翔龍王・桃香
「私達も同じだよ！！孫権さん、蓮華ちゃん！！」

猛虎王・蓮華
「え！？」

劉備ガンダム
「俺達が闘ってきたのはいつだって三璃紗の民のためだ!!」

孫権ガンダム
「三璃紗の・・・・民・・・」

劉備ガンダム
「そうだ!!俺達にとって大切なもの三璃紗全土の民のためだ!!」

翔龍王・桃香
「孫権さん、蓮華ちゃん!!貴方達の家族も家臣も江東の民も三璃紗の民だ!!私達にとって大切なものなのよ!!」

猛虎王・蓮華
「私達の家族が三璃紗の民・・・・」

孫権ガンダム
「劉備、桃香・・・お前達という奴らは・・・・」

そして、それぞれの剣が輝き始めた

劉備ガンダム
「龍帝剣と龍神剣にはそんな俺達の想いが・・・・」

翔龍王・桃香
「私達を支えてくれた仲間達の思いがこもっている」

そして・・・・

翔龍王・桃香
「孫権さん、蓮華ちゃん・・・」

劉備ガンダム
「お前達の力、見せてみろ!!」

孫権ガンダム、猛虎王・蓮華
「「おう!!」」

お互いに離れて、武器を構えた

劉備ガンダム
「俺達は戦う!!!」

翔龍王・桃香
「三璃紗の民のために!!」

孫権ガンダム
「俺達は守る!!」

猛虎王・蓮華
「私達の家族を!!」

そして・・・

劉備ガンダム
「これが・・・・」

翔龍王・桃香
「私達の正義です!!!」

劉備ガンダム
「翔龍斬！！！！！」

翔龍王・桃香
「天龍斬！！！！！！」

「ギャオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

劉備ガンダムと翔龍王・桃香の必殺技が重なり合い、龍のオーラと化した

孫権ガンダム
「行くぞ！！」

猛虎王・蓮華
「我が一族が奥義！！！」

孫権ガンダム
「猛虎獣烈覇！！！！」

猛虎王・蓮華
「猛虎牙王覇！！！！」

「ガオオオオオオオオオオオオ！！！！」

孫権ガンダム、猛虎王・蓮華の必殺技が重なり合い、虎のオーラと化した

「ギャオオオオオオオオオオオオ！！！」

「ガオオオオオオオオオオオオ！！！」

それぞれのオーラがぶつかり合って、光となった

孔明リ・ガズィ
「正に互角・・・・それぞれの武器が伝説のものである証・・・・」

周喩ヒャクシキ
「そして、それを使いこなせたものこそ伝説の血を受け継ぐ者の証・・・」

そして、孫権ガンダムと猛虎王・蓮華は立ち上がると、そばにあった岩を切り裂いた

孫権ガンダム
「今、斬ったのは今までの俺達のためらいだ！！」

猛虎王・蓮華
「これより私達は家族を、三璃紗民を守るために・・曹操軍と戦う！！」

劉備ガンダム
「俺も孫権達と一緒になって・・・・」

翔龍王・桃香
「曹操達を倒す！！」

こうして、劉備軍と孫権軍の同盟の連合軍が成立したのであった。
すると一刀の様子がおかしかった

一刀
「まただ・・・・」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
一人の青年はとある蔵の中に立っていた。その手には錆びれた剣が握られていた
？？？
「この絵はいったい・・・・・」
そこには龍、虎、鳳凰、玄武、麒麟、獅子の顔を持つ龍、鳳凰の羽を持つ龍、阿修羅が巨大なる闇に立ち向かっている絵であった
すると・・・絵が輝き始めた
？？？
「う・・・うわあああああああああああ！！！」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
そして、一刀は我に気付いた
一刀
「まただ・・いまのはいったい・・・・」
そのころ、江東へ進軍する黄祖ゾゴック率いる先発隊の基地では
黄祖ゾゴック

「蔡瑁様からのご連絡だ。劉備達が江東の孫権軍と同盟したらしいぞ。おそらくこちらに向かっていることに間違いはない」

黄忠ガンダム
「ワシらにどうしろというのだ・・・・・」

黄祖ゾゴック
「決まっているさ、お前らはワシの指示通りに奴らと戦うのだ。」

紫苑
「くっ・・・・・劉表様を暗殺したものに手を貸すなんて・・・・・」

黄祖ゾゴック
「おお?逆らうのはかまわんぞ。だがお前らの宝物がどうなっていいのか?」

黄忠ガンダム
「貴様!!」

黄祖ゾゴック
「とにかくお前らは逆らえないのだ!!」

すると一人の兵士がやってきた

兵士
「黄祖様、劉備軍、孫権軍が攻めてきました!!」

黄祖ゾゴック
「もう嗅ぎつけてきたのか、頼むぞ」

そういう黄祖ゾゴックは天幕を出た

魏延マーク？
「黄忠・・・・・」

延耶
「紫苑様・・・・」

桔梗
「くっ・・・・卑怯な奴らめ」

黄忠ガンダム
「やむを得ない・・・・・」

紫苑
「出陣の準備をしましょう」

黄忠ガンダム達は出陣の準備を始めたのであった

黄忠ガンダム
「ワシ達が必ず助けてやるからな・・・・」

紫苑
「だから待っていてね・・・璃々・・・・」

こうして戦い始まったのであった

第２８話『孫権、立つ！！』（後書き）

次回予告

黄祖ゾゴックと戦いが始まった劉備・孫権連行軍。果たして勝負の行方は・・・・？

次回　第２９話『龍虎激燐！！』

第２９話『龍虎激燐！！』（前書き）

今回はオリジナルの話になります。

第２９話『龍虎激燐！！』

孫権軍との連合に成功させた劉備軍は江東へと進軍する曹操軍の先発隊、黄祖ゾゴックとの戦いに備えていた。そして、密偵に行かせた明命から連絡が来た

劉備ガンダム
「なんだって、黄祖軍の中に二人の黄忠殿がいるだと！！？」

明命
「はい、彼らには敵対する意思はありません」

張飛ガンダム
「じゃあ、なんで黄祖の野郎にしたがっていやがるんだ！！」

明命
「兵士達の話では人間の黄忠殿の娘が人質にされており、戦わざるを得なかったようです」

桃香
「本当なの！？」

蓮華
「娘を人質にするなんて卑怯な奴らよ！！」

孫権ガンダム
「でもそんな事情の相手とは戦えないよ」

すると孔明リ・ガズィが名乗り出た

孔明リ・ガズィ
「それなら私に作戦があります」

はたして孔明リ・ガズィの作戦とは・・・・

第２９話『龍虎激燐!!』

孔明リ・ガズィの作戦はこのようになっている。関羽ガンダム、馬超ブルーディスティニー、愛紗、翠、蒲公英が黄忠達と一討ちをする。その間に張飛ガンダム、趙雲ガンダム、孫尚香ガーベラ、鈴々、星、小蓮が紫苑の娘を助ける作戦であるのだ

関羽ガンダム
「我が名は関羽!!鬼の武勇の印にかけて、黄忠殿と一騎打ちを申し込む!!」

鬼神王・愛紗
「我が名も関雲長!!!天下の青龍の名にかけて迎え撃とう!!!」

馬超ブルーディスティニー
「俺は西涼の錦獅子・馬超!!!いざ尋常に勝負する!!」

獅子王・翠
「あたしも馬超だ!!!そして、もう一人はどこだ!!」

錦豹装・蒲公英
「ここにいるぞ!!二人の馬超の従妹、馬岱とは蒲公英のこと!!」

黄祖軍の本陣の前では関羽ガンダムと馬超ブルーディスティニーと

鬼神王・愛紗と獅子を模した鎧を装備した翠と豹を模した鎧を装備した蒲公英が待ち構えていた。その要望に黄忠ガンダム、魏延マーク?、龍を模した鎧を装備した紫苑と桔梗と延耶が出てきた

黄忠ガンダム
「お主らの申し出、受けて立とう」

神弓王・紫苑
「ただし、絶対に負けません」

そして、ついに戦いが始まったのであった

関羽ガンダムＶＳ黄忠ガンダム

黄忠ガンダム
「連龍牙!!!」

関羽ガンダム
「鬼牙百烈撃!!!」

黄忠ガンダムの放った矢を関羽ガンダムは防ぐことができた

関羽ガンダム
「なかなかやるな・・・・」

黄忠ガンダム
「貴公もだ・・・・」

関羽ガンダム
「猪々子から聞いたぞ。貴殿はなぜあのような奴を・・・・」

黄忠ガンダム
「大切な宝を助けるためだ！！！」

鬼神王・愛紗ＶＳ神弓王・紫苑

神弓王・紫苑は何発もの矢を放った。鬼神王・愛紗は得物で防いだが、一発だけがほほをかすった

鬼神王・愛紗
「ふっ・・・噂に違わぬ神業だな」

神弓王・紫苑
「貴方も大した使い手ね」

鬼神王・愛紗
「次はこっちから参る！！」

馬超ブルーディスティニーＶＳ魏延マーク？

馬超ブルーディスティニー
「うおおおおおおおおおおお！！！！」

魏延マーク？
「はあああああああああああああああ！！！！」

こちらも互角の戦いを見せていた

魏延マーク？
「なかなかやるぜよな」

馬超ブルーディスティニー
「あんたもな！！」

魏延マーク？
「俺も戦いがいがあるぜよ！！」

馬超ブルーディスティニー
「ならかかってこい！！」

獅子王・翠ＶＳ巨砲王・桔梗

巨砲王・桔梗
「うおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

巨砲王・桔梗は巨大な銃から砲弾が放たれた

獅子王・翠
「うわあああああああ！！！」

獅子王・翠も何とか避けることができた

巨砲王・桔梗
「ワシの一撃を避けるとはなかなかだな！！」

獅子王・翠
「今度はこっちから行くぜ！！」

錦豹装・蒲公英ＶＳ黒龍装・延耶

黒龍装・延耶
「ふん、私の相手が貴様のような小娘とはな・・・」

錦豹装・蒲公英
「蒲公英だってあんたみたいな脳筋となんか戦いたくないよ」

黒龍装・延耶
「何！！？どういう意味だ！！」

錦豹装・蒲公英
「脳みそ筋肉という意味だよ！！」

黒龍装・延耶
「殺す！！！（怒）」

それぞれ激闘を繰り広げていた

そのころ、張飛ガンダム、趙雲ガンダム、孫尚香ガーベラ、鈴々、星、小蓮、明命は・・・

明命
「この辺りです」

小蓮
「そうなの？」

趙雲ガンダム
「早く救出しなければ関羽さん達が危ないですね」

張飛ガンダム

「なら、急がねぇとな・・・」

一同は進み始めた。そして、とある天幕を見つけたのであった

孫尚香ガーベラ
「明命、もしかして・・・・」

明命
「はい、あそこです!!」

明命が指差した先には天幕があった

星
「あそこに黄忠殿の娘が・・・・」

鈴々
「ならば一気に・・・」

張飛ガンダム
「行くぜ!!」

明命
「はい、黄忠殿の娘は私が・・・」

明命は煙玉を投げた

兵士?
「うわあ!!?なんだ!!?」

兵士?

「何も見えないぞ！！」

趙雲ガンダム
「龍激導！！！」

張飛ガンダム
「爆裂大雷蛇！！」

孫尚香ガーベラ
「華天楼！！」

それぞれの必殺技で兵士達を全滅させることができたのであった

鈴々
「う～鈴々の出番がなかったのだ」

小蓮
「シャオもだよ！！」

星
「とにかく、周泰殿、黄忠の娘は無事か？」

明命
「はい、なんとか・・・・」

明命の手の中には小さな女の子が抱かれていたのであった

璃々
「ひっく・・・・ぐす・・・」

趙雲ガンダム
「泣かなくてもいい、我々は君を助けに来たのだ」

璃々
「璃々を・・・・？」

鈴々
「とにかくここから逃げるのだ」

璃々
「うん・・・・」

そして、一同は何とか逃げ切ることに成功した

そのころ、戦いは激化していた

鬼神王・愛紗
「はあああああああああああっ！！！！！」

関羽ガンダム
「うおおおおおおおおおお！！！！！」

神弓王・紫苑
「早くしないと・・・璃々が・・・・」

黄忠ガンダム
「だが、このままでは・・・・・」

桃香
「愛紗ちゃん達も限界になって来たよ」

劉備ガンダム
「たしかにこのままではまずいぞ」

一刀
「鈴々達はまだなのか？」

するとその時

趙雲ガンダム
「その勝負、待った！！！」

そこへ趙雲ガンダム達が駆けつけてくれたのであった。そして・・・
・

璃々
「う・・お母さん！！」

神弓王・紫苑
「璃々！？」

黄忠ガンダム
「どうやって、逃げ出したんだ」

紫苑は鎧を解除すると泣きじゃくる璃々をやさしく抱きしめた

璃々
「うわあああん、お母さん！！」

紫苑
「ああ・・・璃々・・・！ごめん・・・ごめんね・・・」

黄忠ガンダム
「じゃが・・・・無事でよかった・・・・・・」

桔梗
「どうなっているのだ？」

関羽ガンダム
「我らは貴殿らがそちらの娘が人質に取られて、仕方なく戦っていると明命殿から聞いたのでな」

愛紗
「だからこそ、無駄な戦いを避けるためにやったのだ」

そして、その後、黄忠ガンダム、魏延マーク？、紫苑、桔梗、延耶、璃々も劉備・孫権軍に加わったのであった

そのころ・・・黄祖ゾゴックの軍では

黄祖ゾゴック
「なんだと！！！？黄忠共が寝返っただと！！！？」

兵士
「はい・・・人質を取られてしまい、完全にこちらが不利になりました」

黄祖ゾゴック
「おのれ・・・・こうなったら・・・ワシ自らが奴らを始末してやるわ！！」

黄祖ゾゴックが向かおうとしたその時・・・・

劉備ガンダム
「そこまでだ！！！」

そこへ劉備ガンダム、孫権ガンダム、呂蒙ディジェ、甘寧ケンプファー、桃香、蓮華、猪々子、斗詩がやってきたのであった

黄祖ゾゴック
「お・・・おのれは！！？」

猪々子
「久しぶりだな、黄祖。てめえらに殺されたあたいの親父の仇をとらせてもらうぜ！！」

猪々子は大剣を黄祖ゾゴックに向かって、振り下ろした。黄祖ゾゴックも槍で跳ね返して応戦した

黄祖ゾゴック
「そうか・・・貴様は翡燕の娘か・・・・ならば親父のもとへ送らせてやる！！」

猪々子
「ぐわあ！！？」

斗詩
「文ちゃん！！」

黄祖ゾゴック
「甘い！！！」

斗詩
「きゃあ！！？」

斗詩も手助けしようとするが還り討ちをくらってしまった

黄祖ゾゴック
「お前らなどワシの敵ではないわ！！」

呂蒙ティジェと甘寧ケンプファーも立ち向かったのだが、還り討ちをくらってしまうばかりであった

黄祖ゾゴック
「とどめじゃ！！！」

黄祖ゾゴックはとどめを刺そうとしたその時・・・・・

ザシュ！！！

突然放たれ矢で黄祖ゾゴックは崩れ落ちた

翔龍王・桃香
「これって・・・・・」

黄祖ゾゴック
「こ・・・この矢は・・・・・」

神弓王・紫苑
「璃々に怖い思いをさせたことと劉表様に手をかけたことによる天罰です！！」

黄忠ガンダム
「今じゃ！！！」

二人の放たれた矢で黄祖ゾゴックの動きを止めることができたのであった

そして・・・・・

劉備ガンダム
「龍帝剣！！」

翔龍王・桃香
「龍神剣！！！」

孫権ガンダム
「虎錠刀！！！」

猛虎王・蓮華
「虎王牙刀！！！！」

劉備ガンダム、孫権ガンダム、翔龍王・桃香、猛虎王・蓮華
「「「「龍虎激燐斬！！！！！！！！」」」」

四人の合体技で黄祖ゾゴックを攻撃したのであった

黄祖ゾゴック
「バカな・・・このワシが・・・・蔡・・蔡瑁様！！！！！」

黄祖ゾゴックは爆発したのであった。それをみた兵士達は逃げ出し

たのであった

斗詩
「なんとか・・・・助かったみたいね・・・・・」

猪々子
「そうだな・・・あの爺さんと・・・おばさんの・・・・・」

シュ！！！

突然、矢が放れた

猪々子
「じゃなくて・・・・お姉さんのおかげだね・・・・・」

こうして、黄祖ゾゴックを倒した劉備・孫権軍。そして、戦いの部隊は赤壁へと移られた

第２９話『龍虎激燐！！』（後書き）

次回予告

天を震わす、最終決戦突入！！天雷火砲が曹操軍を倒す切り札となるのか？

次回　第３０話『赤壁大決戦』

第３０話『赤壁大決戦』（前書き）

いよいよ最後の戦いが始まりました。

第３０話『赤壁大決戦』

黄祖ゾゴックとの戦いに勝利した劉備・孫権軍は曹操軍との決着をつけるために、最終決戦の場である赤壁へと移られた

その際に真っ先に向かったのは孫尚香ガーベラ、陸遜ゼータプラス、呂蒙ディジェ、甘寧ケンプファー、小蓮であった

孫尚香ガーベラ
「待っていなさいよ、曹操軍！！！」

小蓮
「シャオ達がやっつけてやるんだから！！！」

呂蒙ディジェ
「手柄を二人だけには渡せねェぜ！！」

甘寧ケンプファー
「甘寧様が一番乗りじゃき！！」

陸遜ゼータプラス
「やめましょうよ。姫様達、相手は大軍ですよ」

小蓮
「そんなの関係ないわよ！！」

孫尚香ガーベラ
「そうよ。大軍であろう何だろうと攻めてくる奴らには容赦しないわよ！！」

呂蒙ディジェ
「靄が晴れるぜ！！」

靄がはれ始めた。一同は驚いた。そこには水上の巨大な要塞が見えていたのであった

甘寧ケンプファー
「水上の・・・要塞！！？」
呂蒙ディジェ
「なんて・・・・でけぇんだ。」

すると、矢が降りかかった。

孫尚香ガーベラ
「あたし達に矢を討ったわけ・・」

小蓮
「上等！！！」

孫尚香ガーベラと小蓮は突撃をしようとした。すると大量の矢が降りかかった

孫尚香ガーベラ、小蓮、陸遜ゼータプラス
「「「え！！？」」」
呂蒙ディジェ

「も・・・戻れ！！！？」

全員は降りかかる矢から逃げるのであった

全員
「「「「「逃げろ！！！！！！！？？？」」」」」

第３０話『赤壁大決戦』

なんとか、逃げ来た小蓮達は・・・・・・

黄蓋グフ
「姫様！！！？勝手な行いは慎むようにとあれほどおっしゃいましたのに！！！！」

祭
「まったくじゃ！！！お前達もなぜ止めなかったのじゃ！！！」

黄蓋グフと祭に叱られていたのであった

孫尚香ガーベラ
「いいじゃない。無事に帰って来たんだし」

小蓮
「それにシャオ達は武器をお土産に持って帰って来たのよ」

黄蓋グフ
「え？」

祭
「武器じゃと？」

孫尚香ガーベラと小蓮が指差した先には大量の矢が刺さった水上バ

イクがあった

孫尚香ガーベラ
「矢がいっぱい！！」

黄蓋グフ
「姫様、何もそんなこと頼んでおりませんのに～（泣）」

祭
「まったく、あんまり黄蓋殿を泣かさないでおくれ！！」

小蓮
「もう、泣かないでよ爺。わかっているわよ」

そんな様子を劉備ガンダムは見ていた

孫権ガンダム
「まったく、尚香とシャオのおてんばぶりにも困ったものだ」

蓮華
「そうよね。爺や祭にも頭を悩ませているしね」

雪蓮
「まあ、そこが二人のいいところだしね」

桃香
「あれ？あの矢に何かついているよ」

劉備ガンダム
「本当だ！！」

劉備ガンダムは一本の矢をとった。それは文であった。

曹操ガンダム
「劉備、孫権よ。我が軍の総勢は百万。お前達連合軍は二万五千・・・勝敗は明らかだ。それでもなお立ち向かうのか、あるいは降伏するのか。考えるがいい！！」

劉備ガンダム
「曹操達からの降伏勧告だ！！」

一刀
「くっ・・・何て野郎だ！！」

張飛ガンダム
「ふざけやがって！！」

鈴々
「まったくなのだ！！！」

関羽ガンダム
「そのような話は聞けぬな！！」

愛紗
「当たり前だ！！！」

孫尚香ガーベラ
「許せない！！！」

小蓮

「もう一度行ってぶちかましてやるわ！！」

黄蓋グフ、祭
「「なりませぬ！！！」」

黄蓋グフと祭は孫尚香ガーベラと小蓮を止めるのに必死で会った。
するとそこへ

孔明リ・ガズィ
「まともにぶつかっても曹操軍には勝てません」

朱里
「そうですよ」

劉備ガンダム
「孔明・・・・」

桃香
「朱里ちゃん・・」

朱里
「兵の数では我々を超えています」

雛里
「尚香さんの話では巨大な水上要塞まで用意されていると聞きました」

孔明リ・ガズィ
「軍勢の差が大きすぎます」

孫権ガンダム
「じゃあ、どうすれば・・・・・」

すると・・・・

周喩ヒャクシキ
「みなさんにお見せして抱きたいものがあります」

冥琳
「こちらへ・・・・」

周喩ヒャクシキと冥琳に連れられて、やってきたのは倉庫で会った。そこでは大量の火薬弾と投石機が置かれていたのであった。そして、周喩ヒャクシキが布をかぶせていたものに手をとった。そこには虎を模した巨大な武器が置かれていたのであった

劉備ガンダム
「これは・・・・・」

黄月英ガンイージ
「天雷火砲・・・・周喩様と冥琳様の指揮によって作られた最新の兵器です」

そこへ一人の女性が現れたのであった

桃香
「貴方は・・・・・」

黄月英ガンイージ
「黄月英といいます。天雷火砲の設計者です」

張飛ガンダム
「すげぇ、強そうな兵器じゃねぇか！！」

馬超ブルーディスティニー
「ああ、これさえあれば曹操軍も怖くないぜ！！！」

翠
「どうやって使うんだ？」

黄月英ガンイージ
「この火薬弾を使います。中には特殊な火薬が詰められています」

黄忠ガンダム
「特殊？」

紫苑
「普通の火薬とはどう違いますか？」

黄月英ガンイージは焙烙玉が入っている箱に眼を向けた

光月英ガンイージ
「例えば、この焙烙玉、普通の火薬を使っており、これだけでも船一隻を破壊できます。ですが、特殊な火薬を使うこの玉は焙烙玉の数百倍の威力を持ちます」

周喩ヒャクシキ
「その玉をこの天雷火砲から撃てば、曹操の水上要塞を破壊できましょう」

一同は驚いた。そして、孔明リ・ガズィ達は地図を開いた

孔明リ・ガズィ
「ここが江東、そして長江の先にあるのが赤壁・・・・」

朱里
「そこにある要塞が曹操軍の江東攻略のための要塞となります」

冥琳
「そして、ここにはきっと曹操達もいるはずです」

愛紗
「大将もろとも一気に叩くか！！」

張飛ガンダム、孫尚香ガーベラ、鈴々、小蓮
「「「「おもし（ろい／れぇ／ろいのだ！！）」」」」

張飛ガンダム、孫尚香ガーベラ、鈴々、小蓮は立ち上がった

張飛ガンダム
「こいつを何発も撃てば楽勝じゃねぇか！！」

孫尚香ガーベラ
「あたし達に矢を討ったお返しを一万倍に返してやれるわ！！」

鈴々
「それなら鈴々達の大勝利なのだ！！」

小蓮
「曹操軍もおしまいよ！！」

張飛ガンダム、孫尚香ガーベラ、鈴々、小蓮
「「「「イエーィ！！」」」」

しかし・・・・

光月英ガンイージ
「残念ながら一発しかないのです」

張飛ガンダム、孫尚香ガーベラ、鈴々、小蓮
「「「「え！？」」」」

光月英ガンイージ
「特殊な火薬を使うため、これしか作ることができませんでした」

張飛ガンダム、孫尚香ガーベラ、鈴々、小蓮
「「「「たった一発！！！？」」」」

延耶
「失敗はできないということか・・・」

魏延マーク？
「そういうことじゃきな・・・」

周喩ヒャクシキ
「それともう一つ、この砲は射程距離が短いのです」

冥琳
「使うには目標にかなり近づく必要があります」

一刀
「どうやって近づくんだ？」

すると孔明リ・ガズィが・・・・

孔明リ・ガズィ
「この砲を船に積むのです。そして、要塞に十分に近づき、天雷火砲を使うのです」

関羽ガンダム
「敵も黙っていないだろう」

朱里
「はい、すさまじい反撃があるでしょう」

冥琳
「曹操軍の戦力はこちらをはるかに上回る。要塞からと陸地からの反撃があります」

周喩ヒャクシキ
「天雷火砲を撃つにはそれなりの覚悟が必要です。赤壁は血で染める戦いになりましょう」

そして・・・・

孫権ガンダム
「水上戦は俺達が引き受ける」

蓮華
「どんな攻撃があっても要塞を破壊して見せるわ！！」

黄蓋グフ
「若、蓮華様、よくぞ申し上げました!!」

孫尚香ガーベラ
「兄さん・・・・」

小蓮
「お姉ちゃん!!」

雪蓮
「よく言ったわね。二人とも・・・・」

祭
「ああ!!」

劉備ガンダム
「陸から攻撃してくる奴らは俺達に任せてくれ!!」

桃香
「うん、絶対に止めて見せるから!!」

愛紗
「我が刀の錆にしてくれるわ!!!」

白蓮
「腕が鳴るな!!」

孫権ガンダム
「この戦に勝たない限り、江東の・・・いや・・三璃紗の明日に光

はささない」

蓮華
「そんなことはさせないわ!!」

劉備ガンダム
「この戦を最後にするんだ!!」

桃香
「みんなが笑顔で過ごせる平和な世界を・・・・」

孔明リ・ガズィ
「四人の願い、皆さんの武勇があれば、かなうと私は信じます」

そして、翌日についに動き始めようとしていた

黄蓋グフ
「出向準備、整いました!!」

祭
「権殿!!」

孫権ガンダム
「なんとしてもこの戦に勝ち・・・」

猛虎王・蓮華
「三璃紗に平和をもたらすのだ!!」

孫権ガンダム、猛虎王・蓮華
「「船の帆をはれ!!!出撃!!!」」

兵士
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

そして、始まった

周喩ヒャクシキ
「この天雷火砲こそが作戦の要！！」

冥琳
「これを撃つためには射程距離まで要塞に近づかなければならない！！！」

大史慈ドム
「敵の反撃は激しいはずだ！！」

思春
「心してかかれ！！！」

周りは靄で覆われていた

孫権ガンダム
「靄がひどいな」

孫尚香ガーベラ
「前が全く見えないわね」

そして、やがて靄が晴れてきた。そして、そこには鉄鋼で固められた船があった

猛虎王・蓮華
「何よ！！！？あれ！！！？いつのまに艦隊が」

冥琳
「まるで要塞を守るみたい・・・・」

すると・・・・

蔡瑁アッグガイ
「がはははははははは！！！！」

鉄甲艦隊から離れたところの船から声がした

孫権ガンダム
「誰だ！！？」

蔡瑁アッグガイ
「ワシは荊州水軍艦隊・提督・蔡瑁！！！！」

孫尚香
「荊州の水軍ですって！！？」

周喩ヒャクシキ
「やはり・・荊州水軍は曹操軍についたというわけか・・・・」

蔡瑁アッグガイ
「いかにも！！！見たか江東のアメンボども荊州艦隊の恐ろしさ見るがいい！！！！」

そして、それを曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は見ていた

曹操ガンダム
「劉備、孫権、やはり理解できぬようだな」

紅蓮王・華琳
「三璃紗統一という私達の理想を・・・」

曹操ガンダム
「蔡瑁・・・・撃て！！」

蔡瑁アッグガイ
「滅びるがいい！！！虎の一族よ！！！」

そして、ついに攻撃が始まった

周喩ヒャクシキ
「防御・扇の方！！！」

周りの船は動き出し、攻撃を見守った

冥琳
「水上要塞まで持ちこたえるのだ！！」

大史慈ドム
「焙烙玉、用意！！」

思春
「撃て！！」

そして、焙烙玉を投げて反撃を開始したのであったが鉄鋼艦隊は無

傷で会った

黄蓋グフ
「無傷じゃと！！！？」

祭
「焙烙玉の攻撃が効かぬとは・・・」

蔡瑁アッグガイ
「ワシらの船は鉄の装甲、効かぬわ！！！」

水軍のほうはかなり苦戦していた

そのころ地上部隊も攻撃を仕掛けようとしていた

張遼ゲルググ
「殿の理想に立ち塞がる者は撃つ！！」

飛龍鎧・霞
「撃て！！！」

しかし、突然の攻撃で態勢は崩れた。そこへ劉備軍が駆けつけてきた

翔龍王・桃香
「三璃紗の平和は守り抜く！！！」

劉備ガンダム
「曹操の好き勝手にはさせん！！！」

馬超ブルーディスティニー

「孫権達は撃たせねぇぞ！！！」

獅子王・翠
「てめえらの相手はあたし達だ！！」

張遼ゲルググ
「どうしても邪魔するならば・・・」

飛龍鎧・霞
「うちらが相手や！！」

一方、江東水軍隊も苦戦しており、鉄鋼艦隊によって船はおとされてしまった

蔡瑁アッグガイ
「曹操様達に刃向かうものは沈めてくれるわ！！」

孫権ガンダム
「蔡瑁め・・・・俺達にこれを止められる手立てはないのか・・・・」

陸遜ゼータプラス
「このままでは要塞に近づけない！！」

隠
「かといって天雷火砲を使うわけにもいきませんよ」

祭
「くっ・・・・どうすればいいのじゃ！！黄蓋殿・・・・？」

祭はいつのまにか黄蓋グフがいないことに気がついた

蔡瑁アッグガイ
「怯えろ！！！怯えて死んでしまえ！！！」

猛虎王・蓮華
「本当に打つ手がないというの！！？」

とその時

黄蓋グフ
「まだ、手はありますぞ！！！」

孫権ガンダム
「え！！？」

孫権ガンダム達が見た先には水上バイクに乗った黄蓋グフの姿であった

孫権ガンダム
「黄蓋！！？」

小蓮
「爺、何する気！！？」

祭
「あやつ・・・・まさか！！？」

黄蓋グフの乗っていた水上バイクの後ろには大量の焙烙玉が積まれていた

黄蓋グフ
「一発ずつ効かずとも、これだけの焙烙玉をぶつければ、いかに鉄鋼艦隊でもひとたまりはありませぬぞ！！」

孫尚香ガーベラ
「そんなことしたら・・・爺は・・・」

小蓮
「そうだよ！！いかないで！！」

黄蓋グフ
「そんな顔をなさいますな。この爺が見事、あの壁を・・・・いや！三璃紗の明日を切り開いて見せますわい！！！」

猛虎王・蓮華
「祭、爺を止めて！！！」

祭
「いや・・・いかせてやれ！！！」

孫権ガンダム
「何言っているんだよ！！このままじゃ爺は・・・・」

祭
「あやつの覚悟を無駄にするな！！！」

黄蓋グフは突撃を開始した

蔡瑁アッグガイ

「何奴!!?撃て!!!!」

荊州水軍は矢を放った。黄蓋グフはそれを防ぎ続けていたが、何発かは食らってしまった

小蓮
「爺!!?」

黄蓋グフ
「まだまだぁ!!この程度ではワシを止めることは出来ぬぞ!!!!」

黄蓋グフはなおも進み続けた

思春
「くっ・・・ご家老を援護しろ!!!!」

祭
「手助けをするぞ!!!」

そして、孫権軍も黄蓋グフを守るために、援護射撃を始めた

黄蓋グフ
「若・・・姫様・・・この爺が・・・この爺が三璃紗の明日を・・・・」

そして、それを見ていた劉備軍も・・・・

劉備ガンダム
「黄忠さん、紫苑さん、桔梗さん、爺やさんの援護を頼む!!!!」

黄忠ガンダム
「わかった！！！」

神弓王・紫苑
「黄蓋さんの志を無駄にしないために・・・・」

黄忠ガンダム、神弓王・紫苑、巨砲王・桔梗も援護射撃を開始した

そして、黄蓋グフの乗っていた水上バイクも鉄鋼艦隊に近づいてきた

黄蓋グフ
「祭殿・・・ワシの分まで若や姫様のことを頼みましたぞ。いろいろと思い出しますな・・・・」

黄蓋グフは祭との記憶を思い出した。

無理やり酒につきあわさせることや、仕事をさぼって酒を飲もうとしているところを注意すること

彼にとってはいい思い出であった

祭
「ああ、心配するなお主の気付いた明日はワシが受け継ぐぞ。ワシがそこに来るまで、上等な酒を用意するがいい」

そして・・・、最後に当たった矢が黄蓋グフの急所に当たった

黄蓋グフ
「フ・・・フフフ・・・・見よ！曹操・・・・これが・・・・三璃紗の明日を照らす光じゃあああああああああああ！！！！

！！！」

黄蓋グフの乗っていた水上バイクは鉄鋼艦隊にぶつかり、そして・・・・

どごおおおおおおおおおおおおおおおおおん！！！！！！！！！

乗せていた焙烙玉によって大きな爆発が起こった

孫権ガンダム、孫尚香ガーベラ、猛虎王・蓮華、小蓮

「「「爺いいいいいいいいいいいいいいい！！！！」」」

第３０話『赤壁大決戦』（後書き）

次回予告

ついに決戦の火蓋は切って落とされた。暗躍する者も現れ、天雷火砲は一撃必殺の要となるのか！！？そして、劉備と桃香は・・・・

次回　第３１話『龍の導き』

第３１話『龍の導き』（前書き）

次回はいよいよ第一部最終回です。次は第二部を作成しますので楽しみにしてください。挿入歌・三璃紗伝説～Ｔｈｅ　Ｂｒａｖｅ　Ｌｅｇｅｎｄ～

第３１話『龍の導き』

黄蓋グフ
「フ・・・・フフフ・・・・・見よ！曹操・・・・これが・・・・・三璃紗の明日を照らす光じゃあああああああああああああ！！！！！！！」

黄蓋グフの乗っていた水上バイクは鉄鋼艦隊にぶつかり、そして・・・・

どごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん！！！！！！！！

乗せていた焙烙玉によって大きな爆発が起こった

孫権ガンダム、孫尚香ガーベラ、猛虎王・蓮華、小蓮
「「「「爺いいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！」」」」

第３１話『龍の導き』

その爆発によって鉄鋼艦隊は全滅したのであった

蔡瑁アッグガイ
「バカな・・我が無敵の鉄鋼艦隊が全滅しただと・・・・」

孫権軍は黄蓋グフの死を悲しんでいた

明命

「そんな・・・・」

亞莎
「こんなことって・・・」

孫権ガンダム
「そんな・・・・爺が・・・・・・爺が死ぬなんて・・・・・」

猛虎王・蓮華
「私達にはまだ貴方の支えが必要なのに・・・・・・どうして・・・・・」

そして、雪蓮と祭も首を挙げた

雪蓮
「父様、孫策。黄蓋が向こうに入ったわ。よろしく頼むわね」

祭
「まったく・・・・あやつは先走りし追って・・・・」

周喩ヒャクシキ
「お見事でした黄蓋殿・・・・!!貴方の開いてくれた道、決して無駄には致しませぬ!!!」

冥琳
「周喩!!見えたぞ」

陸遜ゼータプラス
「曹操の要塞が!!!」

曹操の要塞が見え始めた

周喩ヒャクシキ
「黄蓋殿の死を無駄にしてはなりませぬ！！！」

孫権ガンダム
「はっ・・・・・」

猛虎王・蓮華
「孫権！！」

孫権ガンダム
「天雷火砲・用意！！！」

そして、ついに天雷火砲の発射準備が始まった

そのころ、蔡瑁アッグガイは戸惑っていた

蔡瑁アッグガイ
「ぐっ・・・・おのれ！！！！」

猪々子
「うおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

そこへ大剣を構えた猪々子が現れた

猪々子
「とうとう追い詰めたぞ！！！　蔡瑁！！！！」

斗詩

「文ちゃんのお父さんの仇をとらせていただきます！！」

蔡瑁アッグガイ
「小娘どもが・・・・・死ね！！！！！」

蔡瑁アッグガイは触手を伸ばすと二人を締め上げた

猪々子
「くっ・・・・・」

斗詩
「かっ・・・・・」

蔡瑁アッグガイ
「ぎゃはははははは！！！！！！あの世にいる親父のもとへ送らせてやるわ！！！！！」

するとその時

ドッ！！！

蔡瑁アッグガイ
「ぐわあああああ！！！！」

突然放たれた二つの矢によって、蔡瑁アッグガイの触手が外され、二人は解放された

黄忠ガンダム
「今じゃ！！」

神弓王・紫苑
「外道提督にとどめを！！！」

猪々子
「おう！！！　蔡瑁、覚悟！！！！！」

蔡瑁アッグガイ
「ぐわあああああああああああああ！！！」

猪々子の放った斬撃によって、蔡瑁アッグガイは倒された

猪々子
「親父・・・・仇はとったぜ・・・・・」

そのころ

周喩ヒャクシキ
「弾は一発のみ、けして外しはせぬ！！！」

隠
「間もなく射程距離に入ります！！」

冥琳
「頼むぞ！！」

そして、発射の準備が整った

周喩ヒャクシキ
「この一撃に私のすべてを賭ける！！曹操の野望を打ち砕け天雷火砲・発射！！！！！」

シュバーン！！！！！！

天雷火砲の放った一撃は要塞に直撃して、炎上した

陸遜ゼータプラス
「やった！！！」

劉備ガンダム
「やったな。孫権！！」

翔龍王・桃香
「蓮華ちゃん！！」

大史慈ドム
「ついに要塞を落としたぞ！！！」

兵士
「うおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

孫権ガンダム
「爺、見ているか？」

猛虎王・蓮華
「何もかも爺のおかげよ・・・・」

一同は勝利に喜んだ

その時、突然地響きが鳴った。

雪蓮
「え！！？何あれ！！？」

祭
「要塞の天守閣・・・」

要塞が崩れ始めると、そこに現れたのは・・・・・・

冥琳
「あれは巨大な鉄鋼戦艦！！！？」

孫権ガンダム
「まさか・・・・・あんなものが・・・・・・」

猛虎王・蓮華
「敵の本体なの！！？」

周喩ヒャクシキ
「なんてことだ・・・天雷火砲が効かぬとは・・・・・」

ついに現れた。鉄甲戦艦・神火鳳凰・・・・そして、その上には曹操ガンダムと紅蓮王・華琳がいたのであった

すると

呂蒙ティジェ
「ヒャッハー！！！」

呂蒙ティジェと甘寧ケンプファーが水上バイクに乗って、鉄甲戦艦・神火鳳凰に突っ込もうとしていた

孫尚香ガーベラ
「ちょっと、呂蒙、甘寧！！何する気？」

呂蒙ティジェ
「曹操の船がでかいからってビビってんじゃねぇよ！！」

甘寧ケンプファー
「ワシらで沈めてやるじゃき！！！黙って見とり！！！」

小蓮
「戻りなさい！！」

呂蒙ティジェ、甘寧ケンプファー
「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」」

二人は果敢に挑んだが・・・・

パッコーン

呂蒙ティジェ、甘寧ケンプファー
「「どっしぇー！！！」」

はじき返されたのであった

孫権ガンダム
「呂蒙！！！」

猛虎王・蓮華
「甘寧！！」

そして、二人は海から上がった

甘寧ケンプファー
「ぴゅー！！」

孫尚香ガーベラ
「もう何やっているのよ・・・・・」

小蓮
「まったく・・・・・」

そのころ、鉄甲戦艦・神火鳳凰では・・・・・

司馬懿サザビー
「勝利は時間の問題です。三璃紗統一の理想が現実のものとなりました」

曹操ガンダム
「うむ・・・・」

紅蓮王・華琳
「船を出しなさい・・・・・」

鉄甲戦艦・神火鳳凰がついに動き出した

周喩ヒャクシキ
「あんな巨大な戦艦が相手では我が艦隊はひとたまりもない！！」

冥琳

「全艦、回避行動を取れ！！！」

孫権軍は回避行動をとるが、よけきれず、孫権ガンダム達の乗る船に直撃してしまった

孫尚香ガーベラ、小蓮
「「きゃあああああああああああああああ！！！」」

孫権ガンダム
「尚香！！」

猛虎王・蓮華
「シャオ！！」

周喩ヒャクシキ
「若！！」

そして、周喩ヒャクシキは曹操ガンダムと紅蓮王・華琳を見つけた

周喩ヒャクシキ
「曹操！！！」

冥琳
「くっ・・・どうしたらいいのだ！！」

陸遜ゼータプラス
「このままでは全滅してしまいます」

隠
「あの鉄鋼戦艦を止めなければ・・・」

亞莎
「いったい・・・どうしたら・・・」

すると周喩ヒャクシキと冥琳が・・・・

周喩ヒャクシキ
「陸遜、江東水軍はお前に託す!!」

陸遜ゼータプラス
「え!?」

冥琳
「それから彼の補佐として、隠と亞莎に私は託そう!!」

隠
「え!?」

亞莎
「冥琳様!!?」

周喩ヒャクシキ
「陸遜、お前には私の持っているすべてを教えた。お前も立派な戦士だ!!」

陸遜ゼータプラス
「お師匠様・・・・」

冥琳
「行くのね・・・・周喩・・・・」

周喩ヒャクシキ
「冥琳達を頼んだぞ・・・私は鉄鋼戦艦を・・・止める!!」

冥琳
「隠と亞莎は陸遜の補佐を頼むわ!!」

陸遜ゼータプラス
「お師匠様、何を!!」

周喩ヒャクシキは神火鳳凰に向かった

そのころ、

郭嘉ヴァサーゴ
「敵は手も足も出せないようだね」

桂花
「私達の勝利は確実よ・・・・・」

すると・・・・

兵士
「後方より敵が来ます!!」

それは周喩ヒャクシキであった

司馬懿サザビー
「あれは周喩、江東艦隊の提督です」

桂花
「悪あがきもいい所よ！！」

周喩ヒャクシキ
「うおおおおおおおおおおお！！！！我が名は周喩！！江東水軍提督として・・・・曹操！！！貴様らの頸を捕りに来た！！！」

周喩ヒャクシキは曹操ガンダムと紅蓮王・華琳と戦い始めた。戦況は曹操ガンダムと紅蓮王・華琳のほうが有利であった

そのころ、江東水軍艦隊は

陸遜ゼータプラス
「これより江東水軍は僕達が指揮します！！！」

隠
「傷ついた兵を救出して、いったん戦場を離脱してください！！！」

亞莎
「そして、体勢を立て直してください！！」

陸遜ゼータプラスと隠と亞莎の指揮を受け継ぐことになった

そのころ、劉備軍は・・・・・

黒龍装・延耶
「うおおおおおおおおおお！！！！！」

凪
「はあああああああああああああああああ！！！！！」

錦豹装・蒲公英
「えーい！！！」

真桜
「うおおおおおおおお！！！！！」

白蓮
「はあああああああああああああ！！！！！」

沙和
「えーい！！！！！」

激戦は繰り広げていた。孔明リ・ガズィと朱里と雛里は兵達の指示を、神弓王・紫苑と巨砲王・桔梗と黄忠ガンダムは援護射撃をしていた

馬超ブルーディスティニーと周倉ドーベンウルフと関平ガンダムと獅子王・翠と張コウザク？

趙雲ガンダムと魏延マーク？と昇龍王・星と徐晃サーペント

夏侯惇ギロス、夏侯淵ダラス
「「隼鋼二重閃！！！！！」」

紅狼装・春蘭、蒼狼装・秋蘭
「「牙狼双刃斬！！！！！」」

季衣、流琉
「「えええーい！！！！」」

藍
「はあああああああああああああ！！！」

張飛ガンダム
「聞け、雷の雄たけびを！！！！！　爆裂超雷蛟！！！！！！！！」

轟雷王・鈴々
「爆裂轟雷撃！！！！！！」

恋
「双風激烈斬！！！！！！！！」

顔良ガズアル・文醜ガズエル
「「必殺・金剛爆炎破！！！！！！」」

張飛ガンダム、顔良ガズアル、文醜ガズエル、轟雷王・鈴々、恋は
夏侯兄妹と季衣と流琉と藍と・・・・・

そして・・・・・

関羽ガンダム
「張遼！！！」

鬼神王・愛紗
「霞！！？」

張遼ゲルググ
「関羽、愛紗・・・・一度は同じ旗印の下で戦った」

飛龍鎧・霞
「だが・・・お互いの信念のため・・・・容赦はせぇへん！！！」

関羽ガンダム
「望むところだ！！！」

鬼神王・愛紗
「我らが戦友よ！！！」

関羽ガンダムと鬼神王・愛紗と張遼ゲルググと飛龍鎧・霞

そのころ・・・閃光装・一刀も戦っていた。するとそれを様子見ていたものがいた

宇吉
「ふふふふふ・・・面白くなってきましたね。左慈・・・・」

左慈
「ふっ・・・・まだだ・・・この俺を満足させるにはまだ弱すぎる・・・」

宇吉
「貴方は相変わらずですね・・・ですがあのお方のお役立てることもありますよ」

左慈
「わかっている・・・・・覚悟しろよ・・・・・北郷一刀・・・」

そういうと二人はその場から消えた

そのころ・・・・周喩ヒャクシキは曹操ガンダムと紅蓮王・華琳に一撃を加えようとした。

周喩ヒャクシキ
「白麗閃！！！！！！」

しかし・・・・二人には効かず・・・・刀が折れてしまった

紅蓮王・華琳
「片腹痛いわ・・・・」

曹操ガンダム
「その程度では余の覇行は止められぬ・・・・」

そして、一撃を食らわされた周喩ヒャクシキは吹き飛ばされてしまった

周喩ヒャクシキ
「ぐっ・・・・・・」

曹操ガンダム
「ほう・・・まだ立つか・・・」

周喩ヒャクシキ
「孫策と雪蓮が切り開いた江東を・・・・渡してなるものか！！！」

紅蓮王・華琳
「貴方にそれができるのかしら？」

周喩ヒャクシキ

「私は・・・・貴様らを止めなければならぬのだ！！！天雷白爪弓！！！！」

周喩ヒャクシキは必殺の一撃を放った。しかし、曹操ガンダムと紅蓮王・華琳に避けられてしまった

郭嘉ヴァサーゴ
「外れ！！！」

桂花
「無駄なあがきのようね・・・」

司馬懿サザビー
「いや・・これは！！！」

そう・・・周喩ヒャクシキが狙ったのは・・・

ドカーン！！！

紅蓮王・華琳
「くっ・・・・動力部を狙ったのね・・・」

動力部を破壊された神火鳳凰は動きを止めた

雪蓮
「鉄鋼戦艦が止まった・・・・・」

周喩ヒャクシキ
「やったぞ・・・・・孫策・・・・・雪蓮・・・・・」

紅蓮王・華琳
「見事だわ・・・・周喩・・・・・」

曹操ガンダム
「だが・・・例え船が止まったとしても・・・我らの歩みは止まらぬ!!三候と四聖獣と四神姫の力は貴様の策などはるかに凌駕するものなのだ!!」

曹操ガンダムは星鳳剣を、紅蓮王・華琳は天凰剣を天にあげた。そこから光があふれだした

そして・・・・

劉備ガンダム
「なんだ・・・・・」

翔龍王・桃香
「いったい・・・・・」

孫権ガンダム
「これは・・・・・」

猛虎王・蓮華
「曹操が・・・」

劉備ガンダムの持つ龍帝剣、翔龍王・桃香の持つ龍神剣、孫権ガンダムの持つ虎錠刀、猛虎王・蓮華の持つ虎王牙刀もまた輝いていた

朱里
「これは・・・」

雛里
「伝説の力が・・・・共鳴している・・・・・」

孔明リ・ガズィ
「ええ・・・・・・」

そして・・・・

翔龍王・桃香
「孔明さん、朱里ちゃん、雛里ちゃん・・」

劉備ガンダム
「ここは任せた!!!!」

劉備ガンダムと翔龍王・桃香も神火鳳凰へと向かった

曹操ガンダム
「これが三候の輝きだ!!!!大獄焔斬!!!!!」

紅蓮王・華琳
「そしてこれが四聖獣と四神姫の力よ!!!!!超真焔斬!!!!!」

周喩ヒャクシキ
「ぐわあああああああああああああああ!!!!!」

孫権ガンダム、猛虎王・蓮華
「「周喩!!!!」」

二人の放った炎によって周喩ヒャクシキは吹き飛ばされてしまった

のであった

そして・・・・

劉備ガンダム
「曹操・・・・・」

翔龍王・桃香
「決着をつけよう・・・・・」

劉備ガンダムと翔龍王・桃香も駆けつけたのであった

紅蓮王・華琳
「そうね・・・」

曹操ガンダム
「劉備、貴様らと決着をつける時が来たようだな・・・・」

劉備ガンダム
「どうしてもこの地を侵略するか・・・・曹操!!!」

翔龍王・桃香
「そんなこと絶対にさせないよ!!」

曹操ガンダム
「統一は侵略にあらず!!」

劉備ガンダム
「同じことだ!!」

翔龍王・桃香
「天下は一人のための天下じゃない！！！民の望まない世界に正義がある！！！」

そして、ついに戦いが始まった

曹操ガンダム
「この期に呼んで、そんな戯言をほざくか！！！」

紅蓮王・華琳
「いいかげんに覚悟を決めなさい！！」

劉備ガンダム
「くっ・・・・・」

翔龍王・桃香
「きゃあ！！」

戦況は曹操ガンダムと紅蓮王・華琳の方が上であった

紅蓮王・華琳
「なぜなの！？二人の劉備、貴方達ほどの戦士なら三璃紗のために何を為すべきか理解できるでしょうが！！！」

劉備ガンダム
「わかっているとも・・・だからこそ・・・俺達は・・・・・」

曹操ガンダム
「貴様らのやり方で平和は訪れたのか！？民は満たされたのか？」

翔龍王・桃香
「違います。私達はただ・・・・」

紅蓮王・華琳
「誰かがやられねばならないのよ・・・誰かがどれほどの犠牲が出ようとも・・・誰かが!!」

劉備ガンダム
「だからと言って・・・・」

翔龍王・桃香
「民を踏みにじることなんて許されないよ!!」

曹操ガンダム
「あくまで刃向かうのか!?二人の劉備よ・・・ならば・・・・」

曹操ガンダム、紅蓮王・華琳
「「滅びよ!!」」

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は手を天にあげた。光の中から現れたのは・・・玉璽であった。そして・・・・天から光が降り立った。そして、天から鳳凰を模した鎧、天玉鎧と神鎧獣が現れた

曹操ガンダム
「天玉鎧・炎鳳!!!!」

紅蓮王・華琳
「神鎧獣・紅鳳!!!!!」

曹操ガンダムは炎鳳を、紅蓮王・華琳は紅鳳を鎧のように装備した

劉備ガンダム、翔龍王・桃香
「「曹操！！！！！」」

曹操ガンダム
「二人の劉備！！！我らの理想と貴様らの正義、どちらの志に真があるのか！！」

紅蓮王・華琳
「天は全てを知っているわ！！」

劉備ガンダム
「負けられない・・・」

翔龍王・桃香
「負けるわけにはいかないの！！」

劉備ガンダムと翔龍王・桃香は曹操ガンダムと紅蓮王・華琳に向かって行った

劉備ガンダム
「星龍斬！！」

翔龍王・桃香
「光龍斬！！」

曹操ガンダム
「これで終わりだ！！！天鳳華焔斬！！！！！！！」

紅蓮王・華琳

「天鳳烈火斬！！！！！！」

「ギイイイイイイイイイイイ！！！！！！！！！！」

お互いの必殺技がぶつかり合った。その衝撃で劉備ガンダムと翔龍王・桃香は吹き飛ばされてしまったのであった

劉備ガンダム
「俺達は負けられない・・・」

翔龍王・桃香
「負けられないの！！」

曹操ガンダム、紅蓮王・華琳
「「今こそ我らは天となる！！！」」

曹操ガンダム、紅蓮王・華琳は剣から炎を出した。劉備ガンダムと翔龍王・桃香は何とかして挑むが・・・・・

バッキーン！！

龍帝剣、龍神剣、爪龍刀、翔龍王の鎧が砕かれてしまった。そして・・・・

どかあああああああああああああああん！！！！

大きな爆発が起こってしまい、劉備ガンダムと桃香は海に落ちてしまった

孔明リ・ガズィ

「劉備さんと・・・・」

朱里
「桃香様が・・・・」

雛里
「まさか・・・・・」

一同は驚きを隠せなかった。そして・・・・

紅蓮王・華琳
「聞きなさい!!!!」

曹操ガンダム
「今、二人の劉備は滅びた!!!これ以上の犠牲を出したくはなかったら・・・・」

紅蓮王・華琳
「我らの理想にひざまずけ!!!!」

一同は驚いた。

孫権ガンダム
「劉備が・・・・・」

猛虎王・蓮華
「桃香が・・・・」

閃光装・一刀
「滅びただと・・・・」

鬼神王・愛紗
「曹操・・・・貴様ら・・・・」

張飛ガンダム
「兄貴いいいいいいいいいいい！！！！」

轟雷王・鈴々
「お姉ちゃん！！！！！！」

そのころ、海に落ちた劉備ガンダムと桃香は曹操ガンダムと華琳にかなわずあきらめかけていた。
すると・・・

？？？
「劉備・・・・二人の劉備・・・」

劉備ガンダム
「この声は・・・」

桃香
「あの時の・・・・」

？？？
「汝らの望みはなんだ？」

そして、光から死んだはずの公孫賛イージーエイトが現れた

公孫賛イージーエイト
「劉備・・・桃香・・・」

劉備ガンダム
「兄貴・・・公孫賛の兄貴!?」

桃香
「兄さん・・・・・」

公孫賛イージーエイト
「もう一度立ち上がるんだ。劉備、桃香!!お前達の正義は燃え尽きていないはずだ」

劉備ガンダム
「俺達の・・正義・・・」

さらにそこへ盧植ジムキャノンも現れた

盧植ジムキャノン
「正義とは魂の輝きなり・・・」

劉備ガンダム
「盧植先生・・・・」

盧植ジムキャノン
「想いの輝きが消えぬ限り魂の輝きも消えぬ!!見つめよお前達の想いを・・・」

桃香
「私達の想い・・・・」

そこには曹操軍と必死に戦っている仲間の姿が映し出されていた

劉備ガンダム
「俺達の想い・・・」

桃香
「皆の想い・・・・」

盧植ジムキャノン
「劉備・・桃香・・今こそ真の龍となれ!!」

そして、光の激しさが増した

劉備ガンダム
「俺達の・・・」

桃香
「私達の望みは・・・民のための明日・・・」

劉備ガンダム、桃香
「「この三璃紗に生きるすべての民の笑顔だ!!!」」

???
「ならばその魂を示せ!!」

そして、それは二体の龍となって、二人を積み込んだ

劉備ガンダム
「光よ・・・龍帝よ・・・」

桃香

「青龍よ・・龍帝姫よ・・・・」

劉備ガンダム、桃香
「「この魂を見るがいい！！我らが魂は・・・・・」」

劉備ガンダム、桃香
「「我らが魂は正義と共にあり！！！！！」」

そういうと二人から光があふれだすと巨大な光の龍が現れた。同時に黄金の鎧が装備された

「ギャオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

同時に黄金の龍はそれぞれの体に分離された。両肩には龍の頭部を模した鎧が、頭部には黄金の兜が、背中には黄金の翼が装備されたのであった

劉備ガンダム
「うおおおおおおおおおおおお！！！！！」

桃香
「はあああああああああああああ！！！！！」

海から巨大な二体の龍が現れた

「ギャオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

閃光装・一刀
「あれは・・・・」

獅子王・翠
「あの龍は・・・」

鬼神王・愛紗
「もしや・・・」

司馬懿サザビー
「龍の魂・・・目覚めしとき・・・・その魂は光となり・・・・天を駆け巡る・・・」

孔明リ・ガズィ
「世界を救った三候の一人・・・龍帝・・・・」

朱里
「四聖獣の一体・・・青龍・・・・」

雛里
「四神姫の一人・・・・龍帝姫・・・・」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

龍が天に昇るとそこには新たなる姿となった劉備ガンダムと桃香の姿が見えた

孔明リ・ガズィ
「神話の時代・・人々は龍帝と青龍と龍帝姫の魂を称え・・・こう呼んだという・・・・」

朱里
「天駆ける戦神、翔烈帝と・・・」

雛里
「煌めく光の龍帝姫と・・・・」

新たなる姿となった翔烈帝・龍装・劉備ガンダムと龍帝姫・桃香はポーズをとった

司馬懿サザビー
「この予言成就したり！！！！」

そして、劉備ガンダムの両手には真赤龍翔神刀と真青龍烈斬刀が、龍帝姫・桃香の両手には真赤龍閃牙剣と真青龍光爪剣が現れた

劉備ガンダム、龍帝姫・桃香
「「曹操！！！！」」

紅蓮王・華琳
「劉備！！」

曹操ガンダム
「貴様らは・・・・」

龍帝姫・桃香
「天を動かすのは貴方達だけじゃない！！！」

劉備ガンダム
「この魂に宿る正義と共に・・・・」

龍帝姫・桃香
「皆の想いと共に・・・」

劉備ガンダム
「今ここでお前達を討つ！！！」

そして、二人の二つの剣は一つとなり、真天翔龍帝剣と真閃光龍神剣へと変わった

そのころ、周喩ヒャクシキを助けた孫権ガンダム達もまた・・・

孫権ガンダム
「これは・・・・」

猛虎王・蓮華
「虎錠刀と虎王牙刀が・・・・私達を呼んでいる・・・・」

閃光装・一刀
「俺は・・・・そうか・・・あの時・・」

そして、ついに戦いは終幕へと向かって行った

第３１話『龍の導き』（後書き）

次回予告

三つの志が一つとなる時、新たなる自体が幕を開ける

第一部・最終回　第３２話『三国の志』

第３２話『三国の志』（前書き）

今回は第一部最終回です。次回は第二部を始めます。

第３２話『三国の志』

神話の三候の一人・龍帝、四聖獣の一体、青龍、四神姫の一人、龍帝姫

それらの魂を受けた劉備ガンダムは天駆ける戦神、翔烈帝へ、桃香は煌めく光の龍帝姫へとなり、復活した

周喩ヒャクシキ
「若・・・蓮華様・・・・今こそ大殿様や孫策や雪連から受け継いだ・・・・真の勇気を・・・・」

雪蓮
「行ってきなさい」

猛虎王・蓮華
「はい！！」

孫権ガンダム
「わかった。父上、兄さん・・・俺達に力を貸してくれ・・・・・」

そして、孫権ガンダムと猛虎王・蓮華も戦いに加わった

劉備と桃香の正義・・・・

曹操と華琳の理想・・・・・

孫権と蓮華の勇気・・・・・・

真の志を持つ者ははたして・・・・

第３２話『三国の志』

戦いは激化していた。互いに互角に戦っていた

曹操ガンダム
「逃さぬ！！！」

紅蓮王・華琳
「はあああああああああああああああ！！！！！」

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳は攻撃を仕掛けようとした。しかし・・・そこへ

孫権ガンダム
「蒼洸壁！！！」

曹操ガンダム、紅蓮王・華琳
「「何！！？」」

劉備ガンダム
「孫権！？」

龍帝姫・桃香
「蓮華ちゃん！！？」

孫権ガンダム
「猛虎獣烈覇！！！！」

猛虎王・蓮華
「猛虎牙王覇!!!!」

曹操ガンダムと紅蓮王・華琳はそれを何とかして受け止めた

曹操ガンダム
「孫権!!これはもはや天を沸かす戦い!!」

紅蓮王・華琳
「貴方達ごときに何ができる!!」

孫権ガンダム
「俺達も伝説の力を受け継ぐ者だ!!!!」

猛虎王・蓮華
「この身に宿る真の勇気がある限り、家族を・・・・全ての民を守って見せる!!」

するとそれぞれの得物が輝き始めた

龍帝姫・桃香
「これは・・・」

紅蓮王・華琳
「伝説の力が共鳴を・・・・」

すると玉璽が曹操ガンダムと紅蓮王・華琳の所から離れ、二人の劉備と二人の孫権の前に現れた。そして、光が降り立った

光がはれるとそこには・・・・・

虎の天玉鎧・弩虎を装備した孫権ガンダム、虎の神鎧獣・猛虎を装備した猛虎王・蓮華

龍の天玉鎧・蒼龍を装備した劉備ガンダム、龍の神鎧獣・天龍を装備した龍帝姫・桃香

それぞれ天玉鎧と神鎧獣を呼びだしたのであった

郭嘉ヴァサーゴ
「どうなっているんだ!!?」

桂花
「三つの天玉鎧と神鎧獣が同時に現れるなんて・・・・」

司馬懿サザビー
「伝説の力を受け継ぐ者たち・・・その真の志がついに天をもふるわせたのか・・・これはよもやG記には書かれていない戦い・・・・我らは神話の目撃者となるのだ・・・・」

曹操ガンダム
「そうか貴様たちも天を望むか・・・・・」

劉備ガンダム
「違う!!天を動かしたのは民の想い!!」

紅蓮王・華琳
「民の想いですって・・・・・・」

孫権ガンダム

「そうだ！！」

猛虎王・蓮華
「平和を願う皆の祈りが・・・・」

龍帝姫・桃香
「三璃紗に生きるすべての者達の想いが天すらも突き動かしたのです！！！」

曹操ガンダム
「認めよう、その力・・・・」

紅蓮王・華琳
「認めるわ、その信念・・・・」

曹操ガンダム
「だが我らとて引くわけにはいかぬ！！！」

そして・・・・

曹操ガンダム
「燃え尽きよ！！！炎鳳獄焔燐！！！！！！！」

紅蓮王・華琳
「紅鳳焔烈燐！！！！！！！！」

「ギイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！！！」

孫権ガンダム
「王虎轟獣撃！！！！！！！」

猛虎王・蓮華
「王虎轟勇覇！！！！！！」
「ガオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」
劉備ガンダム
「天翔真龍斬！！！！！！！！」
龍帝姫・桃香
「閃光真龍斬！！！！！！！！」
「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」
それぞれの技が重なり、鳳凰、虎、龍のオーラとなって天へと昇った
孔明リ・ガズィ
「龍の力が天に昇っていく・・・・」
周喩ヒャクシキ
「あれこそが・・・・真の勇気・・・・・・」
閃光装・一刀
「俺も行かなきゃ・・・・・」
閃光装・一刀も天へと向かった
「ギイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！」
「ガオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

龍と鳳凰と虎は天に向かっても戦い続けた。そして、それぞれが向かった

そして・・・・・・・

「ギイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！！！」

「ガオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

お互いがぶつかり合うと、天には星の紋章が浮かび上がった

趙雲ガンダム
「劉備さん！！」

神弓王・紫苑
「桃香様！！」

陸遜ゼータプラス
「孫権様・・・・・」

隠
「蓮華様・・・・・・」

そして、オーラが消えると・・・

曹操ガンダム
「まさかな・・・」

紅蓮王・華琳
「守られる者だけだった弱き者達・・・・」

曹操ガンダム
「民の想いを受けた貴様たちが・・・・・」

紅蓮王・華琳
「こうも・・・・力をつけるとは・・・・・」

その瞬間!!!!

バッキ!!!!

天玉鎧と神鎧獣が砕け始めた

劉備ガンダム
「曹操!!!!」

紅蓮王・華琳
「来るな!!!!戦いはまだ終わってはいないわ!!!!!」

曹操ガンダム
「いや・・・むしろ新たな時代はここから始まるのだ!!!」

龍帝姫・桃香
「新たな時代!?」

紅蓮王・華琳
「そうよ・・・・・」

曹操ガンダム
「貴様たちと民のつかんだ時代だ！！！！！！胸を張るがいい、弱き者達よ！！！！」

そして・・・・

どかあああああああああああああああああああああああああああああん！！！！

大きな爆発が起きた。そこへ閃光装・一刀が現れた

龍帝姫・桃香
「ご主人様！！？」

紅蓮王・華琳
「何やっているのよ！！！！貴方まで死ぬ気・・・・」

閃光装・一刀
「そう簡単にあきらめるな！！！！俺は・・・俺は・・・！！！！」

どかああああああああああああああああああああああああん！！！！！！

そして、二人と共に大きな爆発が起きた

劉備ガンダム
「曹操！！！！！！！」

龍帝姫・桃香
「ご主人様あああああああああああああ！！！！！！！」

そのころ、地上では・・・火の雨が降られていた。そこへ・・・・・

ドッ！！

夏侯淵ダラス
「これは・・・・星鳳凰剣！！？」

蒼狼装・秋蘭
「それに天凰剣！！？」

夏侯惇ギロス
「まさか・・・・曹操が・・・」

紅狼装・春蘭
「華琳様が・・・負けたというのか！！？」

そして、曹操軍は武器を捨て始めた

張遼ゲルググ
「斬れ・・・・」

関羽ガンダム
「張遼・・・霞・・・・」

飛龍鎧・霞
「うちらは負けた行き恥はさらさせん・・・・」

鬼神王・愛紗
「生きることは恥ではない・・・・」

張遼ゲルググ
「なっ！？」

関羽ガンダム
「死にたいときでも這いつくばってでも生きる・・・・」

鬼神王・愛紗
「それでこそ戦士ではないか・・・」

張遼ゲルググ
「関羽・・・」

飛龍鎧・霞
「愛紗・・・・・」

張飛ガンダム
「おい・・てことは兄貴達はどこへ行っちまったんだ！！？」

郭嘉ヴァサーゴ
「そんな・・・曹操様と華琳様が負けるなんて・・・・」

桂花
「嘘よ・・・こんなの・・・」

司馬懿サザビー
「いや・・曹操将軍と華琳様の命運はまだ尽きてはいない・・」

桂花
「え！？」

司馬懿サザビー
「天は三璃紗の統一は望まなかった。吉向が目指した三国の志・・・
・ならば我らのすべきことは・・・・・・」

孔明リ・ガズィ
「新たな時代の夜明けか・・・・・・」

やがて時は流れ・・・・

三璃紗・北部　洛陽

そこでは新たな鎧を装備した司馬懿サザビーと青い鎧のＭＳ武将と
赤い髪の少女がいた

曹丕ガンダム
「父上と華琳の行方はまだつかめぬか？」

曹丕（真名・華憐）
「どうなの？」

司馬懿サザビー
「はっ、曹丕陛下、華憐様・・・・ただ家臣一同、曹操将軍と華琳
様の捜索を全力すれば・・」

曹丕ガンダム
「わかっておる・・・こたびの余と華憐の皇帝即位とてそなたら家

臣の尽力があってこそ・・」

華憐
「お父様と華琳お姉様の捜索と共にこれらも私達の国を頼むわよ。
司馬懿!!」

司馬懿サザビー
「はっ!!」

そして、二人の皇帝即位の儀式が始まった

曹丕ガンダム
「顧みよ!!!あの赤壁の戦いを!!!」

華憐
「我らが父、曹操と同じ名を持つ曹操は三璃紗統一という理想を胸に戦い・・・そして、志半ばで散った」

曹丕ガンダム
「だが!これで終わりではない!!今こそ我らは二人の曹操の遺した志を受け継ぎ」

華憐
「光となろう!!」

曹丕ガンダム、華憐
「「我らはここに新国家『魏・機駕』の建国を宣言する!!」」

鳳凰の国旗を示す国・・・魏・機駕

江東

孫権ガンダムと蓮華は一つの墓の前に立った

孫尚香ガーベラ
「父上、兄上・・・・・」

小蓮
「今日、江東に新しい国『呉・轟』が生まれました」

孫権ガンダム
「俺達は・・・・いえ私達は誓います」

蓮華
「ここに眠る皆の志に恥じぬよう・・・・家族たる民を守って見せると・・・・」

虎の国旗を示す国・・・・呉・轟

周喩ヒャクシキ
(孫策・・・・これでお前もようやく安心して眠れるな・・・・
いつかまた向こうで語ろう・・・・幼いころのあの日のように・・・・)

そういうと周喩ヒャクシキは静かに息を引き取った

雪蓮
「逝ったのね・・・・周喩・・・・・」

冥琳

「孫策のことをお願いね・・・・これからどうする？」

雪蓮
「旅に出るに決まっているわよ。もちろん、冥琳と一緒ね！！」

冥琳
「そう言うと思ったわ。雪蓮・・・」

そして・・・未開の地、益州では・・・・・・

張飛ガンダム
「もう駄目だ！！！」

鈴々
「おなかすいて一歩も動けないのだ！！」

璃々
「鈴々お姉ちゃん、頑張って・・・」

雛里
「そうですよ・・・・」

愛紗
「まったくいちいち泣きごとを言うな！！」

関羽ガンダム
「そうだぞ！！」

関羽ガンダムと愛紗の言葉に張飛ガンダムと鈴々は

張飛ガンダム
「うるせぇ！！！」

鈴々
「泣いたっていいのだ！！」

劉備ガンダム
「相変わらずだな・・・張飛は・・・・・」

桃香
「鈴々ちゃんもだよ・・・・・」

張飛ガンダム
「そういう兄貴達だって変ってないぜ！！」

鈴々
「そうのだ！！」

桃香
「そうかな・・・」

張飛ガンダム
「あの戦いの後はどうなるかと思っていたぜ」

星
「ちゃんと我らの所に戻って来たしな・・・」

愛紗
「さよう・・民や我らを信じる兄上と桃香様に変わりありません」

劉備ガンダム
「みんな・・・・」

桃香
「ありがとう・・・」

孔明リ・ガズィ
「さあ着きましたよ」

朱里
「益州へ・・・・」

孔明リ・ガズィと朱里の先導によって、益州へとたどり着いた

劉備ガンダム
「ここが・・・・」

桃香
「益州・・・・・」

孔明リ・ガズィ
「そうです劉備さん、桃香様・・・ここに貴方達の描いた理想郷が誕生するのですよ」

劉備ガンダム
「俺達のじゃない・・・みんなのだろ!!」

桃香
「この光景・・・ご主人様にも見せたかったな・・・・・」

朱里
「ご主人様ならきっと帰ってきますよ」

桃香
「そうだね・・・・・」

そして、民や配下達が国旗を挙げた

それは・・・龍の国旗を示す国・・・・蜀・翔

劉備ガンダム
「さあ行こう!!」
桃香
「羽ばたく!!」
劉備ガンダム、桃香
「「明日へ!!」」

第一部　完

第３２話『三国の志』（後書き）

次回予告

今、三国伝の最終章が開幕する

真・恋姫三国伝　戦神大乱

そして・・・・もうひとつ

真・恋姫三国伝　Ｂｒａｖｅ　Ｂａｔｔｌｅ　Ｓｔｏｒｙ（ＢＢＳ）

戦神大乱・プロローグ（前書き）

今回から戦神大乱編がスタートします。

戦神大乱・プロローグ

かつて光り輝く3人のガンダムと4人の女神と4匹の獣が天から降り立った地、三璃紗。

神話の三候を継ぐ者たちと四聖獣と四神姫を継ぐ者たちにより・・・・三璃紗に

魏・機駕
呉・轟
蜀・翔

三つの国が生まれ、世は穏やかな時を迎えていた

しかし・・・・平和な時は長くは続かなかった

プロローグ

賈?アシュタロンと張譲の一人の女性が現れた

張譲
「ま・・・・まさか・・・お前は・・・・・・・ぎゃあああああああ!!!!!!!」

女性は持っていた剣で張譲を斬り殺した

賈?アシュタロン
「張譲様が・・・・・」

？？？

「安心しなさい・・・・・貴方は殺さないわ・・・私の片腕になりなさい・・・」

賈？アシュタロン

「は・・・・はい！！」

そして・・・魏・機駕の城でも・・・・・・

司馬懿サザビー

「まさか・・・・お前が現れるとは・・・・・・」

？？？

「この世界に司馬懿は二人いらないわ！！！消えなさい！！」

謎の女性、司馬懿（真名・咲夜）は司馬懿サザビーを殺したのであった

そして、今・・・再び戦乱の時代が始まろうとしていた

戦神大乱の世へと・・・・・・

戦神大乱・プロローグ（後書き）

次回

第1話『闇の血』

第1話（第33話）『闇の血』（前書き）

新シリーズが今回からスタートします。

第1話（第33話）『闇の血』

ここは三璃紗の西の果て・・・涼州。ここでは・・・・・・

兵士
「ひゃーはははははははは！！！逃げろ、逃げろ！！！！」

村人A
「ぎ・・魏・機駕軍だ！！！？」

村人B
「助けてくれ！！！！？」

魏・機駕軍が涼州のとある村で殺戮が行われていた

兵士
「助かりたかったら、もっと逃げろ！！！？でなければ死んでしまうぜ！！！！」

少女
「きゃあああああああああああ！！！！！！」

一人の兵士が少女に斬りかかろうとした。その時・・・

？徳イフリート
「させるか、外道ども！！！」

錦豹装・蒲公英
「お前らの好き勝手にはさせないぞ！！！」

青いＭＳ武将、?徳イフリートと錦豹装・蒲公英は子供を助けた。
兵士達も名を上げるために攻撃しようとするが二人にはかなわなかった。そこへ・・・・

韓遂デザートザク
「そこまでだ!!」

?徳イフリート
「お前は韓遂!?」

錦豹装・蒲公英
「なんで、あんたがここにいるのよ!!」

それは元西涼軍の韓遂デザートザクであった。その手には人質である子供が捕まっていた。

韓遂デザートザク
「久しぶりだなぁ?徳に馬岱!!てめえらと馬超のガキと小娘の首をとれば、ワシは一躍、魏・機駕の将軍様よ!!」

?徳イフリート
「裏切り者め!!」

錦豹装・蒲公英
「西涼の恥知らずが!!?」

韓遂デザートザク
「ああん?誰に向かって行っているんだ?てめえらの立場ってもんをわからせてやろうかぁ?」

韓遂デザートザクは子供に剣を切り裂こうとした

?徳イフリート
「やめろ!!」

と・・その時・・・

ザシュ!!

突然、現れた剣によって、韓遂デザートザクの左腕は切り落とされた

韓遂デザートザク
「ぎっ・・・ぎゃあああああああああああ、ワシの腕があああああああ!!!!」

???
「俺達を呼んだか?」

?徳イフリート
「その声は・・・・」

韓遂デザートザク
「ばっ・・・・・・馬超おおおおおおおおおおお!!!!?」

それは馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠であった

獅子王・翠
「ひでぇ事しやがって・・・」

馬超ブルーディスティニー
「てめぇら・・・まとめてぇ・・・」

馬超ブルーディスティニー、獅子王・翠
「「地獄へ堕ちろ!!!!」」

赤壁から一年、ついに魏・機駕は武力侵攻を開始。再び巻き起こる戦乱の炎。それは予言に描かれた「闇」の始まりか・・・・・

???
「天の刃は・・・・」

???
「闇と共に現れり・・・・・」

第1話『闇の血』

魏・機駕の武力侵攻に蜀・翔も動き出した

馬超ブルーディスティニー、翠、蒲公英は西涼へと戻り、魏・機駕と戦うことに

関羽ガンダム、張飛ガンダム、趙雲ガンダム、黄忠ガンダム、魏延マーク?、愛紗、鈴々、星、紫苑、焔耶、璃々は翠達と合流するために北方へと向かった

孔明リ・ガズィ、朱里、雛里、桔梗は「天の刃」を探すために南方へと向かった

劉備ガンダム、桃香は赤壁以降に行方不明となった北郷一刀を探す

ために北方へと向かった

そして、翌日、西涼の村はすっかり平和であった

?徳イフリート
「ずいぶんと上手になったじゃないか。そうだそのまま足で馬の腹を・・・」

?徳イフリートは子供達に馬の乗り方を教えていた。そこへ

翠
「なんだ、お前ら、まだ馬の一つも乗れねーのか?」

馬超ブルーディスティニーと翠と蒲公英がやってきた

少年
「馬超あんちゃん、翠姉ちゃん、それに蒲公英も」

蒲公英
「なんで蒲公英だけ呼び捨てなんだよ!!」

翠
「落ち着けって・・・」

馬超ブルーディスティニー
「ったく・・・しょうがねぇなー、俺が教えてやるよ!!」

翠
「あたしも教えてやるから!」

少年
「えー、やだよ。馬超あんちゃん、『走れ』と『止まれ』しか教えてくれないし。翠姉ちゃんの馬からはおしっこ臭いし」

少女
「？徳あんちゃんのほうが教え方が上手だもの」

馬超ブルーディスティニー
「なんだとぉ～！！？」

翠
「誰がお漏らしだ！！！？」

蒲公英
「でも翠お姉様、本当のことだし・・・・」

ゴッチーン！！

蒲公英
「お姉様、痛～い！！？」

？徳イフリート
「こらこら本当のことを言われたからってムキになるなよ。蒲公英も余計なことを言わないようにするんだぞ」

蒲公英
「う～、？徳兄様まで・・・」

？徳イフリート
「そろそろ巡回の時間だぞ」

四人はそのまま巡回へと向かっていた

翠
「?徳は子供好きだな・・」

?徳イフリート
「翠は嫌いなのか?」

翠
「いやあたしもあいつらといると楽しいさ」

蒲公英
「蒲公英もだよ」

馬超ブルーディスティニー
「俺もだ」

?徳イフリート
「だろ?子供達を見ていると戦争も過去も忘れさせてくれる。自分の名から流れるどす黒い宿命もな・・・・」

馬超ブルーディスティニー
「?徳、お前・・・まだあのことを・・・・」

翠
「忘れろとは言わないが・・・」

?徳イフリート

「わかっているさ。罪滅ぼしというわけじゃないがせめて俺は・・
あそこにある小さな幸せを守りたい・俺の・・・・この手で・・」

蒲公英
「そうだね」

?徳イフリート
「分かれて見回りしよう。俺はこっちに・・」

翠
「あたし達はこっちだな。了解、じゃあ後で・・・・」

そして、それぞれ巡回を始めたのであった

?徳イフリートが巡回を続けていると、旅人が倒れていた

???
「助けて・・・・くだせぇ・・・・」

?徳イフリート
「ど・・・・どうした、大丈夫か!?誰がこんなひどいことを・・
・」

???
「紅い・・・・血のように真っ赤な眼をした男に・・・襲われて・・
・・」

?徳イフリート
「紅い眼の男・・何者なんだ?」

すると旅人は？徳イフリートの腕をつかんだ

？徳イフリート
「！！！？」

？？？
「いやだなぁ～よくご存じでしょ～どんなに隠しても見えますよ・・・・そこにいるのはわかってますよぉ～お前のころの中にねぇ」

？徳イフリート
「う・・・うわあああああああああああああああ！！！！！！！」

そのころ・・・馬超達は巡回を続けていた。すると

少年
「馬超あんちゃん、翠姉ちゃん、蒲公英！！！」

そこへ馬に乗った子供たちがあわててやって来たのであった

少年
「止めてえええ！！！！！！！」

翠
「お前ら！！！？」

蒲公英
「あのままじゃ落馬しちゃうよ！！」

なんとか馬超ブルーティスティニーが馬を止めることができた

馬超ブルーディスティニー
「まだ乗り越せないのに無茶するな!!」

少年
「そんなことより村が大変なんだ!!」

翠
「村が!!?」

翠達が戻ってくると・・・村は火の海となっていた

翠
「魏・機駕軍めこりもしねぇーで!!」

蒲公英
「蒲公英達の実力を見せてやるんだから!!」

少年
「違うんだ」

馬超ブルーディスティニー
「どういうことだちゃんと説明しろ!!!」

するとそれはやってきたのであった。それは血のような紅い眼をした?徳イフリート
であった

馬超ブルーディスティニー

「?徳!!?」

そのころ、離れたところでは韓遂デザートザクと于吉がいたのであった

于吉
「これで彼らも終わりですね」

韓遂デザートザク
「どんな手を使ったんだ?」

于吉
「いくら善人の仮面をかぶっていても所詮、彼らは闇の末裔です。そのどす黒い血をくすぐってやっただけですよ」

韓遂デザートザク
「ずいぶんと楽しそうじゃねぇか?恐ろしい男だな、あんたは・・・・」

于吉
「本当の楽しみは残してあげましたよ。貴方の腕の恨み、晴らしてください」

そして、ついに魏・機駕軍が動き出したのであった

そのころ・・・・・

?徳イフリート
「うがあああああああああああ!!!!!」

翠、蒲公英
「「恋姫鎧装！！！」」
馬超ブルーディスティニー
「ボウズども隠れてろ！！」
馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠、錦豹装・蒲公英は?徳イフリートと戦い始めた
馬超ブルーディスティニー
「やめろ、?徳！！！」
獅子王・翠
「お前は・・・お前はまたすべてを失うつもりか！！？」
錦豹装・蒲公英
「?徳兄様、やめて！！」
三人は?徳イフリートを説得しようとするが、攻撃は止まらなかった
獅子王・翠
「やめろ！！」
馬超ブルーディスティニー
「?・・・・・」
三人は気付いた。彼の眼には・・・・涙が流れていたのであった
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

?徳イフリート
「両親と妹に手をかけたのは・・・・この俺だ」

蒲公英
「え！？」

翠
「なんだと！？」

馬超ブルーディスティニー
「本当かよ！？」

それは?徳イフリートの父が闇の力に飲まれ、?徳イフリートはそれを止めようとしたが、自身も闇の力に飲まれてしまい、父を手にかけた。母と妹と一緒に・・・・・

?徳イフリート
「気がついたとき、俺は・・・・何かも失っていた自分自身の手で・・・俺にもお前達に闇の血が流れている。己を見失ったが最後・・俺達は・・・馬超、翠、蒲公英・・・お前達は決して俺のようには・・・なるな！あああ・・・ああああああああ！！！！！」

?徳イフリートは悲しみを思いきり放った。三人はそれを見ていることしかできなかった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

?徳イフリートと戦っている三人は必死に叫んだ

錦豹装・蒲公英
「やめて、?徳兄様!!」

獅子王・翠
「お前、言ったろが『この村の小さな幸せを守るんだ』って!!だったらなんでこんなことしてんだよ!!」

馬超ブルーディスティニー
「闇の血なんか関係あるかぁ!!そんなモンに俺達は負けねぇって!!!!」

すると・・・

?徳イフリート
(そうだ、馬超、翠!!だからこそお前達の手で・・・・・殺してくれ!!)

?徳イフリートは馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠の手をとるとその武器で自らの体に突き刺した

?徳イフリート
「すまない・・・・馬超・・・・翠・・・・蒲公英・・・・・」

そういうと?徳イフリートは息を引き取ったのであった

錦豹装・蒲公英
「嘘・・・・・」

獅子王・翠

「おい・・・」

馬超ブルーディスティニー
「？徳・・・・・・」

するとそこへ・・・・

韓遂デザートザク
「けっ、闇の力とやらも大したことはなかったな。まあいいぜ、片方は片付いた。次はてめえらの番だ」

錦豹装・蒲公英
「お前は・・・・そうか・・これはお前らの・・・・」

左手を棍棒の義手へと変えた韓遂デザートザクが現れたのであった

韓遂デザートザク
「この左手の恨み、存分に晴らさせてもらうぜ」

錦豹装・蒲公英
「この野郎・・・・って・・・兄様・・・・お姉様？」

すると馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠の様子がおかしかった

馬超ブルーディスティニー
「て・・・・めぇら・・・・・」

獅子王・翠
「地獄に・・・・・・・」

馬超ブルーディスティニー、獅子王・翠
「「てめえら、皆地獄に堕ちろおおおおおおおおお!!!!!!!!!」」

すると突然、馬超ブルーディスティニーの眼が紅くなり、左肩の龍の鎧が頭部に装着した。獅子王・翠も眼が紅くなり、胸の獅子の頭部を模した鎧が外され、仮面となり装着し、髪留めが外され、手甲からは爪状の武器が生えた

錦豹装・蒲公英
「まさか・・・・闇の暴走によってなの?」

魏・機駕の兵士達は向かおうとしたが・・・・・・

馬超ブルーディスティニー
「獅龍神威乱舞!!!!」

獅子王・翠
「獅龍牙王斬!!!!」

闇の力によって暴走した馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠によって、全滅されたのであった

韓遂デザートザク
「何!!?」

韓遂デザートザクは驚きを隠せなかった。そして、彼の目の前に獅子王・翠が現れた

韓遂デザートザク
「ひっ！！？」

韓遂デザートザクは棍棒で攻撃しようとしたが、獅子王・翠は祖の棍棒にかみつき、食いちぎったのであった

韓遂デザートザク
「ぎゃあああああああああ！！！！」

そして、馬超ブルーディスティニーもその場へとやってきた。そして・・・・

韓遂デザートザク
「誰か・・・・于吉様・・・・お助け・・・」

ザク！！！

馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠は槍で韓遂デザートザクを突き刺したのであった

韓遂デザートザク
「ぎゃあああああああああ！！！！！痛い・・・し・・・死にたく・・・」

韓遂デザートザクはそのまま絶命したのであった。そして、二人は錦豹装・蒲公英と子供達のほうを見た。そして・・・・・・

馬超ブルーディスティニー、獅子王・翠
「「うがあああああああああああああああああ！！！！！！」」

錦豹王・蒲公英
「ちょっと!!?蒲公英達まで襲う気なの!!?」

その刃が錦豹装・蒲公英に襲いかかろうとしたその時・・・・

???
「「ふん!!」」

謎の二つの影が馬超ブルーディスティニー、獅子王・翠を攻撃したのであった

獅子王・翠
「ぐっ・・・・・」

???
「闇の力に溺れるな!!」

???
「その力を克服しなさい・・・」

馬超ブルーディスティニー
「あんた達は・・・・」

そういうと二人は意識を失ったのであった

それから眼が覚めた。二人は・・・・

翠
「嘘だろ・・・・・」

蒲公英
「本当だよ・・・・・・?徳兄様は・・・自ら・・・・・」

翠
「そんなのって・・・・・・」

馬超ブルーディスティニー
「ほ・・・・?徳?　?徳うううううううううううう!!!!!!」

翠
「う・・・うわあああああああああああああああん!!!!!!」

蒲公英
「こんなのって・・・こんなのって・・・うわあああああああああああ!!!!!!」

三人は悲しみを一気に放ったのであった

天の刃たる獅子の一族、その刃の向く先は・・・・・・

三璃紗を覆う予言の闇か・・・・・・

それとも・・・・

己自身の内なる闇か・・・・

第1話（第33話）『闇の血』（後書き）

次回予告

馬超達がたどり着いた漢中に新たな刺客が現れる

次回　第2話『漢中慟哭』

第2話『漢中慟哭』（前書き）

アニメ版をイメージした小説もよろしくお願いします。

第2話『漢中慟哭』

ここは魏・機駕の都・洛陽では・・・・・・

曹丕ガンダム
「漢中？」

華憐
「そこがどうしたの？」

郭嘉ヴァサーゴ
「ええ、田舎の小さな領地なんですが、とにかく民を苦しめる酷い領主がいまして・・・」

それを聞いた二人は・・・

曹丕ガンダム
「ふむ、見過ごしせぬな」

華憐
「咲夜、何か手は打っているのかしら？」

咲夜
「ご安心を、すでに我ら魏・機駕の正義を示すべく、漢中攻略部隊を派遣しております」

曹丕ガンダム
「さすがは咲夜、漢中の件、そちに任せたぞ」

そういうと咲夜と郭嘉ヴァサーゴは部屋を出た。それを見た桂花達は不審がっていた

そして、玉座から出た曹丕ガンダムと華憐の前に、程?ワイズワラビー、姜維ガンダムＦ９１、桂花、稟、風が現れた

姜維ガンダムＦ９１
「恐れながら申し上げます」

程?ワイズワラビー
「あまり咲夜の意見を鵜呑みされるのはいかがかと思います」

稟
「それに司馬懿殿の突然死にも何か違和感があるかと・・・」

桂花
「もしくは咲夜が司馬懿殿を暗殺されたかと思います」

風
「十分にお気を付けを・・・・・・・」

五人をそう告げるのだが・・・・・

曹丕ガンダム
「なぜだ?余と華憐は咲夜に全幅の信頼を置いている」

華憐
「それに証拠もないのに疑うのはどうかしているわよ」

二人は咲夜を疑うことはなかったのであった

第2話『漢中慟哭』

そのころ、漢中では一人の老人が逃げ回っていた

張魯ネモ
「し・・・しまった!?」

アニキ
「ようやく追い詰めたぜ、ジジィ!!」

チビ
「手間をとりやがって!!」

デク
「だな!!」

そして、兵士達はじっくりと近づいていき・・・・

アニキ
「さぁ、その小袋をよこしな!!」

張魯ネモ
「あ・・・あんたらには取るに足らんものだ。こ・・・・こんなもの奪っても・・・・・」

アニキ
「うるせぇ!!よこさねぇなら滝壺に落とすぞ!!」

三人は張魯ネモに襲いかかろうとしたその時・・・・

馬超ブルーディスティニー、翠、蒲公英
「「「お前らが落ちろ!!」」」

そこへ関羽ガンダム達と合流するために旅に出た馬超ブルーディスティニーと翠と蒲公英が馬を使って、三人を蹴り飛ばした

アニキ、チビ、デク
「「「あああああああああああああっ!!!!!」」」

三人は滝つぼに落とされてしまった

翠
「爺さん、大丈夫か?」

蒲公英
「怪我はしていない?」

張魯ネモ
「は・・・・はい・・・ありがとうございます」

馬超ブルーディスティニー
「あいつら、何を狙ってやがったんだ?」

張魯ネモ
「ああ、これですか・・・・」

張魯ネモが小袋から取り出したのは・・・・

張魯ネモ
「粟の実ですじゃ・・・魏・機駕の兵隊には何の魅力も感じぬもののはずじゃが・・・・・」

馬超ブルーディスティニー
「粟・・・・・」

すると・・・・

ぎゅるるるるるるるるるるるるるる～

三人は突然、落馬したのであった。原因は空腹である

張魯ネモ
「こ・・・これ、お若い方、大丈夫かね？」

そして、漢中の村にたどり着いた張魯ネモは・・・馬超ブルーディスティニー達に食事を与えたのであった。そこには張魯ネモの弟子である華柁もいたのであった

馬超ブルーディスティニー
「うめえええええええ！！！」

翠
「おかわり！！」

蒲公英
「蒲公英も！！」

張魯ネモ
「ははははは、こんなものでよければいくらでもお食べなさい」

そして、食べ終わった

蒲公英
「ごちそうさま」

翠
「たすかったぜ。しばらく何も食ってなかったからな」

張魯ネモ
「なに、礼を言うのはワシのほうじゃ」

華柁
「そのとおりだ。しかし、師匠、なぜ、奴らは師匠の粟の実を・・・・」

張魯ネモ
「わからん・・・・・」

すると・・・・・・

子供
「師君様、粟の刈り取りが終わったよ」

張魯ネモ
「おおそうか、では皆で食糧庫に運ぼう」

華柁

「俺も手伝います」

馬超ブルーディスティニー
「師君様？」

華柁
「そうだ。師匠はこの漢中の領主だ」

翠
「えええええええええええ！！？」

蒲公英
「嘘！！？」

張魯ネモ
「ふぉふぉふぉ、領主っぽくはありませんかな？」

その後、三人は村に残って漢中の手伝いをしたのであった

数日後

馬超ブルーディスティニー
「爺さん、あんた立派な王様だよ！！」

張魯ネモ
「ワシみたいな老いぼれが王様とはこそばゆいわ」

華柁
「そんなことはありませんよ」

張魯ネモ
「本当の王様とは劉備様達のようなお人のことをいうんじゃ」

馬超ブルーディスティニーと翠と蒲公英は思い出した。？徳イフリートの事件のことを話した。

蒲公英
「蒲公英達は魏・機駕を倒すためなら・・・・・」

華柁
「いや・・気持ちはわからんでもないが、暴力に暴力で対抗しても闇に飲まれるだけだぞ」

翠
「それは・・・・・」

すると広場のほうでは大騒ぎを起こしていた。そこでは・・・・

魏延マーク？
「さぁさぁ、お次はもっとすごいものを見せちゃるぜよ！！」

焔耶
「あの二つの的とこの紙にご注目ゥ～！！」

魏延マーク？と焔耶は紙を投げた。すると二つの矢が刺さり、的に命中したのであった

黄忠ガンダム
「ぬわはっはっはっ！！今日も絶好調じゃわい！！なあ紫苑よ！！」

紫苑
「ええそうですわね」

璃々
「お母さんも黄忠おじいちゃんもすっごーい！！」

それは黄忠ガンダム達であった

馬超ブルーディスティニー
「あれって黄忠のオッサンと魏延のオッサンだ！！」

翠
「それに紫苑もいるぜ！！」

蒲公英
「璃々や焔耶も一緒だ！！」

華佗
「知り合いのようだな。お前達と合流するために来たようだぞ」

そして、三人は黄忠ガンダム達の所へと向かった

馬超ブルーディスティニー
「黄忠のオッサン、俺と勝負してくれ！！」

黄忠ガンダム
「馬超、お主もきおったのか。よかろう、相手になってやる」

魏延マーク？
「ったく・・・・好きだねぇ」

魏延マーク?は子供達を下がらせた

翠
「あたしは紫苑とでも相手としよう」

紫苑
「ふふふ・・・・いいわよ。璃々、下がっててね」

璃々
「うん!!」

蒲公英
「蒲公英は脳筋とでも相手しよう!!」

焔耶
「誰が脳筋だ!!!」

蒲公英
「焔耶のことにきまっているじゃん!!」

焔耶
「殺す（怒）!!」

そして、組み手が始まったのであった。それを見ていた者もいた

韓浩ギガン
「あ・・・ありゃ黄忠・・・洛陽から『早く漢中を落とせ』って催促が来てんのにどうするよ兄貴?」

それは元・荊州軍の韓玄・韓浩兄弟であった

韓浩ギガン
「それに今・・・魏延も見えたぜ。奴らがいる限りうかつに手が出せねぇ。お・・俺、漢中に脅迫状、送っちまったよ」

韓玄ガッシャ
「心配するな。奴らは流れ者。すぐに出ていくさ」

そのころ、華柁や翠達が旅に出ようとしていた

張魯ネモ
「ではみなさん、蜀・翔への道中お気をつけて・・・」

華柁
「ですがよろしいのでしょうか?俺だけでも残って・・・・」

張魯ネモ
「心配しなくとも大丈夫じゃ。華柁よ。ワシにはもう教えてやることはもうないからな・・・」

すると・・・村人の一人が

村人
「し・・師君様・・こ・・・これを・・・」

張魯ネモ
「ん?こ・・・これは・・・?」

馬超ブルーディスティニー
「どうした、師君様」

張魯ネモ
「ああいや・・・知り合いに子供が生まれたとかで・・・・・」

そして、馬超ブルーディスティニー達は漢中を去った。それを韓兄弟は見ていた

韓浩ギガン
「おっ、何かうまくいったみたいだぜ。兄貴」

韓玄ガッシャ
「へっへー、うんじゃ出陣と行きますか！！」

そのころ、馬超ブルーディスティニー達は華柁からいろいろと話を聞き始めた

翠
「へぇー、太平洋術を封印することができたのか」

華柁
「ああ、俺の一撃で太平洋術は光りとなったのだ」

蒲公英
「すっごーい！！」

璃々
「うん！！」

華柁
「しかし、気になることがある。一つは張譲と魏・機駕の筆頭軍師

の司馬慰が何者かによって殺されたこと、それからもう一つはその魏・機駕に新たな軍師である同じ名を持つ司馬慰が現れたことだ」

焔耶
「そうなんだ?ところで紫苑様と黄忠様はさっきから黙っていますけど、どうしましたか?」

すると・・・二人は気がついたのであった。

黄忠ガンダム
「し・・・・しまった!!張魯殿が持っていたあの書簡の紋章・・・・」

紫苑
「あれは・・・・荊州殺戮部隊・韓兄弟の紋章よ!!」

黄忠ガンダム
「魏・機駕に降った聞いたが・・・いかん・・漢中にもどるぞ!!」

紫苑
「蒲公英ちゃん、璃々をおねがいね!!」

そのころ漢中では韓兄弟によって殺戮が行われていたのであった

韓玄ガッシャ
「泣け、わめけ!!!虫けらどもは皆殺しだ!!」

そこへ・・・張魯ネモがやってきたのであった

張魯ネモ

「この外道どもめが・・・早く逃げるんじゃ!!」

韓玄ガッシャ
「ジジィ、何の真似だ?」

張魯ネモ
「貴様ら、外道どもにこの・・・・漢中を好きにはさせんぞ!!」

韓玄ガッシャ
「バーカ!!この三璃紗にあるもの全ての者は草木一本まで機駕の物だ!!」

韓浩ギガン
「だから好きにやるんだよ!!」

韓浩ギガンは張魯ネモを突き刺した。そこへ・・・獅子王・翠、華柁、馬超ブルーディスティニーが戻ってきた

華柁
「師匠!!」

馬超ブルーディスティニー
「じ・・・爺さん!!」

張魯ネモ
「お若いの・・・なぜ戻ってきた・・・・」

獅子王・翠
「なんであたし達に言わなかったんだよ!?」

華柁
「俺達に言えばこんなことには・・・・」

張魯ネモ
「ワシらのことを気にするとは・・・・あんた達・・・・やさしい・・人・・」

そういうと張魯ネモは息を引き取った

華柁
「師匠・・・師匠おおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

獅子王・翠
「何でこんなことになっちまったんだよ！」

馬超ブルーディスティニー
「爺さん・・・・」

すると

韓浩ギガン
「ケッしけた村だぜ。見ろよ、兄貴、粟しかねーぜ！！」

韓玄ガッシャ
「んなもん火をつけて燃やしちまうか！！」

それを見た三人は

華柁
「貴様らか・・・貴様らが師匠を・・・！！」

獅子王・翠
「その薄汚ねぇ手で粟に触るんじゃねぇ、てめえら!!!」

韓浩ギガン
「ああ?なんだてめぇら?そのジジィと同じようにこの俺が嬲り殺してやろうか?」

馬超ブルーディスティニー
「てめえが・・爺さんを・・・・・許せねェ・・・・ゆるさねぇぞ!!!!!!!!」

獅子王・翠
「うおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!」

すると突然、馬超ブルーディスティニーの眼が紅くなり、左肩の龍の鎧が頭部に装着した。獅子王・翠も眼が紅くなり、胸の獅子の頭部を模した鎧が外され、仮面となり装着し、髪留めが外され、手甲からは爪状の武器が生えた

華柁
「これはいったい・・・・・」

韓浩ギガン
「やんのかぁこらぁー!!!」

ドス!!

韓浩ギガン

「へっ？」

馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠の武器が韓浩ギガンの額に突き刺さり、

馬超ブルーディスティニー
「獅龍神威乱舞！！！」

獅子王・翠
「獅龍牙王斬！！！」

そのままの勢いで、韓浩ギガンをバラバラにしたのであった

韓玄ガッシャ
「か・・韓浩おおおおお！！！？ひ・・ひいいいいいい！！」

韓玄ガッシャは逃げ出そうとすると、そこにはたくさんの兵士達の死体であった

韓玄ガッシャ
「わ・・・・ワシの兵達が・・・・」

魏延マーク？
「どこへいくつもりぜよ？」

黒龍装・焔耶
「残るは貴様だけのようだな・・・・」

韓玄ガッシャはゆっくりと見た・・・・そこには・・・・

韓玄ガッシャ
「ぎえええええええええ！！！魏延！！？い・・・いやだ・・・死にたくない！！！！！」

華柁
「逃がさん！！師匠の仇をとらせてもらうぞ！！」

華柁は針を韓玄ガッシャに投げた。するとその動きを止めた。それと同時に二本の矢がその体を貫いたのであった。その矢の正体は・・・

黄忠ガンダム
「貴様らの行き先は地獄…」

神弓王・紫苑
「迷わず逝きなさい・・・」

すると・・・

どごおおおおおおおおおおおん！！

近くで大きな爆発が起きた

魏延マーク？
「なんじゃ！！？」

黒龍装・焔耶
「新手か！？」

すると馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠は突然走り出した

魏延マーク？
「待たんか！！馬超！！」

黒龍装・焔耶
「翠！！」

黄忠ガンダム
「あやつら、どうしたんじゃ！！」

魏延マーク？
「わからんが・・・勝手に向かって行った」

神弓王・紫苑
「魏延さん、焔耶ちゃん、ここは頼むわ！！」

黒龍装・焔耶
「紫苑さま！！？」

そんな中で馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠が立ち向かった。
そこにいたのは

昇龍王・星
「何！！？」

趙雲ガンダム
「馬超、翠！！？」

鬼神王・愛紗
「どうしたのだ！！？二人とも！！！？」

関羽ガンダム
「その紅い眼は・・・・・」

轟雷王・鈴々
「まさか・・・・・」

張飛ガンダム
「お前らが漢中を・・・・・・」

そこへ・・・・

黄忠ガンダム
「待ってくれ！！！」

神弓王・紫苑
「翠ちゃん達は何か様子がおかしかったのよ・・・」

張飛ガンダム
「そうはいっても・・・」

轟雷王・鈴々
「二人を攻撃することなんてできないのだ・・・・」

そして・・・・

馬超ブルーディスティニー・獅子王・翠
「うがあああああああああああああ！！！！！」

馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠が襲いかかろうとしたその

時・・・・一つの光が降り立った。

昇龍王・星
「あの光は・・・もしや・・・・・」

鬼神王・愛紗
「ご・・・・ご主人様・・・・・・」

???
「天の身遣い・・・・天の輝きの鎧を手に入れる時・・・・」

???
「再び、現れし・・・・・」

そして、光がはれると、そこには新たな鎧を装備した一刀がいたのであった

天輝装・一刀
「闇の血・・・・俺が相手だ」

天輝装・一刀は天輝剣を取り出すと・・・・・馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠に立ち向かった。

第2話『漢中慟哭』（後書き）

次回予告

ついに帰還した北郷一刀・・・そして五誇大将軍に新たな力が宿る

次回　第3話『天の輝き・起て、五誇大将軍』

第３話（第３５話）『天の輝き・起て、五誇大将軍』（前書き）

最新話です。今回はイメージで挿入歌を追加しました。

挿入歌

「我等詠ウハ兵ノ道標」

第3話（第35話）『天の輝き・起て、五誇大将軍』

馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠が襲いかかろうとしたその時・・・・一つの光が降り立った

昇龍王・星
「あの光は・・・もしや・・・・」

鬼神王・愛紗
「ご・・・・ご主人様・・・・・」

???
「天の身遣い・・・・天の輝きの鎧を手に入れる時・・・・」

???
「再び、現れし・・・・」

そして、光がはれると、そこには新たな鎧を装備した一刀がいたのであった

天輝装・一刀
「闇の血・・・・俺が相手だ」

天輝装・一刀は天輝剣を取り出すと・・・・・馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠に立ち向かった。

第3話『天の輝き・起て、五誇大将軍』

天輝装・一刀は二人を相手にしても互角の戦いを見せていた。

鬼神王・愛紗
「ご主人様、その二人は・・・・」

天輝装・一刀
「わかっている。二人は何とかして元に戻すから大丈夫だ!!」

天輝装・一刀は勢いで馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠を押し返していたのであった。

轟雷王・鈴々
「おおー!!?」

張飛ガンダム
「すっげぇー!!」

趙雲ガンダム
「あれこそが天の力だというのか・・・・?」

そして、その場で離れると同時に・・・・・

天輝装・一刀
「天輝・光烈斬!!!!!!」

馬超ブルーディスティニー・獅子王・翠
「「ぐわあああああああああ!!!!」」

馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠は吹き飛ばされて、気絶した

黄忠ガンダム

「馬超！！？」

神弓王・紫苑
「翠ちゃん！！」

天輝装・一刀
「心配するな、気絶しただけだ」

関羽ガンダム
「主よ・・・今まであったことをお話ししてください・・・・」

鬼神王・愛紗
「お願いします」

そして、漢中で給仕活動しながら、一刀はこれまであったことを話した

あの爆発の後、謎の男に助けられて、修行をおこなっていたのであった。その時に天輝の力を目覚めさせることができたのである

愛紗
「そうだったのですか・・・・・」

関羽ガンダム
「にわかには信じがたい話なのですが・・・・」

一刀
「ははははは・・・・ところで愛紗達はこの漢中を守るために？」

愛紗

「はい、孔明殿と朱里と雛里の命を受けて・・・・」

そして、桃香と劉備ガンダム達も一刀を探していたことを伝えた

張飛ガンダム
「俺達がもっと少し早く来てりゃ、こんなことには・・・・・」

鈴々
「魏・機駕の奴らを許してはおけないのだ!!」

趙雲ガンダム
「なんとしてもこれ以上の被害を食い止めねば…」

星
「そのようだな?」

すると・・・・・

一刀
「だけど・・・なぜ軍を出さないんだ?いくら愛紗達でも・・・
たった六人では・・・」

関羽ガンダム
「実はもう一つ、我々はあるうわさについて調査をしている」

一刀
「噂?」

愛紗
「ええ。魏・機駕に謎の部隊あり!たとえその身がひきさかれよう

と死することなく立ち上がり襲い来る不死身の兵団。その者たちは皆、燃えるような真紅の眼をしているというのです・・・・」

すると黄忠ガンダムと紫苑は驚いて、馬超ブルーディスティニーと翠を見た

張飛ガンダム
「大事な部隊兵達にそんな得体のしれない奴らの相手をさせらねぇだろ」

一刀
「そうか・・・・・・」

すると・・・・・

蒲公英
「大変だよ!!」

焔耶
「どうした、蒲公英?」

蒲公英
「それが魏・機駕の大軍がすぐそこまで・・・・・」

一刀
「何?」

鈴々
「しつこいのだ!!!」

一刀
「行くか！！」

一刀、愛紗、鈴々、星、紫苑、関羽ガンダム、張飛ガンダム、趙雲ガンダム、黄忠ガンダムはすぐにその場所へと向かったのであった

それを見ていたものがいた。それは賈？アシュタロンと于吉であった

于吉
「まさか・・・漢中を前にしてこんな獲物が来るとは思いませんでした・・・・」

賈？アシュタロン
「蜀・翔の猛将三人・・・荊州の射手・・・・それに天の遣い・・・・」

関羽ガンダム達はあたりを見回していた。

神弓王・紫苑
「魏・機駕の大軍がいません・・・・」

張飛ガンダム
「まさか・・・別の道で漢中に入られたか！？」

天輝装・一刀
「いや・・・眼の前にいるぞ！！」

鬼神王・愛紗
「え！？」

そこには真紅の瞳をした兵達がいたのであった

趙雲ガンダム
「真紅の瞳・・・・」

昇龍王・星
「噂の不死部隊というのか・・・」

張飛ガンダム
「上等！！俺達の手でその不死身とやらを確かめてやるぜ！！」

于吉
「さあ、かかってきなさい・・・・」

そして、戦闘が始まった

関羽ガンダム
「鬼牙百列撃！！！！」

鬼牙王・愛紗
「鬼牙双刃撃！！」

趙雲ガンダム
「真空迅！！」

昇龍装・星
「疾風迅！！」

張飛ガンダム
「爆裂大雷蛇！！！」

雷光王・鈴々
「爆裂雷鳴砲！！」

黄忠ガンダム
「連龍牙！！」

神弓王・紫苑
「天翔突！！！」

それぞれの攻撃で不死部隊は倒れたが・・再び立ち上がった

轟雷王・鈴々
「こいつら・・・生き返ったのだ！！！？」

鬼神王・愛紗
「痛みを感じていないみたいだぞ！！！」

しかし、天輝装・一刀の攻撃を受けたものは立つことはなかった

天輝装・一刀
「どうやら、俺の攻撃は効くようだ」

于吉
「ならば・・私が相手です！！」

于吉は天輝装・一刀に立ち向かった。そして、不死部隊が鬼神王・愛紗達に襲いかかろうとしたその時・・・どこからか攻撃が不死兵に直撃した

馬超ブルーディスティニー
「ようやく・・追いついたぜ」

獅子王・翠
「あたし達も仲間に入れてくれよ!!役に立つと思うぜ!!」

関羽ガンダム
「馬超と翠の攻撃は主の攻撃と同様に効いているのか・・・・!?」

賈?アシュタロン
「やはり・・・闇に対抗できるのは・・・・天の力と闇だけか・・・」

すると・・・・
??

「「「「ならば・・・我らが相手だ!!!」

するとどこからか・・・声がした。そこに現れたのは・・・・徐晃
サーペントと凪、真桜、沙和であった

趙雲ガンダム
「紅い眼!!?」

関羽ガンダム
「バカな!!?どういうことだ!!?」

賈?アシュタロン
「それはこの力のおかげだよ。君達も闇の世界においでよ・・・」

賈?アシュタロンが取り出したの黒い玉璽であった。そして、玉璽から闇があふれだした。それは呪縛となって全員をとらえた

天輝装・一刀
「皆!!?」

于吉
「私も持っているのですよ・・・」

于吉も黒い玉璽を取り出した。そして、同時に闇を出した

馬超ブルーディスティニー
「なんで・・・・」

獅子王・翠
「あたし達だけなんとも・・・」

于吉
「ふふふ・・・元々闇を持つ貴方達にはわかりませんけど、この輝きを見た者は全て闇に支配されてなんの痛みを感じない無敵の人形になるのです」

鬼神王・愛紗
「そうか・・・これを使って兵達を・・・」

賈?アシュタロン
「そう一度・・・闇に魅入られた者は永遠に闇の中をさまようんだよ。?徳君がそうだったようにねぇ〜あんまり役に立たなかったけどねぇ」

それを聞いた馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠は・・・・

馬超ブルーディスティニー
「テメェが・・・？徳を！？」

獅子王・翠
「テメェ！！！！！！！」

于吉
「ふふふふ・・・・・貴方達も怒りに任せなさい。・・・・・愚かな友達のように・・・・」

獅子王・翠
「き・・・・」

獅子王・翠、馬超ブルーディスティニー
「「貴様あああああああああああああああああ！！！！！！！」」

馬超ブルーディスティニーと獅子王・翠が怒りと憎しみがあふれだし始めた

関羽ガンダム
「馬超、翠！！！」

鬼神王・愛紗
「怒りを身に任せるな！！！」

于吉
「ふふふふふ・・・・北郷一刀・・・・貴方も終わりですね・・・・」

天輝装・一刀
「くっ・・・・・・」

天輝装・一刀があきらめかけていた。

そのころ、劉備ガンダムと桃香は一刀を探し続けていた。すると・・・

桃香
「こ・・・これって・・・・・」

劉備ガンダム
「剣が輝いている・・・・・」

手にしていた真赤龍翔神刀と真青龍烈斬刀と真赤龍閃牙剣と真青龍光爪剣が輝き始めた。すると一つの光があふれだした

劉備ガンダム
「まさか・・・」

桃香
「ご主人様が・・・・・」

そのころ、関羽ガンダム達は闇に飲み込まれてイシキカセ遠のきかかっていた。すると・・・・

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

二体の光の龍が現れ、それぞれに降りたった

賈?アシュタロン
「何だ!!?」

于吉
「あれは!?」

天輝装・一刀
「まさか・・・・」

そして、光がはれると・・・・そこには・・・・

『闇に抗い者達よ・・・聞け。我らが声を・・・・・!!』

右肩に黄金の龍の頭部を模した鎧を装備した関羽ガンダムと鬼龍王・愛紗

左肩に黄金の龍の頭部を模した鎧を装備した張飛ガンダムと雷龍王・鈴々

両肩に黄金の龍の胴体を模した鎧を装備した趙雲ガンダムと風龍王・星

左肩に黄金の龍の前足を模した鎧を装備した黄忠ガンダムと弓龍王・紫苑

右肩に黄金の龍の後ろ脚を模した鎧を装備した馬超ブルーディスティニーと獅龍王・翠

新たな鎧を装備した五誇将軍の姿が見えたのであった

第３話（第３５話）『天の輝き・起て、五誇大将軍』（後書き）

次回予告

新たな鎧を装備した五誇将軍・・・・・そして・・・・今、二人の覇王が舞い戻る

次回　第４話『紅蓮の焔神・日輪の炎帝姫』

第４話『紅蓮の焔神・日輪の炎帝姫』（前書き）

連続投稿でございます。

第４話『紅蓮の焔神・日輪の炎帝姫』

二体の光の龍が現れ、それぞれに降りたった

賈?アシュタロン
「何だ!!?」

于吉
「あれは!?」

天輝装・一刀
「まさか・・・・」

そして、光がはれると・・・・そこには・・・・

『闇に抗い者達よ・・・聞け。我らが声を・・・・・!!』

右肩に黄金の龍の頭部を模した鎧を装備した関羽ガンダムと鬼龍王・愛紗

左肩に黄金の龍の頭部を模した鎧を装備した張飛ガンダムと雷龍王・鈴々

両肩に黄金の龍の胴体を模した鎧を装備した趙雲ガンダムと風龍王・星

左肩に黄金の龍の前足を模した鎧を装備した黄忠ガンダムと弓龍王・紫苑

右肩に黄金の龍の後ろ脚を模した鎧を装備した馬超ブルーディスティニーと獅龍王・翠

新たな鎧を装備した五誇将軍の姿が見えたのであった

第４話『紅蓮の焔神・日輪の炎帝姫』

趙雲ガンダム
「この鎧は・・・・・・」

風龍王・星
「力を感じる・・・・・・」

馬超ブルーディスティニー
（俺達の中の・・怒りや憎しみが消えていく・・・・・・）

獅龍王・翠
（これは一体・・・・・・）

そして、天輝装・一刀は察した。その隙に于吉から離れた

天輝装・一刀
「これは・・・・もしかして・・・龍の力・・・・」

関羽ガンダム
「龍の力・・・・・」

鬼龍王・愛紗
「まさか・・・・・」

天輝装・一刀
「ああ、桃香や劉備が君達に力を貸してくれたに違いないんだ」

張飛ガンダム
「兄貴が・・・」

雷龍王・鈴々
「お姉ちゃんが・・・・」

賈?アシュタロン
「ふぅ～んまだまだやる気みたいだけど・・・・・」

于吉
「貴方達の攻撃は効きませんよ」

不死隊は再び、襲い掛かった。天輝装・一刀達は一斉攻撃を始めた。
その攻撃を受けた不死隊は動かなくなった

賈?アシュタロン
「何!!?」

于吉
「奴らの攻撃が効いているとは・・・・・」

五誇将軍（関羽、張飛、趙雲、黄忠、馬超）
「「「「「我らが魂は!!!!!!」」」」」

五誇将軍（愛紗、鈴々、星、紫苑、翠）
「「「「「正義と共にあり!!!!」」」」」

そして、ついに全滅させることができた

天輝装・一刀
「どうだ！！」

賈?アシュタロン
「使えない人形だな・・・・・・」

于吉
「今度は貴方達がやりなさい」

そこへ、徐晃サーペント、凪、真桜、沙和が襲い掛かった

凪
「クルシイ・・・・・・」

真桜
「タスケテ・・・・・」

関羽ガンダム
「くっ・・・・・・」

鬼龍王・愛紗
「これでは攻撃ができん・・・・・・」

そして・・・・・・・

徐晃サーペント
「鉄火地雷衝！！！」

凪
「烈火激烈拳！！！」

真桜
「螺旋突貫！！」

沙和
「疾風激斬！！」

そして、四人の攻撃が馬超ブルーディスティニーと獅龍王・翠に襲いかかろうとしていた。その時・・・謎の人物が前に出て、攻撃を受けた

獅龍王・翠
「あんた達は！！？」

？？？
「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

？？？
「はあああああああああああああああああああ！！！！！！」

そして、攻撃をはじいたとき・・・四本の剣が現れた

賈？アシュタロン
「あ・・・あの剣・・・星鳳剣に威天剣・・・」

于吉
「それに天凰剣に光星剣・・・・あの剣がなぜ！！！？」

？？？
「貴方達・・・・」

？？？
「我らの顔を忘れたのか・・・・・？」

そして、布が破れるとそこにいたのは・・・・・・・行方不明となったはずの曹操ガンダムと華琳であった

天輝装・一刀
「曹操、華琳！！！」

馬超ブルーディスティニー
「あれが・・・・・・」

獅龍王・翠
「・・・・・・・曹操・・・・・」

そして、曹操ガンダムと華琳は語り始めた

華琳
「賈？、于吉・・・・・私達がいない間、好き勝手してくれたわね」

曹操ガンダム
「あまつさえ余の子供、曹丕と華憐まで利用するとは・・・・・断じて許さぬ！！」

于吉
「くっ・・・・この二人をやりなさい！！！」

徐晃サーペント、凪、真桜、沙和が襲いかかった

曹操ガンダム
「徐晃・・・・・」

華琳
「凪、真桜、沙和・・・・」

曹操ガンダム、華琳
「「眼を覚まし（せ／なさい）！！！！！！！！」」

曹操ガンダムは炎の拳で徐晃サーペントを、華琳は凪、真桜、沙和を炎の覇気をぶつけた。その瞬間、四人の背中から真紅の羽が現れた

真桜
「あれ？うちら、どないなったんや？」

沙和
「それにこれっていったい・・・・」

曹操ガンダム
「お前達、いつまで寝ぼけておる？」

華琳
「早く眼を覚まして、私達のために働きなさい！！」

徐晃サーペント
「曹操将軍！！！」

凪

「華琳様！！！！」

四人は正気を取り戻すことに成功したのであった

賈？アシュタロン
「バカな！！！」

于吉
「奴らの心は暗黒玉璽の力で完全に消したはず・・・・」

曹操ガンダム
「笑止。戦士の絆でつながれた心が貴様らごときに消せるものか！！」

華琳
「それにこれこそは闇に立ち向かう証！！私達の絆の証よ！！」

曹操ガンダム
「行くぞ！！」

徐晃サーペント、凪、真桜、沙和
「「「「御意！！！」」」」

その瞬間・・・・・巨大な鳳凰のオーラが曹操ガンダムと華琳を包み込んだ

「ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！！！」

天輝装・一刀

「あれは・・・・まさしく・・・・伝説の輝き・・・」

曹操ガンダム
「うおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!」

華琳
「はああああああああああああああああああ!!!!!」

そして、光がはれるとそこには・・・・・

曹操ガンダム
「見よ・・・・・」

華琳
「我らは・・・・曹操!!」

曹操ガンダム、華琳
「「真の理想を掲げる者なり!!!」」

そこには頭部には鳳凰を模した冠と、両肩には黄金の翼を模した鎧、そして、背中には真紅のマントを装備した曹操ガンダムと華琳が見えた。それぞれ雀瞬と朱雀と炎帝姫の力に目覚めた姿・・・・機武帝・紅蓮装・曹操ガンダムと炎帝姫・華琳である

関羽ガンダム
「こ・・これは・・・・」

鬼龍王・愛紗
「兄上と姉上と同じ輝き・・・・」

曹操ガンダム
「ふっ、雀瞬と朱雀と炎帝姫の魂が我らに語りかけておる！！！」

炎帝姫・華琳
「今こそ闇を焼き尽くす時と！！」

賈？アシュタロン
「ありえない・・・・伝説の焔神と炎帝姫が復活するなんて・・・・」

于吉
「くっ・・・・殺してしまいなさい！！！！！！」

不死隊は襲い掛かってきた

曹操ガンダム
「愚かなり！！！！」

炎帝姫・華琳
「行くわよ！！！！」

曹操ガンダム
「七星紅蓮焔武！！！！」

炎帝姫
「天星烈火神翼！！！！」

二人の攻撃によって不死部隊は再生できないくらいに焼き尽くされてしまった

賈?アシュタロン
「なんてことを・・・・僕達の・・・・僕達の不死隊が・・・・全滅したじゃないかあああああ！！！！！」

曹操ガンダム
「賈?、于吉よ。人の命を弄んだ罪」

炎帝姫・華琳
「地獄の底で償いなさい」

于吉
「ふっ・・・・貴方達の時代は終わりましたよ。私達のとっておきを見せましょう。賈?！！」

すると・・・・賈?アシュタロンと于吉は持っていた暗黒玉璽を自分の体に入れた

馬超ブルーディスティニー
「あいつら、何する気なんだ！！！？」

獅龍王・翠
「あいつらの姿を見ろ！！！」

すると賈?アシュタロンは巨大な蠍の姿へ、于吉は下半身が怪物と化した姿となった

賈?アシュタロン
「これが・・・・闇の力だよ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

二体の怪物の攻撃で全員は吹き飛ばされてしまった。それをみた馬超ブルーディスティニーと獅龍王・翠は・・・・・・・

馬超ブルーディスティニー
「なんて・・・化け物だ・・・・・」

獅龍王・翠
「あたし達の中にも・・・・あいつらと同じ禍々しい闇の力が・・・・・」

二人はそのまま目を背けそうになるが・・・・・

天輝装・一刀
「眼を背けるな!!!!」

獅龍王・翠
「ご主人様!!」

天輝装・一刀
「この世を司る森羅万象・・・・全て表裏一体!!光も闇もその根源は同じなのだ!!」

天輝装・一刀が語ると同時に・・・・曹操ガンダムと炎帝姫・華琳も語る

曹操ガンダム
「光のみでも闇のみでも無力!!」

炎帝姫・華琳
「心に宿し闇と向きあってこそ真の戦士!!」

馬超ブルーディスティニー
「心に・・・・光・・・・幸せを守りたい・・・・・」

獅龍王・翠
「あたし達の・・この手で・・・闇と向き合うこそ・・・・」

すると・・・・賈?アシュタロンと于吉は闇の炎を馬超ブルーディスティニーと獅龍王・翠に放った

黄忠ガンダム
「馬超!!!!?」

弓龍王・紫苑
「翠ちゃん!!!また怒りで・・・・・」

馬超ブルーディスティニー
「大丈夫だ!!!」

獅龍王・翠
「聞こえているぜ!!!!」

そして、二人は覆っていた闇の炎を振り払った

馬超ブルーディスティニー
「?徳・・・・・俺達の内なる闇の力なんて関係ない!!!」

獅龍王・翠
「あたし達もお前も同じだ。この力で幸せを守りたい!!!!」

そして、賈?アシュタロンと于吉へと立ち向かった

馬超ブルーディスティニー
「俺達はもう迷わない！！」

獅龍王・翠
「この光と共に・・・・」

馬超ブルーディスティニー、獅龍王・翠
「「闇を討つ！！」」

馬超ブルーディスティニー
「獅龍神威天翔牙！！！！」

獅龍王・翠
「獅龍天翔銀牙斬！！！！」

「ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

賈?アシュタロン、于吉
「ぐぎゃあああああああああああああああ！！！！！！！」

二人の攻撃で賈?アシュタロンと于吉は真っ二つとなった

賈?アシュタロン
「くくく・・・・・僕達が・・・・・倒れても・・・・・」

于吉
「すでに・・・・・咲夜様が・・・・・動き始めているのですよ・・・

・」

そう言うと二人は消滅した

天輝装・一刀
「ついに始まったか・・・・・闇との戦いが・・・・・」

その後、漢中でそれぞれまとめることができた

一刀、関羽ガンダム、愛紗は音信不通となった呉・轟へと向かった

残りの物は漢中で闇との戦いに備えていた

そして・・・・

劉備ガンダム
「ついに始まったか・・・・・」

桃香
「闇との戦いが・・・・・」

第４話『紅蓮の焔神・日輪の炎帝姫』（後書き）

次回予告

南方へと向かった孔明リ・ガズィ達に恐るべき刺客が放たれた。そして・・伏龍は再び天を舞う

次回　第５話『伏龍、再び』

第5話『伏龍、再び』（前書き）

今回で恋姫キャラを全員登場させました。

第5話『伏龍、再び』

漢中で宇吉達を倒した一刀達が闇との戦いに備えているその頃、南方へ向かった孔明リ・ガズィ、朱里、雛里、桔梗、そして、呉・轟からやってきた孫尚香ガーベラ、黄月英ガンイージ、小蓮、明命に危機が迫ってくる

第5話『伏龍、再び』

三璃紗から離れた南方では孔明リ・ガズィ達が捜索をしていたのであったが・・・・

孫尚香ガーベラ
「暑い・・・・・もうお城に帰りたい・・・・」

小蓮
「なんで・・・シャオ達がこんなところに来なきゃいけないのよ・・・」

朱里
「あの・・・呉・轟で待っていたほうがよかったのでは・・・・」

雛里
「そのようですね・・・・」

明命
「私達もそうは言いましたが・・・・」

黄月英ガンイージ

「留守番は嫌だと駄々をこねられまして・・・・」

すると何かが落ちた音がしていた。後ろでは鳥が水に落ちていたのであった

小蓮
「あっ、鳥が水浴びしている!!」

孫尚香ガーベラ
「お水だ!!のどが渇いていたんだ。いただきま・・・」

明命
「あっ、お二人ともだめです!!その水は・・・・」

二人が飲もうとしたとき、沼から鳥の骨が浮かんだ

孫尚香ガーベラ、小蓮
「「ヒィー!!!!」」

明命
「それは毒の沼です・・・・」

二人は黄月英ガンイージと明命に抱きついた

朱里
「まったく・・・大変なお荷物です・・・・」

雛里
「うん・・・・」

桔梗
「しかし・・・・孔明よ・・どうしてここまでしてこの地に来たのだ？」

孔明リ・ガズィ
「それは・・・・・！！」

するとどこからか攻撃を仕掛けてきた

朱里
「はわわわ！！」

雛里
「あわわわ！！」

桔梗
「なんじゃ！！？」

孔明リ・ガズィ
「何者です！！？」

そして、茂みから現れたのは闇の血によって暴走した祝融ガンダムとミケとトラとシャムであった

祝融ガンダム
「シャアアアアア！！！！」

ミケ
「うがあああああああああああああ！！！！」

トラ
「がおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

シャム
「ぐおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

朱里
「深紅の眼！！？」

雛里
「まさか・・・・」

孔明リ・ガズィ
「闇の血の暴走！！！」

孔明リ・ガズィは祝融ガンダム達と戦い始めた

明命
「闇の血！！？」

桔梗
「あれが・・・・」

孔明リ・ガズィ
「ええ闇の力を持つ者、特有の戦闘形態、この状態の彼らと戦ってまず勝てるものはいません！！」

小蓮
「じ・・・じゃあどうするのよ！！？」

朱里
「ご安心してください！！」

雛里
「私達にも必勝の兵法を使います！！」

桔梗
「おお、あれを使うというのか！！」

孫尚香ガーベラ
「え、何？何？」

それは・・・・・・・・・

孔明リ・ガズィ
「三十六計、逃げるが勝ちです！！」

孫尚香ガーベラ、小蓮
「「えー！！？」」

一同は逃げ出したが・・・・

木鹿大王
「逃すか！！！！」

帯来洞主
「おーほっほっほっ、どこへいくつもりかしら？」

そこへ南方四天王の木鹿大王と帯来洞主が襲い掛かってきた。さらにそこへ空中から朶思大王ガンダムが奇襲をかけた

朶思大王
「きぃーきききっ！！！たぁーぷりと痛めつけてやるぜ！！」

さらにそこへ南方兵もやってきた。完全に囲まれてしまった

孔明リ・ガズィ
「囲まれた・・・しかし・・・爆扇機！！」

孔明リ・ガズィは爆扇機を投げた。鳥形態となった爆扇機はあたりを調べた

孔明リ・ガズィ
「彼らの布陣、その穴を見つけ出せれば・・・・」

するとどこからか攻撃してきた爆扇に当たった。

孔明リ・ガズィ
「ぐわ！！！」

朱里
「孔明さん！！」

孔明リ・ガズィ
「み・・・みなさん・・・・・早く・・・・早く逃げるんです！！」

雛里
「孔明さん・・・・・」

しかし、南方兵に完全に囲まれてしまった

孫尚香ガーベラ
「こうなったらあたしが相手になるわ！！虎影閃！！」

明命
「加勢します！！」

孫尚香ガーベラと明命は南方兵に攻撃したがはじかれてしまった。
さらにそこへ祝融ガンダムとミケとトラとシャムが孫尚香ガーベラと小蓮と明命を攻撃した

祝融ガンダム
「シャアアアアア！！！！」

ミケ
「うがあああああああああああああ！！！！」

トラ
「がおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

シャム
「ぐおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

孫尚香ガーベラ、小蓮、明命
「「きゃあああああああああああ！！」」

三人は吹き飛ばされてしまった。そこへ・・・

巨砲王・桔梗
「そうさせん！！爆炎砲！！」

巨砲王・桔梗の攻撃で四人は炎に包まれてしまった。全員はその隙に逃げた

なんとか逃げ切った孔明リ・ガズィ達は休息をとっていた

小蓮
「なんとか・・逃げ切ったわね・・・・」

孫尚香ガーベラ
「あいつらの鎧・・あんなに堅いのに・・・・どうして・・」

朱里
「あれは籐の鎧。堅くて丈夫なのですが・・・・」

雛里
「燃えやすいので火という弱点があります」

桔
「それを聞いたからワシは攻撃したのだ」

朱里
「それで孔明さん、眼は大丈夫ですか?」

孔明リ・ガズィ
「うかつでした・・・・まさか爆扇機を狙ってくるとは・・・・」

小蓮
「何でその鳥がやられたら孔明の眼が見えなくなるの?」

小蓮の問いに孔明リ・ガズィは答えた

孔明リ・ガズィ
「この爆扇機は私と完全と同調しているのです・・・・」

朱里
「でもその事を彼らはなぜ…」

雛里
「いったい・・・・」

すると・・・・・

朱里
「みなさん、逃げてください!!!」

雛里
「罠が張っております!!」

そして、罠が動き出し、桔梗、孫尚香ガーベラ、黄月英ガンイージ、小蓮、明命は囚われの身となってしまった

孔明リ・ガズィ
「しまった!!」

すると・・・・・

鳳統ヤクト・ドーガ
「グヘヘヘ!!まんまとおびき出されたな孔明!!」

孔明リ・ガズィ
「お・・・・お前は鳳統!!?」

朱里
「嘘!!?」

雛里
「生きていたなんて・・・・」

鳳統ヤクト・ドーガ
「このとおり俺は生きているぜ!!久しぶりだな朱里に雛里!!」

するとそこへ・・・・兀突骨が襲い掛かってきた

孔明リ・ガズィ
「危ない!!ぐわ!!」

朱里
「孔明さん!!」

雛里
「はやくシャオさん達を助けないと・・・・・」

だがそこへ・・・・祝融ガンダムとミケとトラとシャムが現れて、
朱里と雛里を攻撃した

朱里、雛里
「「きゃあああああああ!!!」」

孔明リ・ガズィ

「朱里さん、雛里さん！！？」

鳳統ヤクト・ドーガ
「いよいよ貴様も終わりだ孔明！！！なぶり殺しにしてやるぜ！！グへへ！！」

鳳統ヤクト・ドーガの手には暗黒玉璽があった

孔明リ・ガズィ
「黒い玉璽・・・・・・鳳統・・まさか・・・お前まで・・・・・」

朱里
「そんな・・・・・」

鳳統ヤクト・ドーガ
「お前達、やれ！！！」

祝融ガンダム
「あああ・・・・・・」

ミケ
「く・・クルシイ・・・・・」

四人はなぜか苦しんでいた・・・・

雛里
「彼女達は・・・・もしや・・・・」

兀突骨
「この役立たずどもめが！！こうなればワシらの手で！！」

南方四天王は孔明リ・ガズィ達を攻撃し始めた。そして、ついに倒れてしまった

桔梗
「孔明、朱里、雛里!!ワシらのことはいい!!早く逃げるんじゃ!!」

鳳統ヤクト・ドーガ
「逃げる・・・それもいい手だな、孔明。かつてと同じように仲間を捨てて逃げるがいい・・・」

朱里
「逃げません・・・あの人たちも常に言っていました」

雛里
「眼の前の命を救えずして・・・」

孔明リ・ガズィ
「世の中を変えられるものかと・・と我らが心も同じ!!」

孔明リ・ガズィ、朱里、雛里
「「「逃げ道は無用!!」」」

三人は南方四天王に立ち向かった

孔明リ・ガズィ
「人は運命には屈せずして・・最後の最後まで私は決してあきらめない・・・」

すると三人の下に光が降り立った。そして、そこから・・・鳳凰の羽を持つ龍が現れた

孔明リ・ガズィ
「龍帝の光・・・」

朱里
「聞こえる・・・・」

雛里
「劉備様と桃香様の声が・・・・」

そして、孔明リ・ガズィは爆扇機を投げた。そして、朱里と雛里のペンダントも輝いた

雛里
「龍凰と爆扇が一つに・・・・」

朱里
「そして・・私達に新たなると力が・・・」

孔明Vガンダム
「大切な者を守るための力が・・・！！！」

そして、光がはれるとそこには新たな鎧を装備した朱里達がいた。龍凰の力によって覚醒した天翔龍・孔明Vガンダムと天龍王・朱里と光凰王・雛里が現れたのである

小蓮
「す・・・スゴイ・・・」

鳳統ヤクト・ドーガ
「ば・・・・バカな!?」

兀突骨
「ケッ、何が龍凰だ!!」

鳳統ヤクト・ドーガ
「よ・・・・よせ!!」

南方四天王が襲い掛かってきた。すると・・・孔明Vガンダムと天龍王・朱里と光凰王・雛里は八門遁甲・破邪の陣を作り出した

孔明Vガンダム、天龍王・朱里、光凰王・雛里
「「「天魔覆滅!!!」」」

南方四天王
「「「「ぎゃあああああああああああああ!!!!!」」」」

天龍王・朱里
「私達はまだ死ねません!!」

光凰王・雛里
「友の死が私達の罪ならば・・・」

孔明Vガンダム
「私達は全てを背負って生きていく!!」

三人の攻撃で南方四天王を倒すことができた

鳳統ヤクト・ドーガ
「お・・・・おのれ・・孔明！！」

孔明Ｖガンダム
「さあ、眼を覚ませ！！鳳統！！」

三人が攻撃しようとしたその時、どこからか攻撃してきた

光凰王・雛里
「え！？」

天龍王・朱里
「誰です！！？」

そこにはＭＳ武将と一人の少女が立っていた。するとそこへ機械でできた象と頭に王冠をつけた巨大な象が現れた

「バオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

猛獲ガンダム
「はあああああああああああ！！！！灼熱金剛合身！！」

猛獲（真名・美以）
「いくにゃ！！恋姫武装！！」

猛獲ガンダムは金剛夜伽と合体して。金剛阿修羅鎧の姿になり、美以は阿修羅を模した鎧を装備した

猛獲ガンダム

「はあああああああああああああ！！！！！」

阿修羅装・美以

「にゃあああああああああああああ！！！！！」

二人はある力を発揮した。そう・・・・

孔明Ｖガンダム

「闇の力・・・・まさか・・この二人は・・・・」

第5話『伏龍、再び』（後書き）

次回予告

二人の猛獲と激闘する孔明。そして友との戦いに決着がつく

次回　第6話『龍と鳳凰』

第6話『龍と鳳凰』（前書き）

最新話です。こちらの小説も佳境になってきました

第6話『龍と鳳凰』

「バオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

孟獲ガンダム
「はあああああああああああああ！！！！！灼熱金剛合身！！」

孟獲（真名・美以）
「いくにゃ！！恋姫武装！！」

孟獲ガンダムは金剛夜伽と合体して。金剛阿修羅鎧の姿になり、美以は阿修羅を模した鎧を装備した

孟獲ガンダム
「はあああああああああああああ！！！！！」

阿修羅装・美以
「にゃあああああああああああ！！！！！」

二人はある力を発揮した。そう・・・・

孔明Vガンダム
「闇の力・・・・まさか・・この二人は・・・・」

第6話『龍と鳳凰』

孟獲ガンダムと阿修羅装・美以の攻撃を孔明Vガンダムと天龍王・朱里と光鳳王・雛里は受け止めた。

桔梗
「孔明殿！！？」

孔明Ｖガンダム
「こ・・・・この地から・・・・間違いない・・・・彼こそ…」

天龍王・朱里
「天の刃・・・・」

鳳統ヤクト・ドーガ
「そうだ。その二人こそ『天の刃』。貴様らが求めている地からはすでに俺の手にあるということだ」

光凰王・雛里
「そんな・・・・」

鳳統ヤクト・ドーガ
「ふふふふ・・・南方の天の刃が編み出した闇を制する不敗の阿修羅真拳の使い手、二人の孟獲。いかに龍凰の力を持つ貴様らでもかなうまい！！」

孟獲ガンダムと阿修羅装・美以は孔明Ｖガンダム達に攻撃した。三人は避けたが・・・隙を受けて攻撃を食らってしまった。

鳳統ヤクト・ドーガ
「（そうだ・・・・龍凰など・・・・天の刃もろとも滅びるがいい！！）ひひ・・ぐひひひひひひ！！！」

すると鳳統ヤクト・ドーガの持っていた暗黒玉時から闇が出てきた。
そして、ついに周りは闇で覆われてしまった。

小蓮
「く・・・苦しい・・・」

桔梗
「くっ・・・・これでは・・・・・」

祝融ガンダム
「あ・・・・頭が・・・・」

ミケ
「クルシイ・・・」

トラ
「イタイ・・・」

シャム
「タスケテ・・・」

全員は苦しんでいた

孟獲ガンダム
「祝融!!皆!!」

阿修羅装・美以
「大変だニャ!!」

孔明Vガンダム
「これは・・・・」

鳳統ヤクト・ドーガ
「何をしている猛獲！！！孔明達を倒せ！！早く倒さぬか！！！！！」

孟獲ガンダム
「くっ・・・蜀・翔の孔明、貴様らに恨みはないがこの地の平和のためだ！！」

阿修羅装・美以
「行くにゃー！！」

孟獲ガンダム
「爆熱！！金剛破動拳！！！！！！！」

二人は孔明Vガンダム達に攻撃しようとしたその時・・・・

？？？
「そうは・・・」

？？？
「させぬのじゃあ！！！」

すると・・・そこへ貂蝉と卑弥呼が現れた

阿修羅装・美以
「なんなのニャ？」

貂蝉
「これ以上、咲夜ちゃん達の好き勝手にはいかせないわよ！！」

孟獲ガンダム
「師匠・・・・なぜ・・・・・」

卑弥呼
「孟獲！！貴様、この地の平和を守るためとはいえなぜそのような奴らの言うことを聞くのだ！！？」

貂蝉
「三人とも今よ！！」

そして・・・・・

孔明Ｖガンダム
「朱里さん、雛里さん！！」

天龍王・朱里
「はい！！」

光凰王・雛里
「任せてください！！」

すると・・・・孔明Ｖガンダムと天龍王・朱里と光凰王・雛里は八門遁甲・破邪の陣を作り出した

孔明Ｖガンダム、天龍王・朱里、光凰王・雛里
「「「破邪顕聖！！！」」」

三人の放った光によって闇は消えた

ミケ

「あ・・・あれ？」

トラ
「トラ達、どうしたのニャ？」

シャム
「にゃあ・・・・・」

阿修羅装・美以
「お前達！！」

祝融ガンダム
「う・・あ・・あたしは？」

孟獲ガンダム
「融こりん！！」

ごん！！！

祝融ガンダム
「融こりんって言うな！！！」

孟獲ガンダムは祝融ガンダムに殴られてしまったのであった

孔明Vガンダム
「とにかく・・これで貴方達と私達が闘う理由はなくなりました」

卑弥呼
「そのとおりじゃ」

孟獲ガンダム
「孔明・・・」

すると

鳳統ヤクト・ドーガ
「おのれぇ!!!孔明、朱里、雛里!!!!!!まだだ、俺は貴様らに負けてなどいない!!!!!!」

鳳統ヤクト・ドーガは暗黒玉璽の力で南方四天王の残骸と合体し始めた

天龍王・朱里
「やめてください、鳳統さん!!!」

光凰王・雛里
「これ以上、闇に魅入られては・・・」

鳳統ヤクト・ドーガ
「うるさい!!この闇の力で・・俺は!!俺は貴様らを倒す!!!!!!!」

鳳統ヤクト・ドーガは巨大な怪物と化した

ミケ
「なんなのニャー!!!」

鳳統ヤクト・ドーガはある武器を投げた。孔明Vガンダム達はそれを見て驚いた

孔明Ｖガンダム
「こ・・・この剣は！？」
鳳統ヤクト・ドーガ
「そうだ、それは貴様らが見殺しにした徐庶と光里の撃剣と苦無だ！！」
孔明Ｖガンダム
「徐庶！！？」
天龍王・朱里、光凰王・雛里
「「光里ちゃん！！？」」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・
それは昔のことであった
徐庶ジェガン
「伏龍と・・・・」
徐庶（真名・光里）
「鳳雛？」
徐庶ジェガンは光里は孔明リ・ガズィ達に聞いた
雛里
「そうだよ。光里ちゃん」
鳳統ヤクト・ドーガ

「ああ、俺達に水鏡先生達がつけてくれた名前なんだ」

光里
「すごいよ」

朱里
「そんなことないよ。伏龍は地に伏す龍で鳳雛は鳳凰の雛という意味なんだよ」

孔明リ・ガズィ
「我々が天を翔けるのはまだまだ先と言われたんです」

すると・・・

徐庶ジェガン
「けど先生に認められたんだろ？」

光里
「いいよね。徐庶さん！！」

徐庶ジェガン
「ああ、なら俺は虎になるぜ！！」

光里
「私も！！」

鳳統ヤクト・ドーガ
「はは、それじゃまるで三候だぜ！！」

雛里

「それに四聖獣と四神姫ともいえますよ」

朱里
「私達は未来の伝説の力とも言えますね」

この楽しいひと時がいつまでも続くかと思えた・・・・・・

しかし・・・

董卓軍に追われる孔明リ・ガズィ達、しかし徐庶ジェガンと光里は
重傷を負っていた

徐庶ジェガン
「うぐ・・・」

光里
「かっ・・・」

孔明リ・ガズィ、鳳統ヤクト・ドーガ
「「徐庶!!」」

朱里、雛里
「「光里ちゃん!!」」

徐庶ジェガンと光里は吊り橋の所で止まってしまった

光里
「ふ・・振り返らないで!!」

徐庶ジェガン

「このままでは全滅だ!!お前達は先に行け!!」

鳳統ヤクト・ドーガ
「何を言うんだ!!董卓軍など・・・・」

徐庶ジェガン
「これ以上民を犠牲にするな!!」

孔明リ・ガズィ達は後ろを振り返った

徐庶ジェガン
「俺達の兵法は殺すためじゃない!!その先にある民達を生かすための兵法じゃないか!!」

光里
「今は・・今は・・・民のことを考えて・・・」

そこへ董卓軍の兵士達がやってきた

徐庶ジェガン
「行け孔明、鳳統!!」

光里
「朱里ちゃん、雛里ちゃん!!いつか・・・貴方達の兵法が必要となる時が来るよ!!」

徐庶ジェガン
「それまで・・・・生きろ!!生きて三璃紗を守ってくれ!!」

鳳統ヤクト・ドーガ

「何を言う！！お前らを置いていけるか・・・」

しかし、孔明リ・ガズィは鳳統ヤクト・ドーガを連れて逃げ出した。

朱里と雛里も付いて行った

鳳統ヤクト・ドーガ

「やめろ！！まだ徐庶と光里が・・・・」

そして・・・

光里

「さよなら、朱里ちゃん、雛里ちゃん！！！」

徐庶ジェガン

「あとのことは頼むぞ！！！」

徐庶ジェガンと光里は自分達の武器で吊り橋を壊し、董卓軍と共に谷底へと消えた

鳳統ヤクト・ドーガ

「徐庶！！！！光里！！！！！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

鳳統ヤクト・ドーガ

「なぜ。徐庶と光里を見捨てた孔明、朱里、雛里！！！！！！！仕方がなかったとでも言いたいのか！！？俺は認めない！！！！！」

鳳統ヤクト・ドーガは孔明Vガンダム達に攻撃をし始めていた

孔明Vガンダム
「なぜ徐庶と光里さんの想いをわかろうとしないんだ！！」

天龍王・朱里
「お願い・・話を聞いて・・・」

鳳統ヤクト・ドーガ
「うるさあああああああああああああい！！！！！！！！」

鳳統ヤクト・ドーガはさらに攻撃をしようとしたそこへ猛獲ガンダムと阿修羅装・美以が防いだ。

光凰王・雛里
「猛獲さん！！？」

阿修羅装・美以
「お前達は祝融やミケ達を救ってくれたニャ！！」

孟獲ガンダム
「今度は俺達の番だ！！」

祝融ガンダム
「あたし達もいるよ！！」

ミケ
「いくニャー！！」

トラ
「ニャー！！」

シャム
「ニャー！！」

祝融ガンダム達は孟獲ガンダムと阿修羅装・美以に宿った

孟獲ガンダム
「来たあああああああああああああ！！！！皆の気が俺達の阿修羅の拳に！！！！！！」

そして、孟獲ガンダムと阿修羅装・美以は鳳統ヤクト・ドーガに向かった

孟獲ガンダム
「奥義・阿修羅七方陣！！！」

阿修羅装・美以
「阿修羅爆砕鉄拳！！！！！」

二人の攻撃で鳳統ヤクト・ドーガの胸鎧が壊され、暗黒玉璽が現れた

孟獲ガンダム
「どうだ！！」

阿修羅装・美以
「一気にいくニャー！！！！」

しかし、鳳統ヤクト・ドーガも反撃を始めた

鳳統ヤクト・ドーガ
「なめるなあああ！！！」

孟獲ガンダム
「ぐわあああああああ！！！！」

阿修羅装・美以
「にゃあああああ！！！」

孔明Ｖガンダム
「猛獲さん！！？」

鳳統ヤクト・ドーガ
「何が伏龍だ！！何が龍凰の力だ！！俺に・・・俺にその力があれば・・・・・」

三人は鳳統ヤクト・ドーガの様子に気がついた。そして・・・

天龍王・朱里
「雛里ちゃん！！」

光凰王・雛里
「うん、朱里ちゃん！！」

天龍王・朱里、光凰王・雛里
「「閃光の陣！！」」

天龍王・朱里、光凰王・雛里の放った光の鎖で鳳統ヤクト・ドーガをとらえた。さらに

孔明Ｖガンダム
「白龍天身！！！」

孔明Ｖガンダムは龍の姿へと変えた。そして、鳳統ヤクト・ドーガに攻撃した。

孔明Ｖガンダム
「今です！！暗黒玉璽を！！」

孟獲ガンダム
「おう！！奥義を受けてみろ！！神拳爆砕！！」

阿修羅装・美以
「神拳粉砕！！！」

貂蝉、卑弥呼
「「奥義・漢女羅武羅武天響拳！！！！！！！！」」

孟獲ガンダム達の攻撃で暗黒玉璽は粉砕された。そして・・・孔明Ｖガンダムは鳳統ヤクト・ドーガに立ち向かった。さらに龍と鳳凰のオーラにまとった天龍王・朱里、光凰王・雛里も駆けつけた。それをみた鳳統ヤクト・ドーガは・・・・

鳳統ヤクト・ドーガ
「天を翔ける・・・竜・・・お前達は・・やっぱり・・・」

孔明Ｖガンダム
「天翔龍凰撃！！！」

天龍王・朱里、光凰王・雛里

「「閃光龍凰撃！！！」」

三人の攻撃で鳳統ヤクト・ドーガは倒れた

鳳統ヤクト・ドーガ
「見事だった・・・・孔明、朱里、雛里・・・・」

孔明Vガンダム
「鳳統・・・・私は・・・・・」

鳳統ヤクト・ドーガ
「わかっていた・・・・それでも俺は許せなかった・・・・力を隠し続けるお前達も・・・その才能に・・・・届かない・・・・俺自身も・・・・・」

天龍王・朱里
「鳳統さん・・・・」

光凰王・雛里
「ううう・・・・」

鳳統ヤクト・ドーガ
「泣くな雛里・・・・鳳凰の羽ばたきはお前に受け継いでもらう・・・俺はここまでだが・・・・頼むぞ・・・・」

そういうと・・・鳳統ヤクト・ドーガは息を引き取った。そして・・・

天龍王・朱里
「泣かないで雛里ちゃん・・・・鳳統さんは・・・・後を任せてく

れたんだよ・・・」

光凰王・雛里
「でも朱里ちゃんだって・・・・・」

天龍王・朱里、光凰王・雛里
「「うわあああああああああああん!!!」」

二人は抱き合って、泣きだした。孔明Vガンダムも涙を流していた

孔明Vガンダム
「三人の・・・・想いは・・・・私達が・・・・・」

おまけ

明命
「貴方達・・・・よく見たら・・」

美以
「見たら・・・なんなのニャ?」

明命
「おおお・・・・お・・・お・・・」

ミケ、トラ、シャム
「「「??????」」」

明命
「お猫様ですぅー!!!!」

明命は美以達に飛びかかった。美以達は・・・・

美以
「助けてニャー！！」

ミケ
「怖いニャー！！！」

トラ
「怖いニャー！！」

シャム
「ニャー！！」

逃げまくったのであった

第6話『龍と鳳凰』（後書き）

次回予告

呉・轟に向かった関羽親子、愛紗、一刀に闇の勢力が迫りつつある

次回　第7話『新たなる闇』

第7話『新たなる闇』（前書き）

最新話です。あと声優の滝口順平さん、ご冥福を祈ります。

第7話『新たなる闇』

一刀、愛紗、関羽ガンダム、関平ガンダム、周倉ドーベンウルフは東方の天の刃を求めて、呉・轟の国へとやってきたのだが・・・

天輝装・一刀
「これはいったい・・」

鬼龍王・愛紗
「なぜ呉・轟の兵士達が我を囲んでいるのだ？」

関平ガンダム
「養父上、これっていったい・・・・・」

すると・・・関平ガンダムの後ろに攻撃を加えようとしていた者がいた

関羽ガンダム
「あぶない、関平！！！」

関羽ガンダムは関平ガンダムを助けたが、重傷を負ってしまった

関平ガンダム
「養父上！！」

鬼龍王・愛紗
「関羽殿！！？」

天輝装・一刀

「バカな・・・・なぜ・・・お前達が・・・・・・」

そこにいたのは闇に操れた呂蒙ティジェと甘寧ケンプファーであった

第7話『新たなる闇』

そのころ、魏・機駕の都『洛陽』では・・・・

一人の少女とMS武将の少年が何かの前で祈っていた。すると・・・

・

司馬炎ザク？

「・・・・・・・・・」

司馬師ペーネロペー

「どうした、司馬炎、雛？」

司馬炎（真名・雛）

「お母さんが来る・・・」

司馬昭クスィー

「義母上が・・・」

そこへ咲夜が現れた。（ちなみに司馬炎ザク?達の父親である司馬懿サザビーは病死したと聞いている）

司馬炎ザク？

「義母上！！」

雛

「お母さん！！」

咲夜
「いいわ。そのまま祈りを続けなさい。」

雛
「はーい！！」

司馬炎ザク？と雛は祈りを再開した。その眼の前には巨大な暗黒玉
璽があった

咲夜
「状況はどう？司馬師・・」

司馬師ペーネロペー
「こちらは順調です、義母上。そとのほうはいかがですか？」

咲夜
「西涼はもとよりすでに南方も呉・轟も闇に堕ちたわ」

司馬昭クスィー
「おおそれは朗報ですね」

司馬師ペーネロペー
「では・・・いよいよ・・」

咲夜
「闇の目覚めは近いわ・・・・」

咲夜はそのまま、部屋を出た。すると・・・・

郭嘉ヴァサーゴ
「咲夜様、お喜びください。ついに片方の関羽を討ちとりました。咲夜様からいただいた暗黒玉璽のおかげです。僕が使いこなしたんです。これで僕も・・・・」

咲夜
「孫権達はどうした？」

郭嘉ヴァサーゴ
「え？」

咲夜
「貴方には呉・轟の攻略を堅く命じていたはずよ。若虎と雌虎を討ってこそ初めての手柄というものよ」

郭嘉ヴァサーゴ
「ですが・・・関羽達は僕達、魏・機駕にとっては・・・」

咲夜
「もういいわ。すでに呉・轟には左慈と新たな闇の盟主を向かわせたわ」

咲夜はそのまま歩き始めた。郭嘉ヴァサーゴは悔しさをあらわにしていた

そのころ呉・轟の旧要塞では・・・・。負傷した関羽ガンダムは目覚めた

関羽ガンダム
「うう・・・ここは・・・？」

関平ガンダム
「義父上！！」

愛紗
「関羽殿！！？」

一刀
「よかった・・・」

周倉ドーベンウルフ
「気がつかれたか・・・」

関羽ガンダム
「関平、周倉、愛紗殿、主・・・・・ここはいったい・・・・」

雪蓮
「呉・轟の旧要塞よ・・・」

関羽ガンダムが見た先には雪蓮、冥琳、祭、大史慈ドムの姿が見えた

雪蓮
「久しぶりね、関羽」

一刀
「雪蓮達が俺達の窮地を救ってくれたんだ」

関羽ガンダム
「貴公らは無事だったか」

冥琳
「すまないな・・・」

大史慈ドム
「こんなことになってしまって・・・・」

愛紗
「それにしても孫権殿と蓮華殿は何を考えているのだ?」

周倉ドーベンウルフ
「そうだ!!俺達、蜀・翔と呉・轟はかつて曹操軍と戦った仲じゃねーか!!」

関平ガンダム
「そうだよ。なんでこんなひどい目にあわされなきゃならないんだ!!」

すると祭が喋り始めた

祭
「魏・機駕が動き出したのじゃ・・・」

雪蓮、冥琳、祭、大史慈ドムは独自に魏・機駕の内偵を続けていた。
そして、報告のために戻ってきたら・・そこには石化した孫権ガンダム、陸遜ゼータプラス、蓮華、隠、思春、亞莎が見えた

一刀
「バカな!!伝説の力を受け継ぐ蓮華達ですら闇にとらわれてしまったのかよ!!!?」

大史慈ドム
「ああ、あれほど強力な闇の力を私達は見たことがない」

関羽ガンダム
「こうしてはおれぬ・・・」

関羽ガンダムは立ち上がろうとするが、怪我に苦しんだ

愛紗
「関羽殿!!無理をされては・・・」

雪蓮
「ところで貴方達はどうしてこの国に?」

関羽ガンダム
「我らは今『天の刃』と呼ばれる者たちを探している。己の中に闇を宿し、その闇の力を制する力を持つ者・・・孔明殿いわく天の刃こそ闇に立ち向かう切り札!!」

冥琳
「天の刃・・・」

愛紗
「我々は『東方の天の刃』の手かがりを求めに来たのだが・・・・」

雪蓮
「わかったわ。こっちにも策があるわ」

作戦は城門に呉・轟の兵士達が囲まれたところ関羽ガンダム、鬼龍王・愛紗、周倉ドーベンウルフ、雪蓮が敵を攻撃する。そして・・・

戦いが始まった

雪蓮
「さあ行くわよ！！」

周倉ドーベンウルフ
「しかし、こりゃまたすげぇ数だな、大将に姉御！！」

鬼龍王・愛紗
「ふっ・・周倉よ。これしきのことで泣きごとを言うな！！」

関羽ガンダム
「貴様と共に潜り抜けた激戦に比べれば・・・」

周倉ドーベンウルフ
「ちげぇーね！！」

四人は激闘を繰り広げていた。そして・・・・

関平ガンダム
「義父上、あんな体で・・一刀さん、俺達も・・・」

天輝装・一刀
「だめだ！！俺達には大事な役割がある！！」

冥琳
「北郷のいうとおりだ！！お前も信じるのだ！あの豪傑の力を！！」

関平ガンダムはそれをじっと見ていた。そのころ、関羽ガンダム達は戦い続けていたが・・・・

関羽ガンダム
「うっ・・・・」

周倉ドーベンウルフ
「大将!!やっぱ、その怪我じゃ・・・・」

鬼龍王・愛紗
「関羽殿、ここは私達が・・」

関羽ガンダム
「構うな!!!眼の前の敵に集中しろ!!!」

すると

呂蒙ティジェ、甘寧ケンプファー
「「うおおおおおおおおおお!!!!」」

雪蓮
「かかったわ!!大史慈!!」

大史慈
「はっ!!!」

関羽ガンダム、鬼龍王・愛紗が呂蒙ティジェ、甘寧ケンプファーの攻撃を受け止めた。すると・・撃鋼形態となった大史慈ドムが出てきた。その上には関平ガンダムと天輝装・一刀の姿が見えた。呂蒙ティジェ、甘寧ケンプファーはそれを追いかけようとするが・・・・

関羽ガンダム

「追わせはせぬ！！」

鬼龍王・愛紗
「貴様らの相手は我らだ！！」

関羽ガンダム
「鬼牙！！」

周倉ドーベンウルフ
「豪鬼！！」

鬼龍王・愛紗
「鬼龍！！」

関羽ガンダム、周倉ドーベンウルフ、鬼龍王・愛紗
「「「爆連撃！！！！！」」」

雪蓮
「覇王烈風斬！！！！」

三人の合体攻撃と雪蓮で全員は吹き飛んだ

大史慈ドム
「さすがは二人の関羽！！雪蓮様と互角の力を出すとは！！」

天輝装・一刀
「関平、ここからが俺達の仕事だぞ！！」

関平ガンダム
「はい！！」

三人が進んでいくと、その先には虎を模した大灯台が見えた

大史慈ドム
「あれだ！！！あの大灯台の黒き闇の炎こそ呉・轟を操っている元凶！！」

天輝装・一刀
「よっし、あれを消せば・・・・・」

？？？
「そうはさせん！！」

そこへ左慈が現れて、天輝装・一刀に襲い掛かった

天輝装・一刀
「お前は左慈！！？」

左慈
「貴様の相手はこの俺だ！！」

左慈は暗黒玉璽を取り出した。その姿を漆黒の龍を模した鎧を着た姿となった

関平ガンダム
「一刀さん！！」

天輝装・一刀
「ここは俺に任せて、お前は闇の炎を！！」

鬼龍王・愛紗
「ご主人様！！」

鬼龍王・愛紗は天輝装・一刀の元へと向かった

天輝装・一刀
「愛紗！！」

鬼龍王・愛紗
「私も戦います！！」

左慈
「来い！！」

そして、戦闘が始まった。そのころ関平ガンダム達も闇の炎へと近づいていた。しかし・・・闇の炎が襲い掛かってきた

関平ガンダム
「大史慈！！？」

大史慈ドム
「なんという闇の力・・・・・」

そして、関平ガンダムも石化し始めてしまった

大史慈ドム
「（いかん・・このままでは・・・）関平！！私を踏み台にして大灯台へ飛べ！！」

関平ガンダム

「でも・・・」

大史慈ドム
「このままでは二人とも動けなくなる！！飛べ、お前ならばやれる！！」

関平ガンダム
「わかった！！うおおおおおおおおおおおお！！！！」

関平ガンダムは闇の炎に向かって飛んだ！！

関平ガンダム
「闇の炎よ、消えろおおおおおおおおおおお！！！！！！」

関平ガンダムは闇の炎に向かっていくが・・・・あっと一歩のところで石化としてしまった

左慈
「ふっ・・・おしかったようだな」

鬼龍王・愛紗
「なっ！！？」

天輝装・一刀
「間に合わなかったのか・・・・！！？」

関羽ガンダム
「関平！！！ぐっ・・・・・・」

周倉ドーベンウルフ

「大将、しっかりしろ!!ここはひとまず退くぞ!!!」

石化した関平ガンダムをみた関羽ガンダムは号泣した

関羽ガンダム
「ぐっ・・・な・・何が豪傑だ!!真名息子一人すら救えずして・・なにが・・・
何が天下無双だ!!!ぬおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!」

とその時、関羽ガンダムの右肩の鎧が輝き始めた、その光は関平ガンダムを包みこんだ

左慈
「何!!」

鬼龍王。愛紗
「この光は・・・・・」

天輝装・一刀
「劉備と・・・桃香が・・・・・」

すると、関平ガンダムの姿が新たな姿へと化した（鬼牙装・関平ガンダム）。そして・・・・

関羽ガンダム
「行けー!!!!」

関平ガンダム
「鬼牙輝燐撃!!」

関平ガンダムの必殺技で、大灯台は崩れた

関平ガンダム
「やりましたよ、義父上！！」

しかし、突然、大きな揺れが起きた

天輝装・一刀
「なんだ、この揺れは！！？」

関羽ガンダム
「いかん！！」

鬼龍王・愛紗
「逃げろ、関平！！」

そして、地面から現れたのは謎の異型の怪物であった。すると怪物は闇の炎を繰り出した

左慈
「ふっ・・・勝負はここからだ！！」

天輝装・一刀
「こ・・・これほどの・・闇の力とは・・・」

関平ガンダム
「お・・・お前が・・・・この呉・轟を・・・・」

第7話『新たなる闇』（後書き）

次回予告

関羽ガンダム、愛息子に最期の戦いを見せる

次回　第8話『劉備帰還・さらば関羽！！』

第8話『劉備帰還・さらば関羽！！』（前書き）

まさかの連続投稿です。今回は悲しい話です。最後のあたりに合ったＢＧＭはどのようなものでよろしいでしょうか？

第8話『劉備帰還・さらば関羽！！』

そのころ洛陽では・・・

巨大なる暗黒玉璽の前に司馬炎ザク？と雛は苦しんでいた

司馬炎ザク？
「う・・・や・・・闇が・・・・・・」

雛
「闇が・・・・・来る」

そして、暗黒玉璽から何かが現れた

そのころ、姜維ガンダムＦ９１と季衣と流琉は揺れに驚いていた

季衣
「ひゃあ！！？」

流琉
「何が起こっているの！！？」

姜維ガンダムＦ９１
「陛下をお守りしなければ！！？」

三人が曹丕ガンダムと華憐の所に向かおうとしたその時、

桂花
「三人とも逃げるのよ！！」

流琉
「どうしてなのです！？」

稟
「ふがふが・・・ふが・・・・・」

風
「稟ちゃんは鼻血を出してしまいましたので風が説明します。曹丕様と華憐様が闇の力によって暴走してしまったのです」

季衣
「嘘！！大変だ！！」

姜維ガンダムＦ９１
「先生はどうしたんだ！！？」

桂花
「程？殿は華憐様達の攻撃を受けて、命を落としたわ」

姜維ガンダムＦ９１
「そんな・・・」

風
「今はとにかく蜀・翔へ向かったほうがいいのです！！」

六人は蜀・翔へとむかった

第８話『劉備帰還・さらば関羽！！』

そのころ、関平ガンダムは闇の怪物に苦戦していた

天輝装・一刀
「いかん！！」

鬼龍王・愛紗
「関平！！」

左慈
「そうはさせん！！貴様らの相手はこの俺だ！！」

天輝装・一刀と鬼龍王・愛紗は左慈に阻まれてしまった

関羽ガンダム
「関平！！」

周倉ドーベンウルフ
「やばい、来るぞ！！！」

闇の怪物は関平ガンダムに攻撃しようとしていた

関羽ガンダム
「うおおおおおおおおおおお！！！！！やらせるかあああああああああああ！！！！」

関平ガンダム
「義父上！！？」

関羽ガンダムは関平ガンダムの前に立ち、闇の怪物の攻撃によって、致命傷を負った

周倉ドーベンウルフ
「大将！！！」

天輝装・一刀
「関羽！！！」

鬼龍王・愛紗
「関羽殿！！！！」

関平ガンダム
「ち・・義父上！！！！」

しかし、関羽ガンダムは・・・・・

関羽ガンダム
「ぐっおおおおおおおおおおお！！！！！例えこの身が砕けて散ろうと！！三璃紗の・・我らが祖国のために！！！だあああああああああああああ！！！！！！」

関羽ガンダムは最後の力を振り絞って闇の怪物に攻撃した。すると闇の怪物の仮面が砕けた

関羽ガンダム
「お主は！！？」

その隙を逃さず、闇の怪物は関羽ガンダムに攻撃した

関平ガンダム
「義父上！！！！」

関平ガンダムは向かおうとするが・・・二つの光が降り立った

そのころ、鬼龍王・愛紗は左慈に追い詰められていた

左慈
「死ね!!!」

鬼龍王・愛紗
「くっ・・・・」

そして、とどめ刺そうとしていた。しかし光が降り立つと一つは闇の怪物に、もうひとつは左慈に攻撃した

???
「大丈夫か・・関羽?」

関羽ガンダム
「りゅ・・・劉備殿!!?」

???
「愛紗ちゃん、大丈夫?」

鬼龍王・愛紗
「桃香様・・・・」

それは白い馬に跨った劉備ガンダムと桃香であった

天輝装・一刀
「桃香!!?」

関平ガンダム
「義父上！！？」

劉備ガンダム
「気をつけろ・・・・」

桃香
「まだ、終わっていない！！」

闇の怪物は尚も立ち上がろうとしていた

劉備ガンダム
「闇にとらわれし者よ・・・・・」

桃香
「その力、龍が断ち切る！！」

劉備ガンダムは真赤龍翔神刀と真青龍烈斬刀を、龍帝姫・桃香は真赤龍閃牙剣と真青龍光爪剣を抜いた。そして・・・二つの剣は一つとなり、真天翔龍帝剣と真閃光龍神剣へと変わった

劉備ガンダム
「真天翔龍帝剣！！」

桃香
「真閃光龍神剣！！」

劉備ガンダム、桃香
「破邪顕聖！！」

そして、二つの剣から二体の龍が現れた

そして、それを感じていた者たちもいた

孔明Vガンダム
「闇を払う・・龍の力・・・・ついに・・・・」

曹操ガンダム
「時は満ちた・・・・・」

そして、龍が消えると、呉・轟の兵士達は倒れた

甘寧ケンプファー
「ううううう・・・」

呂蒙ティジェ
「俺達は一体・・・」

雪蓮
「これで・・・・」

大史慈ドム
「呉・轟は救われたのか・・・・・」

劉備ガンダム
「いや・・・まだだ」

桃香
「まだ終わっていない」

闇の怪物は再び立ち上がった。そして、左慈も・・・

左慈
「貴様ら、許さん!!!!!!」

左慈はその姿を巨大な翼龍へと変わった

関羽ガンダム
「くっ・・・・・やらせはせぬ・・うぐ・・・・・」

関平ガンダム
「義父上!!」

鬼龍王・愛紗
「何をしている関平、行くぞ!!」

関平ガンダム
「義姉上、しかし・・・・」

関羽ガンダム
「愛紗殿の言うとおりだ。お前も戦士ならなすべきことはわかっておろう!!!」

そこへ劉備ガンダム、桃香、天輝装・一刀がやってきた

劉備ガンダム
「関平、やれるな?」

関平ガンダム

「俺が・・・」

劉備ガンダムが渡したのは関羽ガンダムの武器であった

鬼龍王・愛紗
「左慈のほうは私がやる」

関平ガンダム
「義父上、後はおまかせを・・・・」

天輝装・一刀
「行くぞ!!!」

関平ガンダム
「はい!!」

桃香
「私達の命にかけて!!」

劉備ガンダム
「貴様らを倒す!!!」

五人は闇の怪物と左慈と戦い始めた。戦況は桃香達のほうが有利であった

そして、関羽ガンダムはそれを見ていた

周倉ドーベンウルフ
「大将、今のうちだ。傷の手当てを!!」

関羽ガンダム
「大丈夫だ、周倉。わが愛する息子の活躍を眼にすれば・・・傷の痛みなど（強くなったな・・・関平・・・ふっ・・・・あの姿はまるで・・・いや・・・私と同じではないな・・この父が誰よりもわかっているぞ・・・・戦士になったな・・関平よ！！）」

そして、関平ガンダムと鬼龍王・愛紗は飛び上がった

鬼龍王・愛紗
「行くぞ！！」

関平ガンダム
「おう！！（見ていてください。義父上、今こそ貴方から受け遂いだ全てを）」

そして・・・

関平ガンダム
「鬼牙百烈撃！！！」

鬼龍王・愛紗
「鬼龍激燐斬！！」

二人の攻撃で闇の怪物と左慈はひるんだ

関平ガンダム
「劉備さん！！！」

鬼龍王・愛紗

「桃香様、ご主人様！！」

その後を劉備ガンダムと桃香とが現れ、

劉備ガンダム
「天翔真龍斬！！！！！！！！！！」

桃香
「閃光真龍斬！！！！！！！！！！」

天輝装・一刀
「天輝真光斬！！！！！！！！」

三人の攻撃を受けた闇の怪物と左慈は・・・・

左慈
「ぐわあああああああああああ！！！！！バカなあああああああああ！！！！！！」

消滅したのであった

雪蓮
「やったわ・・・」

大史慈ドム
「これで呉・轟も・・・・」

それを見ていた関羽ガンダム達は・・・

周倉ドーベンウルフ

「さすがは鬼髭の息子と黒髪の弟子である関平だぜ!!さ・・・早く傷の手当てを・・・・大将?」

関平ガンダム
「やった、やりました。見てくれましたか?義父上?」

関平ガンダムは関羽ガンダムの所へと向かった。すると劉備ガンダム達は関羽ガンダムの様子がおかしいことに気付いた

関平ガンダム
「ちちう・・・・え・・・・義父上?」

関羽ガンダムは笑顔であった。関平ガンダムの雄姿を見ながら静かに息を引き取っていた

その様子を見ていた劉備ガンダムと桃香と天輝装・一刀は涙を流していた。鬼龍王・愛紗は静かな表情をしていた。そして・・・

関平ガンダム
「そ・・・そんな・・・・ち・・・義父上えええええええええ!!!!!!!」

関平ガンダムはその場で泣き崩れた。

雪蓮
「大史慈、呂蒙達のことは頼んだわ!!私は蓮華と孫権の所に向かう!!」

大史慈ドム
「御意!!」

今だ、関平ガンダムは泣き崩れたままであった。すると・・・・

鬼龍王・愛紗
「何をやっているのだ、関平！！！！　お前も鬼の子なら泣くな！！！！」

関平ガンダム
「義姉上・・・・」

天輝装・一刀
「おい、愛紗・・・」

桃香
「いいの・・・そのままにして・・」

すると鬼龍王・愛紗は関平ガンダムにあるものを渡した。それは愛紗の兄の形見である短剣であった。

鬼龍王・愛紗
「いいか、お前は今、二人の関羽の意志を受け継いだ。その事を誇りに、突き進め」

と微笑む愛紗。そして・・・

劉備ガンダム
「関羽・・・この闇との戦い・・必ず勝つ！！」

劉備ガンダム、天輝装・一刀は走り出した。

愛紗
「周倉、先に行ってくれ・・・・」

周倉ドーベンウルフ
「行こうぜ、関平！！姉御の言う通り、大将の遺志を無駄にしないために・・・」

関平ガンダム
「おう！！（行ってきます義父上、この三璃紗の明日のために・・・・）」

関平ガンダム、周倉ドーベンウルフも走り出した。二人の関羽の志を受け継ぐ無双の鬼、関平ガンダムが誕生した。そして、残った桃香と愛紗は・・・

愛紗
「関羽殿、貴方の志は関平に受け疲れました。これで・・・安らかに逝けますでしょう。関羽殿・・・・・」

そして、やがて愛紗の眼から大粒の涙が流れ始めた

愛紗
「関羽殿・・・・なぜ・・なぜ・・・兄様につづいて・・・どうして・・・」

桃香
「愛紗ちゃん・・・もう無理しなくてもいいよ」

愛紗
「桃香様・・・」

桃香に優しく抱かれ、その言葉に愛紗の感情が爆発し・・・・

愛紗
「うう・・・・うわあああああああああああああん！！！！関羽殿、関羽殿！！！！！！！」

いつまでも泣きじゃくっていた

そして・・・・

桃香
「行こう、愛紗ちゃん」

鬼龍王・愛紗
「はい！！（関羽殿、私も最後まで戦い抜きます！！）」

二人も闇との戦いに向かった。

第8話『劉備帰還・さらば関羽！！』（後書き）

次回予告

二人の孫権、伝説の力に目覚める！！

次回　第9話『碧眼の獣神・月光の獣帝姫』

第9話『碧眼の獣神・月光の獣帝姫』（前書き）

いよいよ、最終決戦に近づいてきました

第9話『碧眼の獣神・月光の獣帝姫』

関羽ガンダムを失った劉備一行は呉・轟の都までたどり着いた。すると・・

雪蓮
「これは・・・・」

それは闇に操られた呉・轟の兵士達であった。

鬼龍王・愛紗
「バカな!?闇の炎は消したはずだ」

劉備ガンダム
「この者達はすでに・・」

雪蓮
「間に合わなかったのね」

そして、兵士達が向かおうとしていた。すると・・・・

関平ガンダム
「劉備さん、桃香様、一刀さん、ここは俺達に任せて先に行ってくれ!!」

桃香
「関平君」

天輝装・一刀

「頼む」

劉備ガンダム達が先に向かうと関平ガンダムと周倉ドーベンウルフは敵と戦い始めた。

関平ガンダム
「さあ来い、お前達の相手はこの俺だ!!」

周倉ドーベンウルフ
「へへ、よく言った関平、てめぇの背中、この俺様が守るぜ!!」

関平ガンダム
「行くぜ」

周倉ドーベンウルフ
「おう」

第9話『碧眼の獣神・月光の獣帝姫』

いっぽう、劉備ガンダム達は向かった先には・・・石化した孫権ガンダム達の姿が見えた

雪蓮
「孫権、蓮華!!」

桃香
「!!待って」

すると何かが雪蓮に襲い掛かった。そして、その脚は石化していた。
すると・・・

劉備ガンダム
「バ・・・・バカななぜ貴様が？」

そこに現れたのは天輝装・一刀達によって倒されたはずの闇の怪物がいたのであった。そして、劉備ガンダムと桃香に襲い掛かった。しかし、闇の怪物はある武器を取り出した。それは見覚えのある武器であった。そして・・

劉備ガンダム
「ぐはぁ！！！！」

桃香
「きゃあ！！」

雪蓮
「劉備！！」

鬼龍王・愛紗
「桃香様！！」

天輝装・一刀
「逃げろ！！」

しかし、闇の怪物の攻撃が迫ろうとしていた。そんな時、二頭の馬が二人を助けた

雪蓮
「これって・・・・」

？？？
「テ・・テン・・・・ノ・・・ヤイバ・・・」

劉備ガンダム
「そうだ、三璃紗より遥か東の海にある蓬莱の地・・・」

桃香
「その地にすむ神秘の民より授かった二頭の的蘆こそ・・・」

劉備ガンダム、桃香
「「東方の天の刃！！」」

そして、二人は二頭の的蘆に乗ると闇の怪物に立ち向かった

劉備ガンダム
「闇を切り裂くこの力、とくと見よ！！天翔鳴龍閃！！」

桃香
「閃光真龍閃！！！」

二人の攻撃で闇の怪物は吹き飛ばされた。そして全身を覆った鎧が砕け始めた

雪蓮
「！！嘘・・・」

桃香
「貴方は・・・孫策さん！？」

その姿は死んだはずの孫策サイサリスであった。そして孫策サイサ

リスは虎錠刀と虎王牙刀を手に取った。

天輝装・一刀
「まずいぞ・・このままでは・・・・」

すると・・・それを阻むものがいた。それは・・・・

孫権ガンダム
「そ・・・そうはさせない、兄さん・・・」

蓮華
「その刀を渡すわけにはいきません・・・・・」

石化から解放された孫権ガンダムと蓮華であった

孫権ガンダム
「うおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

蓮華
「はあああああああああああああ！！！！」

二人は虎錠刀と虎王牙刀に力を与えた。すると

「「ガオオオオオオオオオオオオオオ」」

そこから二頭の虎のオーラが現れた。そして、それらは孫権ガンダムと蓮華を包み込んだ。

雪蓮
「あの姿・・・・碧眼の獣神、月光の獣帝姫」

そこには全身を青と白の鎧、両肩、両腕には虎の前足を模した鎧、頭部には虎の頭部を模した兜を装備した孫権ガンダムと蓮華の姿があった。それぞれ虎暁、白虎、獣帝姫の力に目覚めた姿、轟大帝・猛虎装・孫権ガンダムと獣帝姫・蓮華である。

そして・・・・

孫権ガンダム
「でああああああああああああ！！！！！」

獣帝姫・蓮華
「はあああああああああああああああ！！！！」

孫権ガンダムと獣帝姫・蓮華は孫策サイサリスを攻撃した。

天輝装・一刀
「孫権、蓮華！？」

獣帝姫・蓮華
「一刀、コイツはもう私達の知っている孫策兄様じゃないわ！！」

孫権ガンダム
「こいつはもはや・・・闇の盟主だ！！」

孫権ガンダムと獣帝姫・蓮華は孫策サイリスを吹き飛ばしたが、その様子がおかしいことに気がついた。

孫策サイサリス
「くくくく・・・」

孫権ガンダム
「何がおかしい？」

孫策サイサリス
「伝説の力は・・・その程度か・・・・くくくくく・・・・・」

そして、劉備ガンダムと桃香も加勢しようとするが・・・・

獣帝姫・蓮華
「手を出さないで・・・・・」

孫権ガンダム
「これは俺達の戦いだ」

孫策サイサリス
「面白い・・・・ならばその力を見せて見よ！！二人の孫権！！」

孫策サイサリスはトンファーを連結させたバズーカー型の棍、強襲激鋼棍を手にした。
そして、孫権ガンダムと獣帝姫・蓮華は虎錠刀と虎王牙刀を抜いた。
するとその形は新たな姿、真轟獣虎錠刀と真轟勇虎王牙刀となった。

孫権ガンダム
「伝説の力を継ぐ戦士達の名にかけて！！」

獣帝姫・蓮華
「三璃紗の明日は守って見せる！！！」

孫策サイサリス

「激鋼重爆突！！！！」

孫権ガンダムと獣帝姫・蓮華も攻撃するが、孫策サイサリスのほうが早かった。しかし、突然、武器を下げた。そして・・・・・

孫権ガンダム
「猛虎獣烈覇！！！！」

猛虎王・蓮華
「猛虎牙王覇！！！！」

二人の一撃で孫策サイサリスを斬った。そして、彼から闇の力があふれだすと・・呉・轟を包んでいた闇が消えた。そして・・・孫策サイサリスの体は消えつつあった

孫権ガンダム
「孫策兄さん・・・・」

獣帝姫・蓮華
「兄様、どうして・・・」

孫策サイサリス
「ど・・・どうやら・・・かりそめの命も・・ここまでのようだな・・・たとえ闇に与えられた命といえど・・・お前達の中に眠る・・・真の力を目覚めさせることができた・・・それだけで・・・俺は・・・・」

孫権ガンダム
「に・・兄さん・・・・まさか！？」

獣帝姫・蓮華

「最初から・・・正気に戻られたのですか・・・？」

そして・・・・

孫策サイサリス
「孫権、蓮華、五丈原へ行け！」

孫権ガンダム
「五丈原？」

孫策サイサリス
「そこに闇の軍神が・・・・三候、四聖獣、四神姫が封印した蚩尤がいる！！」

天輝装・一刀
「やはり・・闇の元凶は蚩尤か！」

孫策サイサリス
「必ず勝て。蚩尤を討てるのは、お前達、三候、四聖獣、四神姫の魂を継ぐ者だけだ。そして、天の身遣い、北郷一刀、お前もだぞ」

獣帝姫・蓮華
「兄様・・・」

そして・・・・

孫策サイサリス
「許せ！・・・お前達と共に往けぬ・・・この兄を・・・・」

孫権ガンダム

「兄さん！！！」

獣帝姫・蓮華
「兄様！！！」

孫権ガンダムと獣帝姫・蓮華は手を伸ばしたが、孫策サイサリスは
完全に消えてしまった。

孫権ガンダム
「兄さん・・」

獣帝姫・蓮華
「また・・・逝かれたのですね・・・・」

雪蓮
「見事だったわ・・・孫策・・・・」

三人は涙を流していた

雪蓮
「往くのね・・」

孫権ガンダム
「はい、俺は貴方達から大切なものを受け継いだ・・・・」

獣帝姫・蓮華
「明日のために戦おうとする真の勇気を・・・・」

そして、

孫権ガンダム
「往こう」

獣帝姫・蓮華
「闇を待つ五丈原へ！」

二人の瞳に迷いは完全になくなった。

孫権ガンダム
（父上、孫策兄さん、雪蓮姉さん、見ていてください）

獣帝姫・蓮華
（私達の戦いを・・・）

第９話『碧眼の獣神・月光の獣帝姫』（後書き）

次回予告

三候、四聖獣、四神姫の魂を受け継いだ戦士達は五丈原へとたどり着いた。そして、蚩尤との最終決戦に新たな戦士が現れる

次回　第１０話『最後の戦士』

第１０話『最後の戦士』（前書き）

いよいよ最終決戦に近づきました。

第１０話『最後の戦士』

龍帝・青龍・龍帝姫の力に目覚めた劉備ガンダム、桃香

雀瞬・朱雀・炎帝姫の力に目覚めた曹操ガンダム、華琳

虎暁・白虎・獣帝姫の力に目覚めた孫権ガンダム、蓮華

そして、五丈原に集結して、最終決戦が始まろうとしていた

第１０話『最後の戦士』

五丈原では激戦が広げていた

馬超ブルーディスティニー
「であああああああああああ！！！」

獅龍王・翠
「はあああああああああああ！！！！」

孟獲ガンダム
「成敗いいいいいいいいいいいい！！！！！」

阿修羅王・美以
「にゃあああああああああああ！！！！」

馬超ブルーディスティニー、獅龍王・翠、猛獲ガンダム、阿修羅王・美以は闇に操られた兵士達と戦っていた。蜀・翔軍、南方軍は必死に戦っていたがその数の多さに苦戦していた

巨砲王・桔梗
「くっ・・・こやつら次から次へと・・・」

黒龍装・焔耶
「キリがない！！」

曹操ガンダム
「ひるむな！！我らが倒れれば、誰が三璃紗の明日を守るのだ！！」

華琳
「なっ！！？曹操、あれを見て！！」

華琳が指差した先にいたのは闇に操られた曹仁ガンダムと蒼炎王・華憐と夏侯兄妹、張遼ゲルググ、飛龍装・霞、張？ザク？、藍の姿であった。

張？ザク？
「ふふふふふふ・・・・」

蒼炎王・華憐
「ふふふふふ・・・・・」

曹操ガンダム
「曹仁・・・・・」

華琳
「華憐・・・貴方達・・・」

そして、そのことは本陣でもそのことは報告された。

桂花
「なんですって!!?　曹丕陛下と華憐様と魏・機駕五将までが五丈原に来たですって!?」

天龍王・朱里
「孔明さん・・・・このままでは・・・・・」

孔明Vガンダム
「わかっています・・・・」

その様子を見ていた者がいたそれは闇に完全に操られた郭嘉ヴァサーゴであった。

郭嘉ヴァサーゴ
「ふ・・・・ふふふふふふふ。どうだい僕の力は?僕は天才なんだ!!この僕が・・・一番暗黒玉璽を使えるんだぁ!!!!!死ねえええええええええええ!!!!!!」

そして、郭嘉ヴァサーゴの指示で兵達は襲い掛かった。張飛ガンダム達の体力はすでに限界であった。すると・・・・光が降り立った

馬超ブルーディスティニー
「今度はなんだ!?」

獅龍王・翠
「敵か!?」

孔明Vガンダム
「いえ、あれは・・・・」

張飛ガンダム
「兄貴！！？」

雷龍王・鈴々
「桃香お姉ちゃん！！」

それは劉備ガンダム、桃香、天輝装・一刀、鬼龍王・愛紗、関平ガンダム、周倉ドーベンウルフ、孫権ガンダム、陸遜ゼータプラス、蓮華、思春、隠、亞莎の姿であった

劉備ガンダム
「待たせたな」

桃香
「皆、ここから反撃だよ！！」

郭嘉ヴァサーゴ
「くっ・・・今更援軍が来たぐらい・・・・」

曹操ガンダム
「まだ気がつかぬか郭嘉。今ここに何がそろったかを・・・・」

そして・・・

曹操ガンダム
「雀瞬よ！！余に力を貸せい！！！」

華琳
「朱雀、炎帝姫よ！！！私に力を貸しなさい！！」

孫権ガンダム
「虎錠刀に宿る虎暁の魂よ！！俺に力を！！」

蓮華
「虎王牙刀に眠りし白虎と獣帝姫の魂よ！！私に力を！！」

郭嘉ヴァサーゴ
「あ・・・あれは！？」

劉備ガンダム
「龍帝の光よ！！」

桃香
「青龍と龍帝姫の光よ！！」

劉備ガンダム、桃香
「「我らに力を！！！」」

そして、光がはれるとそこには・・・・・
孔明Vガンダム
「神話に描かれた伝説の魂が・・・今ここに！！」

翔烈帝・龍装・劉備ガンダム、龍帝姫・桃香、機武帝・紅蓮装・曹操ガンダム、炎帝姫・華琳、轟大帝・猛虎装・孫権ガンダム、獣帝姫・蓮華の姿が見えた

郭嘉ヴァサーゴ
「クッ、どいつもこいつも僕の邪魔ばかり、僕が・・・僕が・・・一番なんだ！！」

劉備ガンダム
「いざ決戦の時だ！！！」

龍帝姫・桃香
「行くよ、皆！！」

そして、ついに最終決戦が始まった。

そのころ、洛陽宮殿では・・・・

司馬師ペーネロペー
「郭嘉は自分の立場というものを理解できていないようですね」

咲夜
「そんなことよりも準備は？」

司馬昭クスィー
「はい、黙示録の世界はもう目の前に・・・・」

咲夜
「ふふふ・・・もうすぐ目覚めるのね軍神・・・・蚩尤・・・・」

そのころ祈りを続けていた司馬炎ザク？と雛に異変が起きた

？？？？
「誰だ・・・我を呼ぶのは・・・・・誰だぁあああああああ！！！！！」

すると司馬炎ザク？と雛は突然現れた暗黒玉璽サイコガンダムに取

り込まれた。すると・・・

司馬師ペーネロペー
「義母上!!?」

司馬昭クスィー
「こ・・・これは・・・・・」

咲夜
「これまでよくやったわ子供達よ・・・大いなる闇の力になりなさい」

司馬師ペーネロペー、司馬昭クスィーも取り込まれてしまったのであった。

すると大地から闇があふれだした。そしてそれらは一つとなっていくのであった。それは倒したはずの・・・蚩尤ノイエズールであった。さらに暗黒玉璽サイコガンダムと合体した

獅龍王・翠
「な・・・なんだあれは?」

孔明Vガンダム
「くっ・・・・もっとも恐れていたことが・・・」

咲夜
「ふふふ・・・素晴らしいわ。神話の大地を血に染めた軍神・・・・蚩尤!!」

ついに恐るべき存在・蚩尤ガンダムが復活してしまった。そして、

蚩尤ガンダムは何かをためていた。そして、それは泰山に向けていた。そして

蚩尤ガンダム
「天魔爆煉砲!!!!」

蚩尤ガンダムの闇の砲撃は敵味方関係なく吹き飛ばされてしまった。
そして、本陣ごと泰山は崩れてしまった。

光鳳王・雛里
「泰山が・・・・」

孔明Vガンダム
「これほどとは・・・・」

咲夜
「ふふふ、素晴らしい、素晴らしいわ!! 蚩尤の雷!!さあ次は何を見せてくれるのかしら?」

そのころ、吹き飛ばされた郭嘉ヴァサーゴは立ち上がった。すると・・・

郭嘉ヴァサーゴ
「あ・・・ぼ・・・僕の玉璽が・・・」

郭嘉ヴァサーゴは自身の消滅に驚いていた。そして、再び蚩尤ガンダムが攻撃を始めた。すると・・・・

劉備ガンダム
「俺達が止める!!」

そして・・・・

曹操ガンダム
「七星紅蓮焔武！！！」

炎帝姫・華琳
「天星烈火神翼！！！！」

孫権ガンダム
「王虎轟獣撃！！！！！！！！」

獣帝姫・蓮華
「王虎轟勇覇！！！！！！！」

劉備ガンダム
「天翔真龍斬！！！！！！！！」

龍帝姫・桃香
「閃光真龍斬！！！！！！！！」

天輝装・一刀
「天輝・光烈斬！！！」

劉備ガンダム達が攻撃を防ごうとするが・・・・・

黄忠ガンダム
「ダメじゃ押し戻される！！」

張飛ガンダム

「このままじゃもたねぇ！！」

すると・・・

孟獲ガンダム
「俺達の力も合わせるんだ！！！」

馬超ブルーディスティニー
「おう！！」

獅龍王・翠
「任せろ！！」

阿修羅装・美以
「行くニャー！！」

馬超ブルーディスティニー、獅龍王・翠、孟獲ガンダム、阿修羅王・美以も闇の力が加わったが・・・やはり押されていた

龍帝姫・桃香
「皆、頑張って・・・・」

劉備ガンダム
「闇に負けるな！！！」

咲夜
「何人たりとも黙示録は覆されないのよ！！人は宿命に洵ずるのみよ！！！」

劉備ガンダム達は完全に闇の力に押し負けそうになっていた

黄忠ガンダム
「馬超！！」

錦豹装・蒲公英
「お姉様！！」

祝融ガンダム
「あんた！！」

ミケ
「大王様！！」

張飛ガンダム
「兄貴！！！」

鬼龍王・愛紗
「桃香様、ご主人様！！！」

孔明Vガンダム
「伝説の力をもってしても蚩尤の闇には敵わないというのか！！？」

すると・・どこから光が現れると闇の力がかき消された

咲夜
「バカな・・蚩尤の闇を貫けるわけが・・・」

すると・・泰山から光があふれ出た。そこに玉璽を手にした二人の人物が見えた

孔明Vガンダム
「あれは三候とは別でG記には描かれなかったもう一人の英雄、武義と・・・」

天龍王・朱里
「そして、失われたと思われた四聖獣の一体、玄武と四神姫の一人、武帝姫の魂を受け継ぐ者が・・・・・」

劉備ガンダム
「見つけてくれたんだ・・・恋・・そして、生きていたんだ、呂布」

そう死んだかと思われた呂布トールギスと月、詠、音々音と共に行方不明となった恋が戻ってきた。そこには玄武（※蛇の尾を持つ亀のこと）を模した鎧を装備した姿で登場した。そう武義と玄武と武帝姫の力に目覚めた姿、黒耀の闘神・玄武装・呂布トールギスと漆黒の武帝姫、武帝姫・恋である

そして・・・・

呂布トールギス
「魂イイイイイイ！！！！！！」

武帝姫・恋
「・・・・行く！！」

そして、玉璽が輝くと玄武を模した天玉鎧と神鎧獣が現れた

呂布トールギス
「天玉鎧・真武！！」

武帝姫・恋
「神鎧獣・甲武！！」

そして、呂布トールギスと武帝姫・恋は真武と甲武に乗ると、そのまま蚩尤ガンダムに向かった。蚩尤ガンダムも攻撃したが、呂布トールギスと武帝姫・恋は避けることができた

咲夜
「な・・・に・・・・・」

風龍王・星
「早い！！」

そして、自身の武器をとった呂布トールギスと武帝姫・恋は・・・

呂布トールギス
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

武帝姫・恋
「・・・・・死ね！！」

蚩尤ガンダムを攻撃した。そして・・蚩尤ガンダムは半壊したのであった。

呂布トールギス
「聞け・・・闇に立ち向かい者の達よ！！我らは呂布！！大地の意思、武義、玄武、武帝姫の魂を伝えし者・・・・」

武帝姫・恋

「皆・・・・戦って・・・・・最後の戦い・・・・・」

すると・・・・呂布トールギスと武帝姫・恋の持っていた玉璽が輝き始めた

その時、五丈原に集う全ての武将達は聞いた。武義と玄武と武帝姫の魂の声と共に・・・己に与えられた果たすべき使命を・・・・・・

獅龍王・翠
「今・・・・はっきりとわかった・・・」

馬超ブルーディスティニー
「俺達がなぜこの力を持って生まれたのか・・・・・」

孟獲ガンダム
「ああ俺達に宿る阿修羅の力はあの闇を断つために・・・」

そして・・・

孔明Vガンダム
「そうか・・・・龍凰よ・・・私の力は今・・・この時のために与えられたのですね・・・私は・・・」

天龍王・朱里
「孔明さん・・・・・」

光鳳王・雛里
「私達の役目・・・・・」

そして・・・・・

天輝装・一刀
「俺が呼ばれた理由がわかった気がしてくる・・・・」

龍帝姫・桃香
「ご主人様・・・・・」

天輝装・一刀
「皆・・聞こえたか！！」

孫権ガンダム
「ああ！！」

獣帝姫・蓮華
「ええ！！」

孫権ガンダムは神獣形態となり、獣帝姫・蓮華はその上に乗った

曹操ガンダム
「目指すは一つ！！」

炎帝姫・華琳
「決まっているわ！！」

曹操ガンダムと炎帝姫・華琳も背中の羽を広げた

龍帝姫・桃香
「行こう！！」

劉備ガンダム

「三璃紗の明日を守るため」

天輝装・一刀

「天空の洛陽宮殿へ！！」

七人は天空の洛陽宮殿へと向かった。今、最終決戦が始まった

第１０話『最後の戦士』（後書き）

次回予告

孔明、自らの使命を貫くため、戦う

次回　第１１話『戦神達の大乱』

第１１話『戦神達の大乱』（前書き）

次回は最終回です

第１１話『戦神達の大乱』

天輝装・一刀
「俺が呼ばれた理由がわかった気がしてくる・・・・」

龍帝姫・桃香
「ご主人様・・・・・」

天輝装・一刀
「皆・・聞こえたか！！」

孫権ガンダム
「ああ！！」

獣帝姫・蓮華
「ええ！！」

孫権ガンダムは神獣形態となり、獣帝姫・蓮華はその上に乗った

曹操ガンダム
「目指すは一つ！！」

炎帝姫・華琳
「決まっているわ！！」

曹操ガンダムと炎帝姫・華琳も背中の羽を広げた

龍帝姫・桃香

「行こう！！」

劉備ガンダム
「三璃紗の明日を守るため」

天輝装・一刀
「天空の洛陽宮殿へ！！」

七人は天空の洛陽宮殿へと向かった。今、最終決戦が始まった

第１１話『戦神達の大乱』

洛陽宮殿に向かっている七人を咲夜はみていた。

咲夜
「ふふふ・・・神代から蘇った戦神達の大乱ね。この私は新たな目撃者であり、歴史の創始者となるのよ！！さあ蛍尤よ！！お前の全てを見せなさい！！」

すると蛍尤ガンダムは半壊しながらも闇の気を出した。そして、天輝装・一刀と四神達（三候、武義、四聖獣、四神姫のこと）を包み込んでしまった。

天龍王・朱里
「孔明さん、このままでは劉備様達とご主人様が・・・・」

孔明Ｖガンダム
「わかっています。馬超さん、孟獲さん、次は私達の番です！！白龍転身！！」

孔明Vガンダムは龍形態になると馬超ブルーディスティニー、孟獲ガンダム、獅龍王・翠、阿修羅王・美以を乗せると羽ばたいた。天龍王・朱里と光鳳王・雛里もその後に続いた。それをみた郭嘉ヴァサーゴは・・・・・・

郭嘉ヴァサーゴ
「や・・やつらも・・・咲夜様の所へ・・・・行く・・・・つもりか・・・・ぬがあああああああ!!!!!!」

蚩尤ガンダムの破片を吸収して、新たな姿となった。そして、孔明Vガンダム達の所へ向かった。

馬超ブルーディスティニー
「何か来る!!」

郭嘉ヴァサーゴ
「咲夜様の邪魔はさせない!!!!」

獅龍王・翠
「こいつは・・・・・・」

郭嘉ヴァサーゴ
「死ねえええええええええええ!!!!!!僕が・・・・天に選ばれし者なんだ!!!!!!」

一行は郭嘉ヴァサーゴの攻撃に苦戦していた

天龍王・朱里
「孔明さん・・・大丈夫ですか!!?」

孔明Vガンダム
「私は大丈夫です」

郭嘉ヴァサーゴ
「逃がさないって言ってるだろ!!!!!」

孟獲ガンダム
「俺達を降ろせ!!力を合わせて先に奴を・・・・」

光鳳王・雛里
「いえ、ここは私達に任せてください!!!」

郭嘉ヴァサーゴの前に天龍王・朱里と光鳳王・雛里の前に立った

阿修羅王・美以
「大丈夫か!?ニャ!!?」

孔明Vガンダム
「朱里さん達の言うとおりです・天の刃が揃わなくては蚩尤の闇を払うことはできません。劉備さん達と一刀さんには貴方達が必要です!!貴方達に・・・・天の刃としての使命があるように・・・・貴方達を最後の戦いの場を送り届けるこそが・・・・私の使命!!」

しかし天龍王・朱里と光鳳王・雛里の攻撃を避けた郭嘉ヴァサーゴは孔明Vガンダムに攻撃した

孟獲ガンダム
「孔明!!!!?」

獅龍王・翠
「おい！！」

孔明Ｖガンダム
「くっ・・・・行ってください・・・・・」

馬超ブルーディスティニー
「けど・・・・・」

孔明Ｖガンダム
「は・・早く・・・・・」

そういうと四人はさきに向かった。そして、郭嘉ヴァサーゴは孔明Ｖガンダムにとどめの攻撃を食らわせた

光鳳王・雛里
「そんな・・・・・」

天龍王・朱里
「孔明さあああああああああああん！！！！！！」

孔明Ｖガンダムの死を悲しむ天龍王・朱里と光鳳王・雛里。そして、意識を失いかける孔明Ｖガンダムは・・・・・

孔明Ｖガンダム
「行ってください・・・・・・三璃紗の・・・・・・明日を・・・守る・・・・ため・・・・に・・・・・」

そして、静かに落ちていく、孔明Ｖガンダムは静かに息を引き取った

馬超ブルーディスティニー
「行くぞおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

獅龍王・翠
「はあああああああああああああああ！！！！」

孟獲ガンダム
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

阿修羅王・美以
「にゃあああああああああああああああ！！！！」

四人は闇の中に入り込んだのであった

そして、闇の中では天輝装・一刀と四神達が闇の攻撃を受けて、止められていたのであった。

咲夜
「ふふふふ・・・・・・」

曹操ガンダム
「おのれ・・・」

炎帝姫・華琳
「ぐっ・・・・・・」

龍帝姫・桃香
「ここまで来たのに・・・・・」

四人

「でりゃあああああああああああああ！！！」

すると馬超ブルーディスティニー、獅龍王・翠、孟獲ガンダム、阿修羅王・美以の攻撃で闇の呪縛が解き放たれた

劉備ガンダム
「お前達！！？」

獅龍王・翠
「ようやくわかったんだ！！あたし達が何のために生まれてきたのか！！」

孟獲ガンダム
「我らの力は今この時のために！！」

咲夜
「ふっ、貴様らごときが何になる」

天輝装・一刀
「見るがいい、司馬懿！！」

そして、全員は蚩尤ガンダムに立ち向かった

天の刃は闇と共に現れり！！その刃は光の輝きを・・・闇を貫く天牙となる

最初に劉備ガンダム、龍帝姫・桃香、曹操ガンダム、炎帝姫・華琳が攻撃し、その後を孫権ガンダム、獣帝姫・蓮華、呂布トールギス、武帝姫・恋が攻撃した。そして、天輝装・一刀、二頭の的蘆に乗った馬超ブルーディスティニーと獅龍王・翠、孟獲ガンダムと阿修羅

王・美以が立ち向かった

天輝装・一刀
「行くぞ、闇を貫く者達よ！！」

馬超ブルーディスティニー、獅龍王・翠
「「獅龍！！」」

孟獲ガンダム、阿修羅王・美以
「「阿修羅！！」」

四人
「「「「天翔牙！！！！！！！！！！」」」」

天輝装・一刀
「天輝閃光撃！！！！！！！！！」

五人の攻撃で蚩尤ガンダムを倒すことができた。それは咲夜のいる洛陽宮殿に向かっていた。そして、闇の瘴気がはれていた。それは天龍王・朱里と光鳳王・雛里と郭嘉ヴァサーゴの目に入った

郭嘉ヴァサーゴ
「バ・・・・バカな・・・そんな馬鹿な！！！！咲夜様あああああああああああああ！！！！！！！！」

天龍王・朱里
「雛里ちゃん！！」

郭嘉ヴァサーゴは洛陽宮殿に向かった。

光鳳王・雛里
「うん！！」

二人も洛陽宮殿に向かったのであった

そして、半壊した宮殿の中には蚩尤ガンダムの残骸がその中から司馬炎ザク？と雛がいた。それを見ていた咲夜がいた

劉備ガンダム
「司馬懿！！」

天輝装・一刀
「お前の野望もここまでだ！！！」

龍帝姫・桃香
「覚悟しなさい！！」

天輝装・一刀と四神達と馬超ブルーディスティニーと獅龍王・翠と孟獲ガンダムと阿修羅王・美以が駆けつけた。しかし咲夜は・・・・

咲夜
「笑わせるな・・・・黙示録はすでに成就した！！」

すると咲夜の後ろから闇の瘴気が現れ、それを吸収し始めた。そして、赤かった髪が銀色に変わり、瞳も血のような色へと化した。

孫権ガンダム
「あれは・・・・」

さらに咲夜の背中から蝙蝠の羽が生え、頭からは角が生えた。さら

にそこへ天龍王・朱里と光鳳王・雛里と郭嘉ヴァサーゴがやってきた

郭嘉ヴァサーゴ
「あははははははははっ、ついに神の領域へと到達されたのですね咲夜様！！」

咲夜
「郭嘉・・・・」

郭嘉ヴァサーゴ
「今こそ新たな世界の創造を！！そして天に選ばれしこの僕にも祝福を！！」

咲夜
「この世を司る全ては空・・・」

すると咲夜は郭嘉ヴァサーゴから闇の気を取り出した。そして、郭嘉ヴァサーゴは消滅しかかった

天邪神・咲夜
「我こそは三璃紗の神、天邪神なり・・・」

郭嘉ヴァサーゴ
「あは・・・ははは・・・ど・・・どうして・・・・僕には永遠の命が・・・・」

そして、郭嘉ヴァサーゴは静かに消滅した。一同はそれを見ていた

天邪神・咲夜
「我が汝らに与える祝福は死という名の永遠、何人たりとも抗えぬ・

・・・人はただ・・・・宿命に殉ずるのみである！！！」

天邪神・咲夜は炎を繰り出した、洛陽宮殿が燃えだした

全員

「うわあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

今、最終決戦が始まった・・・・・・

第１１話『戦神達の大乱』（後書き）

次回予告
真の志・・・全ての決着がつく
最終回　第１２話『真の志』

第１２話『真の志』（前書き）

最終回です。本当にご覧になられてありがとうございました

第１２話『真の志』

天邪神・咲夜
「我が汝らに与える祝福は死という名の永遠、何人たりとも抗えぬ・・・人はただ・・・宿命に殉ずるのみである！！！」

天邪神・咲夜は炎を繰り出した、洛陽宮殿が燃えだした

全員
「うわあああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

第１２話『真の志』

燃え盛る宮殿の中では天邪神・咲夜は余優な表情を見せていた

曹操ガンダム
「咲夜、貴様！！！！！！」

炎帝姫・華琳
「これ以上、好き勝手はさせないわ！！！」

曹操ガンダム、炎帝姫・華琳は立ち向かったが、天邪神・咲夜は天邪剣を手に取ると

天邪神・咲夜
「その宿命を前にしては理想などいかに儚きものか・・・・・」

天邪神・咲夜は斬撃を二人に食らわしたのであった。さらに孫権ガ

ンダムと獣帝姫・蓮華も向かったが

天邪神・咲夜
「正義や勇気がいかに愚かであり無力であるか・・・・」

天邪神・咲夜は腕から炎を出し攻撃したのであった。さらに劉備ガンダム、龍帝姫・桃香、呂布トールギス、武帝姫・恋、天輝装・一刀も向かったが・・・

天邪神・咲夜
「人の魂など塵に等しい！！！！」

天邪神・咲夜は腕から闇の球体を出し、五人を攻撃した。馬超ブルーディスティニー、獅龍王・翠、孟獲ガンダム、阿修羅王・美以も挑んだが・・・吹き飛ばされてしまった

天輝装・一刀
「何という力だ・・・・・」

獅龍王・翠
「天邪神・・・蚩尤の闇をも取りこんだ・・・まさに神・・・・」

すると・・・・

天龍王・朱里
「違います！！あれは神様ではありません！！」

龍帝姫・桃香
「朱里ちゃん、雛里ちゃん・・・・」

そこには天龍王・朱里と光鳳王・雛里の姿があった

天龍王・朱里
「人の意思は・・無限に進化します」

光鳳王・雛里
「咲夜さん、貴方が得た神の力は意思の力にすぎません」

すると、天邪神・咲夜の足元から光があふれだした

天邪神・咲夜
「何、この光は・・・」

天龍王・朱里
「見ていてください。この輝きこそ意思の力!!」

光鳳王・雛里
「たとえ死が人の宿命だとしても・・・・」

天龍王・朱里
「人の意思は・・・・」

光鳳王・雛里
「真の志は・・・・」

天龍王・朱里、光鳳王・雛里
「「その宿命すら乗り越える!!!」」

すると洛陽宮殿の周りに八つの光があふれだした。それは孔明Vガンダムの残骸から放たれたものであった。

天龍王・朱里
（孔明さん・・・もう一度）

光鳳王・雛里
（私達に力を・・・与えてください！！）

天龍王・朱里、光鳳王・雛里
「「八門遁甲・破邪の陣！！！！」」

天龍王・朱里、光鳳王・雛里の放った光は天輝装・一刀、四神、馬超ブルーディスティニー、獅龍王・翠、孟獲ガンダム、阿修羅王・美以を包み込んだ

劉備ガンダム
「この光は・・・孔明！！？守ってくれているのか、俺達を・・・」

天邪神・咲夜
「くっ・・・孔明め！！人の身の分際でありながらなお宿命に抗い続けるというのか！！！！」

すると・・・・

武帝姫・恋
「違う・・・」

呂布トールギス
「孔明だけじゃない！！！」

獣帝姫・蓮華
「三璃紗に生まれた者達の・・・・」

孫権ガンダム
「皆の意思が・・・・・」

炎帝姫・華琳
「志半ばで」

曹操ガンダム
「散っていた者達の志が」

龍帝姫・桃香
「かつて刃を交えた戦士達の達の魂もまた・・・・」

劉備ガンダム
「今・・・正義と共に・・・・・」

天輝装・一刀
「光り輝く!!」

天邪神・咲夜
「くっ・・・・ほざくなあああああああああああ、人間!!!!!!」

すると天邪神・咲夜は自身の限界を超えて、力を発揮した。そして、天邪剣から闇の力を放ったが・・・・天輝装・一刀と四神達が受け止めた

劉備ガンダム、龍帝姫・桃香

「「この身に宿る正義が！！！」」

曹操ガンダム、炎帝姫・華琳
「「理想が！！！」」

孫権ガンダム、獣帝姫・蓮華
「「勇気が！！！」」

呂布トールギス、武帝姫・恋
「「魂が！！！」」

天輝装・一刀
「全ての意志が、天と呼ぶべき力を創るのだ！！！！！！」

すると九人の手に玉璽が現れた。そして、輝きを増した。すると

呂布トールギス
「天玉鎧・真武！！！」

武帝姫・恋
「神鎧獣・甲武！！！」

「ブオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

孫権ガンダム
「天玉鎧・弩虎！！！」

獣帝姫・蓮華
「神鎧獣・猛虎！！！」

「ガオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

曹操ガンダム
「天玉鎧・炎鳳！！！」

炎帝姫・華琳
「神鎧獣・紅鳳！！！」

「ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！」

劉備ガンダム
「天玉鎧・蒼龍！！！」

龍帝姫・桃香
「神鎧獣・天龍！！！」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

それぞれ、天玉鎧、神鎧獣を呼びだしたのであった。そして、龍、鳳凰、虎、玄武のオーラが天輝装・一刀に集まった。そして・・・・

天輝装・一刀
「四天輝神剣！！！！！」

巨大な剣を手にしたのであった。そして・・・・・・・・

天龍王・朱里
「今、ここに伝説の力を一つにして・・・・」

光鳳王・雛里

「邪悪なる神を滅します」

四神
「「「「「「「四天閃光」」」」」」」

天輝装・一刀
「天聖斬!!!!!!!!」

九つの光が天邪神・咲夜に襲い掛かった

天邪神・咲夜
「な・・なぜ、なぜだ!!!!!!!神である我が・・なぜ・・・・人間ごときにぃぃぃぃぃぃぃぃ!!!!!!!」

そして、その攻撃は天邪神・咲夜の体を貫いた

天邪神・咲夜
「否・・・・・私も・・・・また・・・・人で・・・・・あったか・・・・」

そういうと天邪神・咲夜は静かに消滅したのであった。こうして闇との対決は終わった。

その後、朱里と雛里が考案した三国同盟を作り上げたことによって、この三璃紗に争いは完全に無くなったのである。その中心となるのは天の身遣い・北郷一刀であった

それから数カ月後の蜀・翔の国では

雛里

「朱里ちゃん」

朱里
「雛里ちゃん、どうしたの？」

雛里
「劉備様の玉座からこれが出てきたの・・・」

朱里
「これは孔明さんの・・・」

そして、朱里はそれを拝見した

三璃紗の臣・孔明が申し上げます。人がある限り闇が消えることはありません。しかしこの三璃紗には真の志を持って闇と戦い、宿命を抗い続けた戦士達がいました。闇と向き合うことで人の意思は限りなく成長します。そのことを忘れないでください

それを読み終えた朱里と雛里は涙を流した。すると・・・

？？？
「二人ともこれからも頑張ろうね」

朱里
「え・・・・」

雛里
「貴方は・・・・」

光里

「ただいま・・・・朱里ちゃん、雛里ちゃん」

それは死んだはずの光里であった

そして、離れた場所では劉備ガンダム、桃香、一刀、璃々が一つの墓の前に立っていた

劉備ガンダム
「関羽、孔明、公孫賛のアニキ、全てが終わった」

桃香
「私達もこれからもがんばりますのでこれから見守ってください」

そして、三人は手を合わせた

一刀
「そろそろ行くか・・・」

劉備ガンダム
「そうだな。桃香のおなかの子も順調だし・・」

璃々
「桃香様、お母さんになるんだね」

桃香
「劉君ったら・・でも。ご主人様は私だけじゃなくて愛紗ちゃんや朱里ちゃん、華琳さんに蓮華ちゃん、月ちゃん、恋ちゃんとの間にまで子供をつくっちゃうなんて・・・」

一刀

「そのたびに春蘭や桂花や思春や詠や音々音にやられてしまうけどな・・・」

璃々
「璃々もお姉ちゃんになってうれしい！！」

すると・・・

一刀
「それから桃香・・・ご主人様って呼ぶはやめないか？」

桃香
「えっ・・・・・でも・・・・・」

劉備ガンダム
「そうだな・・・そのほうがいいな」

桃香
「そうか・・・う～ん・・・」

桃香はしばらく考えると

桃香
「じゃこれならどうかな？」

一刀
「なんだ・・・」

桃香
「それは・・・・・」

やがて、時が流れて・・・・・

とある宮殿では・・・・・・

姜維ザク
「陛下、そろそろお言葉の時間です」

???
「姜維か・・わかった」

???
「すぐに行くわね」

そして、宮殿ではたくさんの人たちが集まっていた。そして、国旗には蜀・翔、魏・機駕、呉・轟を一つにした国『真』の国旗があった

姜維ザク
「偉大なる三璃紗統一王朝『真』の皇帝、司馬炎陛下のお言葉である」

そこには成長した司馬炎ザク?と雛がいた。新たな皇帝として・・・・

司馬炎ザク?
「まず、はじめに侠と・・・」

雛
「乙女ありき」

これから先の物語はどうなるかは彼らの知る由もなかった。そして、
三璃紗に新たな伝説が生まれようとしていた

真・恋姫三国伝　劇終

第１２話『真の志』（後書き）

本当に今までありがとうございました。初めての完結作品なので私もやりがいがあったと思います。しばらくはＢＢＳとクロスオーバー大戦のほうに集中しますが、新連載をやる予定ですので楽しみにしてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8055q/

真・恋姫†三国伝

2011年10月21日10時03分発行